

藩世界の意識と権威

－西日本地域の場合－

課題番号13410103

2001－2003年度科学研究費補助金

*基盤研究(B)(2)*研究成果報告書

2004年5月

研究代表者 深谷 克己
(早稲田大学文学部教授)

目 次

報告書の作成に当たって	代表：深谷克己	1 頁
研究組織・研究経費・研究発表		2 頁
活動経過		5 頁
研究成果		
近世誓詞の機能と意識	深谷克己	7 頁
元和二年幕府の対外政策に関する一考察	紙屋敦之	22 頁
寛永11年日光社参の一考察	泉 正人	31 頁
近世「大名預」考―越後騒動の裁決と大名親族集団―	佐藤宏之	40 頁
大名の「京都御使」について―高松松平家を中心に―	久保貴子	58 頁
史料翻刻・佐賀藩「律例」	島 善高	66 頁
住持退院一件にみる村		
―備中国児島郡藤戸寺退院一件の紹介―	斎藤悦正	76 頁
撮影史料目録		89 頁
研究成果		
翻刻 香川県歴史博物館蔵『南木惣要』	若尾政希・小川和也	195 頁 (42)
大名家における「仮養子」史料	大森映子	209 頁 (28)
官位昇進運動の基礎的研究―岡山藩主池田継政の場合―	堀 新	236 頁 (1)

【『藩世界の意識と権威—西日本地域の場合—』正誤表】

ページ	箇 所	誤	訂 正
目次	17行目	翻刻 香川県歴史博物館蔵『南木惣要』	翻刻 高松松平家歴史資料、香川県歴史博物館保管『南木惣要』
p.37	4行目	30万7000任	30万7000人
p.64	31行目	香川県歴史博物館所蔵、	香川県歴史博物館保管高松松平家歴史資料
p.67	9行目	「律例」を翻刻し	「律令」を、鍋島報効会の許可を得て翻刻し
p.122	8行目	【香川県歴史博物館所蔵松平家文書収集史料】	【香川県歴史博物館保管高松松平家歴史資料】
p.140	上11行目	山口徹氏	森下徹氏
p.192	上20行目	高松松平家旧蔵	高松松平家寄託
p.195	上 1行目	翻刻 香川県歴史博物館蔵『南木惣要』	翻刻 高松松平家歴史資料、香川県歴史博物館保管『南木惣要』
p.196	岡山藩池田家：仮養子一覧		
	池田継政の欄 5行目	池田出羽守 (政純)	池田出羽 (政純)
	6行目	池田出羽守 (政純)	池田出羽 (政純)
	池田斉敏の欄 3行目	奥平吉之丞 (慶政)	奥平吉之丞
p.229	池田継政官位昇進 運動の関連年表		
	元文5年10月の事項	願書B①②	願書B I・II

報告書の作成に当たって

研究代表者 深谷克己

2001・02・03年度の3年間、我々は「藩世界の意識と権威—西日本地域の場合—」というテーマで、文部科学省科学研究費「基盤研究(A・B)(一般)」の補助金を得ることができ、7人の申請メンバーを中心にした研究活動を進めてきた。本報告書は、その活動成果の一端である。

この3年間の共同研究は、1994・95年度の2年間同省科学研究費「一般研究B」の補助金を得て進めた「岡山藩の支配方法と社会構造」、さらに1996・97年度の2年間同補助金を得て進めた「岡山藩権力と諸集団—意識の形成と相互関係—」に続くものである。これらの研究は、近世の支配権力と社会構造の総合的相関的研究を試みることができるだけの豊富な史料群である「池田家文庫藩政史料マイクロ版集成」(丸善発売、早稲田大学中央図書館全巻購入)を中心素材とすることを了解しあった共同研究である。ただこの中心素材を生かそうとすればするほど、マイクロ版にはない村方・町方史料、家臣家史料などが必要であることが明確となったため、活動の一環として実地調査による史料収集を重視し、また藩権力・藩政の比較検討が重要であることが痛感されたので、山陰・四国諸藩など、豊富な藩政史料を有する西日本地域他藩史料の調査・収集も活発に行ってきた。

今次の共同研究で我々は、これまでの活動の中でしだいに煮詰められつつある「藩世界」という総合概念を用いて、藩世界における「意識」「権威」の解明をめざした。前々回の共同研究では藩政の政治構造、前回には藩政の意識関係を探ることに重点をおいた。今次の共同研究では、その延長線上に、一つは藩世界の内部で活動する身分・生業の諸集団間、藩世界の外部(他の藩世界、幕府・朝廷世界および異国異域世界)の大小遠近の諸集団間における「関係意識」、とりわけ「政治意識」として現れる「関係意識」を取り出すことを目標とした。もう一つはそれら内外の諸集団間に生成・変質を間断なくくりかえす複線的並列的な「権威」、とりわけ近世の身分関係の形成にともなう「社会的権威」の制度と装置、権威意識の特徴をとらえることをめざした。

我々は、上のような視角に立って、藩権力と大小遠近の社会集団との間に形成される相互関係、それにともなう意識・権威の形成を軸にして藩世界を動態的に追究し、それによって、個別藩政史の視野を超えた、新しい近世史研究の切り口を模索し続けることを念願している。この報告集は、こうした我々の意気込みを生かして、3年間の総括として作成したものである。

研究組織

研究代表者： 深谷 克己（早稲田大学文学部教授）
 研究分担者： 安在 邦夫（早稲田大学文学部教授）
 研究分担者： 紙屋 敦之（早稲田大学文学部教授）
 研究分担者： 島 善高（早稲田大学社会科学部教授）
 研究分担者： 村田 安穂（早稲田大学教育学部教授）
 研究分担者： 堀 新（共立女子大学文芸学部助教授）
 研究分担者： 若尾 政希（一橋大学大学院社会学研究科助教授）

研究協力者： 泉 正人（早稲田大学エクステンションセンター講師）
 研究協力者： 大森 映子（湘南国際女子短期大学・国際ビジネス学科教授）
 研究協力者： 久保 貴子（早稲田大学文学部非常勤講師）
 研究協力者： 斎藤 悦正（早稲田大学文学部非常勤講師）
 研究協力者： 佐藤 宏之（一橋大学大学院社会学研究科）
 研究協力者： 小川 和也（一橋大学大学院社会学研究科）

交付決定額(配分額)

(金額単位：千円)

	直接経費	間接経費	合計
平成13年度	3,500	0	3,500
平成14年度	1,900	0	1,900
平成15年度	1,300	0	1,300
総計	6,700	0	6,700

研究発表

ア. 学会誌等

- ・ 深谷克己「百姓目安」（『信濃』第54巻・第5号、2002年5月20日）
- ・ 深谷克己「近世政治と誓詞」（『早稲田大学文学研究科紀要』第48輯・第4分冊、2003年2月28日）
- ・ 紙屋敦之「中世日本の境界——環シナ海と環日本海2」（『週刊朝日百科』14号、2002年9月1日）
- ・ 島 善高「自由民権と禅」（『日本歴史』第637号、2001年6月1日）
- ・ 島 善高「枝吉神陽の学問について」（『葉隠研究』第45号、2001年11月1日）
- ・ 島 善高「『葉隠と禅』管見」（『葉隠研究』第48号、2002年11月1日）
- ・ 島 善高「『葉隠』と大慈悲」（『財団法人めぐみ厚生センター）センターだより』第269号、2002年11月15日）

- ・ 島 善高「私のすすめる歴史小説―隆慶一郎『死ぬことと見つけたり』」(『日本歴史』第656号、2003年1月1日)
- ・ 島 善高「幕末に甦る律令―枝吉神陽伝」(小林宏編『律令論纂』、汲古書院、2003年2月)
- ・ 島 善高「翻刻・江藤新平関係文書―書翰の部(1)―」(『早稲田社会科学総合研究』第4巻・第1号、2003年7月25日)
- ・ 島 善高「中江兆民の『自由』について」(『法史学研究』第8号、2003年9月29日)
- ・ 島 善高「翻刻・江藤新平関係文書―書翰の部(2)―」(『早稲田社会科学総合研究』第4巻・第2号、2003年11月25日)
- ・ 島 善高「中江兆民と禅」(『日本歴史』第670号、2004年3月1日)
- ・ 島 善高「翻刻・江藤新平関係文書―書翰の部(3)―」(『早稲田社会科学総合研究』第4巻・第3号、2004年3月25日)
- ・ 堀 新「織田信長と勅命講和」(歴史学研究会編『戦争と平和の中近世史』、青木書店、2001年11月26日)
- ・ 堀 新「書評 鍛代敏雄著『中世後期の寺社と経済』」(『国史学』174、2001年4月20日)
- ・ 堀 新「書評と紹介 立花京子著『信長権力と朝廷』」(『日本歴史』第643号、2001年12月1日)
- ・ 堀 新「平家物語と織田信長」(『文学』3巻4号、2002年7月29日)
- ・ 堀 新「江戸幕府の成立と江戸の建設」(藤田覚・大岡聡編『街道の日本史20 江戸』、吉川弘文館、2003年2月20日)
- ・ 堀 新「信長・秀吉の国家構想と天皇」(池享編『日本の時代史13 天下統一と朝鮮侵略』、吉川弘文館、2003年6月10日)
- ・ 堀 新「書評 橋本政宣著『近世公家社会の研究』」(『織豊期研究』5、2003年11月30日)
- ・ 堀 新「関東大震災と天譴論」(『研究叢書22 歴史と文学・芸術』、共立女子大学総合文化研究所神田分室、2004年1月30日)
- ・ 若尾 政希「『本佐録』の形成―近世政道書 of 思想史的研究―」(『社会学研究』40号、2002年3月1日)
- ・ 若尾政希「近世の政治常識と諸主体の形成」(『歴史学研究』768号、2002年10月25日)
- ・ 若尾政希「日本近世における軍書の歴史的位罫」(『軍記と語り物』39号、2003年3月31日)
- ・ 若尾政希「享保～天明期の社会と文化」(『日本の時代史16 享保改革と社会変容』吉川弘文館、2003年9月20日)

イ. 口頭発表

ウ. 出版物

- ・ 深谷克己『津藩』(吉川弘文館、2002年3月10日)
- ・ 深谷克己『近世人の研究』(名著刊行会、2003年6月12日)

- ・紙屋敦之, 木村直也編『海禁と鎖国』(東京堂出版、2002年9月27日)
- ・紙屋敦之『琉球と日本・中国』(山川出版社、2003年8月30日)
- ・島 善高『早稲田大学小史』(早稲田大学出版部、2003年2月28日)
- ・小林宏・島善高・原田一明編『渡邊廉吉日記』(行人社、2004年3月1日)
- ・若尾政希『安藤昌益からみえる日本近世』(東京大学出版会、2004年3月10日)

活動経過

1. 史料輪読会

○「中世～近世移行期」

2001年	4月18日(水)	9名
	5月23日(水)	9名
	6月20日(水)	8名
	7月18日(水)	8人
	9月19日(水)	8人
	10月17日(水)	7人
	11月28日(水)	7人
2002年	1月23日(水)	9人
	3月27日(水)	5人
	4月24日(水)	7人
	5月28日(水)	7人
	6月26日(水)	10人
	7月31日(水)	6人

2002年	10月9日(水)	7人
	11月20日(水)	6人
2003年	1月22日(水)	10人
	3月26日(水)	7人
	4月23日(水)	5人
	5月21日(水)	6人
	6月25日(水)	6人
	7月23日(水)	7人
	9月24日(水)	8人
	10月29日(水)	6人
	11月26日(水)	6人
2004年	1月21日(水)	7人
	3月31日(水)	7人

○「岡山藩と朝廷・幕府・諸藩」

2001年	4月10日(火)	5人
	4月24日(火)	6人
	5月15日(火)	6人
	5月29日(火)	6人
	6月12日(火)	6人
	6月26日(火)	6人
	9月26日(火)	5人
	10月9日(火)	4人
	10月23日(火)	5人
	11月13日(火)	4人
	11月27日(火)	5人
	12月11日(火)	4人
	12月18日(火)	4人
2002年	1月22日(火)	6人
	4月9日(火)	6人
	4月10日(火)	6人
	4月23日(火)	4人
	5月7日(火)	4人
	5月28日(火)	6人
	6月11日(火)	5人
	6月25日(火)	6人
	7月16日(火)	5人2

2002年	9月24日(火)	4人
	10月15日(火)	4人
	10月29日(火)	4人
	11月12日(火)	4人
	11月26日(火)	4人
	12月10日(火)	4人
2003年	1月14日(火)	5人
	1月28日(火)	5人
	2月4日(火)	5人
	4月8日(火)	5人
	4月22日(火)	5人
	5月13日(火)	6人
	5月27日(火)	6人
	6月10日(火)	5人
	6月24日(火)	6人
	7月8日(火)	6人
	9月30日(火)	4人
	10月28日(火)	6人
	11月11日(火)	6人
	11月25日(火)	6人
	12月9日(火)	5人
2004年	1月13日(火)	6人

2. 史料調査

○2001年 8月20日(月)～25日(土)

宇和島伊達文化保存会／安芸市立歴史民俗資料館／土佐山内家宝物資料館

○2002年 3月26日(火)～4月1日(月)

丸亀市立資料館／香川県歴史博物館／土佐山内家宝物資料館

○2002年 8月19日(月)～27日(火)

徳島城博物館／徳島県立博物館／徳島県立文書館／徳島県立図書館／土佐山内家宝物資料館／岡山市立中央図書館／岡山県総務学事課文書整備班

○2003年 3月16日(日)～20日(木)

鳥取県立博物館／鳥取県立図書館／岡山県総務学事課文書整備班／岡山県総合文化センター／岡山大学附属図書館

○2003年 8月19日(火)～24日(日)

山口県文書館／岡山県総務学事課文書整備班／岡山県総合文化センター／岡山大学附属図書館／土佐山内家宝物資料館

はじめに

「前近代」という時代用語があるが、「前近代」と「近代」を分ける要素は多岐にわたり、したがって曖昧である。日本史では幕藩体制以前が「前近代」とされるが、身分制は新時代の形式で編成され機能した。世襲制も、社会の諸種の生業の世界では消えなかった。

しかし維新変革と呼ばれる激変の過程で眼前から消滅してしまったものもある。「江戸時代」の骨格を作っていた「幕藩体制」と呼ばれる政治組織は、消滅したものの代表的なものであり、「前近代」と「近代」を区分する代表的なものである。幕藩体制は廃藩置県で最終段階をむかえたが、幕府諸藩の上下の役人が誓詞（起請文）によって正路な勤務を誓約する方法もここで終わった。誓詞徴取の終焉は、「前近代」とは何かということ象徴的に示唆する。

一方、中世から近世への移りかわりを見ると、近世はふつう「早期近代」(early modern)と英語訳されているように、そこに近代の国家ないしは社会のなんらかの要素の芽生えが想定されている。日本史における中世と近世の違いは、第二次大戦後の歴史学では社会経済史的な次元でことさらに強調された。その過度の区別が反発に近い空気を生み、「断絶」論の克服が学問的に進められたが、中世と近世が同質でないことは多い。まったく新しいものが生成することもあり、既存の要素が画期的に増量したり減量したものもある。近世の歴史的位罫は、中世と近世との比較と同時に近世と近代との比較も視野に入れながら多角的に探っていかなければならない。

中世と近世が同じようにも見えるものに、誓詞（起請文）がある。本稿では、「前近代」を考え、同時に「早期近代」を考える素材として誓詞を取りあげる。それは、近世の政治文化を考えることでもある。誓詞について私は、最近、岡山藩初期の藩主池田光政の日記を用いて小さな検討を加えた（1）。誓詞の提出は中世・近世ともに行われたが、その意味は変化し、形骸化したという理解が今日の通念と言えよう。

私は中世と近世の関係について、「神の裁きよりも法の裁きによって事を解決することが優勢になってくる。」と見てきた（2）。「神威」より「法威」が優るようになるということだが、両者を二者択一の優劣で理解しているのではない。「法度は神意（神罰仏罰）と牽引しあい、補強しあっていたとみざるをえないのである。」「法が一直線に神々を押し退けていったとすることはけっしてできない。」と見て、法的支配と神裁の力が並存している状況を想定した。近世の法と神、その中身、両者の関係も固定的に見るべきではない。神（神仏）にしても、「神々の相剋というかたちで一元化を阻む力が働いており」、徐々に「神格観の変化」も進む。つまり「近世のなかで神の観念自体がしだいに変化してゆくという過程をもつのである。」（3）。

本稿で取りあげる誓詞は、こうした「威力の交替」に大筋で沿うものであろう。誓詞とは、掟・盟約に背かせないために約束を破れば神罰を受けると誓わせて差し出させる起請文である。あるいは自らが違約すれば神罰を受けると約束して差し出す起請文である。起

請文は、前書と神文と血判とから成るが、その効力はどこからくるのか。それは私見では、神罰仏罰に対する畏怖の感情がどれだけ社会の中で強いかにによって決まる。大きくは起請文の形骸化が進むのが近世だが、「形骸化が完了した時代ということではない。」(4)。「前近代」であり「早期近代」である近世の位置は、誓詞の意義とも関係がある。

本稿は、前二稿と同じように岡山藩主池田光政の自筆日記(5)を主たる対象とし、時にはほかの藩政記録を併用する。他藩の事例と比較しながら考察を広げること考えたが、紙数の限定もあり、むしろこれまで取りあげた事例を中心に、再構成して、より綿密に検討しなおすほうが、近世誓詞についての認識を深化させるうえで有効であると考えたからである。誓詞にも、大名、藩士、百姓など諸身分の間で出されており、提出の動機や期待される事柄にも違いがある。しかし、誓詞も人格も、身分より時代の規定をより強く受けるというのが私の理解である(6)。大名の日記ではあるが、近世誓詞一般の性格にも通じているはずである。

1 政治的合意の保障

元来、誓詞は神の威力を表現する証書である。法の威力が神の威力を凌駕していくのが中世から近世への移行だとすれば、法にも神にも頼る近世政治は何であろうか。誓詞の徴集は近世を通じ社会の上下で習俗化していた。岡山藩では、廃藩置県の明治四年(一八七一)に至るまで顕職微職に限らずすべての役職就任者から誓詞が徴され続けた。『池田家文庫マイクロ版史料目録』には、膨大な数の就任誓詞の目録が記されている(7)。目録の頁数だけでも三〇五頁から五六五頁まで、総頁数二六〇頁にも及ぶ。

一七世紀の藩主光政は、『日記』に誓詞の徴集を再々記録している。『日記』に書き留められた誓詞は、前後の事情をうかがうことができるものが少なくない。光政は、自分の施政期の家臣誓詞をすべて記録しているのではない。また藩庁として機械的に徴する誓詞とは異なり、光政自身は家臣から誓詞を無差別に取ってはいない。池田家文庫に残ったような就任者誓詞のいちいちを記録すれば、日記は誓詞記録でたちまち満杯になろう。

光政が誓詞を求めるのは、一つは依怙疊肩が出やすい役務に就いた場合、もう一つは職務に遅疑逡巡が起こる場合である。少なくとも『日記』には、そういう誓詞を記録している。寛永十九年(一六四二)七月一日、光政は最上級家臣である三人の老中から誓詞を求めた。「三人老中ニせいし申付候覚」とあって、中身を『日記』に載せている(8)。

一、御為、如在存ましき事。

一、御おんみつ(隠密)之儀ハ不申及、其外もれ候て御為ニ悪儀、おやこ・兄弟・縁者・知音たりと云共、申聞スましき事。

一、万事ニ付て、何者ニよらず、ひいきヲ以ゑこ仕ましき事。

一、御為大事ニ存候上ハ、私之意趣ヲ以、三人、間悪不相成様ニたしなミ可申候事。并何者ニよらず、讒言仕ましき事。

一、私欲かまへ申ましき事。

右条々

七月一日

出羽(池田出羽)

長門(伊木長門)

これは、誓詞の前書の部分である。主旨は、主君の為に怠らない、大事は家族にも漏らさない、依怙曩眞をしない、仲間割れせず讒言しない、私欲をはからない、申合せに違約しないよう誓詞を上げるというものである。『日記』に記されているのは前書だけだが、これを、池田家文庫の「誓詞」記録（9）の中で、該当する役職者誓詞を確かめてみると、「右条々」の後の内容もわかる。「於相背者、忝茂」と続き、そこで行が変わって、「牛王宝印」の裏に書かれた神文が続いている。

梵天帝釈四大天王、惣而日本国中六十余州大小之神祇、殊伊豆箱根両所権現・三嶋大明神・八幡大菩薩・天満大自在天神部類眷属、神罰冥罰各可罷蒙者也。仍而起請文如件。

起請文は神罰と不可分だから、近世のいわば法罰の時代になってくると形式化していくという見方には説得力がある。私も、法制化・官僚制化の進行、つまり神威による支配から法威（法度）による支配への変化が中世から近世へかけて進むと理解しているので、その見方を大筋では受け入れる。ただ、現実の社会では有無ではなく優越の程度の違いだと考える。神と仏が習合しているように、神と法も習合的な時代だったのである。

七月一日に光政が、三人の老中に対して誓詞を求めた理由を追うと、近世的な誓詞の特徴が浮かびあがる。この年の後半、光政は將軍から江戸参勤の暇を認められ帰国した。岡山に着いたのは、六月二五日である。二日後の六月二七日には早くも藩政に復帰し、家臣の相続や知行などを細々と指示している。

しかし、光政はそうした一般藩政に関して誓詞の提出を求めている。帰国後三日目の六月二八日に、光政は「只今迄ノ万事仕置」について納得できないことが多いという認識を強めた。それは、自分の施政に対する不満足とそれを実行する家臣らへの不満足との両方であったろう。光政はのち、藩世界では大名が政治主体であり家老等はそれを補佐する立場であるという政治思想を表明するが、そうした考え方はこの頃には芽生えていた。

光政は、藩政に関して「はし（くのくりかえし。端々）仕かへ」ることを構想した。そして、自分に同意するならばとして、家老の池田出羽・伊木長門・池田河内の三人に、改革の責任者となることを命じた。たとえ「唯今まで有来儀」であっても、「悪義」と判断すれば「仕かへ」るつもりであること、またそうした改革について「下々まで異議なきやうに」はからうこと、と指示し、あらためて三人を「老中」に任命した（10）。

ところが指名された三人は、藩主に対して即答を避けた。彼らは、主君の「思召寄」（意向）は「御尤」とは思うが即座の「御請ハ申上かたく候」、と逆らった。そしてお互いの談合を尽くしたのか、その日のうちに三人は人を介して役目を辞退したいと回答してきた。藩主の「御意」に異論はないが、その「御用」を果たすことには自信が持てないこと、もし間違えば主君ひいては御家の「御為」にならないこと、というのが断りの理由であった。光政は三十代半ばだったが、主君の若さをみくびった抵抗というより、「老中」に任命された彼ら自身が、家中の序列からすればなお年若に属するため、年長家臣への憚りもあって辞退したと思われる。

この回答に接して、光政は翌日の六月二九日に再度三人を呼び、藩政を肝煎することをいったん断るのはわかるが、これ以上の優柔不断は許さないと許諾を迫った。三人は、主君からの「直ニ御意」とあれば辞意を通すことはできず、ついに「畏候。」と引受けた。

先の寛永一十九年七月一日の誓詞は、このような経過を踏まえて、決心をした三人の「老中」から、翌日に差し出させた誓詞である。誓詞は本来、神罰冥罰の効験によってその効果が保障されるのであるが、ここでは藩主光政の政治的意思の強さが誓詞徴取となり、藩主を補助・協働する上級家臣の心を自分の側に掌握する手段として機能している。つまり、政治的合意の取り付けの手段である。

こうして光政は、逃げようとする三人の最上級家臣に迫って自分に同意させ、合意の担保として誓詞を徴したが、そのうえで、三人の指揮下に入る他の老中や組頭らに対しても、改革の決意を何か条にも分けて申し聞かせた(11)。冒頭に申し聞かせたのは、三人の老中に述べたことと同じ文言である。二条目以下は、何事にしても「昔は左様ニハ無之」と旧慣にならずで「古を申」すようなことがあってはならない。「法」といっても、中には「昔よりすわりたる」ものもある。しかし中には必要から、「昨日の法」を「今日かへ申事」もある。光政はこのように論じて、旧法から新法への果敢な更新が必要であるとし、それへの妨害を許さない決意を示した。

光政は、専制君主と評されるが、藩主独断で事を進めるのが良いという政治思想は持っていなかった。家臣の意見を聞いては、それに回答しつつ、より高次の結論へたどりつき、そのための合意を取り付けていくという政治手法を取った。異論を出し意見を開陳しない家臣をこそ、光政は難詰しているのである。光政は、自分の思考したことを、法令ではなく教令として、すなわち教諭の形式で家臣に突きつけていくことが再々であった。ただし、だからといって光政が民主的であったというのではなく、疑いもなく君主政治である。ただ家臣は治者の身分層を形成して、君主の政治を補佐するのが当然で、その補佐の行為として意見具申の積極さを求めたのである。対等の協議ではないが、協議することを重視したのである。

光政の言辞は乱暴なほどに手厳しいが、たんに強圧的に命じるのではなく、主従のあいだでの時間をかけた応答のなかで合意に到達するという手法を大事にしていた。このことが、感情までむき出しにして執拗に繰り返す教諭統制の形になった。そのため家臣らにはかえって強圧を感じさせ、藩世界の武士社会に不穏に近い空気をつくりだしたが、視野を広げてよくみると、真意は逆であった。

私見では、こうした主従の応答方式は、儒教政治における臣下の諫言義務の線上にある点で東アジアの政治文化の土台の上にあるが、その硬直性から出て柔軟な談合様式へ進もうとしている点で、日本の近世社会が育て始めた新しい政治文化だと言えよう。そして光政の対応は、その過程で近世的な政治文化をさらに細部にまで創り出し、藩世界の中の家中集団に染みこませることになる。その細部を考えれば、けっして儒教政治の論理の次元であらかじめ用意されているものとは言えない。近世日本の成立過程における政治的対抗、ここでは家中の反発する力を主君である光政が突き破ろうとする時に生じる着想や行為の新しさである(12)。

そのような特徴を帯びる光政の近世的藩政において、神威を頼る誓詞が「法」による支配を保障し、それを支えるために使われている。したがって、法か神かではなく、「法威と抱き合わせにされた神威」としての政治的効果が期待されているのである。神威と法威が習合的關係にあると言ってもよい。神仏の習合関係だけでなく、法と神の習合関係も近世という時代の理解においては想定しなければならない。

このように考えていけば、光政が期待したものがしだいに浮かび上がる。すなわち、誓詞をたんなる手段、形式と考えていたのではない。また本気で神罰冥罰が人に下ると考えていたのでもない。彼は、主従間の約定に責任を持たせる政治方式の一つとして法神習合の誓詞徴取を重視したのである。また言い換えれば、法令秩序を人的関係において下支えする装置としてである。

光政は、誓詞を取る順番についても選択をした。最初に三人の新老中から誓詞を取ることが大事であった。次いで同日、年寄や組頭を説得した。そして六日後の七月七日、「壁書」の形で申渡しをまとめて「惣侍」（家中全員）に示した。それは五か条からなり、『日記』にすべての条文が記録されている(13)。一条目は、「公儀御法度」の遵守と、「きりしたん又かふき（傾き）者」の穿鑿・排除である。二条目は、家中・領民ともに、振舞や衣類の浪費に対する戒めである。三条目では、家中が「武士」としての嗜みである乗馬を日頃から油断なく調練することを求めている。四条目は、池田光仲との国替の形で元和三年（一六一七）因幡・伯耆両国（鳥取城）に入国して以来、家中が方々へ使いに出向いた実績を書上げさせることである。五条目は、「万事式法」の遵守である。

第一条目の「公儀御法度」遵守に見るように、藩体制の確立は公儀支配と深く関連づけられて構想されている。光政は、自分の支配領国を自分の意志の下に掌握しようとする強い熱意を持っていたが、その時にはかならず公儀支配を称揚し、それを自らの防御の鎧のように着込んで家中・領民に臨んだ。

2 白紙血判なし一法への接近

岡山藩領内では承応三年（一六五四）三月頃から「かつゑ（飢）人」が目立ちはじめた。この状況を見て、藩は「すくい米」を出したが、七月一九日の大洪水で追い打ちを受け大混乱に陥った。これを契機に、光政の民政は御救を伴う「百姓成立」政策へ急進し、自分の預治・安民原則を理解させるために家中に対して激しい教諭を繰り返すようになる。

これを契機に家臣も誓詞によって自身を証明しようとし、藩主も誓詞を求めることが強まった。その中で、八月二三日、老臣の出羽が、「今迄ノ儀」を忘れようと光政が直接に述べたことを謝し、誓詞を指し出そうとした。

上ヲかるしめあなとり申候旨、御捨被成とハ御意候へ共、今迄ノ義何共致迷惑候。私心ニ存なから、たくミ候て不仕段誓紙ヲ仕、私ニミせ候よしにて、せいし持参申候。

この誓詞は、役職就任の定型のものではない。これまでのことを忘れようと藩主が直々に家臣へ述べるということは、とりもなおさず許すと述べたに等しい。これに対する出羽の誓詞は、巧妙な自己防衛といえる。自分は藩主を軽んじたり侮ったりしたことはないのだから許すと言われても「迷惑」すると抵抗も示しながら、けっして私心で巧んだことはないのだから誓詞を作成して持参し、わだかまりを解消するために藩主に見せたのである(14)。

この時期の岡山藩は、藩主と家中とが確執と表現してもよい、対抗的な関係にあった。光政は家中に論争を挑む調子で教諭を繰り返し、その実効を意図して誓詞を取った。目付の養元にも、「誓紙、養元持参、披見候。」と誓詞を提出させ、その時に、これまでの事は忘れるから今後は必ず嗜みのある態度を取るようにと念を押している(15)。

同年の承応三年十月六日、光政は、老中・組頭・物頭を残らず城へ呼び集め、家中が過

分に借銀して養うべき人馬を減らしたりしている、その一方で家族の衣装代や祝言などには過剰に出費していることを、「直二」叱責した。そして最後に、

右の条々能々得心仕へく候。加様の風俗習、只ニハ難直存候。人ニより餘成儀と存者可有之候。左様の習心を変せんため誓紙申付候也。

と誓詞を命じた(16)。これは、通常なら誓詞まで取らなくてもよいことだが、慣習化したことを直すのは難しく「餘成儀」と反発する者が予想されるために、あえて誓詞を徴したのである。「但、誓紙の文言ハ部門く(くりかえし)ニいたす故略、」と、内容がそれぞれに異なることも述べている(17)。『日記』にもこのことを記しており、衣装代で行詰まったりする状態は、いわば「知行ハ女のけわい(化粧)田」になり「亡国」の兆しと怒り、「左様の習心を変せんため、せいし申付候也」と家中に誓詞提出を命じたのである。そして、四か条の「せいし前書」を記している(18)。

せいし前書

一、老中より外ノさいし(妻子)いしやう(衣装)、持かゝり、或ハもらい物ハ各別、只今より後、仕候き類、もめんより外仕ましく候。但、手おりノつむき(紬)ハ不苦事。不申及しんめう下女持かゝり・もらい物かくへつ、其外ハもめんきせ可申候事。

一、しんめう乗物のせ申ましき事。

一、縁ニ付候娘、母親ノき類・道具遣し候か、只今ノ持かゝりノ外ハ一円仕ましく候。き類諸道具有ていニ書付、其役人ニ見せ可申候事。

一、さいし一門ノ間、其外へ参候ニ、何ニても持参無用事。并ふる舞無用。但、仕候ハて不叶儀候ハ、おもてより猶けんやくに可仕事。

この誓紙前書は、役職就任のものとはたいへん違っている。内容はほとんど法令である。光政にとって、誓詞は形式どころか、きわめて現実的な政治行為の一つであった。上級家臣と下級家臣では衣料規制が異なるので、この部分が別の内容になる。「部門」とは役職の違いでなく、身分の違いである。要するに、法令である家中禁制の実効を高めるために誓詞の形式にしたのである。実効性を高めるためであろうか、末尾を、

右条々於相背は、神罰白紙血判なしに可仕事。歩士ハ前書別ニ見合可仕事。しうけん(祝言)き類つむき、よき(夜着)・ふとん(蒲団)もめん。

としている(19)。

「白紙血判なし」の意味ははっきりしないが、牛王宝印でなくてもよい、血判は省くという意味であろうか。そうだとすれば、やはり近世の誓詞は、その形式においても中世の起請文から変化しはじめている。いずれにしても光政は神文で威嚇することも行い、法の効果を上げる形式として誓詞を取ることをした。誓詞はこの意味で、中世以来の遺制的習俗の範囲をこえて、近世政治に組み込まれた一つの実効性のある法的規制の情動的手段になったのである。末尾のさらに終わりの部分は衣類規制が紛れ込んだものと解したい。

事柄次第では、光政はわざわざ「せいもん(誓文)ヲ以不申付候へ共」(承応三年十月六日)とことわる場合があった(20)。とすれば、誓詞を取って命じる事柄と、誓詞は取らない事柄とがあり、誓詞を出させる事柄のほうが重要度が高いということになり、この使い分けもまた近世政治の特徴であろう。

誓詞は近世ではふつう役職就任の際の誓約書だったが、そうではない場合がありえたこ

とはこれまでに見た。承応三年（一六五四）十一月二七日、光政は「ふせ官兵へ」の「立退」一件を記録している。これは老中伊賀からの報告によるもので、子細は、官兵衛が「常々不行儀」なので、その上役であろうか村上喜兵衛（修理）が「きつくいけん（意見）」した。たびたび意見したが聞き入れない。そこで「此度ハ官兵へも女もせいし仕可然由」とあるから、この誓詞は藩主に対してでなく、上役らしい村上喜兵衛に対して差し出すものであろう(21)。ところが、「女ノ母悪人」で事情が悪化し、官兵衛は腹を立てて書置を残して立退いた。光政は、この家臣について「平性さた限なる者ノよし。」ときりすてている。

光政は、男色に対する徹底した反対論者であった。万治元年（一六五八）十一月二四日の『日記』にも「男色ハ大きな不義」という見解を表明している(22)。十一月二日にも、去年の参勤留守中に「若者共、衆道事はやらし候ヲ聞届、それく（くりかえし）ニ罪ニ申付候也。」と書いている(23)。衆道は風紀の範囲をこえて、妬心・執心からしばしば刃傷沙汰を誘発した。光政は、衆道発覚の者には、切腹、追放など厳罰に処している。

こうした男色風習を抑え込むために、光政は誓詞を用いた。承応三年（一六五四）三月二六日の『日記』に、

小々性不作法、男色ふつとたち可申候。申かけ候者候共、同心仕ましきせいしさせ申候。

と書いているように、言い寄ることも言い寄られることも許さないという立場で誓詞を徴した(24)。万治元年十一月二四日にも、「与頭せいし」を徴しているが、これは衆道や「かふき者」など「組中ニ大不義」があるのは「与頭越度」という考えからであった(25)。この時組頭から徴した誓詞については、先に紹介した誓詞と同様、「八幡大菩薩ノ誓言書入、白紙ニ血判なしニ申付候事」(26)と書いているから、誓詞の威力を生かしながらだが、近世的に変化した誓詞を命じているのである。もっとも衆道については、役務によっては通常の就任誓詞にも記されて戒められる。「御側見小姓」などがそういう職務で、光政時代より後になるが、安永五年（一七七六）二月五日に差し出された見小姓の起請文の第五条目には「一、不儀の女色男色仕間敷事」(27)という誓言になっている。

3 役務執行と誓詞

光政は、寛永一八年（一六四一）十一月一日、領内の百姓らが上げた目安状について、「百姓共上ケ候目安せんさく（穿鑿）」を命じた(28)。百姓目安自体は特別のことではない。岡山藩では、百姓が目安・直目安を上げることは近世初頭から禁じられていない。慶長一二年（一六〇七）、当時備前監国（藩主池田忠継）の立場にあった池田利隆は、「百姓に申渡覚」で給人（個別領主）に訴訟を二度行い、なお埒が明かない場合は目安をもって「公儀」（藩）へ訴えることを許可し、この措置を了解させるために、村々から請状を取っている(29)。光政も承応三年（一六五四）の大洪水直後には「諫箱」を設けて、領内上下の者から意見を徴した。むしろ目安推奨の姿勢を打ち出した。大まかに一七世紀後半にかけては、岡山藩領では目安上げ状況とでも呼ぶべき時期であった(30)。

そうした状況のもとでの寛永一八年百姓目安がどこからどこへ提出されたかは判明しないが、ともあれ藩主光政はその真偽調査を家臣三人に命じ、同時に彼らに対して「せいし

（誓詞）申付」けた（31）。これは冒頭に「出羽」とあるから家老の池田出羽が命じて、誓詞を徴集したのだが、出羽に対してではなく、藩主に対して上げた誓詞である。法の威力が増していくのが近世政治であり、目安による盛んな上訴はそういう力が増していることを百姓も知っていることを表している。それを執行する者に誓詞提出を命じたのである。

光政の『日記』には、先に指摘したように一般的な就任誓詞ではないが、各所に執務者から徴した誓詞が記されている。寛永一九年八月一八日、三人の老中から藩蔵入地の年貢収納を七人の組頭に指示した。年貢収納は容易でなく、去年・今春分ともに未進解決の目途がついていなかった。光政は、代官には未進分を取り立てる力がないと判断し、その仕事を組頭に「直ニ」命じた。この時、光政は、

何もせいし誓紙に不及儀と存候へ共もし何とそよこ事も候ハ、其時の為ニ候条、皆ノ心次第ニせいし可被仕候。誓紙ノ心ハ郡代・郡奉行・代官ノ義可承為也。

と指示している（32）。この意味は、七人の組頭はいずれも命じられた任務を遂行するのにわざわざ誓詞を差し出すには及ばないと考えるだろうが、もしかすると不都合なことが起こるかもしれない。そうした時のためなので、各自「心次第ニ」誓詞を上げるようにせよ。誓詞の趣旨は、郡代・郡奉行・代官らに申し聞かせよ、というものである。

「何もせいしに不及儀と存候へ共」という言辭は、光政の皮肉とする読み方もありえようし、当時の社会の実態・現場で活動している実務臣僚らの考え方の反映とする読み方もありえよう。私は、後者のほうを推測する。つまり、未進年貢の取立執務に際してわざわざ主君へ誓詞を差し出す必要はないという考え方が普通になってきているのである。しかし埒が明かない未進状況を突破したい光政は、実情を知りつつあえて誓詞を求めたのである。おそらく光政にとっての誓詞徴取の実際の意義は、それを通して郡代・郡奉行・代官らの働きや意見を藩主が率直に聞く回路を広げることであったろう。

このように、光政は、ただ慣習に従って誓詞を徴していたのではなく、現役の家臣が執務上不必要と考えている場合にも、念押しの誓詞を求めている。しかもその時に「皆ノ心次第ニ」と各自の思考と選択の自由を与えてもいる。もちろん「心次第」と主君から言われても、主従制のもとでは主君の意向が明らかにされている以上、迫られているのと同じだから、あえて拒んで誰かが抜けることはありえない。また光政の日頃の傾向からすれば、拒めば説得を何回でも続け、ついに我が意に従わせるであろう。しかも、形のうえでは「心次第」と一人一人の自由な選択をせまることで、かえって受けとめる側は肯定した時には強い覚悟に到達するであろう。こうした迫り方もまた、近世の政治文化になっていくと考えられる。

光政は、この時の「起請文、右七人組頭前書」も八月二一日の『日記』に記録した（33）。在方支配担当者の誓詞らしい内容である。

一、被仰出御法度之旨堅相守可申候事。

一、礼儀・礼物、自分之儀不申及、下々までも一切取せ申ましき事。

一、在々ニて、自然百姓申分於在之は承届、御為ニ成可申と存儀候ハ、縁者・親類・知音たりと云共、御老中まで有躰ニ可申上事。

「御法度」には日頃の光政の訓戒からすれば、藩の法度だけでなく公儀法度がふくまれるであろう。第二・三条は賄賂・供应の防止のために音物贈答が禁じられると同時に、村々で「百姓申分」を聴取することを命じている。「縁者・親類・知音たりと云共」は、組

頭らの血縁者や知人を百姓が批判したとしても、隠さずにその者らの名と行いを老中に報告することを命じたものであろう。

寛永一九年は、光政が岡山藩主になってすでに十年が経っている。不作・凶作への対策も必要であり、それを実行に移せるだけの藩政が積み重ねられた。これまでの岡山藩政史の理解でも、この年は法制・機構ともに一時期を画すると評価されてきた。そうした藩体制確立への光政の覚悟の高まりは、見てきたような誓詞徴取という面からもうかがうことができる。誓詞は機械的に出される新任・転任の際の書類というだけでなく、藩政の改革への熱意を反映する文書ともなっている。

3 必要な誓詞と不必要な誓詞

誓詞の提出は、主従関係だけに限られない。すなわち家臣が主君に差し出すだけではなく、家臣が相互に誓詞を差し出しあう場合があった。先に紹介した、光政の改革宣言とその推進者に任命された三人の老中は、しばらく日数を経た寛永一九年（一六四二）七月二三日、主君に対し、「面々中間申合誓紙」および「面々心持ノ書付」を「御目ニかけ候」と光政に対して申し出た。そのいきさつを『日記』に光政は書き留めている。この時に提出された誓詞前書は、一般的な役職就任の内容とは少し違ったところが見られる。

起請文

- 一、御為ニさへ候ハ、其身之為ハ第二ニ可仕事。
- 一、三人之中間、万事御用相談仕義、さた（沙汰）仕ましき旨申合上ハ、親子・しんるい・知音たりとも、他言仕ましき事。
- 一、三人之間、若意趣いこん在之共、せいしの上ハ少もゑんりよなく申ことハリ、道理したい（次第）ニかんにん可仕事。

三人せいし

一部脱漏があるように思われるが、三人の間に対立を生まないための相互の誓詞である（34）。私的な遺恨があっても「誓詞」を取り交わしたからには、藩政については「道理」にのっとって遠慮なく論議をつくすという相互の誓いである。もとより神罰を担保にしてである。七月一日に藩主光政に求められて差し出した誓詞にも、「三人間悪不相成様ニたしなミ可申候事。」という文言が四条目にあるが、それは主君に対しての約束であった。

これに合わせて同時に作成した「三人之間申合覚」も、光政は『日記』に書き取っている。それは十一か条からなっており、自分達が「三人談合」しても「きハマらさる上」は「御意ヲ請」けて決定する。家中の者からは「音信酒肴」を決して取らない。誰にせよ「御用」向きで訪問者があった場合は夜中でも応じる。家中の誰かに接待されたら、当番・非番にかかわらず必ず三人で待合わせて「振舞」に応じる。三人の間の仕事の都合はうまく繰り合わせる。独断に陥らず依怙最良にならず相談をつくし藩政を頓挫させない。三人は、これらのことを申し合わせている。したがって誓詞は、藩主が家臣の心を掌握するためだけではない。家臣が相互に、各自の決意を固め約束を交わすうえでの、誠心の意思の依り代のような役割を果たしているのである。

寛永一九年七月晦日の『日記』にも、光政は、軍備をふくむ多くの役職者を任命したが、「右ノ役人共、何も誓紙仕り候事」と、誓詞を徴した（35）。その時の「起請文」を三つ

写している。それを見ると、誓詞が、それぞれの役職を勤める同役同士の間の意思の統一のために作成されていることがわかる。右衛門兵衛・玄番・半右衛門の三人は「少用共調候様」にと命じられた。役目がはっきりしないが、玄番持筒二〇挺・右衛門兵衛持弓二〇挺・半右衛門持筒一〇挺を「預」けられているから、軍事にかかわる役職かもしれない。

この三人は、六か条の「起請文」を作成して、「三人之間、如何様之意趣候共、かんにん仕、間^{あいだあしく}悪ならさるやうニたしなみ、御用不滞様ニ可仕候。」と、相互関係の良好な維持へ向けた約束をした。これは藩主へ約束したのだが、趣旨はお互いの間の約条である。良好な関係が日常的に保たれているならば、政治向き・軍事向きの事柄についても当然良好な合意が形成される。それをさらに誓詞を交わしてまで合意しようとするのは、たとえ私的には相互に意趣・遺恨をふくむ状況であっても、公的關係・公的任務においては公平さを維持するためにほかならない。

正保四年（一六四七）二月一五日、光政は「一、養元にせいし申付候事」と『日記』に書いている。要路者を見張る目付という秘密の役目に任じたので、誓詞によって、

今日被仰聞事、誰々によらず申聞ましき事。以来、三人（老中）之間、右被仰聞段怠候事、承及ミ候ハ、可申上事。

とあるように、職務精励と秘密厳守を守らせるためであった（36）。

光政はこの誓詞を命じた後、三人の老中と養元と一緒に呼び寄せ、四人に対して、

三人ノ作法、我等見及候事、心ニ存罷在 候てハせんもなく候。其上家之為ニ候条、可被得其意事。

と告げた。すなわち、自分が見るだけでは心許ないので、養元に対して、もしも老中に怠りがあれば見たこと聞いたことを藩主に報告するように指示し、誓詞も取った。そのことを知っておくようにと知らせたのである。本来秘密の存在であるべき目付を監視される者にも披露したのである。この措置は、三人の老中を緊張させるうえで十分な効果を発揮したことであろう。同時に、監視する養元にも緊張を強いることになったであろう。

このように一般的な就任誓詞の水準を超えて、政策目標に沿わせるための、職務守秘を確約する誓詞が徴されたのである。

光政がそれを、「家之為」としていることにも留意したい。一国を將軍から預かる奉公という認識で領地の私物化に陥ることを警戒した光政であったが、家臣に対しては、一八世紀後半以降の大名に現れる国家意識ではなく、「家」（池田家）への忠誠を求めている。ただしその家はたんなる池田氏族の自然血縁集団ではなく、家中および領民の存続、暮らしの成立に責任を負う、ある公的機構体であることを含意している。

誓詞はまた、自分に対して疑いが懸けられた時、それを晴らすために差し出されることがあった。承応二年（一六五二）一月二〇日に伊木長門が、目付の養元に対して見せた誓詞はそのような特徴を持っている（37）。

せいし仕、養元ニミセ申候。又かうあミ・彦兵へと申者きも入候由申候。彼者も真田將監方へ、去冬せいし仕遣候由、前書持参候。

とあるのがその事例である。事情は、四年前に伊木長門が京に滞在したことがあった。その時に「けいせい（傾城）」と懇ろになった。ところが岡山に帰った時にその傾城を伴い囲っているとの「さた在之」というから、噂が立ったのである。伊木長門は重臣であり、その子供を公儀への「証人」に予定していた。ところが、その子供は傾城が生んだ子であ

るというので、光政は、目付の養元に内密の調査を命じたのである。

探索の結果、事実ではなかったらしく、身の潔白を証明するために、長門は誓詞を作って養元に見せた。また傾城との間を取り持ったと噂されている「かうあみ・彦兵へ」二人も、真田将監に誓詞を差し出して身の潔白を証明した。それは前年のことであつたらしく、その誓詞（「前書」）を光政のもとに持参した。光政はこの日、二人が書いた「両通」の誓詞を見ている。そして、「世間のわる口はれ、一段之事と存候事。」と安心したのである。この一件では、疑惑の潔白を証明する手段として誓詞が活用されている。

留意すべきは、誓詞が出されるほどよいという考え方が、必ずしも適切とはされていないかったことである。正保四年（一六四七）年五月一七日には、

出羽申候、荒但馬（荒尾但馬）せいし仕、懸御目くれ候へと申候、無用と申候へと申候へハ、はや仕参候、私ニ申候ハ、私ノ為ニ仕候条、是非懸御目度と申とて、みせ申候。

と光政は『日記』に記し、誓詞の「大形案紙」を書き留めた。それによれば、「武州公（利隆）より今ニ御懇忝候事。一、相州（鳥取藩主池田光仲）御為如在ニ不存、我等ノ儀も同前ニ存候旨、ゑこひいき不仕由事」という、監国池田利隆から岡山・鳥取両池田家にかかわってきた老臣らしい内容である。広く言えば疑惑を晴らすための誓詞であるが、あらためて光政に公正を誓おうとしたのである。「本紙ハせいしノかけ硯ニ入置也」と末尾にあるのは、光政が硯箱兼用の手文庫に「本紙」を入れておいたということであろう（38）。

この荒尾但馬の誓詞は光政から命じられたものではない。光政が「無用」だと言っているのに、老中を通じて是非見てほしいと無理じいのように誓詞を作って登城してきた。

「私」は光政を指すであろう。荒尾は、光政のために作ってきたのだからどうしても御目にかけたいと言って譲らなかったのである。このことから見ると、誓詞の差し出しは、家臣が主君の信頼をつなぎ止める方便としても大事なものであったのである。これをより押し広げれば、無理強いしてでも約条相手に誓詞を手渡す。そうすることによって、相手に対して約定をより確度の高いものにすることができたのである。

なお荒尾但馬が隠居するにあたり、光政は「覚書」を与え、老中にも披露し、その中で先の誓詞にもとる点を突き、「右之せいしニ相違」と指摘し、「誓言」は「私ヲ立、主君之為ヲ可存との誓紙」を無にしてしまうのか、「あまりなけかしく候」と責めている（39）。

4 大名誓詞と誓詞の返還

大名光政も誓詞を提出することがあった。

近世の大名が将軍に差し出す誓詞を大名誓詞と呼ぶ。慶長一六年（一六一一）に家康が近畿以西の大名から、鎌倉以来の將軍家の法式・法度を尊重・遵守すべきことを内容とする、以後の武家諸法度の起点となる三か条の誓詞を徴した。翌年には東国諸大名からも同様の誓詞を徴した。家康は日本の神仏への起請で盟約が保障されると考えており、それがキリスト教排斥政策につながっていった。ともあれ三か条誓詞がきっかけになり、將軍の代替わりごとにすべての大名がそれぞれに老中役宅において、公儀への奉公や公儀法度の遵守について、署名・血判を行うようになった。そのため代替わり誓詞とも呼ばれた。血判には米のとぎ汁を湯にして手指を温め、血が出やすいようにしたという。

光政は、慶安四年（一六五一）に代替わり誓詞を公儀に対して差し出した。三代将軍家光が死去し、四代将軍として家綱が就任した。この年四月二〇日に、家光は他界した。その三日後の四月二三日、大老の酒井忠勝が家光の「御遺言」を江戸城で諸大名に告知させた。ほんとうは家光が「皆々へ御直ニ被仰渡」べきと考えていたものであったが、俄に容態が悪化したために、酒井忠勝が代弁したものであるという（40）。

これを受けて、同じ二三日のうちに、光政は「相州」、すなわち池田家同族の鳥取藩主池田光仲と「申合」せて、「誓紙仕度」と大老酒井忠勝に「状」をもって申し出た。そして翌二四日、酒井忠勝から「返報」があり、

誓紙之儀尤ニ候。安部豊後・松泉州申談仕候へと御申越候事。

という了解の返答を得た（41）。大名誓詞は、命じられるというより願い出て許可を得るという手順を踏んだのである。ちょうど東照宮の大名国許への勧請がこれに似ている。そしてこの誓詞は、すぐその場で書きあげてしまうというものではなかった。実際に誓詞を書いたのは、かなり時日を経てからである。

豊後（阿倍忠秋）殿ニて、誓紙仕候事。と『日記』に書いたのは、五月十日である（42）。その間の手順の詳細はうかがえないが、ともあれ半月ほど経って、老中役宅において誓詞を作成したのである。形式的な事になってきている、大名が公儀へ誓詞を上げるには、その途次に調整や確認の交渉・駆引が幾段階もあり、それらの全体に日本近世の政治文化の特徴が現れている。

大名誓詞ではないが、誓詞は事後にどのように処理されるのであろうか。池田家文庫に残る膨大な誓詞は、提出されたものが藩庁に残ったものだが、返還される場合もあった。

寛永一十九年（一六四二）以来、光政は三人老中体制で藩政を進めてきた。しかし年月が経てば当然、老中らは高齢化し病身にもなってくる。そこで光政は三人を解任して、新たに伊賀（池田伊賀）・若狭（日置若狭）・佐渡（池田佐渡）の三人を新老中に任命した。そして慶安五年（一六五二）六月一日、光政は、前任の出羽・長門と新しい三老中を呼び、次のように述べた。

先年、出羽・長門・河内を老中役に命じた時に「誓紙」を差し出させた。今度解任したのでそれをあらためて「昨日取出、ミ申候。」。そして「返し可申」考えたが、中身の「文言」はそれぞれにとっては「いつまでも可然誓紙」である。よって、そのまま自分の手元に置いておくので、そのことを了解せよ、と通告した。これで見ると、任期が終了すると、職務に関する誓詞を返還するという考え方があったことになる。

次いで光政は、「若さ・佐渡にも此前書ニてせいし可仕候」と、同じ内容の誓詞の提出を新老中に求めた。その時、次のように付け加えた（43）。

乍去、此文言ノ主意ヲ能かてん（合点）不仕候てハ、神罰モ恐キ事ニ候条、具ニ可申聞候。

「神罰モ恐キ事」と光政が本当に危惧していたかどうかはわからないが、威嚇の効果を求めていることはまちがいない。このように誓詞提出の慣習を、光政は自分の領内支配や家中統制の手段として積極的に活用し、「神罰」の威力までも持ち出したのである。だがここでの「神罰」は神威が立ち現れているというより、いわば、「藩主によって振りかざされた神罰」である。

さらに光政は続けて、先の老中の誓詞五か条の内容を解説している。「第一私欲ヲかま

へ申ししき」とある条について、私欲は「万惡ノ根本」であり、「御為如在ニ存ましき」というのも、私欲がなければ自然に御為大事に思うものであると説く。財宝を欲しがり貪るのは末の私欲である。

依怙最眞は、そうしまいと思っていでも普段「悪者」と知りながら親しいが故にその者を「善者」だと庇うならそれが「一向ノ悪者」なのである。こう説いて光政は、

常ニしたしミ、我か氣ニ入たる者ノ事ハ、悪者もよきやうニおもはるゝ物ニて候へハ、不覺ゑこニ罷成候。是ハ我も不知、神罰ノあたる所ニて候。

と、こうした弱さが招く依怙最眞こそが神罰に相当すると述べる。そして、

今若さ、我等為惡かれとハ誓紙ニ不及、毛ノ先ほとも存ましく候へ共、常々我がいきとおりに寄心あらハ、其所ちかい我等申付候ハ、はや恨心出可申候。此所はや御為如在ニ存ましきと有文言にちかい可申候。

と誓約の難しさを指摘している。「御為如在」の気持がなくても、自分の内部に憤りの心があれば主君の命にも恨みを抱くようになり、誓約と違う結果になる。このように説いたうえで、光政は、「とても誓紙ヲ仕上ハ、能此文言ノ根本ヲかてん仕、せいし可仕事」と、誓紙提出の重みを言い聞かせた（44）。ただし光政のこのような言説は、神威を借りての罰の怖さを押し出しているというより、光政が学問的に重視する、心学的儒教の人間陶冶の主体倫理の強調とも言えるであろう。

翌六月一二日の『日記』に、

佐渡・若狭、誓紙仕候。伊賀、草本見申候事。

と書いているので、二人は誓詞を差し出し、伊賀はそれを見て誓詞を作成することになるものと思われる（45）。「草本」とあるのは、あらかじめ光政に見せた案文だと思われる。神罰を口にして威嚇的な注意を与えているが、為政者として重要なのは、神文部分ではなく、明らかに前文であり、それも光政流に理解された前文なのである。

おわりに

近世誓詞の特徴のいくつかを、前稿よりは的確に指摘できていると考えるが、なお論理化の域には達していない。史実も一七世紀中葉のものにとどまっている。問題の所在のところで述べたように、近世誓詞の考察は、「中世ではなく近代ではない近世」という時代の人間的体験はどういうものだったのかという大きな問いへの答えの、重要な部分だと私は考えている。本稿を、その前提においている論点もふくめて簡略に再説すれば以下のようになろう。

法的機構的支配の力が増していくのが近世政治であり、法威が神威に対して比重を高めていくことは否定できない流れである。しかし、近世初期に新たな政治文化形成の先端を進んでいった池田光政を見ると、藩政の実行に当たって、活発に家臣から誓詞を徴し、その政治的効果を高めようとしている。

また岡山藩で見るかぎり、役職就任に際しての誓詞徴取は近世の全期にわたっており、廃藩置県まで続いている。ただし、本稿で取りあげた、藩主が自筆日記に記録するような誓詞は、依怙最眞の弊害が特に出やすい役務就任、遅疑逡巡が起りやすい役務就任、疑惑の解除、相互の信頼増幅、悪行の予防措置などのためのものであった。

このような誓詞は、神罰冥罰の強さよりも藩主光政の政治的意思の強さを表現し、家臣の心を自分の側に掌握する手段として機能していた。こうして、近世の誓詞は、神文部分ではなく、前書の内容こそが政治的に重要であった。白紙で血判なしでも可というのはそのことの一つの表れであろう。誓詞前書は、ほとんど法令と変わらない内容になっているものがある。逆に言えば、法の効果を上げる形式として誓詞が用いられている。したがって、近世誓詞は、中世以来の遺制的習俗であるというだけでは説明不足であり、近世政治の一つの実効手段に転形しているのである。

注記

- (1) 深谷「近世政治と誓詞」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第四八輯・第四分冊、二〇〇三年三月)。深谷『近世人の研究』(名著刊行会、二〇〇三年)。
- (2) (3) (4) 深谷「日本近世の相剋と重層」(『思想』七二六号、一九八四年一月、「近世社会の形質」と改題して『百姓成立』塙書房、一九九三年、に収録)。
- (5) 谷口澄夫・水野恭一郎・藤井駿編『池田光政日記』(国書刊行会、一九八三年)。
以下『日記』と略称。なおマイクロフィルム版も完成しているが、「池田家文庫藩政史料マイクロ版」には収められていない(林原美術館所蔵池田光政自筆日記マイクロ版、丸善株式会社)。
- (6) 前出深谷『近世人の研究』の「序章」でこのことについて論じた。
- (7) (9) 『池田家文庫マイクロ版史料目録法制 F 行政3 誓詞』(岡山大学附属図書館編)
- (8) 『日記』二二～二三頁。
- (10) 『日記』二二頁。
- (11) 『日記』二三頁。
- (12) これらのことについて、次の論考で指摘した。深谷「明君創造と藩屏国家(二)」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第四一輯・第四分冊(一九九六年二月))。
- (13) 『日記』二四～二五頁。
- (14) 『日記』二五四～二五五頁。
- (15) 『日記』二五五頁。
- (16) (17) 『藩法集1 岡山藩上、卷之七諸臣教令』三四三頁。『池田家文庫藩政史料マイクロ版集成』「法令集」卷之七「諸臣教令部」E2-10*T E B-002。
- (18) 『日記』二六六頁。
- (19) 『日記』二六六～二六七頁。
- (20) 『日記』二六七頁。
- (21) 『日記』二八四頁。
- (22) 『日記』四三三頁。
- (23) 『日記』四三一頁。
- (24) 『日記』二三八頁。
- (25) 『日記』四三一～四三二頁。
- (26) 『日記』四三四頁。
- (27) 『日記』『池田家文庫藩政史料マイクロ版集成』F 3「誓詞」YFC-003。

- (28) 『日記』一五頁。
- (29) 「池田利隆〔武蔵守〕法令 武州様法令 九」(『藩法集1 岡山藩下』創文社、九四頁)。
- (30) 深谷「近世政治と百姓目安」(岩田浩太郎編『民衆運動史2 社会意識と世界像』青木書店、一九九九年)。
- (31) 『日記』一五頁。
- (32)(33) 『日記』三三頁。
- (34) 『日記』二六頁。
- (35) 『日記』三〇頁。
- (36) 『日記』九七頁。
- (37) 『日記』一八九頁。
- (38) 『日記』一〇一頁。なお前稿「近世政治と誓詞」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第四八輯第四分冊、二〇〇三年三月)では荒尾但馬の行為と解釈したが、これは「案紙」を披露したうえで「本紙」を光政に提出し、それを光政が手文庫に入れたと解すべきと考えられるので訂正したい。
- (39) 『日記』一六五頁。
- (40)(41) 『日記』一四九頁。
- (42) 『日記』一五〇頁。
- (43)(44) 『日記』一六二～一六三頁。
- (45) 『日記』一六三頁。

元和二年幕府の対外政策に関する一考察

紙屋敦之

はじめに

二〇〇三年八月二二、二三両日、岡山藩研究会の、土佐山内家宝物資料館の史料調査に参加した。同資料館は「長帳」と称する膨大な史料を所蔵している。その中の一冊に、『甲第三号 元和文書 上 自元年至参年』と題されたものがあり、元和二（一六一六）年土佐に漂着した薩摩船および唐・南蛮船に関する文書十数通が綴られている。

元和二年は、八月八日、江戸幕府がキリスト教禁止令を徹底するために、黒船・イギリス船に長崎・平戸両港への来航を命じた年である（1）。そして、この八月八日令を起点に、幕府は寛永一〇年代に成立する「海禁」へと向かっていった。海禁とは国家が出入国を管理する対外政策のことである。

本稿は、元和二年の土佐漂着船に関する史料を紹介し、元和二年の幕府の対外政策について検討する。

一 元和二年の土佐漂着船

『甲第三号 元和文書 上 自元年至参年』の中から、元和二年土佐漂着船に関する史料を提示する。

1 薩摩船の漂着

元和二年三月二四日、琉球・大島（奄美諸島）から島津氏に年貢米を運ぶ船が難風に遭い、同二八日幡多郡鈴浦に漂着した。島津氏は慶長一四（一六〇九）年琉球を征服し、同一五年大島代官（同一八年大島奉行と改称）を置き、同一六年大島を琉球国王の支配から切り離して直轄地としていた。

【史料1】

猶々右之舟ニ唐人十二人乗申由ニ御座候、様子越後此使可申候、以上
態以使札言上仕候、然者島津殿分国大島と申所より島津殿へ年貢米漕参候船、今月廿四日
之難風ニ相、帆柱梶をそこなひ、其上荷物過半捨申、一昨日廿八日ニすゝの浦ニ寄申候、
所之庄屋水子共罷出引入申候へ共、すゝ浦ニハ湊無御座候故、佐賀へ申越、則佐賀より舟
を申付引入申由ニ御座候、右之捨残り荷物共御座候由申候間、右之上乗其許参候而申上候
へと申付候、此等之趣可然様ニ御披露所仰候、恐惶謹言、

三月晦日

山内吉兵衛

良豊 花押

監物殿

御中

【史料2】

尚々被成御分別御報奉待存候、唐人只今不進候事何と可被思召候哉、一番に得御意可
申ためニ如此候、以上、
態以飛札申入候、島津殿貢物舟之儀ニ付而預御状候、上乘之者参候間、御前可然様ニ奉頼
存候、唐人も可進と存候処ニ候、そうきの様子承候間、先申留候、御報ニより可進候、り

うきうにてすて候荷物書立、則所之ものおさへ取申候間、被仰付請取申度由候事、次二なか崎迄苦状可申談と申、左様之儀頼存唐人進候儀若不届様ニ可被思召候者、此御報次第二可仕候、りうきうにてうせ候荷物之せんさく被仰、同二日島津共へ被仰、いろいろ六ヶ敷事ニ御座候哉、委細者此使者口上ニ被成御尋可然候、惣例唐人之荷物ふからす候、上乘と算用之出入ニて唐人儘ニさせ不申、子細者一ツ書ニ申入候、恐惶謹言、

加用越後

卯月九日

花押

山備後様

ここからは、二つの事実が注目される。一つは、唐人が薩摩船に便乗して来日していることである。唐人は大島で薩摩船に便乗したと考えられる。薩摩藩は琉球征服後、慶長一六（一六一一）年に掟十五ヶ条を制定し、「從薩州御判形無之商人不可有許容事」「從琉球他国江商船一切被遣間敷之事」と定めて、薩琉間の往来を制限した（2）。元和四年八月晦日には、「此度柳屋其国へ罷下候刻、於大島堺衆兩人召つれ差下候由、相聞得候、曲事深重之儀候間可有御糾明事」（3）と、琉球渡航の途中大島で堺衆二人を召し連れて下船した柳屋（4）の糾明を琉球に命じている。大島が唐船と日本商人の出会貿易の場となっていたことがわかる。

もう一つは、唐人が琉球において捨てた（失せた）荷物を所の者が抑え取ったので取り戻したい、また長崎に訴え出たいと述べていることである。その荷物は、三月二四日の難風に遭って海中に投棄した荷物ではない。おそらく大島に来航した際に取り上げられた荷物のことであろう。元和元年六月二六日、島津氏は、「琉球伝ニ参候唐船之儀、長谷川左兵衛佐殿より彼唐人共心次第早々致商売候様ニと被仰候」と、琉球伝いに来航する唐船には商売の自由が認められていると強調し、「向後大事之儀候間、長谷川殿書状為証跡不失様ニ召置候へ」（5）と命じている。長谷川は長崎奉行の長谷川藤広であるが、慶長一十九年五月一七日島津家久に、「唐船之儀被仰下候、着岸之時分者、何様にも唐人次第可被仰付候」（6）と、唐船に商売の自由を認める幕命を伝えている。唐人は、琉球（大島）で無理やり荷物を放棄させられたことを、商売の自由を認めた幕令に違反するとして、長崎奉行へ訴え出る構えを見せたのである。

2 唐船の漂着

五月と思われるが、幡多郡清水浦に唐船が漂着した。

【史料3】

猶以侍共申付儀者修理様より被仰下候付、伊布利迄申付遣申候、
態以飛脚致言上候、今月二日之御書同四日之子之刻ニ参着致拝見候、
一清水唐船之儀おろし申候へと被仰下候、此中三浦介左衛門・桜木左大夫申付、かち帆柱上申様ニと種々才覚仕候へ共、唐人中々合点不仕候、
一唐人之水・薪木其外食物之儀、一日切二遣候様ニと被仰下候、此中より左様申付候、
一唐仁おろし申候而相留申儀中々罷成申間敷体ニ相見へ申由清水より申来候、但随分才覚仕おろし申、舟出不申様ニ才覚可仕候、
一唐仁舟無理ニ留申候而可然と思召候者、其元在之関舟数々被仰付、其上清水近所材木を取、湊口を右之材木ニ石を付しつめ被成候か、又ハ釣舟など五百艘かわら櫟（礫）石を入しつめ候か外ニ才覚も罷成間敷候、爰許に而談合仕候中ニ御座候、

- 一右之通ニ致才覚候而可然と思召候者、此御報ニ可被仰下候、不及申上候へ共御公儀之御中御分別御尤ニ御座候、我等之儀者御意次第ニ可申付候、
- 一唐仁舟之儀其許へひかせ可被成候由御尤ニ奉存候、
- 一前かとり侍共可申付候処ニ人無御座候へハ、唐人事之外迷惑かり申ニ付不申付候、只今御書之旨付、勝左衛門・理左衛門ニ侍式十人伊布利迄遣申候、此等之趣可然様ニ奉頼候、恐惶謹言、

山吉兵衛

六月四日

良豊 花押

生駒木工様

【史料4】

- 尚々申上候、此中牛・にハ鳥などを志摩守・助左衛門御代官所より被申付、唐人共一段忝存候通我等迄申聞候、一段肝煎ニ御座候、以上、
- 去四日之御書今日七日之申之刻ニ致参着頂戴仕候、仍黒舟之儀、萩野久左衛門爰元之体見及被参儀ニ御座候間、具ニ可被申上候、其後吉兵衛様御懇ニ被仰付候故、此比ハ少くつろき申体も相見へ申候、随而只今までハ色々ニおろし申付候、
- 一吉兵衛様今日ミノ刻ニ此表江御着被成候、唐人共ニ種々御ミやけ被遣御懇ニ被仰聞候ニ付、弥今日ハ唐人忝存体相見申候、
- 一唐人一人吉兵衛様へ御礼ニ罷越候而四五日逗留仕、昨日六日ニ罷戻申候、其折節下田之ミなど見及申候而、今日吉兵衛様へ申上候様子ハ、御帰城被成候ハ、唐人御供仕罷越ミなどのふかさをミはからひ、能候ハ下田へ舟を廻申度と申上候、
- 一梶柱帆上ケ候へと被仰付候へ共、久左衛門より申上候、其 御意不被仰付候内ハ中々申出候事不罷成候、
- 一唐舟浦戸へ廻候へと申儀も何と可存もしれさる儀と存、未左様儀も不申聞候、
- 一昨日唐人共申候ハ、舟之作事之用意仕度候間、中ノ島ニ小やかけをかけ候てくれ候へ、奉公人をつけ置申度と申候、幸吉兵衛様被成御座儀候条、何様ニも可得御意可申候、
- 一ミなどの口きりふさき申候儀も用意可仕と各談合いたし候へ共、唐人ともくつろき申体ニ而、山へ上り又ハ近所之在所などへも立廻体ニ御座候故、若不審を立、心をちかえ候へハ、いかゝと各談合仕、先はさしのべ申候、
- 一江戸御注進被成候儀ハ、今少爰元唐人之体見及可申上候、次今日までハ弥あきなひ物少もいたし申体ハ無御座候、相替儀御座候ハ、自之追々言上可仕候、右之趣可然御披露所仰候、恐惶謹言、

酉之刻

真鍋善右衛門

六月七日

□□ 花押

樋口関太夫

吉□ 花押

勘七殿

【史料5】

- 尚々様之通ハ切ニ申上候条、とかく御意次第何様ニも可申付候、以上、
- 追申上候、先年清水へ参申たる船留用意仕たるを承存候て事之外氣遣、清水より五り三り之間ハ庭鳥かいニ参候故、何様之儀ニ候哉と立聞体ニ御座候、少もそれ

をふせぎ候へハ、はや氣ヲ違申候、以上、

去十日之御書同十四日ミノ刻ニ頂戴仕候、

一清水湊口ふさぎ候へと被仰下候、先日様子具ニ言上仕候之条、其御左右次第可申付候、清水へも左様ニ申遣候事、

一唐人江戸へ御礼ニ参候様ニと被仰下候、昨日此表へ召連参候条、一兩日者くツろけ候て可申聞候、とかく氣を違候ハぬ様ニと仕候事、

一我等在江戸之時分下總之国尾瀧へ黒船寄打わり申候、則注進申上候処ニ、公方様より御奉行堅被仰付荷物少も違候ハぬやうニ被成主ニ被遣候、其上江戸ニ御座候唐船御兵糧迄被遣一入御懇ニ而候、罷歸次年頼而御礼ニ参申候、左様之通我等も承及候之条、自然唐人共腹立様ニ仕候而ハいか様之儀も可有御座候哉と先ハおろし申体ニ御座候、先日委申上候条、とかくニ御詮次第湊口之様子可申付候、此等之趣宜預御披露候、恐々謹言、

山内吉兵衛

六月十四日

良豊 花押

生駒木工殿

山内吉兵衛良豊は二代藩主山内忠義の弟、幡多郡中村に居住した。山内吉兵衛は、唐船から唐人を上陸させ、梶・帆柱をも陸に上げさせるよう指示しているが、唐人はなかなか承諾しない。そこで、唐船を強いて拘留するために、材木に石を括りつけて沈めるか、あるいは釣船などに瓦や石を入れて沈めて清水湊口を封鎖するかを申し上げ、藩の指示を仰いでいる。これらは、唐船が不意に出航しないようにするための措置である。

梶・帆柱を陸に上げさせる措置は、過去（慶長七年）唐船に関して次のような失態を演じたことによると思われる（7）。

去秋土佐国江唐船寄、彼国主山内対馬守日本船にて取巻之番を付る、唐人も対馬守江、巻物以下以使令音信、伏見江も急度の可遂礼之由宣之条、対馬守使彼船江

乗移る、さて伏見江可給検使由令言上間、使を被相下、然処風能折を得、帆柱引上、鉄砲のことなる物三つ放し、鐘鼓打鳴し、番に付小船共乗たをし走ける、

対馬守使も同有彼船間、引連行、其比人の嘲弄此事也、唐人も二三人残留、是は対馬守江音信の使也、此船より惣別如此船を押る時は、帆柱を取物なりけるを、

油断にて不取事不覚也と云云、

土佐に漂着した唐船を山内一豊が日本船で取り囲み、伏見（徳川家康）へ検使を要請し、検使が派遣されてきたが、唐船はよい風を得て帆柱を引き上げ、鉄砲のようなものをぶつ放し、鐘・太鼓を打ち鳴らし、番船の囲みを突破して逃げ去ったのであった。

3 南蛮船の漂着

これも五月と思われるが、幡多郡清水浦に南蛮船が漂着した。「十六—十七世紀日欧交渉史年表」（8）には、元和二年（五月）「ノビスパニアからマニラへ航行中のスペイン船、土佐清水に漂着」とある。

【史料6】

尚々はたへ祖父江志摩守一入肝煎申候、猶談合いたし可然様ニ可申付候、以上、

去四日之御書同六日之晩九ツ時分ニ頂戴仕候、南蛮船之儀我等も今日清水へ罷越見申候、弥かびハたんおろし申候へ者案堵仕候、今之分ニ御座候ハ、緩々与可罷在と奉存候、先日注文進申候之御艘唐人用之物共早々可被遣候、委細之儀共真鍋善右衛門・樋口関太夫所よ

り可申上候、此等之趣宜預御披露候、恐々謹言、

山内吉兵衛

六月七日

良豊 花押

生駒木工殿

御報

【史料7】

尚々清水之様子善右衛門・関太夫ニ我等之者相添懸申付置候条可御心安候、猶追々可申上候、

乍恐以飛脚申上候、南蛮船之様子我等罷越、いろいろかびたんおろし申候へ者心安相くつろぎ申候、結句我等と同心候て、中村へ罷越候様ニ才覚いたし召連、下賀江まで罷越申候、可成程ハ何とそおろし申候て、中村ニ相留可申、今之分ニ御座候者、緩々与船拵等可仕候と存候、乍去分別替可申ハ不存候、此等之趣宜預御披露候、恐々謹言、

山内吉兵衛

六月十一日

良豊 花押

生駒木工殿

御中

【史料8】

尚々内々ふさぎ申用意可申付候処、自然聞付、何たる分別をも仕候者、其上者いかゞ可被仰付候哉、重而具ニ可被仰下候、随而御飛脚水深御座候て一日中村ニ逗留仕候、以上、

去八日之御書同十三日八ツ之刻ニ頂戴仕候、

一今一艘奥ニ黒船相見へ候よし、萩久左衛門申上候間具ニ御詫畏存候、随分心懸候へと浦々へ可申付候、

一今朝以飛脚申上候御艘、湊口ふさぎ申様子ハ、其御左右次第可申付候、則黒船主かびたん中村へ遊山ニ参度与申候之条、召連参此上にて候ニ、又湊口切塞申儀者いかゞ御座可有候哉、自然聞付無理ニ罷出候ハ、何と被仰付へく候哉、追々様子可被仰下候、

一とかくニおろしかびたん中村ニ相留、其上其地へ参候様ニ可仕と奉存候、左様仕内ニハ江戸より御左右可有存候、此趣御披露所仰候、恐々謹言、

山内吉兵衛

六月十二日

良豊 花押

生駒木工殿

御中

【史料9】

猶々早々此方へ参候唐人とも御のせ候て下田へふね御こし候へく候、とかく主きこんニ仕候而も心安申が可然候間、此方之儀可御心安候、先々きこん猥成義無之様ニ被申付候へく候、いそき船奉行衆一人と久左衛門殿御のり候て御こし候へく候、以上、

以飛脚申入候、然ハかびたんいろいろ申聞候故、高知へ目見得えニ可参と申候、

一其許ニ在之関船之内、はやきふねニ水主御えらひ候て御乗せ被成、両船奉行衆之内一人与萩野久左衛門殿被召連候へく候、

一先日荷物等上候、久左衛門殿ニ相渡候条大儀ニ御座候共、其御心得候へく候、
一黒船之儀留主中ハ是非共吾等より主ニ頼候間、下々相用与申もの共、御かわせ申へく候、
とかくニきまかせニ仕候ておろし申ならてハ分別無之候、高知より罷帰候共、又直ニ中
村ニかひたんハい申候て、舟拵をハ余之者共ニ可申付と申候、恐々謹言、

七ツ下刻

山吉兵衛

六月十六日

良豊 花押

真鍋善右衛門殿

樋口関太夫殿

渡部左太夫殿

萩野久左衛門殿

御中

【史料10】

以上

貴札致拝見候、仍御領分幡多郡清水浦へ小黒船一艘流寄申候付而、御注進被仰上候、委細
之段以連判申入候、然而此方相替儀無御座候、爰元何にても相応之御用
御座候者可遂仰候、疎意存間敷候、将亦此地御袋様何事無御座御息災ニ被成御座候間御心
安可思召候、猶期後音之時候間、不能一二候、恐惶謹言、

(朱筆) 元和二年

本多上野介

六月廿六日

正純 花押

松平土佐守様

貴報

土佐藩は、組頭渡邊左太夫、御小姓萩野久左衛門、船奉行真鍋善右衛門・樋口関大夫を
清水に派遣した(9)。幡多郡中村からは山内吉兵衛が侍数人を番人に遣わし、南蛮船が
不意に出船しないよう用心を命じた。南蛮船に関しても唐船と同様に、カピタンを上陸さ
せ、帆柱なども陸に上げさせるよう命じている。

また、南蛮船の漂着について幕府に注進した。六月二六日、本多正純は「委細之段以連
判申入候」と山内忠義に答えている(史料10)。それが次の史料である(10)。

猶以早々御注進之儀、被入御念之旨御座候、

御飛札之趣致拝見候、仍御分国幡多郡清水表江小黒船流寄申由蒙仰候、御紙面之通達上
聞候処、何方江参候共彼船主次第ニ御かまいなされまじき之旨上意候間、可被成其心得
候、恐恐謹言、

六月廿五日

土井大炊助利勝

安藤対馬守重信

酒井雅楽頭忠世

本多上野介正純

松平土佐守殿

貴報

幕府は、どこに来航しようと南蛮船の船主次第であると伝えている。

二 元和二年の幕府の対外政策

元和二年の幕府の対外政策については、①六月、すべての外国船に長崎への来航を命じた、②しかし、二ヵ月後の八月八日、黒船・イギリス船には長崎・平戸への来航を命じるが、唐船の来航は自由とした、と理解されている(11)。

幕府がすべての外国船に長崎来航を命じたとされる根拠は、元和二年六月、薩摩藩が大明諸商客に宛てた「須知之簿」(12)である。

須知之簿

我薩摩州与大明、雖隔万里之修程、年々泊商船者、自古皆然、大明商客之所得而能知也、今日本有

一將軍発号於東西施令於南北、日本風行草偃、是故置一官於長崎、使之招異邦之商船、以為其所止之處矣、因茲南商北賈、指此地以為要津矣、今商客之所得而能聞也、自今以往、雖曰大明商船之隨風而來於我薩州之(地)、頃刻不許繫船於我地矣、
一將軍之素心、不愆不忘、率由旧章、由是觀之、今雖令長崎為商客之所止、後必泊商船於我薩州以為貿易、所須之處、亦未可知也、商客姑待之、今也
一官之号令、誰敢可濫之乎、商客其念之、

日本元和二年六月 日

大明諸商客

内容はこうである。日本には將軍がいて全土に号令を発し、全国が支配に服している。將軍は役人を長崎に置き、外国の商船を招かせて停泊の港とした。それにより商人が長崎に集まり、主要な港になった。そのことは今商客のよく知るところである。今後は、明商船が風に任せて薩摩に来航しても船を留めることを許可しない。今、長崎が商客の留まる場所であるが、後に必ず商船が薩摩に停泊して貿易できるようにするので、商客はしばらく待て、今は役人の命令を誰が敢えて濫することができようか。

前段の内容と六月の日付から、幕府が六月すべての外国船の長崎来航を命じた、という解釈が導き出されたのである。

幕府の対外政策の基本方針は、豊臣秀吉の朝鮮侵略後の、明との講和の実現であった。慶長一五(一六一〇)年一二月一六日、本多正純が明商人周性如に託して福建総督宛てに書簡(13)を送り、勘合復活(講和)を打診した。その中で幕府は、「明歳福建商舶来我邦、期以長崎港為湊泊之处、随彼商主之意交易有無、開大関市、豈非二国之利乎、所期在是耳」と、来年福建商船が日本に来航したら長崎港を停泊場とする方針を表明している。そして慶長一七年一〇月二〇日、「今度至薩摩浦唐船着岸致候へ共、長崎より奉行被付置候付而、陸奥守殿より御構不被成候由、蒙仰候」(14)と、薩摩に唐船が着岸しても長崎から奉行を派遣するので、島津氏が構ってはならないと命じ、唐船との貿易を禁じている。幕府はこうした統制策を打ち出す一方で、長崎奉行長谷川藤広の慶長一十九年五月一七日付島津家久宛書状によると、唐船が着岸したときはいずれも唐人次第であると妥協せざるを得なかった。この長谷川書状を根拠に、前述のとおり、元和元年六月二六日、島津氏は、琉球伝いに来航する唐船は唐人次第に商売が認められていると理解したのである。

元和元年五月、大坂夏の陣で、徳川家康は豊臣家を滅ぼし、全国支配者としての地位を確立した。その上で幕府が再び唐船の長崎来航策を強めてくることを薩摩藩は警戒し、大明諸商客に対し「須知之簿」を発したのであろう。「須知之簿」はあくまで唐船を対象にしているのである。

前述したとおり、幕府は、元和二年六月二五日、土佐に漂着した南蛮船の件で、「何方江参候共彼船主次第御かまいなされまじき」と土佐藩に伝えている。このことは、元和二年六月、幕府が外国船の長崎来航を考えていなかったということである。

外国船の長崎来航は、次のような形で発せられた(15)。

追而唐船之儀者何方へ着候とも船主次第商買可仕候旨被仰出候、以上
急度申入候、仍半天連門徒之儀堅御停止之旨先年相国様被仰出之上者、弥被存其旨下下百姓以下に至迄、彼宗門無之様に可被入御念候、将又黒船・いきりす舟之
儀者右之宗体候之間、至御領分着岸候共長崎・平戸へ被遣於御領内売買不仕様に可被申付候、此旨以上意如斯候、恐々謹言、

八月八日

安藤対馬守 ○重信

土井大炊助 ○利勝

酒井備後守 ○忠利

本多上野介 ○正純

酒井雅楽頭 ○忠世

松平土佐守殿

幕府は、慶長一七年のキリスト教禁止令を徹底するために、キリスト教国の船である黒船・イギリス船の来航を長崎・平戸に制限した。しかし、唐船に関しては、長谷川藤広書状の存在により、来航地を制限できなかったのである。

おわりに

元和二年土佐国に漂着した薩摩船および唐・南蛮船に関する史料を紹介しつつ、同年の幕府の対外政策を再検討した。

これまで「須知之簿」を根拠に、元和二年六月、幕府はすべての外国船に長崎来航を命じたと解釈されてきたが、同年六月二五日の老中連署状は「何方江参候共彼船主次第御かまいなされまじき」と南蛮船に自由な来航を認めており、そうした事実は確認されない。「須知之簿」は唐船の長崎来航という従来からの政策が、大坂夏の陣で幕府が全国支配を確立したのにもとない強化されてくることを警戒し、薩摩藩がその撤廃を考えていることを唐人に対し表明したという位置づけになる。

元和二年八月八日令の黒船・イギリス船に対する貿易統制は、キリスト教禁止令を徹底する目的によるものであり、唐船を対象から外した理由は長谷川藤広書状の存在による。

注

- 1 『鹿児島県史料 旧記雑録後編四』一三八八号。
- 2 『鹿児島県史料 旧記雑録後編四』八六〇号。
- 3 『鹿児島県史料 旧記雑録後編四』一五三七号。
- 4 柳屋は寛永一〇(一六三三)年薩摩藩に琉球への渡航許可を求めてきた「柳屋市左衛門尉」と思われる(『鹿児島県史料 旧記雑録後編五』六三八号)。
- 5 『鹿児島県史料 旧記雑録後編四』一二七四号。
- 6 『鹿児島県史料 旧記雑録後編四』一〇九九号。
- 7 『当代記』(国書刊行会編『史籍雑纂』第二、続群書類従完成会、一九七四年)七九頁。

- 8 パステルス著・松田毅一訳『一六——一七世紀日本・スペイン交渉史』大修館書店、一九九四年。
- 9 山内家史料刊行委員会編『第二代忠義公紀 第一編』（山内神社宝物資料館、一九八〇年）四〇〇頁。
- 10 『第二代忠義公紀 第一編』三九九～四〇〇頁。
- 11 元和二年六月 日の「須知之簿」から同年八月八日令へ展開したと仮定して、幕府はすべての外国船の長崎来航を策したが、島津氏等の抵抗を受けて、ヨーロッパ船のみの統制に後退したと解釈されることになった。
- 12 『鹿児島県史料 旧記雑録後編四』一三五八号。
- 13 京都史蹟会編『林羅山文集』（弘文社、一九三〇年）一三〇頁。
- 14 『鹿児島県史料 旧記雑録後編四』九六四号。
- 15 『第二代忠義公紀 第一編』四一四頁。

はじめに

日光社参は、「江戸時代、将軍の日光東照宮への参詣。徳川家康の命日にあたる4月17日の祭礼にもうでる。」と説明されている⁽¹⁾。日光社参は大名を総動員するところから、「將軍家の勢威を伸張するうえに、このうえもない大きな効果のある盛儀」⁽²⁾とか、「強い將軍権力を誇示するための一大デモンストレーションとしての効果をもった」⁽³⁾とか評されている。また、そのようなデモンストレーションという評価を批判し、「きわめて政治的なセレモニー」で、軍役動員を通し「將軍の政治的力量をみせつけ、その權威を高めることを狙った」⁽⁴⁾とも評されている。いづれにしても、將軍の軍事指揮権により全大名を供奉して行うというものとして理解されている。

しかし、これらの評価は、いづれも享保期以降の日光社参を素材にしたものである。日光社参は、表のように、江戸時代を通じて、元和3年(1617)4月の2代將軍秀忠から天保14年(1843)4月の12代將軍家慶の社参まで、226年間に16回行われている。そのうち、9回が3代將軍家光の社参である。享保期以降の日光社参は、僅かに3回を数えるにすぎない。その3回の日光社参でもって、全体の日光社参を説明し、イメージを作り上げていると言える。17世紀中期と19世紀中期の日光社参では、その規模も、また持つ意味合いも異なると思われる。

従来の研究が享保期以降の日光社参に偏っているのは、史料的な問題によるところが大きいと思われる。しかし、まず、それぞれの日光社参の実態を分かる範囲で明らかにし、そのもつ意味合いを考察し、その上で日光社参全体の評価をしていく必要がある。

そのような考えに基づき、本稿では寛永11年(1634)9月に行われた將軍家光の日光社参を取りあげる。この日光社参については、藤井譲治は、同年7月から8月にかけての上洛を神祖家康に報告するためのものと位置づけているが、説明が不十分である⁽⁵⁾。そこで、本稿では、まず、この日光社参がどのように実施されたのか、どのような大名が動員されたのか、また諸大名はどのようにこの日光社参にかかわったのか、等について出来る限り明らかにし、この日光社参が持った意味を考察する。その際、日光社参を通じて將軍權威がいかに創られるのか、また、諸大名がどのような意識をもって日光社参に望むのか、に特に注意したい。

1. 「徳川実紀」に記された日光社参

「大猷院殿御実紀」には、寛永11年9月の日光社参に関して、以下の記述がある⁽⁶⁾。

①寛永11年9月5日条

御上洛はてしをもて。日光山 御宮に詣給ふ由聞えければ。大宮より明衣五。手拭。風呂敷を進らせらる。

②寛永11年9月13日条

十三日日光山御首途あり。松平隠岐守定行。松平式部大輔忠次。牧野右馬允忠成。今市駅にかりやいとなみて警衛す。この日岩槻城に御止宿あり。土井大炊頭利勝饗し奉

る。大久保主馬正朝。山内豊前守一唯。阿倍四郎五郎正之。其子左衛門次郎政継。星合太郎兵衛具通等あまた供奉し。医官熊谷伯安慶伝。田沢清雲道賀もしたがふ。

③寛永 11 年 9 月 14 日条

十四日古河城御泊りあり。土井大炊頭利勝御膳を献ず。

④寛永 11 年 9 月 15 日条

十五日宇都宮城に着御あり。城主奥平美作守忠昌饗奉り。

⑤寛永 11 年 9 月 16 日条

十六日日光山につかせ給ふ。この日雨ふる。今市の土人へ金を下さる。」又道中にて目安さゝぐるものあまたあり。

⑥寛永 11 年 9 月 17 日条

十七日御宮御拝あり。松平式部大輔忠次。安藤右京進重長等供奉す。(中略) この日直に日光山を下らせ給ふ。

⑦寛永 11 年 9 月 18 日条

十八日古河御止宿

⑧寛永 11 年 9 月 19 日条

十九日岩槻

⑨寛永 11 年 9 月 20 日条

廿日御帰城

以上のことから、以下のことが分かる。

- (1) 日光社参が何時発令されたのか、はっきりしない。①以前に日光社参に関する記事は見あたらない。「大宮」とは家光の妹の東福門院のことで、後水尾天皇の中宮として京都にあった。したがって、8 月末には日光社参のことが発令されていたと思われる。「御上洛はてしをもて」とあるから、家光が江戸に帰着した 8 月 20 日以降のことかと思われる。ともかく、日光に出発する直前になってから発令されたと言える。
- (2) 日光山警衛の大名として、松平定行・松平忠次・牧野忠成の名が確認できる。松平定行は伊勢長島 11 万石の藩主、松平忠次は榊原忠次のことで、上野館林 10 万石の藩主、牧野忠成は越後長岡 5 万 8000 石の藩主。いずれも、いわゆる譜代大名である。この三名の警衛箇所は今市で、日光山の他の箇所の警衛については触れていない。
- (3) 往路の宿泊は岩槻・古河・宇都宮であるが、復路については古河・岩槻しか明らかでない。おそらくは、寛永 13 年(1636)・同 17 年の日光社参の時と同じく、下野壬生に宿城したと思われる⁽⁷⁾。
- (4) 岩槻の藩主は阿部正次であるが、宿城した家光の饗応は古河藩主土井利勝(老中)が行っている。これは阿部正次が大坂城代として大坂にあったためと思われる。
- (5) 17 日の東照社拝礼の供奉大名としては、松平忠次と上野高崎 6 万 6000 石余の藩主安藤重長の名しか知れない。いずれも、いわゆる譜代大名である。
- (6) 下山の日時が、東照社に参拝した 9 月 17 日その日と、性急である。家康 13 回忌の寛永 5 年では、4 月 26・27 日の両日に東照社に参拝し、翌 28 日に下山している。また、疱瘡時の立願により社参した寛永 6 年でも、4 月 17 日に参拝し、翌 18 日に下山している。朝廷から、上洛が済み無事着府したことを慶ぶ勅使・院使が江戸に下向してきており、その対顔の儀式が待っていたからかもしれない。

不明な点が多いが、全体として小規模な日光社参のような印象をうける。6月から8月にかけて、30万余の供奉人数を動員した上洛を行ったため、小規模になったとも考えられる。

2. 大名家の書状に見える日光社参

寛永期の幕府や將軍の動静についてよく言及しているものに、細川忠興・忠利の書状があるが、寛永11年の日光社参に関する記事は多くない。

①寛永11年9月11日 堀田正盛宛細川忠利書状

一日光より漸 還御と存候、御氣嫌能御座候哉之事⁽⁸⁾

②寛永11年9月19日 木下延俊宛細川忠利書状

「此中も細々江戸より便御座候、替儀も不申来候、日光へハ弥御成候由申来候」⁽⁹⁾

③寛永11年10月18日 岡孝賀宛細川忠利書状

十月朔日之御状拝見、

一上様日光被成 御社参 還御、御氣嫌之由、目出度存候事、⁽¹⁰⁾

この時期、細川忠利は国許の肥後熊本に在る。①の宛先の堀田正盛は家光の近習出頭人で、下総佐倉藩主。將軍家光の様子を家光側近の正盛に問い合わせたもので、儀礼的な挨拶として述べたものである。しかし、家光がまだ日光に向け江戸を出発していない9月11日に、「日光より漸 還御」と帰りの様子を聞いている。8月末に日光社参が発令されたとしたが、細川忠利には正確に伝わっていなかったことになる。発令自体がどのようなものか問題となる。この点は、この日光社参の性格を考える上で重要なものであるが、明らかにしえない。

木下延俊は豊後日出藩3万石の藩主。細川忠利は、江戸からの書状により伝えられた、將軍家光が日光社参のために江戸を出発したことを、延俊に伝えているが、その書き方から忠利が日光社参に関係していないことが分かる。忠利が国許熊本にいたからとも考えられるが、日光社参時における、いわゆる外様大名の立場が表れているように思われる。

岡孝賀は家光付きの医師。家光が日光から帰府したことについて、その慶びを述べている。10月18日付の奥医師河野通幸宛の細川忠利書状⁽¹¹⁾にも、同様な慶びが述べられている。

総じて、細川忠利の書状では、家光の日光社参は儀礼的な挨拶、あるいは江戸の話題、として記されている。

次ぎに土佐山内家文書から、寛永11年の日光社参を見ていこう。

④(寛永11年)卯月2日 松平土佐守(山内忠義)宛山内伊豆守一唯書状⁽¹²⁾

一此表弥相替儀無御座候、近日日光へ御幸之御沙汰迄ニ御座候、就其获久左衛門遣候付、御上洛被成候翌日、日光へ罷越候、

⑤(寛永11年)8月5日 岩崎又右衛門尉宛柴田覺右衛門勝正書状⁽¹³⁾

態以飛脚致言上候処ニ、去月十七日ニ江戸へ被 遣候御飛脚、今朝御国へ罷下候間、謹而致言上候、

一上様、今日五日辰ノ上刻ニ京都御立被成、還御被為 成候、

(中略)

一九月日光へ被為 成御使者、又其節古河にて大炊殿 御膳御上被成、御使者何茂両

人ニ可被成由ニ御座候、か様ニ御座候ハ、夫々御使者数多入可申候間、御使者ニ可罷成仁二三人も御下置御尤ニ奉存候、何れ之御大名衆も左様ニ被 仰付由申候、
(後略)

⑥ (寛永 11 年) 9 月 14 日 岩崎又右衛門尉宛山内修理太夫忠直書状⁽¹⁴⁾

(前略)

一上様昨日日光へ被為成候、松平能登守殿・山内豊前守殿も御供ニ而御さ仕候、一昨日御 立被成候、

(後略)

⑦ (寛永 11 年) 9 月 14 日 岩崎又右衛門尉宛柴田覺右衛門勝正書状⁽¹⁵⁾

以上

謹而致言上候、此御飛脚去月十四日ニ被 仰付候、同晦日ニ参着仕候、早々指上セ可申处ニ、珍御沙汰も御座候ハ、可被仰進由松平能登守様被成御意候故、致延引候处ニ、相替儀も無御座、上様昨日十三日ニ日光へ被為成候、能登殿も供奉被成候、先日谷川七左衛門罷上候節、御状被進候間、今度之御報者被成間敷由、一昨日被仰候ニ付而、只今指上遣申候、

一今度日光 御社参前ニ、諸大名衆より御進物上り可申由ニ而、何も用意仕候間、先書ニ如言上仕候、当五月御仕立させ置被成 御進上候御道服五ツ、内式ツ単ニ而御座候、此時分ハいかニ奉存、御うらを付申候、残而三ツニハ綿を入仕立申候、皆々御留守居之者共、日前ニ御進物上ケ申度由大炊頭様へ得御意候へハ、今度之御社参俄ニ被 仰出候間、日光前之御進上延慮仕候へと被仰、何も上り不申候、就夫御供之御年寄衆へ御音信ハ無御座候、 還御之節、御進物上り可申敷と、御夜る物・御寝巻・御ふとんと、何も用意仕候、別上り申筈ニ御座候ハ、江戸呉服奉行手前ニ御夜物三ツ分、御表御うら共ニ御座候、又今度巻物式十、伊藤玄意京都にてかい、拙者罷下候節、越申候、何にても大炊頭殿へ得御意、御指図次第ニ上ケ可申候、
一大炊殿古河にて

御膳御上ケ被成候ニ付而、呉服奉行方ニ御座候御重箱三組式荷三種、寺田与左衛門方へ御小袖三つ・鯉三百節入壺箱・諸白両樽、大野仁兵衛方へ御小袖一重・鯉三百節入壺箱・諸白両樽、

一阿部対馬守殿、岩つきにて 御膳御上ケ被成候、為御祝儀、呉服奉行手前ニ御座候御重箱二組二荷三種、小崎武左衛門去十日ニ持参仕候、対馬殿ハ何も不被仰請之由ニ而、右之御重箱御樽肴、一昨日持せ越申候、武左衛門ハ直ニ古河へ参申候間、定而御返進にて可有御座奉存候、

(中略)

一豊前様も今度日光へ之御供ニ被成御座候、

(後略)

⑧ (寛永 11 年) 9 月 28 日 岩崎又右衛門尉宛松平 (山内) 対馬守忠豊書状⁽¹⁶⁾

(前略)

一上様御機嫌能、從日光去廿日還御被為成候、

(後略)

④の差出人の山内一唯は、前掲の 1-②の史料にも名が見える。山内盛豊の子の山内康

豊の子、つまり土佐高知藩藩主忠義の従弟になる。元和 2 年（1616）から秀忠の家臣となり、同 9 年正月御書院番となる。その年に武蔵国足立郡のうちで 3000 石の知行を宛行われている。寛永 3 年に「番をゆるされ、酒井阿波守忠行が大組のうちに加」わり、同 11 年家光の上洛に付き従い、日光社参にも供奉している⁽¹⁷⁾。その一唯から忠義宛の書状である。それによれば、一唯には四月初めに家光の日光社参が伝えられていることが分かる。おそらく、供奉する旗本等に幕府からの仰せ出があったのだろう。しかし、社参期日は「近日」とあるだけで、まだ未定であった。

⑤は江戸留守居柴田勝正から国許の岩崎又右衛門尉に送った書状である。9 月に將軍が日光社参に出かけるが、日光へ遣わす使者が必要であること、また途中の古河で古河藩主土井大炊頭利勝が家光を饗応するが、その祝儀の使者が必要であることを述べ、数多くの使者を遣わす必要があるので、然るべき人物を江戸に下すように書き送っている。この書状では「九月日光へ被為 成」と、將軍の日光社参が 9 月に行われることが記されている。

「徳川実紀」の記述からは、8 月末頃に社参発令があったと推測したが、「何れ之御大名衆も左様ニ被 仰付由」とあるように、書状の認められた 8 月初めには、諸大名は社参時期が 9 月であることを知っていたことになる。

さらに、⑦を見ると、諸大名はもっと以前に將軍の社参があることを知っていたことが分かる。すなわち、「当五月御仕立させ置被成 御進上候御道服五ツ」とあり、5 月には知っていたことになる。しかし、社参期日については知らされていなかったと思われる。

「内式ツ単ニ而御座候、此時分はいかゝニ奉存、御うらを付申候、残而三ツニハ綿を入仕立申候」と記されており、5 月には進上物に夏物を用意しており、社参時期を夏と想定していたことが分かる。しかし、老中土井利勝が「今度之御社参俄ニ被 仰出候」と述べており、社参時期は 5 月時点では決まっていなかったと考えられる。したがって、8 月初めに社参期日が仰せ出されたのであろう。

⑥⑦は將軍が日光に向け江戸を出立した日の翌日付けの書状である。⑥の差出人の山内忠直は忠義の次男。のちの明暦 2 年（1656）に 3 万石を分知され高知藩支藩の中村藩藩主となる。この書状から、松平能登守・山内豊前守が將軍に供奉して日光に赴いていることが分かる。松平能登守は 5000 石の旗本で小姓組組頭の松平定政のこと。山内豊前守は山内一唯のことである。松平定政は山内氏とは血縁関係は認められないが、⑦の冒頭で、江戸留守居の柴田勝正が国許に書状を出そうとした際に「珍御沙汰も御座候ハ、可被仰進」と助言しており、山内氏の出入りの旗本と思われる。

⑦では、將軍の宿城地古河では土井大炊頭利勝が、同じく岩槻では阿部対馬守重次が將軍を饗応したと記されている。「徳川実紀」では、利勝が岩槻でも將軍を饗応したとあり、異なっている。重次は岩槻藩主阿部正次の嫡子で、いわゆる六人衆の一人であり、家光の信任も篤かった。正次は大坂城代として大坂にあったから、その嫡子重次が父に代わって將軍をもてなすのは至極当然であろうし、また家光の信任が篤いことを考えれば、なおのことであったと思われる。

やや意味がとりにくいのが、岩槻・古河における將軍饗応の御祝儀として、高知藩から使者を遣わしていることが記されている。宇都宮のことが記されていないのは、まだ將軍が宇都宮に達していないからであろうか。

諸藩の留守居は、將軍が日光社参に出かける祝儀の進物を、「日前ニ御進物上ケ申度」

と出発前に渡したいと願い出た。しかし、老中土井利勝は「今度之御社参俄ニ被 仰出候間、日光前之御進上延慮仕候へ」と出発前に祝儀の進物を差し出すことを止めさせている。確かに、社参の期日が仰せ出されたのが8月初めと実施1か月前であったが、高知藩では5月から進物の準備にかかっているように、諸藩でも5月頃から進物の準備に取りかかっていたと思われる。したがって、諸大名の方の進物の準備が出来ていないとは考えにくい。進物献上を止めさせた理由は、他に求めなければならないだろう。この点については後述する。

以上、肥後熊本藩細川家と土佐高知藩山内家の書状に記された日光社参の記事は、好対照をなしている。細川家のものには、さほど社参記事はなく、具体的な様子は窺い知れない。それに対し、山内家の書状は、日光社参の様々な情報を提供している。それは、一族の旗本（山内一唯）が将軍に供奉して日光に赴くこともあるが、高知藩江戸留守居から国許に宛てた書状、つまり細川家とは違い、藩主ではなく実務者レヴェルの書状であるからである。したがって、祝儀の献上物、祝儀の使者に関心が集中しているため、それらの記事が多いのである。

両藩ともいわゆる外様大名であり、日光社参に直接動員されることはない。したがって、藩主レヴェルにおいては、儀礼的な挨拶の話題程度のものであった。しかし、江戸留守居という実務者レヴェルでは、祝儀の準備、献上、使者の派遣等、幕藩間を結ぶ様々な重要な対応を行っていた。これらの対応を通じて、将軍の權威を藩として意識していったのではなかろうか。

3. 寛永11年日光社参の意味

本章では、以上の史料の検討から分かったことを整理し、あらためて寛永11年9月の日光社参の歴史的な位置づけを考察することとする。

日光社参は、4月初め頃に供奉する旗本等には伝えられた。諸大名達には5月頃に仰せ出されたと思われる。将軍上洛の前であった。この時点では社参期日は明示されていなかった。しかし、諸藩では社参祝儀の準備に取りかかっている。社参期日が明示されるのは8月の初め頃と考えられる。この時期、将軍家光は京都・大坂にいたが、帰府する段階にあった。上洛が実質的に終了した段階で発令されたのであろうか。

このように、社参自体は、6月の上洛以前から予定されていた。しかし、社参期日が何時の時点で決まったかは分からないが、上洛中に決定されたと考えるのが自然であろう。

社参の規模は不明である。史料から分かる範囲では、今市を中心に日光山の警衛にあたった大名は3名であり、供奉の大名は2名（うち1名は警衛の大名）である。いずれも、いわゆる譜代大名である。このことから、社参の規模はかなり小規模であったと推測される。

さて、寛永11年の日光社参は、6月からの上洛が終わった直後に実施されている。両者の関係について考えてみよう。

既に指摘したように、日光社参の期日は上洛中に決定されたと思われる。それは、両者が密接な関係を持っていることを示していると考えられる。老中土井利勝は、日光社参を行うことについての諸大名からの祝儀を、実施前に受け取るのを避けている。それは、日光社参が独立した行事ではなく、上洛と一体化した儀式であったからではないだろうか。

諸大名からの祝儀を社参実施前に受け取ることによって、上洛からつづく一体性が途切れることになると考えられたからであろう。

寛永 11 年の上洛は、「御代替の御上洛」と言われる⁽¹⁸⁾。外様大名をはじめ、譜代大名も含め 30 万 7000 任の人数を動員した上洛であった。それまでの家康や秀忠の上洛時の動員数をはるかに上回るものであった。寛永 9 年 1 月に大御所秀忠は死去した。それにより、家光は名実ともに将軍になったのである。その将軍としての軍事指揮権の掌握を、上洛供奉によって世の中に示したのである。上洛中の家光は、小規模ではあるが大名の領知替を行い、また朱印改を実施している。領知宛行権を家光が掌握したことを示したのである。このような新たな権力の主体になったことを、日光東照宮に社参することによって完成させようとしたと思われる。すなわち「御代替の社参」の実施であったと思われる。

家光は、大御所秀忠の死後、寛永 9 年 4 月に日光に赴いている。この年は家康の 17 回忌にあたり、その祭礼を行うためであった。しかし、家光は父秀忠の忌服中であり、今市の御殿から出ず、井伊直孝を代拝させ、土井利勝に祭事を総督させた。徳川義直ら御三家もそれぞれの宿所にあつて家臣を代拝させている⁽¹⁹⁾。したがって、寛永 11 年の社参が名実ともに将軍になってからの最初の社参であったのである。

家光は 9 月 16 日に日光山に着くと、今市の町人に金を分け与えた⁽²⁰⁾。これは、上洛の際に、京の町に銀 5000 貫を下賜したこと、大坂・堺・奈良の地子銭を免除したこと⁽²¹⁾、帰路に駿府の町に米 5000 石下賜したこと⁽²²⁾、江戸帰着後、江戸の町に銀 5000 貫を下賜したこと⁽²³⁾と同じで、「御代替」の御祝儀の一環であったのである。

家光は崇敬する祖父家康を神格化する作業を進めていったことはよく知られている。それは、自己の権力を神祖家康と結びつけることによって確立、強化することでもあった。家光は家康神格化の一環として寛永 11 年から 13 年にかけて東照宮の大造替を行っているが、この大造替の実施を決断したのが、寛永 11 年の社参時であったという⁽²⁴⁾。寛永 11 年の日光社参は「御代替の社参」であり、将軍権力を東照大権現の神威と結びつける儀式であったのである。

おわりに

社参に際しての大名の意識については、「2」の終わりにまとめを行ったので、ここでは以下の二点につき、見通しを述べて「おわりに」にしたい。

上述のように、寛永 11 年の日光社参を、家光の「御代替」の重要な儀式と位置づけた。しかし、その重要性に比して、社参規模の小ささはどうしてなのかという素朴な疑問が湧いてこよう。直前に行われた上洛にともなう大軍事動員があったため、規模が小さくなったとも考えられるが、そうではないだろう。日光社参の規模については、実はあまり明らかになってきていない。享保の社参以降は、例えば安永 5 年（1776）の社参時に「大勢之御供、江戸より日光迄人馬一続きに相成」⁽²⁵⁾と言われるように、大規模になっていることが分かっている。しかし、それ以前については不明な部分が多い。寛永 13 年の日光社参は、大造替が終了し新たになった日光東照宮を武士階級に広く印象づける行事であったと思われるので、当然規模も大きくなったことと推測される。また、家綱の寛文 3 年（1663）の社参も、将軍上洛という軍事指揮権の発動が場がなくなり、その場が日光社参に求められるようになっていったと考えられるので、やはり大規模であったと思われる。したがっ

て、特に家光の日光社参がどのような規模で繰り返し行われたのか、その点を明らかにした上でこの問題を考えなければならないと思うが、現時点では寛永 11 年の社参が飛び抜けて小規模であったとは考えていないことだけ述べておきたい。

「御代替の社参」であるならば、以後の社参の少なさをどのように考えるのが問題となろう。表に示した 4 代將軍家綱・8 代將軍吉宗・10 代將軍家治・12 代將軍家慶以外では、5 代將軍綱吉が天和 2 年（1682）と元禄 10 年（1697）の 2 回、日光社参を計画している⁽²⁶⁾。いずれも実現することは至らなかったが、社参する意思をもっていたことは間違いない。11 代將軍家齊は文政 8 年（1825）に実施しようとしたが、打ち続く出水のため文政 9 年 4 月に代参で実施している。7 代將軍家継は、幼少で將軍となり 3 年後に死去しており、対象外として差し支えないだろう。このように見てくると、歴代の將軍は日光社参の実施を念頭に置いていたことが推測される。個々の事例を精査しなければならないが、「御代替の社参」という意識は継続していたのではないだろうか。

日光社参の実態は、まだまだ不明なことが多い。実態を追求する作業をおこないつつ、上述の残された課題に取り組んでいきたい。

-
- (1) 『角川新版日本史辞典』（角川書店、1996 年）。
 - (2) 岡本良一「天保改革」（『岩波講座日本歴史 13 近世 4』、岩波書店、1964 年）。
 - (3) 高埜利彦『日本の歴史 13 元禄・享保の時代』（集英社、1992 年）、305 頁。
 - (4) 藤田覚『天保の改革』（吉川弘文館、1989 年）、159 頁。
 - (5) 藤井譲治『徳川家光』（吉川弘文館、1997 年）、194 頁の表 4。
 - (6) 『新訂増補国史大系 徳川実紀』第二篇。
 - (7) 日光東照宮社務所編『徳川家光公伝』（日光東照宮社務所、1961 年）では、宇都宮に宿城したと推測している（同書 244 頁）。
 - (8) 『大日本近世史料 細川家史料十八』（東京大学史料編纂所、2002 年）、209 頁。
 - (9) 同前、232 頁。
 - (10) 同前、288 頁。
 - (11) 同前、294 頁。
 - (12) 土佐山内家文書「甲第十六号 寛永文書 十一年」。
 - (13) 同前。
 - (14) 同前。
 - (15) 同前。
 - (16) 同前。
 - (17) 『新訂寛政重修諸家譜』第 13、312 頁。
 - (18) 藤井譲治『日本の歴史⑫ 江戸開幕』（集英社、1992 年）、183～187 頁。
 - (19) 日光東照宮社務所編『徳川家光公伝』（日光東照宮社務所、1961 年）、241 頁。
 - (20) 『徳川実紀』寛永 11 年 9 月 16 日条。
 - (21) 註（18）、185・186 頁。
 - (22) 『徳川実紀』寛永 11 年 8 月 15 日条。

- (23) 『徳川実紀』寛永 11 年 9 月朔日条。
- (24) 註 (19)、195 頁。
- (25) 丸山雍成「近世の交通と管理」(豊田武・児玉幸多『体系日本史叢書 24 交通史』
〈山川出版社、1970 年〉) 141 ～ 142 頁。同書には出典として「日光御供記」を記し
ていが、確認し得なかった。
- (26) 大森映子『元禄期の幕政と大名たち』(日本放送出版協会、1999 年)、48 頁。

将 軍 家 の 日 光 社 参

	社 参 年 月	社 参 者	備 考
1	元和 3 年 (1617) 4 月	2 代将军秀忠	東照社鎮座
2	同 5 年 (1619) 10 月	同	
3	同 8 年 (1622) 4 月	同	家康 7 回忌
4	寛永 2 年 (1625) 7 月	3 代将军家光	
	同 5 年 (1628) 4 月	大御所秀忠	
5	同 年	3 代将军家光	家康 13 回忌
6	同 6 年 (1629) 4 月	同	家光疱瘡時の立願
7	同 9 年 (1632) 4 月	同	家康 17 回忌
8	同 11 年 (1634) 9 月	同	
9	同 13 年 (1636) 4 月	同	東照社造替
10	同 17 年 (1640) 4 月	同	家康 25 回忌
11	同 19 年 (1642) 4 月	同	
12	慶安 元年 (1648) 4 月	同	家康 33 回忌
	同 2 年 (1649) 4 月	大納言家綱	
13	寛文 3 年 (1663) 4 月	4 代将军家綱	
14	享保 13 年 (1728) 4 月	8 代将军吉宗	享保改革期
15	安永 5 年 (1776) 4 月	10 代将军家治	明和 9 年が延期
16	天保 14 年 (1843) 4 月	12 代将军家慶	天保改革期

『徳川実紀』、『国分寺町史史料叢書 日光社参関係資料 1』(2001 年 3 月)
から作成。

はじめに—問題の所在—

本稿の研究対象は、近世武家社会において、未決拘留として、あるいは刑罰として用いられ、大名や国事犯たる武士などを大名に預けるという措置が行われていたという事柄である。罪を犯した武士で御目見以上で500石以上の者は未決中入牢させないことになっており、大名に預けられた¹。この「大名預」という事象をあつかったものとして、石井良助²、平松義郎³、中里直美⁴の研究があげられる。前2者は自由刑のひとつとしての「大名預」の、その内容や制度、執行過程などを概説的に論じているにすぎない。後者は、正徳2年(1711)2月7日、八戸藩に幕府より罪人弓場弾右衛門が預けられた事例を、幕府から命が下って以降の八戸藩の鍛冶橋門番の免除、国元の準備、弾右衛門の病氣と死、その死をめぐる騒動を検討し、藩政への影響を指摘している。しかし、そもそもこうした措置をあつかった事例が少なく、「大名預」をめぐる事実関係そのものの究明が不十分であるといえよう。したがって、本稿の課題は「大名預」の実態の確定を第一とし、ついでその措置の意味するものへと追究の歩を進めていくことにしたい。

そこで事例として越後騒動に関わった永見大蔵(4000石)と片山外記(850石)の大名預けを素材として扱う⁵。越後騒動とは、延宝7年(1679)～天和元年(1681)に越後高田藩でおこった家中騒動のことで、延宝7年正月、藩主松平光長の異母妹を妻とする小栗美作の子、大六を藩主とする陰謀が露頭したとして騒動が始まる。この継嗣問題は、光長の弟永見長頼の子万徳丸に決定したが、光長の弟永見大蔵を中心とした反美作派は納得せず、紛争が激化することになる。その結果、延宝7年10月19日、将軍家綱の「上意」により、永見大蔵以下5名の松平家一門大名預かりが申し渡された(第1審)。これによって騒動は一段落したが、幕府重職間の対立も絡み長期化することとなり、延宝9年正月に一門預かりの5人が江戸に召喚され、評定所での審議を繰り返したのち、同年6月21日に将軍家綱の御前公事をうけ、翌日美作父子の切腹、大蔵以下の遠島・配流、松平光長(越後高田藩)の改易など一連の処罰が決定する(第2審)⁶。第1審で永見は長門国萩藩に、片山は伊予国宇和島藩にと親族大名に預となり、第2審で永見は八丈島に遠島、片山は再び豊後国臼杵藩に預けられる。

さて本稿は、前述のような研究史的状況を克服する一環とするものの、その意図するところは、この分析をとおして幕府一藩、藩一藩の関係性に着目するところにある。とくに、この騒動の裁決にあたって、第1審で永見以下の5人の家臣を預かり、また第2審後、八丈島へ遠島となった永見と萩藩との関係が継続するなど、大名親族集団の果たした役割は決して小さくはない。このように家臣の大名預から遠島における大名親族集団の果たした役割を検討することで、幕府、萩・宇和島藩、永見大蔵・片山外記を取り巻く環境や社会的関係、あるいはその相互の関係性に迫りたい。

第1節 「大名預」の実態

1 越後騒動の第1審

延宝7年10月18日、稲葉正則・大久保忠朝・土井利房・堀田正俊の老中連名書付が留守居戸田重種・大目付渡辺綱貞宛に出され、永見大蔵・荻田主馬・片山主水・林内蔵助・片山外記・中根長左衛門・渡辺九十郎の7人を19日5時（午前8時）に評定所へ連れてくるように命じた。

19日に評定所に出た7人に対し、大目付彦坂重紹が片山と林を除く5人を光長の親族大名へ預ける旨を書付をもって申し渡した。

松平越後守家来、永見大蔵、荻田主馬、片山外記、中根長左衛門、渡邊九十郎五人の者、傍輩、小栗美作と、前廉私宿意に依て出入これあり、騒動をなすゆゑ、越後守殿より双方へ、誓紙申付られ静り候得共、右五人の者ども遺恨をとげべく旨これを申すに付、越後守殿より上聞に達せられるの処に、右の者どもは家老、目付役とも仕り、簡様の出入和談およびべき処に、剩へ越州において徒党仕り、不届に思召され、彼面々江府へ召寄せられ、評定所において、大蔵は、松平大膳太夫殿、主馬は、松平出羽守殿、外記は、伊達遠江守殿、長左衛門は、松平越前守殿、九十郎は、松平大和守殿へ御預け。

すなわち、永見大蔵は光長の正室土佐子の弟で大蔵のいとこにあたる松平（毛利）大膳大夫綱広（長門萩藩）、荻田主馬（1万4000石）は松平出羽守綱近（出雲松江藩）、片山外記は光長の娘婿（娘稲子が正室）にあたる伊達遠江守宗利（伊予宇和島藩）、中根長左衛門（1000石）は光長娘国子の子にあたる松平越前守綱昌（越前福井藩）、渡辺九十郎（300石）は光長のいとこにあたる松平大和守直矩（播磨姫路藩）と、光長の親族大名に預けられることが申し渡される。

この裁決に対して、光長の反応は「御口上越後守様御家来之儀御願候通、御一門様方へ御預越後守様御同前ニ御満足思召候通⁸」と、満足のいくものであったことが知られる。なかでも「越後守様御家来之儀御願候通」とはいったいどのようなことであろうか。家臣の預け先について、この裁決以前の10月10日に松平直矩から大目付渡辺綱貞につぎのような提案がなされた。

越後守殿家来共当分鎮り候も、後二事ニ発可申との下心にて、越後殿来年帰国待、我が儘ニ可仕内意之段々相達候条、何も返し候而ハ、後悔可有之候間、とかくは只今越後殿より以書付御詮議之上門共へ御預可被下と御願候様ニ尤ニ存候、左候は、大蔵殿は松平丹後守殿へ、主馬ハ越後守殿へ、外記は出羽守殿へ、長右衛門ハ我等へ、九十郎ハ中務殿へと、此予も尤と同シテ立、其より越前守殿留守へ見廻、番所にて言置、鳥越へ寄帰ニ大沢右近殿へ行而、越州之事語内談する⁹

すなわち、松平直矩が渡辺綱貞を尋ね、光長の家臣の一門預の案を実行するように主張し、その預け先を提示しているのである。また10月16日には、

乍然高田美作等被召寄、御詮議有之は、死罪流罪も出来、越後守殿為ニ弥不宜事也由、詮議ニ而越後殿より被仰上、御一門中へ御預ニ成候得は、此上之儀ニ思召候旨被仰ニ付、如御意公儀より御穿鑿候得は、越後守為にも悪敷、先日之書付、相違も御座候得は、私大隅も不詮議成儀申上候ニ成、旁以之外ニ御座候¹⁰

と、直矩は公儀による詮議・穿鑿が「越後守為にも悪敷」、「越後守殿為ニ弥不宜事也」と公儀評定へ持ち込まれる怖さを認識し、あらためて一門預を主張していることが知られる。

こうした結果、先に見たように一門預が実現される。直矩は、一門預が決定されると、

乍然越後守殿御願之通一門方へ預、則為御礼御老中へ御まいり、此上之儀ニ存候、向後弥渡辺隅州御相談御尤ニ存候、不及申達候へ共、罪人之一人も無之程か、対中将殿御孝行被存候間、左様ニ御談合尤事と言達之¹¹

と、光長の願いのとおりに一門預になったことを老中へ御礼にいくことになる。この裁決は直矩と渡辺綱貞との間で談合が行われた結果であった。このようにして紛争解決の手段として親族大名による調停が実行されたことが知られる¹²。

それでは具体的な事例を史料に基づいて検討していくことにしたい。

2 永見大蔵の事例

つぎの史料は、永見大蔵の罪状を記した書付である。

覚

一永見大蔵事、今度小栗美作義ニ付而荻田主馬一統者共相静可申候処、左様不仕、其上越後守在国ニ候処相伺不申、美作宅へ押寄せ騒動為仕候事

一荻田主馬一統之者誓紙取徒党為仕候事

一大蔵義越後守当地江召寄候処、無遠慮居屋敷へ直ニ落つき、頭取仕候者共度々相集密談仕候事

右之段越後守・三河守対不屈被 思召候、遠嶋可被仰付候得共、御用捨被成、大蔵義松平大膳大夫江被成御預候、以上

十月十九日¹³

これによると、①美作の件で主馬と騒動を起こしたこと、②一統の誓詞を取る徒党行為に及んだこと、③江戸到着後も人を集め密談したことが理由として挙げられ、これらは光長父子に対する「不屈」であるが、「遠島」を許して毛利綱広へ預となった。

(1) 準備・執行過程

では、どのようにして大名預が準備・執行されたのであろうか。

幕府から毛利家への伝達は、10月18日に「毛利元丸様御継目之御礼被仰上候、依之御殿様御老中方江為御礼使桜井藤右衛門被差込候所ニ、御月番堀田備中殿被仰候ハ、大膳殿江御用之儀も候間、忝人被指出候様ニと可得御意と存候折節、致参上候間被仰聞候由ニ而被召出、備中殿直ニ被仰渡候ハ、大膳殿江明日御預ケ人有之候、松平出羽殿・同大和殿江茂御預人有之候¹⁴」と、毛利元丸（元賢）の継目の御礼に参上したところ「御用之儀」として、明日「御預ケ人」があることが伝えられる。ただちに請取のための人数、乗物1挺・馬乗2人・歩行10人・足軽20人が用意され、下のような行列で実行された。

行列図

足軽	騎馬	材満十郎右衛門	同断	井上与三右衛門	
					騎馬 栗屋久右衛門
足軽	騎馬	木賀十郎兵衛	同断	神村五郎右衛門	
足軽		御中間五人	足軽		騎馬
足軽		御預ケ人	騎馬	足軽 騎馬	小幡彦七
足軽		乗物	桂半介	足軽	河内六郎右衛門 騎馬
足軽		御中間五人	足軽		三戸正左衛門 ¹⁵

そして大蔵の警護は、「早速新屋敷明小屋江入置候、廻りハ竹ニ而やらいを請、出入之口
壱ヶ所口も而、番之者等被付置候¹⁶」と、大蔵を新屋敷明小屋にいれ、周りは竹で囲い、
出入口を一か所とし、番人を日替わりに8人ずつ付けている。また、食事は、「青山御屋敷
江列越落着之晩者、二汁七菜之御料理被遣之、翌日より者二汁五菜ニ御定被成候、夜ハ吸
物ニ而、肴一種にて御酒被遣候事¹⁷」と、毛利家の青山屋敷に到着の晩は2汁7菜である
が、それ以後は2汁5菜を用意し、夜は吸物、肴一種にて酒を遣わし、「在江戸中ハ毎日御
青冷物被遣候事」と、江戸在中は毎日「青冷物」を用意している。

そして、このように永見大蔵を預かることが決定した旨を国元・京都・大坂へ伝達して
いる。

一右之通、大蔵殿御預ケ被成付、御一門様方心知と旁之ため翌廿日ニ御使者被遣候、尤毛
利元丸様・毛利刑部様へも御使被遣候事

一右同断ニ付而、京都・大坂之御役人衆、御付届とメ 御書被遣候事

但京都にて諸司代戸田越前守殿・町両御奉行、大坂ニ而御城代太田摂津守殿・町両御
奉行衆へ被遣候事

室戸半右衛門

付京ニ而井上善兵衛、大坂にて小方三郎左衛門方へも申遣候事

一毛利甲斐守殿、御在所ニ御座候故、大蔵殿御預ケ之様子申越候事

付吉川内蔵助殿へも申遣候事¹⁸

これによると、毛利家一門¹⁹、毛利元丸元賢（徳山毛利家）、毛利刑部元知（清末毛利家）、
また国元にいる毛利甲斐守綱元（長府毛利家）、吉川内蔵助広紀（岩国吉川家）、京都の室
戸半右衛門・井上善兵衛、大坂の小方三郎左衛門の萩藩役人や、京都所司代戸田忠昌、町
奉行前田直勝（東）・井上正貞（西）、大坂城代太田資次、町奉行島田重頼（西）・設楽貞政
（東）へ伝達を行っていることが知られる。

ついで萩における大蔵の居住場所、親類中からの書状、刀・脇差の扱いについて老中へ
伺書を提出している。

一同十月廿日ニ、大蔵殿御当地ニ而、居所いかやうニ可被仰付候哉并親類中其外より書状
之取遣、扱又刀脇差此方ニ請取候迄にて差置可申哉との儀、御月番堀田備中守殿江以林
仁左衛門被仰付候処、居所之儀、御長屋之内しまりの所ニ番等申付可差置候、書状取遣
之儀ハ先々可為無用候、扱又刀脇差之儀も先請取置候迄にて可差置候由、被仰遣候事²⁰

これによると、居住場所は長屋のなかで戸締りのよいところに番を付けて置くこと、書
状については「先々可為無用候」こと、刀・脇差については受け取り、差しおくことが伝
えられている。

ついで長門へ大蔵に随行する家来が決定される。つぎの史料によると、

昨晚松平越後守家老共より申越候、永見大蔵家来之者三四人茂大蔵江御付被下候様ニと、
従越後守方願被申候処ニ、三四人ハ可被指免之旨候通、貴様より越後守方迄被仰遣之旨、
依之家来之者書付指越之内大蔵心次第召列候様ニ仕度候条、内意承くれ候様ニと申越候、
別大蔵方江承候処ニ付候内点之分召連申度由申候、就夫右之書付越後守家老共迄差越申候、
此已後大蔵家老之者越後守より此方江相渡被申候ハ、請取を大蔵方江付置可申候哉、御
差図次第ニ可仕候、尤此儀御月番之御老中江相伺可申候哉、兎角之御指図御書付被成御指
越可被下候、為此以使得御意候、以上

十月廿二日
渡邊大隅守様
各紙之付立ニ

松平大膳大夫

永見大蔵家来

渡邊源五右衛門
森吉兵衛
竹田戸右衛門
○羽田只八
濱口源次郎
木代又六

右六人之内三四人心次第可被召列之由、御老中御指図と也²¹

と、大蔵に家来3、4人付けられるよう、松平光長方から願いが出されている。そこでは家来のなかから書付を提出した者のうち、大蔵の心次第で選び、召し連れていけるようお願い出ていることが知られる。とくに大蔵は「点之分召連申度」と、羽田只八を召し連れたいと主張している。これに対して、幕府側の返答は「永見大蔵殿家来四人迄ハ不苦、点を被懸、丸被致候者共望次第可被遣候」と、4人までは連れて行くことが認められた。

そして、藩側は寛文10年(1670)5月15日に島田淡路守時郷²²が預けられたときの先例を確認し、「其格ニ相心得可申哉と此間御老中江被得御内意候処ニ、長門へハ相違之儀も可有之候ても、大概者淡路同前之心得可様と就被仰出候²³」と、島田時郷と永見大蔵とでは格に違いがあるが、大概は島田と同様に扱うよう申し渡している。それと同時に、島田の預のさいの控を書き写し、心得として国元へ送っている。

ついで道中あるいは国元における大蔵の扱いについて10月28日に幕府へ伺書を出し、その返答を受ける。

覚

一永見大蔵事、国元江指越候道中乗物ニ可申付哉之事
右勝手次第ニ可被致事

一道中指添遣申人数、いか程付遣可申哉之事
右物頭式人侍四人足輕式拾人可差添之事

一大蔵刀脇差并家来刀脇、差如何可申付哉之事
右大蔵刀脇差ハ於国元可被指免候、家来刀脇差ハ道中より可被指免候事
一箱根・今切御関所江御手形可被遣哉之事

右不及手形候事

一大坂着之上、天氣悪敷出船難成候ハハ、滞留仕ニ而可有御座候左候ハハ、大坂町御奉行衆江付届可仕哉之事

右不及断事

一於国元、居所并普請等如何様ニ可申付哉之事
右勝手次第しまり能所ニ可被指置候事
一於国元、居所江付置候番之者いか程可申付哉之事
右番所一ヶ所足輕斗可被指置候事

一住所之屋敷内ニ可申付哉并家来之者用事之節ハ、門外指出可申哉之事

右家来門外へ出候儀ハ先可為無用候事

一於国元いゝ程扶持方可申付哉之事

右式拾人扶持程可然哉候事

一大蔵家来宗門改之儀如何可申付哉之事

右可為無用候事

一大蔵并家来之者江一類共方より書状通達、又入用之諸道具之儀ハ、望次第越後より取越致相改置可申哉之事

右一類共状通ハ先可為無用、越後より取越候諸道具之儀ハ能相改被渡候尤之事

十一月二日

松平大膳大夫²⁴

その内容は①道中の乗物、②道中添遣す人数、③大蔵刀・脇差、家来刀・脇差の扱い、④箱根・今切関所の手形、⑤大坂逗留のさいの町奉行への届け出、⑥居所、その普請、⑦居所に付け置く番人、⑧家来の門外指しだし、⑨扶持方、⑩宗門改、⑪親類からの書状・入用の道具の扱いなど、こと細かく指示受けていることが知られる。

このようにして、藩は老中とのやりとりのなかで預人を受け入れる準備を進めていく。

(2) 長門までの道中

ついで、江戸から長門までどのように護送されていったのかみていきたい。それは「御国元迄被付遣候人数之儀、老中相談之上旁相極道中備付并泊付次ニハ御心付」と、長門まで遣わされる人数、道中の備え、泊付、心付は老中の相談によって決定し、申し渡されることになる。

長門への道中人数は、永見大蔵、家来4人（森吉兵衛・羽田只八・濱口源次郎・木代又六）、乃美八郎右衛門（目付役）・上下15人・下横目、黒澤源左衛門（手廻物頭）・上下30人、岡部半左衛門（手廻物頭）・上下34人、廣沢立与（牢人）・上下2人、高野三左衛門（無役）、山縣七右衛門、佐々木又右衛門（徒目付）、三嶋弥二右衛門（徒目付）・上下2人、楊井玄也、煮方1人、中間3人、六尺2人の総勢104人で、下の行列によって実行された。

道中行列図

黒澤源左衛門	騎馬	足軽一人	足軽三人
	両人間一人	大蔵殿乗物	家来之者老人
岡部半左衛門	騎馬	足軽一人	足軽三人
騎馬	岡部半左衛門	足軽一人	
	両人間一人	大蔵殿家来又者	
騎馬	黒澤源左衛門	乗掛	
足軽一人	足軽一人	足軽一人	御目付
同	同	同	乃美八郎右衛門 ²⁵
			騎馬

そして道中の宿泊・休憩場所は、

泊り付

一河崎	一ノ泊	戸塚昼休	一沖津	五ノ泊	鞠子昼休
一藤沢	二ノ泊	大磯昼休	一藤枝	六ノ泊	金谷昼休
一小田原	三ノ泊	箱根昼休	一見付	七ノ泊	荒井昼休
一沼津	四ノ泊	神原昼休	一白須賀	八ノ泊	御油昼休

一岡崎	九ノ泊	池鯉鮒昼休	一草津	十三ノ泊	大津昼休
一宮	十ノ泊	桑名昼休	一伏見	十四ノ泊	平潟昼休
一四日市	十一ノ泊	亀山昼休	一大坂		
一坂下	十二ノ泊	水口昼休			

右永見大蔵殿并家来四人、御国許江被差下候道中泊付、如此候間可成程と大坂迄右之辻を以、十五日道中可被相越候、以上

十一月十二日

福隠岐

国主計

上京 国与三兵衛

乃美八郎右衛門殿

黒沢源左衛門殿

岡部半左衛門殿²⁶

と、国元への道中の宿泊、休憩場所、15 日間で大坂に着くようその行程が決定され、藩主補佐役である当役から付添人に伝えられる。

ついで道中守らなければならない規則がつぎのように定められる。

條々

一永見大蔵殿并家来四人、御国江就被差越御方兩人被差下、其外乃美八郎右衛門儀も此度被付下儀候条、万事申談無緩心遣可被仕事

一大蔵殿、成程いたはり心添可被仕候、彼家来一人充大蔵殿乗物廻りへ供仕儀候条、此方より御付之陸之供仕候者共、諸事申談心添仕候様ニ可被申付候、寒氣之時分ニ候間、茶屋など江立寄休足候様ニ可被申事

一泊り之宿、朝は六つ已後ニ立、晩は六つ已前泊り可被申候、乍尔此段ハ大蔵殿望次第ニ可被仕候、たとひ雖為望夜道者可為無用事

付晩者行すりニ加暮候分者苦間敷事

付寒氣之時分ニ候間、餘り早朝ニハ出足無之様ニ可被相心得事

付彼家来四人之者、道中或ハをくれ或ハ先江不参候様ニ、御付之足輕共江能々可被申付事

一道中渡りへ別而可被入念候、舟ニ込合乗不申候様ニ可被申付事

一宮より桑名江之渡り之儀、日和悪敷候ハ、さや江廻り可被申事

一御関所舟渡りなどの所江先達相断儀候ハ、依品御方など兩人・乃美八郎右衛門三人之内一人申談可被参候、雖然三人之儀者、騎馬之事候而様子次第山縣七右衛門可被差越事
一長路事ニ付候間、面々騎馬難積候ハ、所々ニよりあふ付苦間敷、尤宿出宿入又ハ御関所之方角渡り之前後などはとかく可為騎馬事

一御預人、若道中ニ而被相煩、意齋薬ニ而も駿氣無之候ハ、於城下者其領主之家老江様子相達、醫者無之宿ニ候ハ、前後之宿江可有手遣候、其上無之ニおひてハ趣□地江可被申越候事

付御預人道中食事別而可被入念候事

一道中宿之番之作法、大形爰元にての格を以、相勤候様ニ可被申付事

一泊り之宿しまり能所行要ニ夜者不寝之番六人ニ而式番ニ可被申付候、若少ニ而もしまり悪所ニ候ハ、不寝之者定之外ニも見合次第可被申付事

付泊りへ二而、亭主江内証申達宿之しまり能様ニ可被申付候、左右之隣へも亭主心得之様ニ内意可申聞候通可被相達候事

付仮初之立宿、又ハ茶屋等ニ至迄万事無緩を可被申付事

一御預人同道ニ而、宿主渡りへ至迄我まゝ作法無之様ニ、手堅可被申付候事

一下々至迄道中ニ而大酒不給候様ニ可被申付、惣而高声不仕いかにも貞心ニ相嗜候様ニ可被申付、とまり之宿ニ而猥ニありき不申様ニ是又手堅可被申付候事

付下々道中ニ而宿賃旅籠錢渡り賃など無滞堅固ニ相誓候様ニ可被申付事

一自然道中ニ而火事有之候ハ、万事を差置大蔵殿并家来不殘同道ニ而可被立退候、雖然程遠キ火事などに猥ニ不噪候様ニ、内々下々江可被申付事

一伏見より大坂江陸路を可被参候事

一箱根・今切両御関所へ從 公儀御手形ニハ不及之通被仰出候、箱根御関所通り手形之儀者隠岐より例之分ニ差越候条、持参候而可被指出候事

一箱根御関所被越候ハ、三嶋・沼津より辺より一左右可被申越候、大井川渡り候而、是又可有一左右候飛脚之者有之間敷候間、所々にて御宿主を相頼書状可被差越候、大坂着并乗舟之儀ハ、彼地より小方三郎左衛門申談、以町便可有注進候、三田尻着船之様子者、野村与三兵衛申談、大坂迄以飛船可被申越候、夜着之儀者、御留守居衆より被申越候様ニ可被相達候、右之外ニも相替事候ハ、何方よりなりとも可有注進事

一於大坂宿其外之儀小方三郎左衛門方へ先達而申遣候間万端可被申談事

一此度御付ケ之侍衆足輕・御中間至迄無緩を可遂其節候、大蔵殿儀者不及申家来四人之者共いか躰而無理非道申掛候共、御為之儀ニ候之間面々之下々ニ至迄謹而可致堪忍事

右之道中・船中大形此辻を以可被相勤候、此外之儀者各見合次第首尾能様ニ可有心遣候、以上

十一月

福隠岐

国与三兵衛

国主計

黒澤源左衛門殿

岡部半左衛門殿

右之通之写、乃美八郎右衛門江茂相渡之、いつれも隠岐於小屋銘々申渡候事、但如此黒沢・岡部江書付相渡候而、何篇申談可相務之由申渡候事²⁷

その内容は、

- ②大蔵をいたわり、家来1人を乗物の廻りにつけ、寒気ของときは茶屋などで休息すること。
- ③泊まりの宿は、朝は六つ以後に立ち、夜は六つ以前に入ること。
- ④道中渡りの節は特に念を入れること。
- ⑤宮から桑名へ渡るとき、天候がよくなければ佐屋路へまわること。
- ⑦所どころ歩いててもよいが、宿の出入、関所の通行時は騎馬すること。
- ⑧病気のさいは、城下ではその領主の家老に伝え、医者のない宿では前後の宿へ伝える。
- ⑨道中・宿の番の作法は、その格に従って勤めること。
- ⑩泊まりの宿は戸締りのよいところにし、寝ずの番を6人一組で2組申し付けること。締りの悪いところでは、そのほかに見合うだけ申し付けること。
- ⑪宿主・渡りに至るまでわがままな振る舞いをしないよう堅く申し付けること。

- ⑫下々に至るまで大酒を飲み、大声を上げないこと。泊まりの宿をみだりに歩かないこと。
- ⑬道中火事のさいは、万事を差し置き、大蔵と家来を同道して立ち退くこと。
- ⑭伏見から大坂へは陸路を通ること。
- ⑮箱根・今切の関所へは公儀からの手形に及ばないことを申すこと。
- ⑯箱根の関所・大井川を越えたときは書状を遣わすこと。大坂・三田尻着時など何ときも注進すべきこと。
- ⑰大坂において宿そのほかのことは、小方三郎左衛門方へ相談のこと。
- ⑱大蔵・家来がいかなる無理非道を申しても、御為の儀にて下々に至るまで堪忍すること。と、大蔵の扱い、道中、宿舎・宿泊場所などこと細かく決められ、それを「何篇申談可相務之由申渡」していることが知られる。

このように道中の人数、大坂までの行程、道中の規則などが決められ、大蔵らは延宝7年11月13日に江戸を出立することになる。

(3) 長門での生活

ところで大蔵は萩でどのような生活を送っていたのだろうか。その詳細を記した史料がないため、ここでは大蔵を中心に起きたできごとをみていくことにしたい。

まず、大蔵と家来森吉兵衛の「主従之挨拶悪敷相成候」という主従の不和が問題となった²⁸。大蔵は小姓の濱口源二郎を「目を懸被申候」ており、「延宝八年之度時分難儀二煩申候二付、為心添側二昼夜付居申候」と、昼夜側にいたことが知られる。これに対し、吉兵衛は「嫉妬之心有之」て、大蔵の呼び寄せに対して「愛慕之心入毛頭無之」と申し開いた。そのため吉兵衛は「大蔵殿用事等も不被申付」、「奉公難仕様二相成」った。湯浅源兵衛はたびたび大蔵に意見をすることも、「大蔵殿手打など二被任候而ハ公儀之御首尾如何敷間、吉兵衛江者晦を遣被申替之者從越後呼寄せ候様ニハ相成間敷候哉」と、吉兵衛に晦を出し、代わりの者を越後から呼び寄せようと画策する。一方、吉兵衛からも「只今之分二候而者奉公難成候而晦申談度候」と源兵衛へ書付が渡される。これは国許から老中へ伝えられ、「大事之儀」ゆえ、月番老中へ相談され、「自然此已後様子茂有之候時者御預ケ人之儀御座候間如何敷被存候、無別条吉兵衛被指返ニ而人替等呼候而ハ如何可有御座候哉与為御内意如此御座候」との口上が伝達される。

ついで、大蔵家来羽田只八の死が問題となった。羽田は延宝8年11月8日に発病し、12日の晩に疱瘡であることが分かり、22日に死去する。その死骸は「湯浅源兵衛病中より付置見届念被入塩漬ニメ壺ニ入置申候通申来候」とし、そのことを12月8日、月番老中堀田正俊へ以下の書付を提出している。

永見大蔵家来羽田只八与申者、先月八日二煩付十二日之晩より疱瘡与相知候、尤薬等用させ申候、最初者手重様子ニ而も無之候之处ニ、廿二日之朝より変症差出色々養生申付候得共不叶、同晩果、死骸之儀者、彼地ニ付置候者見届念を入置候通、国許より申越候作舞之儀如何可申付哉之事

十二月八日

松平大膳大夫²⁹

老中はこのことを相談し、「病死無紛之由候へハ、検使ニ不及候而、死骸之作舞可被仰付候」と、病死であることがあきらかであるので、検死役人の派遣におよばないという旨が伝えられる³⁰。

2 片山外記の事例

つぎの史料は、片山外記の罪状を記した書付である。

一片山外記事、今度小栗美作義申立永見大蔵致一味義、越後守為を不存我儘成訴訟申出、
国元・江戸屋敷家中騒動為仕候事

一越後守僉議之上、誓紙をも被申付候以後も不相静様ニ申なし候段不届之事³¹

これによると、①大蔵に一味して家中騒動を起こしたこと、②一統の誓詞後も騒動を続けたことが「不届」として伊達宗利（伊予国宇和島藩）へ預となったことが知られる。

(1) 準備・執行過程

延宝7年10月18日、堀田正俊より「御預ケ人」の請取のため、乗物1挺・騎馬2騎・歩行6人・足軽15人を用意するように申し渡される。そして外記の居所は「外記居所拵、居間、表裏口、縁之向竹菱垣外堀忍返、湯殿閑所堅裏板固³²」と造られた。ついで10月22日には宇和島へ外記に随行する家来が決定される。

一片山外記江鈴木仲右衛門・小原三左衛門方より申聞候者

家来四人之内心次第兩人為召仕候様ニ与御老中様被仰付候由、渡邊大隅守殿より越後守様へ被仰達候間被申越候由ニ而、小栗右衛門方より気布川六右衛門方を以被申越候、可召仕者之名ニ点掛可被差越由申遣之

田中金左衛門

小貫萩左衛門

泉小八郎

堀江伝助

右点之兩人可召仕由申越ニ付、小栗右衛門方へ申遣候処、追而右衛門方より人相添、同日晩金左衛門・萩左衛門差越、別外記方江相渡申候事

延宝七己未十月廿二日³³

このように4人の候補のうち2人を外記の「心次第」で選ぶことができ、田中金左衛門と小貫萩左衛門が選ばれた。そして翌日には、

一片山外記今日発足御国へ被遣、望月助兵衛・宮部勘右衛門・山辺弥右衛門、其外雑人拾式人差添之、外記家来式人也、弥右衛門ニハ刀脇鎧持等御借人有、御鷹匠松木七郎兵衛御国江被遣候筈故、右之衆江加之、已上三十一人也

一外記二道中物頭老人、侍兩人、足軽十人相添為登可申由之事³⁴

と、家来田中金左衛門・小貫萩左衛門、望月助兵衛・宮部勘右衛門・山辺弥右衛門、雑人12人、鷹匠松木七郎兵衛、物頭1人、侍2人、足軽10人の総勢31人が決定する。

ついでこの準備・執行過程における大名親族集団との関係を検討していきたい。この大名預が決定したのち、

昨日被仰下候通、今度越後守様御家来御預付、御老中様方御礼之儀、大膳様・出羽守様御家来衆与拙者家来申合、今朝酒井雅楽頭様へ御伺申達候様、一昨日之儀候間、最早御届及申間鋪由、御差図御座候故、其通仕候為御知以使者申達候、御返事被入御念御使者忝存候、昨日申合之儀大膳様・出羽守様・御自分様御家来申合雅楽頭様御伺被成候様、一昨日儀候故無用之由被任御差図候由承知仕候、如何様懸御目可申達候由³⁵

と、老中に対して毛利綱元、松平綱近の家来と申し合わせて御礼に伺っていることが知られる。また、10月23日には外記の扱いについて以下のような幕府へ伺いをたてている。

覚

一片山外記儀在所宇和嶋江遣可申哉、勝手次第何時成共遣可申哉之事

一先年陸奥守家来兩人御預ケ被成にて在所ニ差置申候、此度外記儀付右陸奥守家来御預ケ之格ニ諸事可仕候哉、以上

十月廿三日 伊達遠江守

右之趣御口上申上御書付入御披見申候、御逢被遊御直ニ御返事御使者被下、片山外記御在所へ可被遣之儀被仰下候、何時成共御勝手次第可被遣候、且又先年之陸奥守殿御家来御預ケ被成候格ニ可被成哉之儀、其趣被遊可然候、併松平大膳殿・同大和守殿・同出羽守殿御同前之儀御座候、殊御一門間之事ニ候間被仰合、万端一用ニ被遊可然存候由³⁶

この史料の波線部によると、毛利綱元、松平直矩、松平綱近も同様に預け人があり、これは一門間のことであるため、「万端一用ニ被遊」よう、同じく家臣を預けられる親族大名を意識している様子が知られる。そして他の親族大名がどのように家臣を扱っているのか、情報の収集をしている（第1表）。

第1表

項目	永見大蔵	先例（陸奥守家来）	片山外記	渡辺九十郎	荻田主馬
居所	しまり能所	堅閉	堅閉	しまり能所	○
刀脇差	於国元可被差免	渡可申候		指免可然事	○
道中差添え人数	物頭2人・侍4人・足軽20人	物頭1人・侍2人・足軽15人	物頭1人・侍2人・足軽10人	物頭1人・侍2人・足軽10人	○
扶持	20人扶持	5人扶持	7人扶持	5人扶持程	○
道中の乗物	勝手次第	錠乗物	乗物	勝手次第	○
一類中よりの書状	可為無用事	停止	停止	先可為無用事	○
諸道具	能相改可被相渡事			能相改可被相渡事	○
居所番人	番所1か所・足軽斗		番所1か所・足軽	番所1か所・足軽斗	
家来の刀脇差	道中より可被差免	渡可申候		指免可然事	○
家来の外出	先可為無用事	門外不通		先可為無用事	
箱根・今切関所の手形	不及手形事			此方より可申遣事	
宗門改	可為無用事				○
大坂逗留のさいの届出	不及断候事				

注 片山外記・渡辺九十郎・荻田主馬・先例（陸奥守家来）は「片山外記御預被 仰出覚」（『越後光長公御領没収之節御用控』宇和島伊達文化保存会所蔵）および「片山外記一卷」（宇和島伊達文化保存会所蔵）、永見大蔵は「延宝七年永見大蔵殿御預之控」（山口県文書館所蔵）より作成。

荻田主馬は記載の有無を示す。

また、史料の傍線部によると、寛文11年（1671）4月6日に伊達陸奥守綱村家来が御預³⁷となったさいの先例を確認していることが知られる。その先例を基準として、「扶持方之儀ハ、御預陸奥守様衆五人扶持、是ハ下一人也、外記ハ下兩人故五人扶持ニ而ハ不足ニ

も可在之哉、被加簡候様与御国申遣候処、七人扶持遣置之³⁸」と、陸奥守の家来は下人1人で5人扶持だったので、外記は下人2人のため7人扶持にすることが決められる。

以上のように、大名預は預け先の藩と幕府の間で預け人の扱い方などの詳細が決められると同時に、同じく家臣を預けられる大名親族集団との間でもその扱いについての情報を交換し、また大名が有する先例との比較のなかから決定されていることが指摘できる。

第2節 5代将軍綱吉による越後騒動の親裁

1 第1審に対する不満

延宝7年10月19日、将軍家綱の「上意」により、永見大蔵以下5名の松平家一門大名預かりが申し渡された第1審の直後、この裁決に対する不満が越後松平家家臣のなかから現れる。

付添い人の片山主水・林内蔵助・服部九郎右衛門が呼び出され、大目付より永見以下の預けの趣意が伝えられると、

本文之趣、大目付より相達したる処、御受に躊躇し、主水曰く、一応の御尋問もなく御預け仰せ付けられ候は、如何なる御次第なるや。遠国に隔たる者共、疑惑を生じ、人心取鎮方にも差支候故、御主意何度と云ひ出て、九郎右衛門も亦詞を添て不服を唱へり。壱岐守曰く、上意之趣敢て違背するやと、察斗せしかば、主水等一同恐れ入り退出せしと云ふ³⁹。

このように片山、服部が不満の意を表すが、彦坂重紹の一言によって退出を余儀なくされる。その後、越後家家臣は、「有志は出府して右五人の罪なきを訴へ、聞届けなき時は腹切て申訳すべしと、弥騒立公辺の処置を攻撃して止まず、所々に集会して人心益々不穩の勢とはなれり」と、この裁決を不服として騒ぎ立てることとなった。幕府は、「信、越の諸侯に令を下して、越後の諸士暴挙ある時はこれを国境にて討止め、鎮撫すべしと厳令し、諸侯は間者を派出して国情を探り、江戸へ注進櫛の齒を挽くが如く警備嚴重に武威を示したり」と、信濃・越後両国の大名に暴挙があるときは鎮撫すべしと厳命し、間者を派遣して国情を探るなど武威を示すことになる。このように、第1審の裁決後もこの騒動は治まることなく長期化している様子がうかがえる。

2 綱吉による越後騒動の親裁—第2審—

延宝9年(1681)正月、大名預となっていた永見以下の5人が江戸へ召喚され、再びこの審議が進められる⁴⁰。評定所での審議を繰り返したのち、6月21日、永見大蔵、荻田主馬、小栗美作が登城し、将軍綱吉によってこの騒動の親裁がなされた。そして、徳川御三家、甲府宰相綱豊、在府中の譜代大名、幕府の番頭以下の諸有司が招集され、彼らの陪席のなかで御前公事が進められた。

22日には評定所において、大目付・町奉行・目付両人が列座し、「上意」の旨を申し渡した。美作は松平綱昌邸で切腹、その子掃部は池田綱政邸で切腹となった。永見大蔵・荻田主馬は八丈島へ、岡嶋老岐・本多七左衛門は三宅島へ、小栗兵庫⁴¹・小栗十蔵・安藤治左衛門は大島へ遠島となった。また、美作の異父兄戸川主水(滝川利昌小姓番士)は、陸奥国八戸藩南部家に預けられた⁴²。

23日には評定所において、大目付・町奉行・目付が列座し、大名預と追放者を申し渡し

た。片山外記は稲葉景通（豊後国臼杵藩）、中根長左衛門は水谷勝宗（備中国松山藩）、渡辺九十郎は伊藤祐実（日向国飫肥藩）の大名に預けられた。追放者は、城代渥美久兵衛、家老林内蔵助、同小栗右衛門、綱国付家老野本右近、大番頭安藤平六の5人で、定められた所のほか、越後・越前・木曾路は立ち入り禁止となった。

そして26日、藩主松平光長は松平定直（伊予国松山藩）へ、その子綱国は水野勝種（備後国福山藩）へ預け⁴³となり、これによって越後高田藩が改易となる⁴⁴。

3 永見大蔵の遠島

ここでは、永見大蔵の八丈島への遠島までの準備過程をみていくことにしたい。

流罪人に対しては、出帆以前に、身寄りの者から届け物すなわち差入物の願書を役所へ差し出すと、米は20俵まで、銭は20貫文まで、金は20両まで、麦5俵、雨傘、下駄、煙管ぐらいまでの届け物をする事は許される⁴⁵。また、流罪人には島到着後75日の見積りで扶持が渡され、「預り人手前より米十俵、銀壹貫目、衣類葛籠二個、随行の下人には、葛籠一個送りしと云ふ⁴⁶」と伝えられる。

永見大蔵は、同じく八丈島へ遠島となった荻田主馬に対して、次のような差越物を渡す。

一水野右衛門大夫殿・内藤新五郎殿・甲斐庄飛騨殿・北条新蔵殿より 殿様へ御差紙にて永見大蔵・岡嶋老岐遠嶋被仰付候、就夫夏冬之衣類并雜用等少々指越可然候間、只々向井将監・小嶋助右衛門方へ可被遣候由申来候付、相当之御返答被成候、左候而大蔵一所へ被遣候荻田主馬方へ之御差越物之員数太艱相違為無之、出羽守様へ御申合之上、米拾五俵、壹歩五十切、銭五貫文、味噌・塩・醤油・香の物・干肴・切漬等大かた一器充、らうそく五十丁、箱提灯壹つ、はな紙十束被遣之、其外大蔵此方ニ有之荷物衣類不残其上ニ時服上下等少々被添遣候事⁴⁷

これによると、「出羽守様へ御申合之上」、米15俵1歩50切、銭5貫文、味噌、塩、醤油、香の物・干肴・切漬等をだいたい1器ずつ、らうそく50丁、箱提灯1つ、はな紙10束が送られている。また、延宝8年12月23日、「御究之儀有之ニ付而、其間暫時大膳殿へ御預ケ被成候⁴⁸」と、未決拘留の意味で毛利綱元に預けられた岡嶋老岐も、同じく三宅島に遠島となった本多七左衛門を預けられた「若狭守様之方御申合之上」、白米3俵と小判50両を持っていくことが決められた。しかし、「御大法有之左様ニ大分ハ金子御持参被成候、小判十五両迄ハ相成候由」と、先に見たような制限があるため、「米ハ如何之■■■■御座候哉と問合仕候処ニ、十五俵御相加との義ニ付、猪右衛門申様ニ米をハ三俵指越候条、米之替りと思召、小判と少被遣被下候様ニと申候へ者、尤候由、役人申候而、小判廿両米三俵被遣候」と、役人へ米かどのくらい持参してよいのか問い合せ、15俵までの米を3俵にし、その米の代わりに小判を加えて金20両、米3俵を持参することが決められた。

また、大蔵に随行する下人については、

一大蔵・老岐へ下人壹人充被遣候、大蔵望ニ付浜口源二郎■■■■ミ落し被遣候、源二郎儀乗物ニのセ御使番阿曾佐源兵衛へ警固被仰付、足輕六人被成御付、向井殿御屋敷へ被遣候事⁴⁹

と、1人遣わすことが許され、「大蔵望ニ付」、浜口源二郎を下人として随行させ、足輕6人がつけられることが決められた。この浜口源二郎は、すでに大蔵と家来との主従不和で述べたように「大蔵殿小姓濱口源二郎を大蔵殿目を懸被申候⁵⁰」人物であった。そのほか

の長門へ随行した家来は、乃美権右衛門が老中稲葉正則へ「此者共如何可被仰付哉」と伺ったところ、「生国越後国之由候条、兩人望次第ニ彼国へ成共其外いつかた成とも可被差越之由」と、生まれが越後であるならば、越後でもどこでも行ってもよいと申し渡され、それによって「兩人共ニ越後へ罷歸度と申ニ付而、六月廿五日之朝、御中間二人充被差添越後国迄御送候事」と、6月25日の朝、中間2人ずつを連れて越後に帰ることとなる⁵¹。

このように、永見大蔵の遠島が決定したのち、島へ持参するもの、随行する下人を決定し、そして今まで随行していた家来を解き放つなど、その準備を進めていくことになる。

第3節 遠島、その後

つぎの史料は永見大蔵の科書である。

御科書

一越後出入之儀ニ付、延宝七年未ノ十月十九日、御先代に松平大膳大夫殿へ御預に被仰付、天和元年酉ノ二月、長州より被召出、同三月江戸着、数度御詮議、同六月廿一日於御前対決被仰付、翌廿二日、御評定所にて越後出入之儀、度々御詮議被遊候処、不届被思召候、依之、八丈島江遠島被仰付之由、内藤出羽守殿被仰渡候、其節水野右衛門大夫殿、小栗美作父子今朝切腹被仰付候間、左様相心得可之由、被仰聞候、拙者無筆故、家来に代筆為被仕候、已上

元禄八年亥ノ七月廿五日

松平越後守家来 本国越後生国豊後 浄土宗 年六拾五

永見大蔵直長 ㊦

家来 浜口源次郎⁵²

これによると、「越後出入」によって遠島となったことが知られるが、この史料が注目されるのは、無筆のため、家来（浜口源次郎）が代筆したと記されている点である。大隈三好はこの箇所を取り上げて、「人を食っている」と指摘し⁵³、『八丈島流人銘々伝』は「どうも永見大蔵が無筆者だとは考えられないが、或はその通りであったかも知れないし、或はまたこんなものを書く煩わしさから、こんな言い訳を書いて御免こうむったのかも知れないし」と推測している⁵⁴。しかし、「永見大蔵殿書状ハ、悪筆にて、被認事不自由ニ候、他筆にても可為書哉と、是ハ主水方より言来⁵⁵」と、無筆なのではなく、悪筆で、それを読むことが不自由であったためと考えられる。

さて、永見大蔵が遠島となったのちも、萩藩との関係は継続していく。まず、萩に残された永見大蔵の娘の縁組みについて、つぎの史料を見ていきたい。

廿 永見大蔵殿息女縁組之事

一右息女縁組住吉也社務大学方聞合被仰付苦間敷之由、御一門様方御相談被遊候上、公儀へ被仰伺候処ニ、大学方へ之御取組御無用ニ被成可仕候由、御老中御内意ニ候、然者公方様へ御目見をも不仕ほと御家来、尤出家にても不苦との御老中御内意ニ付而、御国清光寺いまた不妻之事ニ候而、相応之儀と被思召にて、御一門中様へも御請合被遊、いづれも御内意ニ付而、阿部豊後守殿へ被仰出、尤松若狭守様よりも此御方御同前ニ被仰出候、其後豊後守殿被仰候ハ、永見大蔵娘縁与候儀、御半見なし候も相達候処ニ、御家来之被仰合候得ハ、何之様子も無之候、清光寺ハ出家之儀ニ御座候間如何可有之哉、弥

左様思召候者、今一通り可被仰出候、各可申談候由にて、此上ハ達而右之御取組之儀御預可被成儀にて無之、御違返可然との儀にて、若狹守様へも被仰談、豊後守殿へ追而被仰達候ハ、大蔵娘拙者国元清光寺と申出家候申合候儀答申候而ハ、左様色行之様ニて被仰達候、尤 若狹守様よりも豊後守殿へ右之通被仰達候事⁵⁶

これによると、親族大名のなかで相談が行われ、それを老中阿部正武へ伺ったところ、將軍へ御目見えできない家来、出家の者であってもよいという老中からの内意を得た。このことは同じ一門の松平直明からも提出されており、大蔵の娘は長門国清光寺へ嫁つぐこととなった。

また、萩藩から定期的に八丈島の永見に対して金子が送金されている。

永見大蔵殿へ金子被遣候事

一永見大蔵殿へ前々より配所堪忍料として金子被遣候、然処此節八丈嶋へ船便有之候間、大蔵殿へ御心付被遣候ハ、可相届候通、彼地御代官設楽嘉右衛門殿より被申越候前々之様令僉議見申候処、天和三年ニ初而被遣候一ヶ年十両充之積を以、三ヶ年分を一度ニ三十両充式年はさめニ被遣候、然処近年者壹年はさめニ三十両充被遣候、元禄九年六月・同十一年二月御在府之内被遣候ニ付、又此度元禄十三年之春被遣候、依之御年寄御老中阿部豊後守殿へ被得御内意候事

覚

八丈嶋江流罪被仰付候永見大蔵方、三年目ニ一度三十両充、勝手為積遣申候、今年遣年ニ御座候、依之奉得御内意候、以上

正月廿一日

松平大膳大夫内

国司庄左衛門⁵⁷

この史料によると、永見大蔵へは前々から堪忍料として金子が送られていたことが知られる。1か年10両ずつのところ、3か年分を一度に30両を送金している。その初めは天和3年(1683)で、貞享5年(1688)、元禄3年(1690)正月、同5年(1692)4月、同9年(1696)6月、同11年(1698)2月、同13年(1700)2月に送金していることが「公儀事扣」によって確認することができる。

まず、上記の書付を老中へ提出する。そして幕府から「大蔵殿へ金子之義、御心次第被遣候様」と申し渡されたら下記の送り状を作成し、

覚

一金子三拾両 但小判也

右者松平大膳大夫方より被進候付而、今度設楽喜兵衛様へ御頼仕、御船便差越申候間御受取可被成候、以上

辰ノ

御名

二月廿二日

国司庄左衛門書判

永見大蔵様

斗⁵⁸

これを八丈島奉行の設楽喜兵衛宅へ持参して、用人の植村徳右衛門へ渡し、

覚

一金子三拾両者 但小判也

右者從 大膳大夫様八丈嶋永見大蔵殿江被進候御金請取申候、重而嶋より請取之返事参次第此書付と引替可申候、以上

辰
二月二日
国司庄左衛門殿⁵⁹

設楽喜兵衛内
植村徳左衛門

そのかわりにこのような手形を受け取り、大蔵から金子を受け取ったとの連絡が入り次第手形と引き換えることになっている。

このように八丈島へ遠島後も萩藩との関係が継続していた本稿の主役、永見大蔵は元禄14年(1701)4月5日に死去する⁶⁰。八丈島へ流罪となって21年。享年70歳であった。そのときの様子は「豊歳ノ俛スヘキ時ナケレバイカナル壮者モイカンセン最愛ノ一子ヲ海底ニ、帰路ニハ己レ道路ニ倒レ死、此時ニアタリテハ老幼餓死スル者幾百人彼大身タル永見大内蔵サエ榎立村ニ於テ黄金千両ヲ枕トシテ餓死ニ及フ⁶¹」と、大飢饉のさいに、千両箱を枕に死んだと『八丈実記』によって伝えられる。

おわりに―まとめと課題―

以上見てきた事象により、越後騒動の裁決による大名預の性格、またそれよって大名預となった家臣を取り巻く環境や社会的関係を、それと深くかかわりをもった大名親族集団を中心に、以下のようにまとめておきたい。

越後騒動の第1審における大名預は、大名親族集団への預であり、延宝7年10月の永見以下5人の預は刑罰としての性格、延宝8年12月の岡嶋壱岐の預は未決拘留としての性格を有していた。しかし、刑罰としての性格を有していたといえども、それは公儀評定の怖さを認識した大名親族集団が幕閣と談合し、紛争解決の手段として利用していたと指摘できよう。すなわち、大名親族集団による調停機能として、大名家の救済という性格を有していたといえよう。一方、第2審は大名親族集団に預けられていた片山、中根、渡辺がともに非親族大名に預け替えがなされており、このことは刑罰としての性格を明確に示していることが窺えよう。

幕府と藩の関係性に目を向けると、預け人の扱い・道中における詳細な規則、大蔵と家来の不和・大蔵家来の死に対する介入など、幕府という公権力による管理・規制が強く、預人の忝意が認められるのは、随行する家来の選定のみに限定されていた。それは大名預が国家役としての性格を有していたということができよう。

また、藩と藩の関係性に目を向けると、親族大名の横のつながりが注目される。特に「御一門間之事ニ候間被仰合、万端一用ニ被遊可然存候」と、他の親族大名と同様になるよう情報収集や申し合わせが多く行われていることが指摘できる。

最後に毛利家と永見大蔵の関係性に目を向けると、遠島後も大蔵娘の縁組みや3年に一度30両の送金など、その関係が継続している。これは国家役としての性格を有するものではなく、毛利家と大蔵の縁戚関係によるものと考えられる⁶²。

こうした大名親族集団の家の救済という意識は、元禄11年津山に再興されるさい、「今度、侍分被召抱候ニ付、御一門方御家中ニ由緒有之者御望被思召、則、御五人様江御連名之以手紙、侍共御抱可被下由、被仰出候⁶³」と、家臣の割愛を願い出たとき、23人の家臣の割愛によってもみることができよう。

今後は事例の収集はもちろん、大名親族集団へ預となる場合、そうでない場合にはどの

ような論理が存在するか、大名親族集団の意識を含めた検討を行いたい。

注

- 1 平松義郎「預」『国史大辞典』。「預け」の類語として「配流」があるが、『徳川実紀』では「預け」は特定の者に預けること、「配流」は流罪に処することと区別して用いられている。
- 2 石井良助『江戸の刑罰』（中公新書、1964年）。
- 3 平松義郎『近世刑事訴訟法の研究』（創文社、1960年）、同『江戸の罪と罰』（平凡社、1988年）。
- 4 中里直美「江戸藩における御預人騒動の顛末」（『江戸地域史』第29号、1996年）。永嶺信孝氏の御教示による。個別具体的な事例を扱ったものは管見のかぎり、この論文しかない。
- 5 石高はともに「越後従三位中将光長卿様御家中知行并役附」（延宝3～7年正月と推定）を参考にした。
- 6 この騒動の顛末に関しては、福田千鶴「寛文・延宝期の御家騒動」（『幕藩制の秩序と御家騒動』校倉書房、1999年）を参照。筆者は家臣団の構成的展開を追跡する作業からこの騒動に言及した（拙稿「越後騒動に関する一考察」大石学編『近世国家の権力構造』岩田書院、2003年）。
- 7 「延宝七己未年十月十九日江戸町奉行南廳の御用覚帳」（『徳川將軍御直裁判実記』原胤昭・尾佐竹猛解題『犯罪・刑罰事例集』柏書房、1982年）。このはしがきに佐久間長敬が「此編は、予がむかし、幕府町奉行の廳に、公の勤めせし頃、書きぬき置しものなれば旧記は全文を其儘記して、露もたがへることなし。今は事ふりければ、世の人幕府の裁判所、裁判官も、如何なるさまなりしや、知る人いとゞ、まれになりゆき、問ひ尋る人もありければ、歴史の料に、斯くは梓にのぼせ、本城の図も、予が所持せしを添へ置きぬ。評定所の図は、他の巻に記すを合せ見るべし。明治の二十とせあまり六とせ　をさひろしるす」と本書をまとめた動機を記している。
- 8 「片山外記御預被　仰出覚」（『越後光長公御領没収之節御用控』宇和島伊達文化保存会所蔵）。同内容の史料に「片山外記一卷」（宇和島伊達文化保存会所蔵）がある。
- 9 「大和守日記」（朝倉治彦改題校訂『日本庶民文化史料集成』第12巻、芸能記録（1）、三一書房、1977年）。
- 10 前掲注9参照。
- 11 前掲注9参照。
- 12 福田前掲書注6参照。
- 13 「越後高田御時代諸事抜書」（『上越市史』別編5・藩政資料　、上越市、1999年）
- 14 「延宝七年永見大蔵御預之控」（山口県文書館所蔵）。
- 15 前掲注14参照。
- 16 「10月19日」前掲注14参照。
- 17 「10月19日」前掲注14参照。
- 18 「10月19日」前掲注14参照。
- 19 宍戸氏および右田毛利氏以下の同姓毛利5家を指し、藩士中の最上階層で、代々家老職につく。
- 20 「10月20日」前掲注14参照。
- 21 「10月22日」前掲注14参照。
- 22 嶋田淡路守時郷：『寛政重修諸家譜』（第五、207頁）、『徳川実紀』（第5篇、72頁）を参照。山口県文書館所蔵の毛利家文庫に「嶋田淡路御預一件」（34点）がある（『毛利家文庫目録』第五分冊、二幕府、36）。本史料の撮影にあたっては、中村大介氏の多大なご協力を得た。
- 23 「10月24日」前掲注14参照。
- 24 「11月2日」前掲注14参照。
- 25 「11月12日」前掲注14参照。
- 26 「11月12日」前掲注14参照。
- 27 「11月12日」前掲注14参照。
- 28 前掲注14参照。
- 29 前掲注14参照。
- 30 嶋田淡路守が元禄10年に死去したさい、幕府から検死役人が到着している（前掲注22の一件史料所収）。

預人が死去したさい、検死役人が派遣されることは『徳川実紀』にも多数記載されており、中里前掲注4や永嶺信孝「奥羽松前巡見使八戸領通行について」(『八戸地域史』第23号、1993年)においても触れられている。

- 31 前掲注13参照。
- 32 「10月19日」前掲注8参照。
- 33 「10月22日」前掲注8参照。
- 34 「10月23日」前掲注8参照。
- 35 「10月21日」前掲注8参照。
- 36 「10月23日」前掲注8参照。
- 37 『寛政重修諸家譜』(第12、335～336頁)参照。
- 38 「10月23日」前掲注8参照。
- 39 前掲注7参照。
- 40 福田前掲注6参照。
- 41 「小栗兵庫子息四人御預覚書」(東京大学史料編纂所蔵、6丁)。小栗兵庫には7人の子どもがおり、3人は松平陸奥守(伊達綱村)へ、4人は細川越中守綱利へ預けとなる。
- 42 中里前掲注4、永嶺前掲注30に触れられている。
- 43 「水野記」(『広島県史』近世史料編V、1979年、960～968頁)。天野彩氏の御教示による。
- 44 改易後の藩領処理、城内に残された諸道具の扱いかたなどについて、別稿「大名改易における藩領処理一城請け渡し時の文書作成」を用意している。
- 45 石井前掲注2。『八丈島誌』(八丈島八丈町役場、1973年)。
- 46 前掲注7参照。
- 47 「越後一卷之事」(山口県文書館蔵)。目録上、「越後一卷之事」となっているが、史料の表題には「越後一件之事」と記されている。
- 48 前掲注47参照。
- 49 前掲注47参照。
- 50 前掲注14参照。
- 51 前掲注47参照。
- 52 八丈実記刊行会『八丈実記』全7巻(緑地社、1963～76年)。
- 53 大隈三好『江戸時代流人の生活』(雄山閣、1982年)。
- 54 葛西重雄・吉田貫三『増補三訂 八丈島流人銘々伝』(第一書房、1982年)。
- 55 前掲注9参照。
- 56 「貞享二三年公儀ヲ被仰出御書附」20(山口県文書館蔵)。
- 57 元禄12年・13年「公儀事控」40(山口県文書館蔵)。
- 58 前掲注57参照。
- 59 前掲注57参照。
- 60 「八丈島流人明細帳」(前掲注54参照)。
- 61 前掲注52参照。
- 62 同じく慶長11年に八丈島に遠島となった宇喜多秀家は、奥方の実家加賀の前田家から毎年見届け物が届けられている(前掲注53参照)。
- 63 「津山藩江戸日記」貞享5年2月18日(国文学研究資料館史料館蔵写真版利用)。津山藩として再興した後の家臣団編成のあり方については、拙稿「大名家家臣団の再編成とその構造―津山松平家を素材として―」(『日本歴史』第669号、2004年2月号)を参照。

[付記] 本稿は、2003年11月29日に早稲田大学で開催された岡山藩研究会第19回全体会で
の報告「大名家家臣の預け・遠島について―越後騒動を事例に―」を補訂したものである。
貴重な御教示をいただいた参加者のみなさまに記して謝意を表する次第である。

大名の「京都御使」について —高松松平家を中心に—

久保貴子

はじめに

徳川氏が江戸に幕府を開いたことで、武家政権は京都の朝廷とはそれまでに比べて距離を置くことになったが、双方の接触は公私を併せると意外に多い。本稿では、そのうちの1つである「京都御使」、特に大名が將軍正使を勤める場合を例に検討を加えてみることにしたい。さらに、「京都御使」は官位叙任とも密接な関係をもっており、本稿では、高松松平家を例に叙任手続きを明らかにしたい。高松松平家は、20歳で死去した4代頼桓を除く歴代当主9人がこの役を勤め、うち4人が2度勤めており、都合13回を数える。

I 大名の「京都御使」

將軍(幕府)が天皇(朝廷)に派遣する「京都御使」は、通常は高家が勤める。その代表的な事例が、毎年恒例の年頭の使者であり、これは幕末まで変わらなかった。それに対して、大名が「京都御使」を勤めるのは、即位・入内・立后・立坊(立太子)、將軍宣下・任官(元服叙任・転任)に際してであるが、その契機となったのは、寛永7年(1630)の明正天皇の即位時である。すでに知られているように、前年の後水尾天皇の突然の譲位、しかも位を譲られたのが大御所徳川秀忠の孫娘で7歳の興子内親王という異例の事態に対処するため、派遣された大名は老中の酒井忠世と土井利勝であった。したがって、これはいわゆる慶賀使ではない。実際、2人は在京中に武家伝奏中院通村の罷免と昵近衆の日野資勝の後役就任を実現し、摂家衆と武家伝奏に訓戒をするなどの活動を行っている。次に大名が派遣されたのは、寛永20年の後光明天皇即位時で、大老酒井忠勝と老中松平信綱がこれを勤めた。これもたんなる慶賀使でなかったことは先行研究から窺える(1)。

正保2年(1645)4月23日、將軍家光の世子家綱が元服し正二位権大納言に叙任され、その謝使として京都所司代板倉重宗と高家吉良義冬、高家大沢基重(家綱の謝使)が派遣された。これ以降、大名派遣の際は、原則、正使(大名1名)・副使(高家1名)の形となるが、京都所司代が勤めたのはこの時だけである。これらを含め、「京都御使」を勤めた大名を天皇家・將軍家双方の事由にわけて『徳川実紀』『続徳川実紀』をもとにまとめると、以下のようになる。

派遣理由	正使	暇日	帰任日
明正天皇即位(1630.9.12)	酒井忠世(老中)	1630.8.20	1630.10.10
明正天皇即位(1630.9.12)	土井利勝(老中)	1630.8.20	1630.10.10
後光明天皇即位(1643.11.21)	酒井忠勝(大老)	1643.9.8	1643.11.29
後光明天皇即位(1643.11.21)	松平信綱(老中)	1643.9.8	1643.11.25
後西天皇即位(1656.1.23)	松平頼重(高松)	1656.1.3	1656.2.14
靈元天皇即位(1663.4.27)	松平直政(松江)	1663.3.25	1663.5.26
女御(鷹司房子)入内(1669.11.21)	松平定房(今治)	1669.11.1	1669.12.1
立坊・立后(1683.2.9/2.14)	松平頼常(高松)	1683.2.9	1683.3.25

東山天皇即位(1687.4.28)	保科正容(会津)	1687.4.7	1687.5.25
女御(有栖川宮幸子)入内(1697.2.25)	本多忠国(姫路)	1697.2.9	1697.閏 2.28
立坊・立后(1708.2.16/2.27)	松平頼豊(高松)	1708.閏 1.21	1708.3.28
中御門天皇即位(1710.11.11)	榊原政邦(姫路)	1711.1.12	1711.3.4
女御(近衛尚子)入内(1716.11.13)	松平宣維(松江)	1716.10.16	1716.12.21
立坊(1728.6.11)	酒井親本(前橋)	1728.5.15	1728.7.10
桜町天皇即位(1735.11.3)	井伊直定(彦根)	1735.10.4	1735.12.4
女御(二条舍子)入内(1736.11.15)	松平明矩(白河)	1736.10.27	1736.12.23
立坊(1747.3.16)	松平定喬(松山)	1747.3.15	1747.5.12
桃園天皇即位(1747.9.21)	藤堂高豊(津)	1747.8.12	1747.11.1
女御(一条富子)入内(1755.11.26)	松平宗衍(松江)	1755.11.5	1755.12.25
後桜町天皇即位(1763.11.27)	酒井忠恭(姫路)	1763.10.15	1763.12.28
立坊(1768.2.19)	松平忠刻(桑名)	1768.1.15	1768.4.9
後桃園天皇即位・立后(1771.4.28/5.9)	松平定静(松山)	1771.4.1	1771.6.1
女御(近衛維子)入内(1772.12.4)	松平頼真(高松)	1772.11.5	1773.1.15
光格天皇即位(1780.12.4)	酒井忠以(姫路)	1781.2.15	1781.4.15
立后(欣子内親王)(1794.3.7)	松平定国(松山)	1794.2.25	1794.4.15
立坊(1809.3.24)	井伊直中(彦根)	1809.3.5	1809.4.28
仁孝天皇即位(1817.10.21)	松平頼儀(高松)	1817.8.15	1817.11.1
女御(鷹司繫子)入内(1817.12)	井伊直亮(彦根)	1817.12.15	1818.1.19
女御(鷹司祺子)入内(1825.8.22)	松平容敬(会津)	1825.9.1	1825.10.23
立坊(1840.3.14)	松平定和(桑名)	1840.3.15	1840.6.1
孝明天皇即位(1847.9.23)	松平齐斎(松江)	1847.8.15	1847.10.21
女御(九条夙子)入内(1848.12.15)	酒井忠発(鶴岡)	1848.12.15	1849.2.25
派遣理由	正使	暇日	帰任日
徳川家綱元服叙任(1645.4.23)	板倉重宗(所司代)	1645.5.26	
徳川家綱将軍宣下(1651.8.18)	酒井忠清(前橋)	1651.9.7	1651.10.14
徳川家綱転任(1653.8.12)	保科正之(会津)	1653.9.21	1653.10.28
徳川綱吉将軍宣下(1680.8.23)	井伊直興(彦根)	1680.9.6	1680.10.14
徳川綱吉転任(1705.3.5)	酒井忠挙(前橋)	1705.3.23	1705.閏 4.7
徳川家宣転任(1705.3.5)	松平定直(松山)	1705.3.23	1705.閏 4.7
徳川家宣将軍宣下(1709.5.1)	井伊直通(彦根)	1709.5.15	1709.7.1
徳川家継将軍宣下(1713.4.2)	松平忠雅(桑名)	1713.4.7	1713.閏 5.4
徳川吉宗将軍宣下(1716.8.13)	松平頼豊(高松)	1716.8.18	1716.10.21
徳川家重元服叙任(1725.4.9)	酒井忠真(鶴岡)	1725.5.9	1725.7.1
徳川吉宗転任(1741.8.7)	松平容貞(会津)	1741.8.27	1741.10.27
徳川家治元服叙任(1741.8.12)	酒井忠寄(鶴岡)	1741.8.27	1741.10.27
徳川家重将軍宣下(1745.11.2)	松平頼恭(高松)	1745.11.5	1745.閏 12.15
徳川家重転任(1760.2.4)	松平頼恭(高松)	1760.3.1	1760.4.26
徳川家治兼任(1760.2.4)	松平容頌(会津)	1760.3.1	1760.4.26

徳川家治將軍宣下(1760.9.2)	井伊直幸(彦根)	1760.9.6	1760.11.1
徳川家基元服叙任(1766.4.7)	松平朝矩(前橋)	1766.5.9	1766.6.28
徳川家治転任(1780.9.4)	井伊直富(彦根)	1780.9.8	1780.10.28
徳川家斉元服叙任(1782.4.3)	松平頼起(高松)	1782.5.1	1782.6.28
徳川家斉將軍宣下(1787.4.15)	松平頼起(高松)	1787.4.23	1787.6.22
徳川家慶元服叙任(1797.3.1)	酒井忠徳(鶴岡)	1797.4.7	1797.5.28
徳川家斉転任(1816.4.2)	松平容衆(会津)	1816.4.21	1816.6.13
徳川家慶兼任(1816.4.2)	松平直温(前橋)	1816.4.21	1816.6.13
徳川家斉・家慶転任(1822.3.1)	松平頼恕(高松)	1822.3.20	1822.6.9
徳川家斉転任(1827.3.18)	井伊直亮(彦根)	1827.4.16	1827.閏 6.15
徳川家慶昇叙(1827.3.18)	松平定永(桑名)	1827.4.16	1827.閏 6.15
徳川家定元服叙任(1828.4.4)	酒井忠実(鶴岡)	1828.5.7	1828.6.28
徳川家慶將軍宣下(1837.9.2)	松平頼恕(高松)	1837.9.7	1837.11.13
徳川家慶転任(1837.9.2)	酒井忠器(鶴岡)	1837.9.7	1837.11.13
徳川家定兼任(1837.9.2)	松平勝善(松山)	1837.9.7	1837.11.13
徳川家定將軍宣下(1853.11.23)	松平頼胤(高松)	1853.12.15	1854.2.15
徳川家茂將軍宣下(1858.12.1)	酒井忠顕(姫路)	1858.12.15	

まず、天皇家側の事由をみると、後西天皇即位の際から大名1名(正使)と高家1名(副使)が將軍の慶賀使として派遣されている。この形式は、続いて女御入内、立坊(立太子、靈元天皇の代に再興)、立后の際にも行われるようになった。ただし、立后は光格天皇の中宮欣子内親王の時のみ、単独で慶賀使が送られているが、それ以外は立坊慶賀使等との兼任である。さらに、中宮(皇后)ではなく皇太后に立てられたときは、高家が慶賀使を勤めることもあった。一方、將軍家側では、やはり、將軍および世子の叙位任官、特に任官に際して行われている。將軍宣下に代表されるように家光までとは違い、將軍が上洛しなくなったことで、派遣の形式が整備され儀礼化が進んだ。

將軍家側の事由の場合は、当然その儀式が終了してからの派遣となるが、天皇家側の事由の場合は、その儀式に間に合うように派遣されるのが通常であった。しかし、光格天皇即位の慶賀使に顕著に表れるように、儀式後の派遣も江戸後期には若干みられる。暇日から帰任日までの日数は、2ヶ月前後が多い。

派遣される大名は「溜問詰」で、譜代では本多家と榊原家が各1回あるが、基本的には井伊家と酒井雅楽頭・左衛門尉両家である。家門では高松松平家、松江松平家(結城松平系)、会津松平家、前橋松平家(結城松平系)のほか、松山松平家(久松松平系)が勤めているが、圧倒的に多いのは高松松平家である。

幕府が「京都御使」を大名に任命するのは、儀礼の軽重を勘案した結果である(踐祚や贈官位では高家が派遣される)が、その基準をいつどのように定めたのかは判然としない。

II 高松松平家の「京都御使」と官位叙任

高松松平家は、初代頼重が寛永19年(1642)に下館から移されて成立した。以後、明治維新まで移封されることなく11代を数える。この間、9人の当主がのべ13回の「京都御使」を勤めた。そして、この「京都御使」によって少将、あるいは中將に任官されるこ

とになるが、いずれも京都出立前に参内した際、推任され、帰府後、江戸城で承認されるという形である。ただし叙任文書の日付は朝廷で推任された日となる。

- 1 頼重(1622～95) ○明暦2年(1656)1月29日 従四位上左近衛権少将
明暦2年1月29日 御暇被下御太刀拝領被 仰付、且、此度ノ御祝儀トテ従四位上少将ニ被任ノ旨
即席難有ノ旨言上、但、官位昇進ノ義ハ重テ関東ヨリ御請可申候旨ヲ述フ
2月15日 今度京都ニテ被 仰出候官位ノ義可奉随 叡慮ノ旨
即席難有ノ旨申上、退出
- 2 頼常(1652～1704) ○天和3年(1683)3月6日 左近衛権少将
天和3年3月6日 此度目出度御使者相勤ルニ付、少将ニ任セラル、ノ由
即両伝奏衆ヘ向テ少将推任ノ義難有奉存候、乍然、此義ハ下向ノ後御受仕度ノ旨申達ス
3月25日 此度御使相勤ニ付、少将ニ任セラル、旨
即 御前ニ進出、御礼申上ク
- 3 頼豊(1680～1735) ○宝永5年(1708)3月4日 左近衛権少将
宝永5年3月4日 此度目出度御使相勤候ニ付、少将ニ被任ノ旨
即席難有ノ旨申上、且、下向ノ後御請仕度由ヲ述フ
3月28日 勅許ニ随テ少将転任被 仰付候旨
即席御礼申上
○享保元年(1716)9月27日 左近衛権中将
享保元年9月27日 御暇被下候ニ付、御太刀拝領被 仰付、且、此度目出度御使相勤ニ付、左中将ニ被任ノ旨
則難有ノ段御請申上、但シ中將就任ノ義ハ重テ関東ヨリ御請可申上旨、伝奏衆ヘ申達ス
10月21日 勅許ニ随テ中將ニ転任被 仰付候旨
拝謝退出
22日 今般中將ニ被任ニ付、従四位上ニ加階被 仰付ノ旨
即席御礼申上、退出
- 5 頼恭(1711～71) ○延享2年(1745)12月22日 左近衛権少将
延享2年12月22日 某并出雲守少将 勅許ノ由、次ニ若狭守従四位下 勅許ノ由
三人一同ニ難有ノ旨、并ニ御請ノ義ハ罷下リ追テ可申上旨ヲ述フ
閏12月15日 少将 勅許ノ段、達 上聞候ノ处、可任 叡慮旨被 仰出ノ由
難有奉存候趣申達シ、退出
○宝暦10年(1760)4月2日 左近衛権中将
宝暦10年4月2日 此度御転任御祝義御使相勤ルニツキ中將ニ御推任 仰出サル、由申聞ラル、平服シテ復座、(中略)一同ニ進出テ御

礼申上、御請ノ儀ハ関東ヨリ申上ヘキ段申達ス

4月26日 此度京都ニ於テ中将御推任仰出サル、所、御辞退申上、其
後言上ニ及フノ所 叡慮ニ任スヘキ旨 仰出サル、段申聞
ラル、難有段申上、退出

5月9日 此度中将ニ任セラル、ニツキ位階従四位上ニ 仰付ラル、旨
存寄ラズ、難有段御礼申述、退出

6 頼真(1743～80) ○安永元年(1772)12月16日 左近衛権少将

安永元年12月16日 此度入 内御祝儀御使相勤ルニツキ少将ニ御推任被 仰出
由申聞ラル、平伏シテ難有仕合奉存候、帰府仕達 上聞、
追テ御請可申上段申述ヘ復座ス

安永2年1月15日 此度京都ニ於テ少将御推任 仰出サル、所、言上ニ及フノ
所叡慮ニ任スヘキ旨 仰出サル、段申聞ラル、難有仕合ノ
段申上、退出

7 頼起(1747～92) ○天明2年(1782)6月7日 左近衛権少将

天明2年6月7日 此度御使相勤ニ付、少将ニ被 仰付由申述ラル、其時平伏相
済復座、(中略)一同進出御礼申上、御請ノ義ハ関東ヨリ可
申上段由申達ス

6月28日 此度京都ニ於テ少将御推任仰出サル、ニ付、御辞退申上ル
段、言上ニ及フ所 叡慮ニマカスヘキ旨 仰出サル、段申
聞ラル、難有旨申上ケ、竹ノ御廊下ニ開ク

○天明7年(1787)6月2日 左近衛権中将

天明7年6月2日 此度將軍 宣下御礼御使相勤ムルニ付、中将ニ御推任被 仰
出ノ由申聞ラル、其時平伏、畢テ復座、(中略)一同進ミ出
御礼申シ上ケ、御請ノ義ハ関東ヨリ可申上段申達ス

6月22日 此度京都ニ於テ中将御推任 仰出サル、ニ付、御辞退申上
ル段、言上ニ及フ所 叡慮ニマカスヘキ旨 仰出サル、段
申聞ケラル、難有ムネ御請申上ケ、竹ノ御廊下エ開ク

6月25日 今度中将ニ任セラル、ニ付、位階従四位上ニ 仰付ラル、
旨申聞ケラル、存寄ラス、難有段御礼申述、退出

8 頼儀(1775～1829) ○文化14年(1817)10月7日 左近衛権中将

文化14年10月7日 此度御即位御祝儀之御使相勤候ニ付、中将御推任被仰出

11月1日 こたび京より帰りし三人のものども。御推任御推叙の次第
を御聴に入れしかば。叡慮に任ずべきのよし仰せ出されて。
少将讃岐守は中将に転じ。

11月5日 従四位上加階被仰付候 (従四位下中将松平讃岐守同じ上に
のぼる)

9 頼恕(1798～1842) ○文政5年(1822)5月5日 左近衛権少将

文政5年5月5日 此度転任御祝儀御使相勤ルニツキ、少将御推任 仰出サル、
由申聞ラル、平伏シ復座、(中略)一同進出テ御礼申上、御
請ノ儀ハ関東ヨリ申上ヘキ旨申達ス

6月9日 此度京都ニ於テ少将御推任 仰出サルハニツキ、御辞退申上
ル段、言上ニ及フ処 叡慮ニマカスヘキ旨 仰出サルハ段申
聞ラル、難有旨申上、

○天保8年(1837)10月16日 左近衛権中将

天保8年10月16日 此度御使相勤候ニ付、中将御推任被仰出

11月13日 勅許に任せて讃岐守は中将(中略)に転じ

11月14日 正四位下加階被仰付候

10 頼胤(1810～77) ○嘉永7年(1854)1月24日 正四位下

嘉永7年1月24日 此度御使相勤候ニ付、正四位下御推叙被仰出

2月18日 正四位下 松平讃岐守

右可任 勅許旨。於御黒書院縁類。老中列座。大和守申渡之

上記は、「京都奉使録」(2)から、朝廷の推任時と幕府の承認時の文言を書き出したものである。ただ、文化14年・天保8年・嘉永7年については、「京都奉使録」が現存していないようなので、「家譜」(3)および『続徳川実紀』から記事を拾った。これを見ると、文言に若干の違いがあることがわかる。たとえば、頼重は、朝廷の推任に対して「重テ」関東より御請け申し上げべきと返答している。「重テ」の文言は、頼豊の中将推任(享保元年)の際にも見える。この「重テ」が一般的な意味ならば、頼重、頼豊は推任をその場でいったん受けたと解され、幕府に報告後、改めてもう一度受けるという手順を踏んだことになる。こう考えると、永井博氏が検討した朝廷側の史料と合致するが、推任を受けるか否かが頼重に一任されていたわけではなく、頼豊も幕府に報告しただけではなかった(4)。さらに「重テ」が、頼恭・頼真の少将推任(延享2年・安永元年)の際の「追テ」と同意(のちに、今度の意)とすれば、推任の場では保留した可能性もなお残る。

「京都奉使録」で「御辞退」の文言がみられるのは、頼恭の中将任官(宝暦10年)、頼起の少将任官(天明2年)・中将任官(天明7年)、頼恕の少将任官(文政5年)の際である。いずれも江戸城での帰任報告の中で使われている。これは朝廷での推任の場では辞退し、江戸で許可を得て叙任されるという慣例に則っているが、なぜ高松松平家の場合、宝暦10年からこの文言がみられるのか、現段階では判断しがたい。叙任文書の日付は、この場合もちろん、朝廷での推任日であり、「家譜」には「御辞退」の文言は見えない。

ところで、高松松平家は3代頼豊が2度目の「京都御使」を勤めたことで中将に昇進し、以後中将に補せられる家柄となった。その後、中将昇進には「御使」が条件となり、同家にとってこの勤めのもつ意味は大きい。しかも8代頼儀と10代頼胤を除けば、少将昇進も「京都御使」によってである。8代頼儀が「京都御使」を勤める以前に少将に任じられたのは年齢が影響していると思われる。初代頼重以降、少将昇進、つまり初めて「京都御使」を勤めた時の年齢をみると、頼重35歳、頼常32歳、頼豊29歳、頼恭35歳、頼真30歳、頼起36歳の時であった。つまり30歳前後が1つの目安になるが、頼儀がこの年齢であった時期は、偶然にも大名の「京都御使」はなかった(寛政9年の家慶の元服叙任から文化6年の立坊までの10年間)。加えて頼儀は18歳で家督相続しており、相続後の年数も考慮されて、文化4年(1807)33歳で御使とは関係なく昇進したと考えられる。

ところが、10代頼胤の昇進状況は、それまでとは明らかに異なる。少将昇進は天保4年(1833)家督前の24歳の時で、これにより当主の養父頼恕と官位で並んだ。頼恕は25歳

の時に「京都御使」を勤めて少将になっており、年齢的にはこれに倣ったといえようか。また、頼胤は文政 11 年（1828）19 歳で將軍の日光名代を勤めるなど、家督前からすでに公儀役を果たしている。その後、天保 13 年 33 歳で家督相続し、5 年後に中将に昇進する。これも「御使」を中将昇進の条件とする「寛保御定」に達する昇進であった。頼胤が「京都御使」を勤めるのは、40 歳半ばの嘉永 6～7 年である。このときすでに中将であった頼胤は正四位下に推任され、幕府に承認された。「正四位下」は、養父頼恕が「御使」で中将に昇進したあと、幕府によって任じられており、これを先例にしていると考えられる。それまでの 4 回の中将昇進では「従四位上」であった。いずれにせよ、頼胤の官位昇進は異例の部分が多く、その背景を探る必要があるだろう。

おわりに

高松松平家の初代頼重は水戸家初代頼房の長男で、頼重が誕生したとき、將軍家光をはじめ尾張家初代義直、紀伊家初代頼宣にもまだ男子はなかった。その後、水戸家では頼重の同母弟光圀を世継ぎと定めたこともあって、頼重の大名としての位置づけは幕府としても考慮しなければならなかった。結果、御三家に次ぐ家門大名として創出する方針になったと思われる。また、のちに「京都御使」を勤める松山松平家は家康の異父弟定勝を祖とする家、会津松平家が家光の異母弟正之を祖とする家であるのに対し、松江松平家が秀忠の異母兄秀康の子直政を祖とし、前橋松平家も同じく秀康の子直基を祖とする家、高松松平家が秀忠の異母弟頼房の子頼重を祖とする家である。このうち中将に補せられるのは会津松平家と高松松平家で、この会津松平家の創出が、高松松平家の立場に微妙な影響を与えたと推測できる。それが、「京都御使」の回数と官位叙任のあり方に反映された可能性はあろう。ただし將軍の「御使」としては、ほかに日光への名代もあり、高松松平家の一門内での位置についてはこれらを併せて考察しなければならない。

また本稿では、事実確認とデータ収集に終始したので、今後はこれらを生かして幕府・朝廷間における大名の立場や役割について考えてみたい。

ところで、今回、一部引用した「京都奉使録」は、「御使」に任命された時点から終了時までの記録で、附録に書付・目録・行列などが書き留められている(5)。幕府・朝廷・藩の 3 者が関わる儀礼研究には格好の史料で、これについての分析は別稿に譲りたい。

註(1)野村玄「後光明天皇の即位と江戸幕府」(『日本史研究』467、2001 年)。

(2)香川県歴史博物館所蔵。

(3)『徳川諸家系譜』第三(続群書類従完成会、1984 年)。

(4)永井博「「御使」と官位叙任—高松松平家の家格をめぐって—」(『社会文化史学』45、2003 年)

(5)たとえば、明暦 2 年の「京都奉使録」は「一京都御使者被 仰出式、一御使者被 仰付御礼式、一御暇式、一伝奏衆入来式、一所司代宅饗応式、一御即位御規式拝覧式、一参 内式、一近衛亭饗応式、一勅答式、一帰府 御目見式、一官位 仰付式、一同御式」で、附録は「家君水戸公書付、行列江戸発駕并入洛同、参内行列、久野 御宮参詣、禁裏御所方ニ献上ノ品、禁裏并御所方ヨリ拝賜ノ品、帰府後献上ノ品并贈送ノ品、官位昇進ニ付 禁裏御所方ニ献上并贈物ノ品」である。これらの項目はその時々

によって多少変化があるが、基本的には増加の傾向にある。なお、官位の推任が行われるのは勅答式の時である。

史料翻刻・佐賀藩「律例」

島 善高

はしがき

佐賀藩が熊本藩に倣って徒刑制度を導入したことはよく知られており、既に『佐賀県史』中巻（昭和四十三年）や『佐賀市史』第二巻（昭和五十二年）にもその梗概が記されている。それらによれば、佐賀藩が徒罪制を始めたのは天明3年12月で、徒罪小屋は当初、片田江、十五村、鍋島村、皿山の四箇所（寛政十年に片田江一箇所に統合）に設けられていた。そして、従来追放刑に処されていたものの大部分を徒罪とし、川浚、砂運び、道普請、材木運搬、細工仕事などに従事させた。そして一日錢二十文の賃金を与え、半分を小遣いとして与え、残りの半分をプールしておき、服役終了時に「渡世有付用」として渡した。

徒罪制は本来、犯罪者を更正させるための制度であって、刑期を満了すれば就業資金まで下付されるという有難い制度であるはずであるが、その運用の実態をみると、必ずしも所期の目的を達していたとは言い難いようである。上記『佐賀市史』によれば、文化二年から天保八年までの三十二年間に三六五人の徒罪者があったが、そのうち85人が逃亡している。

『佐賀市史』が依拠した史料は佐賀県立図書館所蔵の「律例」と題する史料であって、天保年間に書かれたものと推測されるが、それによれば、徒罪者の逃亡を防ぐための方策がいろいろ提言されており、そこに

明律等ニハ纔三ヶ年より以下之徒ニシテ副予不逃出通、鐐と申鉄鏈之環を相部置、兼而又其紛為無之、額刺墨之手当も有之由相見候付而は、番其外之儀准夫、聊大形無之儀、押而被考候、然此御方ニ而は徒罪之印ニ手数迄髪切杯有之儀ニ候得共、鐐刺墨鉢之御手当も無之、番其外之筋も人様有之候上、

とあるように、明律に倣って「鐐と申鉄鏈之環」とか「刺墨」などを施しては如何と述べている。「張紙留 御仕置仕形之事」という史料（『日本近世行刑史稿』上巻所収）によれば、幕末の佐賀藩では実際に額に「×」の入墨を施すようになっている。この入墨と右の提言との直接的な関連は不明であるが、今後、両者の関係を追及して見る必要がある。

ところで、従来ほとんど注目されていないけれども、佐賀藩の「律例」には、徒罪以外にも、閉戸、追放と払との関係、そしていわゆる併合罪についての言及もある。まず閉戸については、城下の家が軒並み青竹封印をしていては「見場悪敷」、かえって「風化を敗り」、「他邦之批判」も懸かり、さらには閉じ籠もっているだけでは暇をもてあまして不善をなすことにもなるから、閉戸は過料などに替えたほうが良いと提言している。

次に追放と払の関係であるが、本来、追放は格相も名字も没収し、赦免もされない刑罰であり、払いは格相も名字もそのままであるから、追放が重く、払いが軽いはずであるが、実際の刑罰では追放刑でありながら二三郡の構であり、払いでありながら五郡の構いなどとなっており、払いの方が構い場所が多くなっていると述べ、今後は四郡より以下を払、五郡より以上を追放というように、郡数の多少によって両刑の差別をつけるようにすべきであると主張している。

そして併合罪については、窃盗や横取は「余罪被流候御手当」であって、何箇所でも窃盗を行なっても五十敲の上で御城下払、また何箇所でも横取を犯しても三十敲であるが、窃盗・博奕・女遊を犯したものは「束而御手当」であり、三罪が併科され、百敲の上で御城下払

となる。つまり併合罪における吸収主義と併科主義との問題であるが、この「律例」では向後二罪以上之向は、軽と重と相兼候者ハ重一罪を揚、軽重等を相兼候者ハ其一罪ニ付而御手当有之、其内兼罪等夥敷、一罪ニ付而之御手当ニ而難差置所業も候半ハ、右ハ臨時御裁判御座候通ニ被相極方にては如何可有御座哉、

と述べ、軽と重の二罪であれば重き一罪で、軽重等しい場合にはその一罪で処罰し、もし数多くの罪を犯して一罪では済ましがたい場合には臨時裁判所を開くべしと提言している。

以上の提言が、佐賀藩でどのように扱われたのかは今後の研究課題であるが、「律例」のように、具体例を挙げて刑法上の問題点を指摘している史料は貴重である。そこで以下、この「律例」を翻刻し、大方の参考に供することにした。

史料翻刻・佐賀藩「律例」

律例之儀は御政事上重立筋ニ而、從來被入御念儀ニ付而ハ、聊ニ而も御改革躰之儀、甚以不容易筋御座候得共、被行来等之訳ニ泥、御不都合之儀杯御座候も、其促被閣候ハ、幾と宿弊相改候期有之間敷、余事とは相違、人之死生存亡ニも相懸候事柄、其通ニ而は不可然様相見候条、廉々左之通御潤色等有之候而は如何可有御座哉、

上附箋

御刑法辺之儀ニ聊氣付之筋有之候ニ付、御役筋御吟味書之構ニ倣、草案本文之通取立候、乍然愚見其理ニ当候哉、妄意之廉勝ニ而可有御座候得共、其御役下相部事柄之儀と乍心付、其促黙止居候も無本意、幸当時御改正等之御仕組は一条ニ而も被御取揚廉有之、律例上聊之補とも相成候ハ、詮も不空様相心得候ニ付、不奉顧恐懼、本ケ条入御内覧候事、

上附箋

本文草案之儀諸御記録等、得と調合候上、取立申答ニ候得共、当時ハ地行之御用筋杯夥敷、他事ニ相施候暇無御座ニ付、泊等之折節、一通書立候促ニ而、諸御記録へ引合之手数杯も相関置候ニ付而は、不取調且見込違之失御座候とも、其答奉蒙御宥免度候事、

一、徒罪之儀ハ懲締は勿論、教化之筋を兼候上、在付料をも被下候儀、無上も御仁刑ニ候得共、是迄之様逃走躰夥敷御座候而ハ、大切之御手当其詮不相立儀ハ不能申、御捕方等を始不通御後害と相見候ニ付而は、屹度其御仕組無御座而相叶間敷、是迄ハ其御手締懸紙下紙之通、追々御潤色相成、寛政八以後ハ前罪之不拘軽重、逃去者一切死罪被仰付通相極、其段徒罪ともへも御申渡相成候得共、逃走一向相減不申、死罪ハ刑之最上ニ候得共、右ハ専御捕之上之御仕置ニ而、逃走ともニは御領内副拔出候得は、他邦之儀ハ纔御隣領之分一過手数迄之御探促ニ而、稠敷御穿鑿も無之儀ニ付、十分可被逃課目論見ニ相見候故、御捕之上之御刑罰は万之一之患之様相成、逃走制当之大御権威ニも難相成様相見、惣而死罪ニも可被仰付程之儀ニ候得は、勝手ニ不逃走通之御手締は屹度無之而相叶間敷、一躰御教導之御趣意ニ而在付料をも被下通、飽迄之御慈刑ニ候得は、銘々其旨を奉感服、屹度神妙之稼方等可仕儀勿論ニ付而ハ、番其外御手締など無御座候而も逃去躰全躰有間敷筈ニ候得共、元来下愚之難移者共勝ニ而、難有御手当之筋等俄ニ存当不申、徒役難苦之处よりは其場逃出候儀、此輩小人共之有打ニ而候、乍然年限中無疎被入置、夫々御教化御座候ハ、其内ニハ漸々感悟仕通可相成、惣而ハ番其外小屋飾等は屹度堅

固ニ無御座而不相濟儀相見候、且其御仕組相立、一向拔出候儀、不叶通ニ相成候ハ、御探促方其外死罪など被仰付通、末々之御造作ニ相及間敷、一躰徒罪之儀 御家ニ而は天明より行来候新刑ニ而、不逃走躰、廉々之御仕組も相備不申、

公儀御刑書杯ニは徒罪之儀其外本条より相見不申、明律等ニハ纔三ヶ年より以下之徒ニシテ副予不逃出通、鐐と申鉄鏈之環を相部置、兼而又其紛為無之、類刺墨之手当も有之由相見候付而は、番其外之儀准夫、聊大形無之儀、押而被考候、然此御方ニ而は徒罪之印ニ手数迄髪切杯有之儀ニ候得共、鐐刺墨躰之御手当も無之、番其外之筋も大様有之候上、加ニ五ヶ年七ヶ年之久徒役、常式之人ニシテも猶不堪様相見候所、まして徒罪風情之曲者とも、其逃去候儀必然之勢ニ而、文化二年以往は徒罪帳ニ逃去之咎御書載無之故、急ニ幾何と申儀逢知不申、其以来は懸紙之通ニ而、七ヶ年より壹ヶ年之者、死亡等相除、^(判斷不能)□三百十三人之内、逃去八十五人ニ而、此者其他之惡事無之、逃走一条ニシテも兼而相定被置候御法律通ニ候得共は、何も死罪難遁者ニ而、仮令殘貳百余人之者共、御教育之化、全行届、悉神妙ニ勤揚ニシテも、逃去八十五人生害者致出来通ニ而は、以前之郡払等、却而御仁恵ニ相見可申、此促ニ而被閑候ハ、以来之儀も打迫逃去、幾々ニハ幾何之死罪者可致出来哉も難計、御仁恵之妨とも可相成、惣而勤揚之貳百余人は壹ヶ年貳ヶ年之者重ニ候得は、逃去之八十五人ハ五ヶ年七ヶ年之重科者勝候處、御穿鑿杯不行届、御捕出杯ニ不相成候ハ、大切之御手当も無詮様相成、去迎一々御捕出相成、逃走一条之科ニ而穢多支配等被仰付通ニ而ハ、前広被定置候御法律ニは候得共、不便之様ニも相見候条、少々御入費之儀ニ候得共、人命ニも相懸候格別之事柄ニ付而は、右御仕組、左之通被相整方ニ而如何可有御座哉、

上附箋天明五巳正月

一、徒罪ニ被入置候者逃去候節被仰付候儀、揚屋を破逃去候者ハ、其通無之、不相双様被 思召上候由 仰出之趣奉承知候、依之吟味仕候處、元來徒罪之儀新法之儀ニ而、利害得失重疊讃談之上、專惡者共を御仁術を以善心ニ被相導候御趣意御座候處、難有御法不相基、或逃去或惡事をも仕出候者ハ、自其罪を招ニ而、外ニ参方無御座候、然者能々号令御嚴重ニ被相行、其御手当ニ相恐相慎罷在候内、自然と善心翻候儀ニも相移可申儀御座候處、逃去候者共、其促死罪之御沙汰も無御座節ハ全躰徒罪之方難行届、一躰惡者相恐候と申儀は責而一命ニ相懸候儀共より外有御座間敷、尤一端心得違鳥渡宿元罷帰、又ハ一往逃去候而も御仁恵を存当立帰候躰、其外准右之躰之者ハ勿論、死罪御沙汰ニ可相及様無御座、偕又籠屋揚屋を破逃出候者ハ未御手当も無之以前ニ而其内逃去候者ハ御手当を相恐候道理も可有御座敷、徒役之儀ハ全躰重科者を御教諭のため、先ハ離囚之儀ニ而、其内心底相改候得は徒罪被差免、既ニ在付料迄被渡下儀、眼前乍相心得、左迄之御仁恵を不存当逃去候者、揚屋を破逃出候者とは不相双儀と奉存候、第一徒罪之儀、人数も相増候處より逃去候躰も多可有御座、頃日も太郎左衛門・吉次郎と申者とも至而之重科者へも徒罪被入置候處、無間も兩人共逃去、今以行衛相知不申、段々右躰相重り候而は一向徒罪之御方不相立儀ニ御座候条、何レ格別号令嚴敷相定不被置候而不叶儀ニ御座候、勿論牢屋揚屋を破、毎度逃出候通有之候而は不相叶候条、以後之儀猶又吟味仕、其節之振合ニ随、嚴科ニも可被仰付儀奉存候旁吟味仕候、此段達 御耳候、

下附箋

一、徒罪之者逃去探促之上相捕、下地其科至一命被相助置候者之儀は、死罪にも可被仰

付哉、又は徒罪年数可被相増哉、随其趣時々吟味之事、

下附箋

一、徒罪之内小科之者逃走候節は、月数可被相増哉、其節之依振合吟味之事

右ハ天明年徒罪被相始候節被相定候数条之内より書拔候事

下附箋

此通

一、徒罪之儀格別御仁恵之御手当ニ候得は、いつれも感服仕、旧悪を改候通無之而不相叶儀ニ候得共、畢竟悪者のミニ候得は、右之处ニ存当候者寡数拾人之儀ニ而、中々役人之導教行届兼候趣相見候、前条答打曝躰之刑法、於被相改行ハ、以後再犯博奕其外之者共ハ徒罪ニハ不被相部、右答打曝之御手当ニ被相替、盜人其外重科之者計徒罪被入置候ハ、徒罪之者漸々相減、夫丈彼役筋之手当行届可申、且徒罪内格別相愼候者ハ、其趣時々相達候上、日限年限等被相減候ハ、一統相愼、徒罪御手当之詮も行届可申、左候而年限中逃出候者ハ最初之咎之輕重ニ不被相拘、御捕之上穢多支配被仰付ニ而有御座間敷哉、

右寛政八年相極候事

上附箋

文化二年ヨリ天保八年迄

七ヶ年三拾五人

内

勤揚四人

逃去拾三人

病死貳人

現在壹人

勤逃不分五人

六ヶ年七人

内

勤揚壹人

逃 壹人

病死三人

勤逃不分貳人

五ヶ年貳拾三人

内

勤五人

逃拾四人

病死壹人

逃勤不分三人

四ヶ年貳拾壹人

内

勤拾人

逃六人

病死壹人

逃勤不分四人

三ヶ年三拾貳人

内

勤拾八人

逃拾貳人

病死貳人

貳ヶ年半貳拾人

内

勤拾貳人

逃六人

病死壹人

逃勤不分壹人

貳ヶ年百拾壹人

壹ヶ年半七拾四人

内
勤八拾三人
逃拾貳人
病死五人
現在七人
逃勤不分三人

内
勤六拾五人
逃九人
病死貳人
現在四人

壹ヶ年四拾貳人

内
勤三拾六人
逃貳人
病死貳人
現在貳人
〆三百六拾五人

内
病死拾九人

右は満日迄致存命居候ハ、逃候も難計ニ付切離候事
現在拾四人

右は当時致入徒居候者満日迄ニハ同断ニ付切離候事
勤逃不分拾九人

右は勤揚逃去等之否徒罪帳ニ書載落相成、急ニ取調子不行届ニ付右同断

〆五拾貳人引
残三百拾三人

内
逃去八拾五人

一、右書載之年数は最前入徒之節之年数ニ而、徒中大赦等ニ而七ヶ年之五ヶ年ニ被相縮、又は悪事等ニ而七ヶ年之八ヶ年ニ被相増候実年数ニ無御座候、全躰は実年数取調申筈ニ候得共、其通ニ而ハ何拾何日と日数をも取調候半而不計通ニ相成、混雜ニ付、入徒之節被仰渡候年数取調置候ニ付、七ヶ年と相立候得共、其実ハ九ヶ年ニ被相増候も有之、五ヶ年ニ被相縮候も有之、六ヶ年以下も此例之事

一、初徒罪ニ而逃去候末、再徒罪ニ而勤揚候者は逃去之廉と勤揚之廉と両所江二人之形相立居候、将又一往逃出候末再徒ニ而逃候者ハ、前徒之逃と後徒之逃と両所二人之形相立居候付、逃去は八拾五人、全数は三百六拾五人と相立居候得共、現人数は少々相減儀候事、

一、逃去等之儀、徒罪帳一篇調之俣ニ而、多之出入は有之間敷候得共、少々之違目ハ難計候事、

一、徒罪小屋之儀有来之場所之様手薄飾等ニ而は相叶間敷候条、少々御入費之筋ニ候得共、格別之訳を以、屹度堅固牢屋見合之小屋一ヶ所取建方相成、三ヶ年以上之者共被入置、揚屋見合之小屋貳ヶ所程も建方相成、壹ヶ年より貳ヶ年半之者とも被入置、百日式百日之者共ハ是迄有来之場所へ被入置、昼間仕事被相部候節は小屋々々より被差

出候通被仰付方ニ而は、如何可有御座哉、

- 一、徒罪共へ類刺墨之御手当杯兼而被仰付候ハ、逃去候とも刺墨を目当ニシテ致穿鑿候ニ付而は、面躰等不相心得者も其手懸有之故、探促方杯ニは殊之外便利宜、不日ニ捕出ニも可相成故、輕易ニは逃去も不仕通相成可申、就而は

御家ニ而は是迄未曾有之新刑ニ候得共、五ヶ年七ヶ年其外強暴逃去之機相見候様之者へは、件之御手当も兼而被仰付通ニ而ハ如何可有御座哉、乍然右ハ肉刑と申候而、血肉を傷候惨冷之御手当ニ付而は、是迄之髪殘切杯、猶又屹度厳格ニ相行通ニ而は可被差置哉、

- 一、小屋飾等前断之通堅固相整、仕事等被相部候節、小奉行相付居候事ニ候得

共、猶逃去之患有之儀ニ付而は、鐐如何之製式ニ候哉調合、便利宜候ハ、相部被置方ニ而は如何可有御座哉、自然其製式急ニ不差分候ハ、逃去製当之理攻ニ而足枷様之品、新ニ拵立相部被置方ニ而は如何可有御座哉、

- 一、小屋奉行是迄之通ニ而は小人数ニ而、番其外差引教導躰相整兼可申候条、

向後ハ人数被相増、数人ニ而万端行届候様被仰付、兼而又是迄ハ小人数ニ而隔番之様相泊、夜白之勤番難行届儀、打見居候訳と相見、不番躰之落度御座候而茂、御呵捨等之輕御手当ニ而相済来候得共、人数増ニも相成候ハ、聊大形無之様、猶又嚴重ニ相達被置、自然不束之儀杯有之候ハ、稠敷其御手締被仰付通ニ而ハ如何可有御座哉、

- 一、組繩其外徒罪仕事躰之手業ニ心得之勇壯之荒使子、兼而人柄相応之者数人

定雇ニシテ、役筋召抱被置、平日徒役等差引致指南候儀ハ勿論、万一逃走等之節は、其場手分探促方ニも罷出候通被仰付置、且又夜分之儀ハ小奉行壱人雇夫兩人都合三人程ニ而、終夜無疎張番をも仕通被仰付方ニ而は如何可有御座哉、

- 一、七ヶ年徒罪之儀は、委細は前条懸紙逃走者書拔之通、死亡等相除^(判斷不能) □ 式拾七人之内勤揚は纔四人ニ而、余は式拾三人悉逃去ニ而、株立候罪人形通ニ而は人切之御手当空敷相成申儀候、乍然七ヶ年と申候而は御手当とは乍申も、余り程久敷、徒罪づれ大躰短慮暴氣之者共勝ニ而候得は、弥ヶ上滯渋を生、実ニ部兼可申、惣而は嚴番重刑も猶逃走其外不慮之變事も難計御座候条、五ヶ年ニ被相縮、殘二ヶ年は御手当替ニ而、出徒之節、式郡三郡間御構被置方ニ而は如何可有御座哉、

- 一、徒罪共年限中一日之暇も無之通仕事被相部通ニ而は、乍御手当も不便之様相見候条、毎月朔望之儀は九ツ時頃迄内、仕事等ニ被相部、八ツ時よりハ休息之構ニ相定被置、徒罪共一所ニ相集、役頭手伝杯より諸御法度之筋は不能申、孝悌之条を始、徒罪共之勸懲相成候儀とも故事を引、譬を揚、信実致会得候様、精々論方御座候通ニ而ハ如何可有御座哉、

- 一、徒罪杯被仰付者ハ大躰幼少より鄙事賤業を嫌、酒宴遊逸賭之諸勝負等ニ身安生立、只様難渋差迫候処より、果は盜謀等之惡事ニ相流候者勝ニ付、年限中禁酒禁煙僊服などニ而、日比之口躰を枯シ、兼而又從來徒ニ生立候遊墮之骨を換、肉をも變通之訳ニ而、非常之勵方をも仕候通之御手締無之而相叶間敷候得共、是迄ハ逃走之心遣重ニ有之故と相見、纔五ツ時より七ツ時迄寛々之致事ニ而被差置候得共、其通ニ而ハ地行徒者猶又懶墮相長、被差免候後も其余習ニ而十分之稼方等相厭可申、左候ハ、妻子など相育候儀は儲置、一身之過賄も六ヶ敷、難渋差迫候処よりは日比之盜横取躰又候企通躰又候企通^(判斷不能) □ 移行儀ニ候条、当節前ヶ条之御仕与、夫々相整儀候ハ、容易ニ逃出候儀も相叶間敷候得は、半時程も被相増、向後は明六ツ半より被相部方ニ而は如何可有御座哉、將又勤怠

ニ付御褒貶之御手当御座候ハ、徒中之人氣自然ニ引立、不覺致集勵候場ニも可相成候付而は、不時ニ怠惰之者へは答罪、稼方宜敷者へハ鳥目等被下通ニ而は如何可有御座哉、惣而は是迄は在付料一日ニ拾文錢之御定前ニ候得共、別段刻限等も被相増儀候ハ、在日料も被相増、一日拾五文錢も被渡下通被相定候ハ、壹ヶ年ニ而も積候而は相応之高ニ上、基手之用ニも相成儀ニ付、永徒役者ともハ猶又御仁恵之在付料を氣當ニ逃走之念慮相薄一助ニも可相成付而は、五文錢被相増通ニ而は如何可有御座哉、

一、庄屋別当共之教諭不相用諸疎行之族とも、以前は徒罪被入置候得共、當時は牢屋或溜揚屋入被仰付来、惣而右入牢等之御手当は一過之締方ニは可相成候得共、徒ニ閉籠被置手を束罷在通ニ而は怠惰を生之患も可有御座候条、以前之通、徒罪ニ被相復方ニ而ハ如何可有御座哉、於然は御手当之詮、猶又相立候上、職仕事杯ニも致馴、殊ニ組縄其外有用之品々も出来立通相成儀候事、

一、初再犯之通例盜人、偕又忍取横取或謀躰之者共、以前ハ徒罪被仰付候得共、其通ニ而は徒罪人数夥敷教導方等、夫々御手ニ難被及候ニ付、寛政八より答罪ニ御手当替相成、打追行居候、乍然答罪は徒罪之様在付料等被下候儀は勿論、教化之筋も無御座、一過之懲締迄之様ニ而、御手当之詮、徒罪ニ不及様相見へ申候、惣而前所業之族共は下地徒者之上、被召捕より御裁判まで数十日之牢屋揚屋等ニ而、猶又懶怠ニ相長居候処、五十八十敲之分ニ而被差出候ハ、引続其宿弊ニ而遊暮、勤方等部兼申儀ニ而、惣而は所業柄之末旁を以他人は勿論、近親肉縁之者も弥ヶ上見放、見次等仕暮候儀無之通相成、殊ニ出牢躰之後纔貯も有兼、衣類等も猶又汚損居候者勝ニ而、的面飢寒之責ニ差迫候処よりハ、初犯之答痛猶未止内、再犯再々犯と只様惡業致長遣儀、是迄多々有之通ニ候得共、徒罪被相部儀候ハ、地行徒者も御手当之儀ニ付而は、いづれ定前之仕事等不仕候半而不相濟儀ニ付、漸々ニハ職仕事をも致馴、出徒後も其余風ニ而不覺稼方等ニ相部可申、且在付料被渡下儀ニ付而は、差付之大難渋も無之、殊ニ徒役杯首尾好勤揚候得は、少しは身晴ニも相成儀ニ付、身寄其外よりも不便を懸呉候通ニ相成、其故重而不所存杯取起候躰之儀、絶行候通相成可申、盜横取躰之者ニは屈竟之御刑法と相見候条、以来之儀は以前之通徒罪之方重ニ被仰付通ニ而は如何可有御座哉、

一、姦犯人傷或給人、惡事等大躰郡御構被仰付、盜横取躰之重筋、偕又元盜人躰之惡事多分徒罪被仰付儀ニ而徒罪と郡御構は所業柄と人柄とニ依而被相替用來候相對之御刑法ニ而、其見合委細は懸紙之通ニ而御座候、併御手当之詮は郡御構之方大ニ徒罪之教化懲創并相兼候上、在付料を茂被下通之御仁恵ニ不及様相見候、尤

公辺筋ニ而御座候追放之様、一円ニ数十州を茂被相払、數百里之外ニ居付通ニ而は、身寄其外へ会面も不容易、生別離も同然ニ而、屹度御懲締ニも可相成候得共、此御方ニ而は

御城下之者以上、九郡追放ニ而、高来郡之内居付候而も生所へ之片道、海陸一旦夕之力ニ而相達儀ニ付、御構内入込候儀多々有之、兼而又御手当後差付御構場外へ家居等可借求仕候而茂、流罪風情之者、家主は勿論、与合所役も不相好儀ニ付、急ニは実ニ有兼儀も可有之、仮令可也之住所杯有之ニシテも年来住馴候生所より遠相離儀、難渋ニ付而、居付向有兼候訳ニ事寄、日延月延等ニ而押送、急ニ配所引取不申、打追居住仕候ニ付、彼是ニ而御手当之詮、徒罪見合ニ難相^(判斷不能)□様相見、惣而徒罪ニ前ヶ条之御仕与、夫々相備、循々善導御座候ハ、至愚不肖之者も自然と變動可仕、御役筋之化育をも贅程之

儀ニ付而は、死罪引続之一大刑法ニ相定被置、給人之儀ハ容易ニ徒役杯ニ而難被相辱候得は、其以下ハ趣ニ依、徒罪之方重ニ被仰付通ニ而は如何可有御座哉、

上附箋

徒罪と郡払等と兼而相定候見合

一 七ヶ年は	九郡見合
一 五ヶ年は	七郡見合
一 三ヶ年は	五郡見合
一 壹ヶ年半式ヵ年は	二郡三郡ニ当
一 壹ヶ年は	佐賀郡見合
一 式百五十日は	御城下并居郷見合
一 百五十日は	所払ニ当

- 一 閉戸之儀は、輕罪御手締ニハ一通其詮相立儀ニ候得共、此間之通数十百人同様之御手締ニ而

御城下其外端々迄、所在々々青竹封印などニ而は殆ど見場悪敷、風化を敗、御法違之者多様ニ而、諸通路筋、他邦之批判も可相懸、殊ニ一町数軒打逃も両隣も同様之御手当にては相互之様ニ而、差而恥締之儀ニも相成兼可申相見候ニ付而は、店商売等取止、徒ニ引籠候儀、致屈宅迄之御手締之様相成、惣而御手当中全躰有間敷儀ニ候得共、形之通閉籠被置候而は、小人共之閑暇為不善計、非儀患も難計候条、是迄は閉戸被仰付来候者も、其内ニは其日数御呵逼塞等ニ御手当替相成、打追店商売等仕候は被差免、其替相応ニ過料被相懸通ニ而は如何可有御座哉、将又御呵或逼塞或御呵逼塞之者は御手当中ニ付而は、長髪等ニ而相慎可罷在筈ニ候得共、其内ニハ平日同様月代等相整、勝手ニ外出をも仕儀ニ而、一躰御手当筋は聊にても人切之儀ニ付、等閑不相成通其御手締有之儀ニ候得共、輕罪は至而夥敷、下々までハ其儀不届合儀も可有御座付而は、商売筋杯ニ而穩便ニ外出等仕候は、大様ニ被差置、其替ニ無調法之品ニ依、少々宛過料をも兼而被相懸通ニ而は如何可有御座哉、左候而右過銀を以、徒罪小屋飾其外雇夫給金ニ被相用儀候ハ、徒罪御仕与も相立、輕罪御手当も相締、乍兩全備可仕候事、

- 一 給人其外郡御構被置、御手当ニ追放と構之差別有之、追放ニ被仰付候得は、格相も被召放、大小名字も被召上候上、懸紙之通、御吉凶にても容易ニ歸郡躰之御取扱も無之程、至而重御手当ニ候得共、重所業ニ被仰付、兼而郡数も可多筈ニ候得共二三郡よりも有之、二三郡ニ而相濟位之科ニ候ハ、払ニ被仰付候而も可相濟相見候得共、追放ニ被仰付儀有之、将又払ニ被仰付候得は格相も不相替、大小名字も打追ニ候上、御吉凶ニ付而歸郡をも被仰付御規則ニ而、輕御手当ニ付而は、輕所業ニ被仰付、兼而郡数も可寡筈ニ候得共、五郡より以上ニも有之、五郡をも御構被置程之重所業ニ候得は追放ニも可被仰付相見候得共、払ニ相濟候儀有之、五郡より以上をも御構相成候儀は郡数も不寡、重所業ニ而情難被憐訳も可有御座相見候付而は、是迄ハ払ニ而相濟被成候得共、向後は追放ニ被仰付、尤其科差而身分辱にても無之、格相取失儀ニ而も無之、情可被憐所業ニ而、追放ニ難被仰付向は、郡数よりも被相減、四郡より以下之御構ニ而払ニ被仰付、将又四郡以下御構被置儀は郡数も不多、輕所業にて情可被憐訳可有御座相見候付而は、是迄ハ追放ニ被仰付候向も以後ハ払ニ被仰付、尤其科身分を辱、格相をも取失、情難被憐所業ニ而、払ニ而難被相濟向は、郡数よりも被相増、五郡より以上之御構にて追放ニ被仰付、四郡より

以下を払二、五郡より以上を追放と、郡数之多少ニ依而兩刑之差別被相定通ニ而は如何可有御座哉、是迄之通三郡ニ而追放有之、七郡ニ而払も御座候通ニ而は、三郡之追放重候哉、七郡之払重候哉、追放は三郡ニ而も重様ニ候得共、七郡ニも相成候而は払にても全不輕様相見、輕重序位等分明致兼候得共、前断之通郡数之多寡ニ付而被差分候ハ、混雜等一向不仕候事、

上附箋

- 一 追放者一命被相助候者之儀、先年万部御執行其外ニ而、段々被成御免、御城下迄も被差免候儀有之候得共、追放者一命被相助候者之儀は至而重キ御手当者ニ付、御城下之儀も被差免候而ハ郡払其外同様ニ有之、輕重之詮無之、就右而は此以後御赦免被仰付候節
御城下之儀は不被成御免候ニ付、准夫追院追寺被仰付出家之儀も同様、御免不被成方ニ可有之と、享和二年戌十月
御転任御祝ニ付御赦免もの等御吟味之節相々其通被達御耳候事、

文化二丑二月

- 一 追放者偕又一命被相助候者、前方ハ御吉凶ニ付御赦免無之候處、光徳院様御中陰之節
泰国院様格別之御賢慮を以、重御法事御祝儀等之節等は段々御赦免有之候得共、追放者一命被相助候者ハ至而重御手当ニ付而は、以来前々之通被成御免方ニ而ハ有御座間敷哉之旨申上相成候處、
御代々様不被成御免儀ニ付而は、右被申上候通、向後御免不被成方ニ可有之旨被仰出候、

上附箋

給人江被仰付郡払之儀、五郡以下は甚多候得共、以上は甚稀ニ、八郡九郡ニ至而は凡五六十年來之郡払帳一通取調候得共、見当中不中、七郡よりは少々見当候ニ付、本文七郡ニ而払ニ被仰付儀有之旨書載仕置候、乍然此間松千代殿家來米倉兵藏と歟申人、九郡ニ而払ニ被仰付候由、沙汰仕候、其通ニも候ハ、七郡は差置、八郡九郡ニも払ニ被仰付儀と相見候、乍然右は跡方之例忝取調之上候哉、

- 一 一命被相助之文字、徒罪ニハ三四ヶ年、郡払ニは四郡五郡よりも被相付來候得共、全舛右文字死罪可被仰付者被相宥、一命のミ被相助置意味ニ相見候ニ付而は、右文字不被相付候而不叶程之重所業へは、御手当徒罪七ヶ年、郡払等は九郡ニ限可申相見候得共、三ヶ年四郡ニ而相濟候儀も有之、右之年数郡数ニ而相濟候程之科候ハ、右文字ニも相及間敷、尤是非とも相付不被置候而不叶重科ニも候ハ、郡数年数よりも被相増、向後は九郡七ヶ年ニのミ被相付通ニ而如何可有御座哉、其通候ハ、是迄ハ相付候四郡四ヶ年重候哉、不相付九郡七ヶ年重候哉、輕重等不差分候得共、九郡七ヶ年ニ限被相付通候ハ、輕重等自致分明候事、
- 一 平人ニは追放之御手当有之候而も、被召放格相も無之、被取揚大小名字も無之者ニ付、郡払被仰付ニ差而差別無之ニ付、追放ニも不被仰付候半而不叶通之科重者へハ、郡払之上一命之文字被相付、追放ニは容易ニ不被仰付候得共、此節五郡より以上之御構は都而追放ニ被仰付、一命之文字九郡追放ニのミ被相付通ニ相極候ハ、平人も五郡より以上之御構ハ追放、一命之文字ハ九郡ニ限相付候通ニ而ハ如何可有御座哉、

一 一命被相助之文字、郡払ニ被相付候得は、御吉凶ニ付而帰郡之御取扱も容易ニ無之儀ニ付、其詮も有之儀ニ候得共、追放ニ被相付候得は、地行之追放計にても帰郡之御取扱容易ニ無之、御規則前ニ付而は、一命之文字被相付候而も其詮一向無御座候条、向後之儀は懸紙之例を以、右文字相付候者ハ自余御赦免有之節も容易帰郡躰不被仰付、追放は下紙之例を以

御城下之外ハ帰郡被仰付、郡払ハ 御城下も被差免通、段取相成居候而は如何可有御座哉、其通ニも候ハ、文字相付居候も不空様相成候事、

一 盜横取躰之儀、数ヶ所江相犯候も、壹ヶ所江相犯候も御手当ニは輕重無御座、矢張盜は五十敲之上 御城下払、横取は三十敲迄ニ而相濟御法律ニ候得とも、盜之上致博奕居候者ハ、二罪を合八十敲之上 御城下払、盜博奕之上女遊をも相兼候者ハ、三罪を束百敲之上 御城下払被仰付御法律も相立居、此例ニ而は三ヶ所へも致盜居候者ハ、三罪有之訳ニ而、壹ヶ所へ致盜候一罪ニ三倍之御手当も無御座而不相濟儀ニ候得共、右ハ壹ヶ所へ致盜候一罪にて御手当有之、余罪被相流候御法律有之、此例ニ而ハ壹ヶ所へ致盜、壹ヶ所へ致博奕候輕重二罪之者ハ、重一罪御手当御座候ハ、重ニも不至、輕一罪は被差免も不足儀に候得共、右ハ束而御手当御座候御法律有之、余罪被相流候と束而御手当御座候と、兩御法律相戻候、惣而重御法律相破候者ハ、其重副不憚相破心底ニ付而ハ、輕御掟杯は背も不足者之科迄相負儀ニ而、其故犯重科者ハ、輕科は其内ニ兼而相犯居候訳ニ付而ハ、重科者現ニ輕科相兼居候而も、輕科者有打ニ而情可被憐ニ付而ハ、盜之上女遊博奕等仕候者、盜之重ニ而御手当御座候ハ、輕女遊博奕之科は御手当被相省候而も可然相見候付而ハ、束而御手当御座候御法律は、余罪被相流御法律とも相戻居候条、被御取止、向後二罪以上之向は、輕と重と相兼候者ハ重一罪を揚、輕重等を相兼候者ハ其一罪ニ付而御手当有之、其内兼罪等夥敷、一罪ニ付而之御手当ニ而難差置所業も候半ハ、右ハ臨時御裁判御座候通ニ被相極方にては如何可有御座哉、是迄之通ニ而ハ科御詮議等之節は、本人々々より差出候究調子手形、其外用捨書付ニ御詮議之御見合とも為可相成、前方同罪ニ御手当被仰付候類例取調書拔手形等一同御詮議之席持出候御規則ニ而、右類例取調之儀、案文方之一大業ニ而、為早引、以前より書拔候数部之御裁許録等有之儀候得共、一切之惡者法外相働候百出之醜狀、其科を数、三罪五罪と束而御手当御座候通ニ而ハ、元ハ盜女遊博奕之三科条ニシテも、三罪取束候得は一科条相増、二罪宛盜女遊と盜博奕と女遊博奕と取束候ハ、又三科条相増儀ニ而、凡百之罪狀、右之例ニ而取組候ハ、科条只様繁殖相成、類例取調は勿論、御詮議等ニ殊之外混雜、大手入之儀ニ候得共、重一罪ニ付而御手当有之通候ハ、何分多端之罪狀にても輕重杯相撰迄之儀ニ而、諸手数等簡易ニ相濟儀ニ付而ハ、束而御手当御座候御法律、打迫相立被置通ニ而は、右之廉々ニも妨申儀ニ相見候、乍然右御法律は所兼手広、殊ニ従来之被行来ニ付而ハ、容易ニ難被御取動も可有御座候得共、取兼手広、御法律御不束之儀杯御座候ハ、所害も手広被行来之訳ニ而、今御手を難被付候得ハ、後來は弥御手を難被下、然時は御辨法等終ニ相改候期無之通相成可申候条、得失等猶又御讃談可有御座事、

(止)

住持退院一件にみる村
—備中国児島郡藤戸寺退院一件の紹介—

齋藤 悦正

本稿では、村の一寺院の住持退院をめぐる一件を紹介し、檀家や村側の寺院に対する意識について考える一助としたい。

紹介する史料は、「安政二卯年藤戸村藤戸寺住持諦実離末寺ニ相望候条退院ニ相成、跡一等寺代判、其外同寺取向方不宜段、檀中一統不居合出入日記」と題がつけられた堅帳（26丁）で、岡山大学附属図書館所蔵日笠家文書のうちの一点である(1)。ここには、藤戸寺住持が本寺からの離脱（離末）を企てたことで退院することとなり、その後の同寺の運営や管理をめぐる本寺と檀家（村方）側との間で意向が対立し「出入」となった経緯が記されている。筆者は藤戸村名主の日笠武一郎（栄顕）で、武一郎の控として作成されたものである。村側・檀家側の意向や行動が詳細に記されている。表紙に「極内密書」とされている通り、寺社方など領主側には公言できない檀方・村方の意識と内々での村側での思惑等が記録されている。

舞台となる藤戸村は、備中国児島郡に属する（現、岡山県倉敷市藤戸町藤戸）。児島湾の最西奥に位置し、藤戸合戦の古戦場跡があることでも知られる。近世では岡山藩家老天城池田氏の給地となり、村高は446石余であった。史料の旧蔵者である日笠家は、藤戸村の名主を代々務めた家で、文化3年（1806）以降は大庄屋も勤めるようになり、安政2年時の日笠家当主武一郎も後年大庄屋を務めている(2)。

藤戸寺は、藤戸村にある真言宗御室派（本山京都仁和寺）の寺院で、山号を補陀洛山と称し、院号を千手院という。藤戸合戦の死者を祀る寺としても著名な寺である。天正期に宇喜多家家臣による兵火で堂宇は焼亡したが、のち岡山に入部した池田忠雄が同寺を保護し、寛永8年（1631）に堂舎を再建、寺領4石余が与えられた。翌年にはさらに25石が加えられた。こののち岡山に入部した池田光政も高29石余を寄進して安堵し、以後明治維新まで同寺は保護を受けた。同寺内には塔頭子院が12坊あり、末寺12院も有していた(3)。檀家は藤戸村とその周辺に260軒を持っていた(4)。安政期の住持は14世諦実（法印宥心）で、嘉永5年（1852）に転入、安政2年11月当一件で藤戸寺を退院し、1879（明治12）年に75歳で没している(5)。

藤戸寺の本寺は、京都御室仁和寺末の児島郡曾原村（現、倉敷市曾原）の^{いっとうじ}一等寺（法輪山清浄院）である。一等寺の末寺は、藤戸寺を含め12か寺（天城村遍照寺、粒江村西明院、浦田村蓮華院、福田村般若寺、広江村持明院、福江村宝寿院、尾原村慈眼院、木見村住心院ほか）あった(6)。

藤戸寺と本寺一等寺との本末関係をめぐる確執は、今回提示する安政期以前にも認められた。古くは万治元年（1658）の一件が知られている。「池田光政日記」には、「小嶋有南院・藤戸寺本末ノ申分」として記されている。藤戸寺と有南院（のち一等寺と改称）の本末関係をめぐる紛争があり、藤戸寺が本寺からの離脱を岡山藩に主張していることがうかがわれる。この一件では、本山御室仁和寺へ岡山藩の家老が出張し確認の上、「古ハ藤戸ハ一山一寺ノ事うたかい無之候へ共、六七代此かたハ有南院末寺ニ候事せうこ共出候故」とし、藤戸寺の由緒は認めたものの、離末は認めず従来通り有南院の末寺と命じた(7)。

その後宝暦3年(1753)頃にも、同様の動きがみられた。10世住持義雄^{ぎおう}の時代で、義雄は万治期と同様に一等寺の末寺から脱して、本山京都仁和寺の直末寺になることを求め藩や仁和寺に働きかけた。しかしこれも同9年一等寺が藩へ訴えたこともあり藤戸寺の離末は認められない旨裁定が下されている(8)。なお一等寺末寺は、天保期に藤戸寺以外の末寺を含めて反本寺を標榜する一件を起こしている。一等寺住持が没したのを機に末寺が分裂し、藤戸寺など8か寺は一等寺に不信感を示して結束することを確認しあったという(9)。

このような経緯の中で、安政2年(1855)住持諦実も一等寺からの離末をもとめる運動を行った。万治期以来離末を求めている理由には、藤戸寺が古来から独立した大寺院で由緒も古く、岡山藩主池田家の保護も受けていた点があったと考えられる。しかし、この一件のために、諦実^{ていじつ}は藤戸寺を退院することになった。

当「出入日記」は、10月4日に寺社方役人が藤戸寺に出張し諦実の退院が命じられる場面から始まる。藤戸村名主武一郎と大三郎、五人組頭幸十郎が同寺に出頭したが、すでに退院を申し渡された後であったため、その場に居合わせていた一等寺末寺の尾原村慈眼院・天城村遍照院に事情を聞いた。この時一等寺は病気のために立ち会っておらず、慈眼院は一等寺の代理として、遍照院は結衆惣代として同席していた。こののち、突然の報に接した檀中の者が藤戸寺に集会し、「如何之訳ニ而退院ニ相成候哉」と当惑しつつ、檀方は住持退院が「身持不宜と申義も無之」く「氣之毒千万、且家中不請」という意思を表明している。退院までの一連の経緯について、檀家は本寺一等寺からも話をうけておらず、同寺の小僧の処遇や諸道具等の管理についても、慈眼院・遍照院両寺が代行して諸道具を封印し、本寺へ持ち帰っている。本寺の預かったものの中には、藤戸寺の有していた「御国印」も含まれていた。この印は同寺にとって重要なものであった。藤戸寺で先住退院の際には、この印は隠居に預けられたことで済んでいたものが、今回は隠居でなく一等寺が預かることになり、これを檀家は「先例ニ違」うものとして主張した。さらに檀家側によれば、本寺は「御国印」を預かる一方で、本尊については預かるどころか参詣も行わずにそのままとしており、「出家之道」に違うものと主張、本寺への不信感を抱くことになった。

また一等寺は、諦実退院の注進書と代判願を寺社奉行寺沢藤左衛門へ提出する際、この注進書に諦実が自ら退院を望んだと記しており、藩の寺社方出役が退院を命じたという檀方の認識と食い違う報告内容になっていた。檀家側が慈眼院を通じて一等寺に尋ねた所、同寺は注進書の記述に手違いはないと強く主張したため、この注進書へ奥書をすることを躊躇し、大庄屋まで問い合わせながら対応を検討している。これらのことで、檀家や村方は、本寺の対処に反発の意を示すようになった。

このため檀家一同は村役人に対し、一等寺が藤戸寺の代判を行うことについて「一同不勝手」であることを表明し、①一等寺の末寺の一つである植松村大慈院に代判を頼みたい、②小僧を藤戸寺に戻したい、③「御国印」を早々に一等寺から藤戸寺に戻して欲しい、との三か条からなる願書を提出し、願いが聞き届けられなければ「一等寺代判不同心」とも主張し、最終的には大庄屋に提出されている。諦実は、安政4年(1857)美作観音寺へ転住し(10)、かわって後住には、備中生坂村の東雲院住職が入って落着いた。

檀家・村方は、決着までの間に藩の寺社奉行や郡奉行、または一等寺や藤戸寺以外の他の末寺などと交渉や折衝を繰り返し行っており、これら一連の対応と主張のなかからは、檀家や村側における、寺院やその財産・管理などに関する意識をうかがうことができると

思われる。また末寺離脱の運動を以前の事例とあわせて検討することも可能と考えられるが、具体的な分析は、今後を期したい。

【注】

- (1) 岡山大学附属図書館、請求番号3943。
- (2) 『岡山大学所蔵 近世庶民史料目録』第1巻（岡山大学附属図書館、1973年）。
- (3) 「藤戸寺志」（『倉敷市史』第2冊、p.593、名著出版、1973年所収）。
- (4) 『倉敷市史』第5巻、p.502。但し明治5年（1872）の書上による。
- (5) 同上。
- (6) 寛政3年「備前国古義真言宗本末帳」（『江戸幕府寺院本末帳集成』上巻、p.1204、雄山閣、1981年）。
- (7) 『池田光政日記』p.436（国書刊行会、1983年）、万治元年閏極月11日条。『新修倉敷市史』p.688（山陽新聞社、2003年）。
- (8) 『新修倉敷市史』p.688。
- (9) 同上。
- (10) 前掲「藤戸寺志」（『倉敷市史』第2冊、p.626）。

【翻刻凡例】

史料中の改行は「」で、改頁は「』」で示した。

判読不能の文字は「□」で示した。

欠字は一字あけ、平出は二字あけとした。

ミセケチは、—— で抹消を示し、新たに記された文字は行の傍（上部）に注記した。

【翻刻】

（表紙）

「 安政二卯年 極内密書
藤戸村藤戸寺住持諦実離末寺ニ
相望候条退院ニ相成、跡一等寺代判、其外
同寺取向方不宜段、檀中一統不居合出入日記
名主
武一郎控 」

一十月四日晚、寺社御役人藤戸寺へ御出張ニ而、法印義退院被 仰渡候間、早々同寺へ
罷出候様、武一郎・幸十郎当書状大三郎より差越、罷出候所、退院ニ相成候」跡江参、
尾原村慈眼院・天城村遍照院相見へ被申ニ付、様子相尋候所、左之通
一此度退院之始末者如何之義ニ候哉と相尋候处、一等寺当病ニ付、院代慈眼院」・結衆惣
代遍照院両僧共、寺社御出役木崎浅次郎殿藤戸村江出張、御趣意」被 仰渡有之候間、
立会候様一等寺より申聞候ニ付罷越、御出役立会藤戸寺」法印御呼出し、其方義御模様
も有之御趣意ヲ以退院被仰付候間、」退院見届可申旨被申渡候所、如何之子細ニ而退院
被 仰付候哉、ケ条」御取調之上不束御座候ハ、退院ニも可相成義与奉存候段、藤戸
寺より」御出役江申上候处、子細之義者存不申、御趣意ヲ以退院被 仰付之義、御趣意」

ヲ聞入不申哉と御申渡有之、恐入候と申上候所、支度いたし早々立退キ」候様被申、居間迄引取、早々立退キ候様、院代慈眼院より申聞早速立退キ、」寺内門前限り御出役御見届、直ニ天城村へ御越常太郎方宿家一等寺より相頼、」同人方へ御泊りニ相成被申段、両院より武一郎・大三郎・幸十郎共へ御移り被成候

一法印義、御趣意ヲ以此度之有様ニ退院被 仰付候ハ、小僧義当分本寺敷」又ハ法縁内江罷出被申様印下よれり申聞候間、蓮花院江参居り可申、」并諸道具等もヰリ所へ入置、村役人立会封印いたし置候ハ、明五日印下」出府、御奉行所ニ而談事相伺帰村、其上且中へ何角可申談、衣類・道具」等相改引分可申間、其節迄ハ何事も見合可被申、併当人斗り寺番付置」呉候様印下より右夫々申聞候間、可申移段印代より申聞候、小僧も何れ」当分之事故、立会候節二者罷帰候様相成可申と被申、諸道具ヰリ所へ」入、印代并結衆惣代より封印いたし申候、

一御国印之義者、印下より差図無之候得共、退院ニ相成候ハ、本寺預り之」当り如何取計候哉と談示有之、慈嶺坊退院之節ハ隠居預り候へ共、」此度之様成退院ニ而者、何れ江預り置候道理と申義、村役人共存」不申ニ付、隠居之内談いたし候処、隠居身分ニ而ハ差図難相成、本寺預り」之当り印代考ニ相任せ候様申ニ付、如何様とも御考ニ取計呉候様返答』いたし候処、先方両僧封印ニ而本寺へ持帰り申候」

一旦中法事又ハ差当り候義ハ、代判相極り候迄ハ本寺より相勤可申、尚又近々」可申談と印代より申聞候

一寺番同寺下人外ニ村方十兵衛・市蔵申付置、何れも帰宅いたし申候

一同八日夜九ツ時頃、判頭中相見へ且中之者共藤戸寺江一同寄合、寺内」之義ニ付相尋義有之、無程役場へ罷出可申様申出候由届来、早速」村役人・判頭同道寺内へ罷越且中之者呼寄承札候処、当寺法印」退院ニ相成氣之毒千万、且家中不請又ハ身持不宜と申義も無之、如何之訳ニ而退院ニ相成候哉、当時差当り候義者一等寺より相勤候由、」代判之義且中考も有之、早々取極り不申而者一同心配いたし可申、其外」相尋申度義も有之、一等寺へ一同罷出可申哉、又ハ御取次可被下哉と」申出候ニ付、同寺へ可申遣、併大勢寄集り候義ハ御法相も早々引取」可申様申聞候所、此度者本尊見舞として参詣、旦那寺之義故寺内」大切と存、且中一同罷出被申義一等寺江夫々相尋、事実相分り次第」罷帰り可申旨申出候得共、最寄へ」者共頼合ニ而惣方引取候様厳敷」申聞候所、罷帰り可申段申出候

一隠居へ参り様子尋度段申出判頭兩人差添遣し、此間度々一等寺」小僧相見、何用ニ候哉、寺へハ不参咄合之義承り度旨隠居へ相尋候処、」咄と申ハ一等寺より代判相勤候様被仰付候、隠居も寺内ニ難被居場合ニ」有之所、印下より申取候法縁も差控可申付考ニ候所、本寺へ断に罷出」相済申候、且中よりハ未タ断ニ参り不申旨相咄し申候段、申出候由一惣方申出候趣承り、一等寺江判頭猪之吉ヲ以、且中一統より御尋申度義有之、藤戸寺へ御出可被下哉、又者一同罷出可申哉と申出被申、」岡山より御帰り次第立会可申様先日御印代より被申、旁以御出可被下段」申出候処相見不申、尚又猪之吉遣し候処、九日朝代僧相見、一同より尋之義」有之様申候得共、頼合少人数ニ而相尋可然申聞、代僧よりも頼」出精々口シ拾人計之者共より代僧江相尋候条々、左之通

一御代判ハ且中考も有之、一等寺より一応ハ御談之上御取極可被下義」と存被申、如何ニ候哉、御出役ニ而退院被仰渡候跡ハ本寺より代判可致」定法ニ候間、一等寺代判ニ相成

申候、左候ハ、且中江者一応御咄しも」無之義御定法者存不申、代判之義者且中より申出ヲ以本寺より願上ニ」相成候様承り、勿論一同考も有之、代判之義ハ且中重之義ヲ隱居ヘハ」御咄し之由、且中ヘハ御談無之一同之迷惑御取計可被成考と相見ヘ、」如何之義ニ候哉と尚相尋候処、願差出し有之候ヘ共、未タ御下ケハ無之と返答」有之候処、御聞濟無之義ニ候ハ、一等寺ハ不作廻ニ候間、大慈院代判願を」申度御歎可被下旨申出候所、願書相下り不被申候ハ、歎之趣ハ可申と被申候』

一此度退院之御取計稀成事故、諸事相伺六日晚頃迄二者」岡山より罷歸り、委細且中ヘ御談有之様御印代被申、七日御歸りと」承り候ヘ共、何之御談も今日迄無之、御引付被成候義ハ難心得と申候」所、願書御下ケ無之ニ付、延引ニ相成被申段、返答有之候

一如何様之ケ条ニ而退院被 仰付候哉、是迄承り居申ニハ、退院ニも」相成候程之義ニ候ハ、本寺より前廉御内沙汰も有之様ニも粗」承り候ヘ共、此度ハ存掛なく義、別而一同氣之毒ニ存ケ条之趣承」歸院願と申度、退院之子細者、離末相望本寺ヲ差置」、御上又ハ京都御室御所江申込、御奉書御差向、御上ヲ」穴取甚心得違、天明年中御触も有之、其非ニ依而退院」被仰付候、左候ハ、法印心得違も有之事と被存候ヘハ、本寺之」御場合ヲ以、御察当有之義不得止事申立候ハ、弥以心得違ニ候、併」御察当又ハ結衆中より理解可致様被申聞候ハ、ケ様成義出来」いたし不申哉ニも存候段申候所、本寺ヲ以相手取候ニ付察当致」不申旨、返答有之候

一御国印先住退院之節者隱居預りニ候ヘ共、此度者御本寺御預り」ニ相成、先例ニ違如何ニ候哉、右様退院ニも相成候ハ、本寺預り」之当り、左候ハ、御本尊其促ニ被成置、御国印計り御預り、如何』御本尊ニ被下候義ニ候間、御本尊前ニ而大切ニ可致道理本寺之」持歸り候義とハ相心得不申、其上本寺小僧隱居屋ヘハ度々被參候ヘ共」、本尊ヘハ參詣無^元候ヘ共之出家之道ニ可有之哉と相尋候^元処ヘ共返答無之」、押而相尋候^元処、印干ニ申伝、追而返答可致との断有之

一本寺小僧度々隱居屋ヘ御出、御咄し等も有之候ヘ共、且中ハ一向」相咄し振り無之、御本尊江御參詣とも相見不申、如何之義ニ而隱居ヘ」者御出被成候哉、何角と申義無之と被申候所、且中ヘハ代判之義」御談無之、隱居計りヘ御咄し、御手盛ニ而兎角引付被成ニ而ハ一同」迷惑千万、其外ニも定而御咄し有之様被存候段、押而相尋候所、隱居」屋江參り候義者私用ニ而有之と被申、代判等之義取極御咄し有之ニ」おゐてハ、私用計りとも相心得不申、ちと吞込かたくと申候へとも」、何とも取分ケ返答無之候、

一御出役天城村名主常太郎江御泊り、宿家一等寺より御頼賄ひ等」御引請、御本寺より御賄ニ候ハ、精進もの之当りと存候ヘ共、粒江村」仲右衛門賄人ニ御遣し、體其外魚類御差出しハ御念入御取持重キ」御出役ニ候ハ、賄人御寺内より御差出し之義と歟共存候へとも、仲右衛門」風情御頼ハ御手厚キ御取持ニハちと不似合ニも相見、如何之訳と」候哉、魚類之義ハ御出役御望ニ付差出、仲右衛門ハ熟意ニ付、相頼候段』返答有之所、持重キ御出役馳走ヲ好候義并寺社掛ニも無之岡山」上之町菊屋と申者も御役人同様御取持^元被成、是等之義とんと」難吞込、与得相尋可申段、押而相尋候ヘ共返答差支、印干ニ」申伝、追而返答可致段被申候

右ケ条申立相尋候^元処、即答無之義者近日返答可致由ニ付、且中」之者共引取、代僧も罷

帰り申候

- 一粒江村仲右衛門義、御出役賄人ニ罷出候由ニ付、様子相尋候ハ、退院ニ相成」候子細相分り可申と存、同人呼寄相尋被申内、度毎相違いたし、法印ニハ弓ヲ引筋杯と申出、左ハ、其方よりも退院ニ相成候様取組候哉」と申辯候処、一言之返答も無之、不審ニ被存候ニ付、判親金十郎へ掛合」候へ共、同人も判親とハ乍申、別宅ニ居申者連帰りがたく、当寺へ差置呉候様」申出候間、粒江村へ御掛合立会之上、御取調被下候ハ、事実相分り可申と存」被申段、且中之者申出候ニ付、粒江村役人共へ掛合候処、名主不快ニ付、五人組頭」熊太郎・判頭彦右衛門相見、名主兩人不快ニ候間、全快次第取調返答可」致段申出ニ付、且中者共へ其段申聞、仲右衛門召連、熊太郎・彦右衛門罷帰り申候
- 一九日夕五ツ時頃帰宅いたし候所、藤戸村退院御注進書并代判願とも」一等寺より晩方ニ差越し候由ニ付、披見致候処、御出役より退院被申付候とハ」喰違、自心より覚悟いたし退院之御注進面ニ而、相違有之ニ付、早速』大三郎方江罷出、相談いたし候処、同人も案外此注進面ニ奥書いたし、」差出しニ而者手違、殊ニ且中一同者難念差含居申場合ニ手違之」取計致候而者役所不束出来難計、大庄屋へ内々申出差図ニ任せ」可申義と存、翌十日朝村役人三人同道ニ而大庄屋出張先古新田へ差出」申談候処、大庄屋奥印も難相成、□代ニ相見へ候、慈眼院江参り様子」承り、若相分り不申候ハ、同院より一等寺へ尋□ひ可申様差図」有之、直ニ罷出手違之始末相尋候処、何様も存不申、明朝一等寺へ」罷越委細相尋返答可致との義ニ付、同夕七ツ時頃罷帰り、」翌十一日昼慈眼院相見一等寺へ罷出相尋候処、注進面手違」之義ハ無之、察当と申事ハ藤戸寺心得違之段ヲ御上江察当致し」候処、御出役有之、退院被仰付、御奉行所ニ而も御加筆有之候義ニて」手違者無之と印下申候へ共、拙僧ニおゐても注進面喰違候様」相見、押而相尋候へ共、手違無之、此旨村役人江及返答承知可」致哉、又ハ御郡方へ差出しかたく様申出候ハ、寺社御奉行所へ相伺可申」との事ニ有之旨慈眼院申来候へ共、注進面手違と相見、御上江」察当と申事も難吞込ニ付、大庄屋へ申出、差図之上返答可致段申置、」直ニ大庄屋出張先古新田へ罷出、右様子相咄し候処、御同所も村役人同様」考振無之段被申、然ル所寺社御奉行所より御廻しニ相成候注進書預り、』其促ニいたし置候而も心ならず、素り手違ニ相成、且中ニも難念差含」居申間、取計方之義一応御伺被下候様申候処、吟味引取次第出府可」致、代判之義ハ且中へ申移し、不承知申出候と者納得いたし候様理解」可申聞との義ニ付、判頭一組より兩人ツ、召連、武一郎宅江明十二日」四ツ時寄合触知せ呉候様幸十郎江申談、同人帰村、武一郎・大三郎」兩人ハ同前ニ止宿
- 一御注進文面ニ而ハ、喰違無之様ニも大庄屋共も相見へ不申、此節」吟味中ニ候間、与得相考可申様申聞候間、御返答今少し延引ニ相成」可申旨、十二日朝幸十郎ヲ以慈眼院迄申遣し置候
- 一九日夕帰宅いたし候処、一等寺より差越し居申注進面并代判願」左之通

御注進

- 一拙寺末寺児島郡藤戸村藤戸寺諦実義、先達而新規非法」之義相目論見、且又同寺隠居(悟)へも常々取向ケ不宜、甚心得違之段」察当仕候処、自心も不始末之段覚悟仕候哉、一昨四日晚退院仕候、」左候得ハ藤戸寺寺内御帳面御除可被下候、右之趣御注進」申上候、以上

安政二年卯十月六日

寺沢藤左衛門殿

右之趣申達承届候、以上

児島郡曾原村
一等寺判 』

寺沢藤左衛門御判

福田甚左衛門殿

外ニ当なし壹枚、一等寺注進
文言御断、御郡方へ差出し可申分

奉願上

一拙寺末寺児島郡藤戸村藤戸寺諦実義、退院仕候ニ付、御公用・」且用共代判拙僧相勤
申度相願候、右願上之通被 仰付可被下候、以上

安政二年卯十月六日

児島郡曾原村
一等寺〇

寺沢藤左衛門殿

右之趣承届、願之通申渡候、以上

福田甚左衛門殿

寺沢藤左衛門〇

外ニ右同断、壹枚

一十二日朝婦村判頭より承り候处、旦那寺之事ニ候ハ、惣代ニ而ハ罷出不申、且中」一同罷出可申様申よしニ而、寺内江寄合候趣ニ付、何れも同道藤戸寺へ」罷出、惣方呼寄代判一等寺江被仰付、尤九日晚同寺より申来候へ共」、一同不作廻之趣申出居申ニ付、大庄屋手前へ申談、彼是延引ニ相成」候義ニ有之、御聞濟ニ相成被申義ニ候間、一同承知いたし可申様申聞」候所、且中へ談示合も無之、手盛之被成方勿論不作廻ニ有之間相断」可申段申出、併一等寺へハあたり不申、御上様へあたり可申間、承知」可致外無之、大庄屋よりも差図有之、得与考弁いたし様種々理解申談」候へ共、当村方不承知ニ候間大慈院へ代判被 仰付候様、大庄屋殿へ願立』可被下、併外村々ニも旦那家有之間、一応談ニおよひ可申、且門中江」一等寺より廻状ニハ、ケ条有之趣御注進面手違ニ相成候哉ニも風聞承り、」勿論門中廻状之趣ヲ以相考候ハ、願面手違も有之哉ニ被存、御郡方へ」御廻シニ相成り候様承り居申、相廻り候ハ、本紙御読聞御見せ可被下、」代判之義相断可申上者、一等寺より本尊勤之義も此一条相済候」迄ハ相断可申、此段御取次ヲ以大庄屋へ願立呉候様申出、種々」理解申聞候へ共口而申出、村役人ヲ相手取候様申ニ付、左候ハ、取次」可申、乍去御法相も有之間、早々引取候様申聞候处、何れも引取」申候一去ル四日御出張被成候寺社御役人天城村へ御出之由、御郡方手先も聞合ニ」参り居申趣承候ニ付、判頭石五郎ヲ以代判断出之義并申出之始末、」役頭へ口達ニ而申遣し候

十二日

一同夕惣方引取候ニ付帰宅いたし居申所、寺社御用手之者兩人相見、御役人」木崎浅次郎より寺之義ニ付相尋申度、天城村用場ニ止宿致被申間、」乍御苦労同所迄村役人罷出呉候

コハシ

様申来、大三郎・幸十郎江申遣し、同道」ニ而罷出候所、且中之者寄合彼是申 被
申由様子承度と被申候ニ付、先日」已来之手續荒々申上候所、大慈院代判ニ相成藤戸寺小僧罷帰り」候ハ、外ニ申分無之哉と被相尋候へ共、惣方より取極候義ハ不申出、私手前へハ』ケ条申上居申間、様子相分り不申、何と取極御返答難申上と申上候处、」尤之

事ニ有之と被申、併先日出張退院御趣意、申渡と注進面とハ手違ニ」相見、此度ハ一向存不申、御奉行所ニ而ハ如何之考か難相分り様被申候、且」只今御尋者正面ニ而私共御呼寄ニ候哉、又ハ御内分ニ候哉と相尋候所、正面ニ」有之と被申、左候ハ、御郡方支配ニ候間、御沙汰不申上而ハ正面之手続」難申上旨申上候处、尤之事ニ有之間、内分ニ承り村役人名目出し」不申、差心得と可致段被申候ニ付、罷歸り申候

一十三日朝大三郎・幸十郎兩人八軒屋役頭へ罷出、十二日旦中之者申出之」始末并寺社方御役人御尋之趣申参り候所、明十四日出府御兩頭様へ相伺」可申間、村役人兩人計り出府いたし可申様被申候由、幸十郎より申来候

一十四日朝四ツ時出立、八ツ時頃着府暮前大塚氏御着府ニ付罷出候所、」明十五日早朝同道福田様へ罷出相伺候様被申、武一郎・幸十郎同道」福嶋屋へ罷歸り、止宿

一十五日早朝福田屋へ参り、役頭同道三人御郡奉行福田甚左衛門様罷出、」退院始末并注進面手違之趣役頭より伺有之所、寺社奉行寺沢藤左衛門へ」当り合可致との御事、直ニ御郡目附瀧川覺左衛門様へ罷出、右始末」同様伺之处、如何之取計ニて喰違候哉、併旦中之者彼是騒立候而者」御締ニ相抱可申、実意ニ当り合候ハ、事物相分り可申との御事、」同晚役頭宿へ参り候所出違ニ付、福田様江罷出畠中氏ニ様子」承り候へとも、未タ御歸り無之、御尋合居申候处、夜四ツ頃御帰宅、寺沢藤左衛門義」留主中ニ付逢不申、明十六日御郡奉行寄合済、寺沢へ罷出可申との」御事ニ付、旅宿へ罷歸り申候

一十六日役頭宿へ参り、明十五日寺沢御留主中之由、今日御当り合」可被成由申伝置、晚方役頭宿へ参り候へ共出違ニ付、暮過頃」武一郎・幸十郎同道畠中へ罷出相伺候处、旦那義寺沢へ罷出当り」合候处、藤戸寺義退院可申付義ニ候へとも、左程之ケ条も無之、」離末重之事故、自分退院いたし候ハ、衣類等も引分ケ遣し候様」可相成ニ付、自分退院取計、同心役浅次郎共へ御趣意之趣」可申付者ニ無之、御趣意申付候様相成候ハ、呼出し退院可申付、」口憐愍ヲ以取計候義、木崎浅次郎より申渡方行届不申、其外」之者も聞取方行届不申義と被存、右退院之始末御用考へも」申達取計候義ニ有之間、手違之義者無之段、寺沢より返答」有之間、承知可致外無之様旦那より被申候、尤只今大塚へも」旦那より咄し合有之との義畠中より承り、旅宿へ罷歸り居申处へ、」明朝役頭宿へ罷出候様、同前より人差越し申候

一十七日朝武一郎・幸十郎同道、役頭宿福田屋へ罷出様子承候处、福田様より」寺沢様へ御当り合被成候所、退院可申付程之義ニも無之、自心」より立退き候様可致、若立退き不申上候ハ、御趣意ヲ以退院被」仰付候様相成可申、左候而者諦実不為ニも相成候間、早々立退」可然段、同心木崎浅次郎より申聞候様申付差向候義ニ有之所、同人」より申付方行届不申義ニ有之候へ共、矢張注進面ニ者」引合可申間、手違者無之、勿論其段御用老江も申達置候、」代判之義者本寺行届兼候義も有之哉、退院後ハ本寺」代判之当リニ有之段、寺沢より返答いたし候間、注進面」代判願旦中江相見せ事訳ケ能申聞、奥書いたし差出し」可申、且中之者彼是申立ニ而者惣旦中不為ニも可相成間、」理解申聞納得可致様可取計段、福田様より被 仰聞候、」尤代判等一応承知いたし候ハ、一等寺代判同寺より相断、」旦中申出之寺院代判ニ相成候様、同寺より取計可申様、」大庄屋より為談可申との事ニ付、左候ハ、御出張之上旦中」之者共へ御理解被下候様相頼候处、村役人中より与得申添へく」段、八軒屋役頭より被申付候、大雨ニ付逗留、八ツ時頃山口村名主」平左衛門ヲ以御召ニ付、 丹羽廣人様江参上仕候处、御目見へ御盃」御馳走頂戴、

御奥様御盃頂戴、御表并御内所通り御免被 仰付候』

一十八日朝鯛壺枚・みかん百 丹羽様御表御内所江献上済、直ニ」幸十郎同道帰村、寺沢様へ御当り合之始末、幸十郎ヲ以大三郎へ」申聞置候、十九日朝旦中之者組々ニ而両三人ツ、幸十郎方江」寄合、右一件申聞度段、保頭ヲ以最寄へ江申触置候

一十九日朝私宅へ大三郎相見、出府中之手続相咄し、幸十郎方へ判頭」石五郎・清吉、旦中頼合臨時惣代久吉・市之丞・松次郎・茂平・」左之吉・庄左衛門・柚蔵・良介・善次郎・十兵衛・市蔵・勘介立会之上、」右注進面手違ニ相見、殊ニ旦中より申出之ケ条有之ニ付、夫々」当り合候所、村役人・大庄屋考ニ而ハ難取計、無拋福田様江」相伺候処、寺沢様へ御出御当り合ニ相成、付而ハ旦中之者へ理解」申論候様との事、夫々手続申聞、代判承知可致外」無之、勿論右様御当り合相済候上者村役人奥書可致候間、」惣旦中も承知いたし候様申聞候処、惣方罷出不被申候間、惣」旦中へ御理解并御手続之趣、一々申聞候上御返答可致段」申出候、左候ハ、無申迄、旦中寄合候とも騒敷いたし間敷」様厚申付候処、承知之段申出候、惣方引取申候

一廿五日九ツ時頃判頭石五郎・猪之吉・真吉私宅へ相見へ、旦中之もの」寺内江寄合十九日御談之趣、惣方申聞候所、代判願ハ旦中より申出、』一等寺代判ニ相成候文言有之哉相尋呉候様判頭手前へ申出」候付、罷出候義ニ有之と尋出候間、代判願文言ハ諦実義退院」仕候ニ付、御公用・旦用共代判拙僧相勤申度奉願候、右願上之通被」仰付可被下候と申、一等寺より願面ニ寺沢様御聞届之御奥書有之、」旦中より申出ノ文意者無之、彼是難念差含候義者不宜、代判」承知いたし不申而ハ御上様江相済不申、一等寺へ少しもあたり」候義者無之、承知いたし候様得与理解申聞、早々惣方引取候様」取計可申段申付置、尚又同夕七ツ時頃判頭右三人相見、」惣方へ夫々申聞候へ共聞入不申、判頭中用向無之間帰宅いたし」候様申出、惣方之者共者引取不申心配之趣申出、左候ハ、拙者」寺内へ罷出可申、大三郎・幸十郎も罷出候様、直ニ判頭ヲ以申遣し居申」折柄、保頭千嘉四郎より申出候而ハ、旦中之者不殘銘々宅へ引取」候段申出、勿論判頭共よりも最早出勤ニ不及申旨申出候、

一廿三日役頭先頃出府、御役口ニ相成候挨拶并廿一日夕始末其後」何之様子も不申出、尤風聞ニハ役人中へ返答ハ当時打捨置候」様申居り候趣、夫々相届相談いたし候所、寺社より御廻りニ相成」居申願面・注進面ニ奥書いたし、早々差出し候様との事ニ付、」罷帰り候処、義兵衛相見へ居申ニ付、右之次第大三郎へ相伝へ呉候様』頼置、勿論右之次第故旦中之者へ申聞、承知致せ候上奥書」可然と存、判頭一組より両三人ツ、罷出候様申触候

一同夕村役人、三人判頭猪之吉・真吉・清吉、組之目付惣代久吉・」柚蔵・庄左衛門・佐之吉・十兵衛・市蔵・勘介・立会代判之義承知いたし」候様先日申付置候へ共、何等之返答無之、風聞ニハ旦中之者申合せ、」一同歟ニ他所へ罷出候哉も承り、左様義無之とハ存候へ共風沙汰」有之、心得違之義出来いたし候ハ、惣方迷惑ニ可相成、如何心得候哉と」相尋候処、一同申合歟筋杯と申、他所へ罷出候義ハ曾而無之、他村ニ而ハ」種々評いたし候趣ニハ候へ共、村方ニ而ハ左様之心得少しも無御座、」代判之義ハ一等寺取向実意ニ無之故、如何被 仰聞ニ而も承知」難致様一同申居り候、尤同寺院家相見へ一々実意ニ相咄し聞せ、」旦中之者共能く腹ニ入事実相分り候ハ、旦中より同寺代判ニ」相頼可申、又者代判大慈院小僧智真坊寺内へ罷帰り、」御奥印も相戻し可申間、一応者一等寺

代判承知いたし候様」取極被申候義ニ候ハ、承知可致、さも難相成候ハ、代判不承知、」村役人ハ兎角も、且中之者共者別ニ考付可申、代判不相極内、」若病死人有之候ハ、惣且中寄合評議之上、取計可申様相成」候ハ、御役口出来難計旨申出候ニ付、左様成義者惣方』甚心得違、取葬之義者公儀よりも御法令有之、彼は難念」差含候処より色々成義考付、是等全ク考違之事ニ候、一等寺」代判承知いたし候上、不作廻も有之候ハ、外寺院江代判相成候様」御取向被下度と実意ニ相歎可申口、御止ヲ相手取候様成義」申立候而ハ、却而不為ニ可相成、種々理解申聞候へ共惣方不承知ニ被申」義故、只今納得難致、代判願・注進面御奥書之義今少し相見せ呉」候様申出候ニ付、役頭へ大三郎罷出相伺呉候様申談置候

一廿四日夕幸十郎宅へ罷出居申処、大三郎相見、今日八軒屋役頭へ罷出相伺候所、代」判不承知申出候杯と申義、惣方心得違、御寺社御聞濟候所手違有之ニ付、御郡方」より御当り合之上、手違之義相分り候間、奥書いたし早々差出し」候様御差図有之義ヲ、彼は故障申立候而ハ惣方不為御上ヲ相手」取候義、左候ハ、御差当被仰付候口一等寺代判不承知之所、御上江対し」一応承知いたし候ハ、大庄屋同寺へ罷出不請ニ候へ共、一応承知いたし」候間、不請之且中当寺より代判有之候而ハ不宜用多となり共いたし代判相断」大慈院へ被仰付候様願差出し可然段、及談示可申心得且中」不承知申立候間、断候様一等寺へ申参り候ハ、先方ニハ御上より被」仰付候義故、拙僧ニおゐてハ考振無之と申候而ハ矢張且中不勝手」ニ相成、且正面ハ公辺江何と御断申様無之次第一応承知之上」一等寺へ談合理不尽申募候ハ、其趣御郡方へ申達候ハ、御差図も』有之義と存候間、何分早々奥書調印之上差出し候様、役頭より」被申候段相咄し、左候ハ、且中之者へ申聞候上ならてハ、事前ハ」奥書当時見合呉候様申出居申義ヲ、不沙汰ニ奥書取計、此後」相尋候時村役人申訳ケ無之間、惣代ニ而呼出可申聞当り」と申候処、大三郎・幸十郎同意ニ付、一組より四五人ツ、明早朝幸十郎」方へ罷出候様、保頭ヲ以申触置候

一廿五日朝村役人三人判頭石五郎・清吉組々四五人ツ、名差遣し候処、」千蔵・梶之介子与三郎・市之丞・久吉・幸右衛門・勘吉・庄左衛門・石之介・柳蔵・」亀蔵・熊次郎右拾壹人幸十郎宅へ立会、廿三日夕代判承知可」致様申聞候へ共、断之品申出、其段役頭へ相伺候所、代判承知之外」無之、彼是不当申立候而ハ惣方不為、勿論御上より御差図有之義ヲ不承知」申立候而ハ、御上ヲ相手取村役人よりも理解手薄く、早々願面」差出し候様被申聞候へ共、一旦断之品申出被申義不沙汰ニ取計候而ハ、」尚又難念差含可申と改候間一応申聞候、承知不承知ニ不抱調印」之上差出候様被申候義、殊ニ奥書いたし、早々差出し可申様御差図」之義故、御趣意ヲ相背候而ハ、銘々村役人且中之者迄御上様ヲ」相手取之道理ニ有之間、奥書之上差出し可申、此段聞置候様」申聞候所、只今罷出居申人数丈承候而者、何と申方無之、惣方へ』申伝候様被仰付候へ共、左候而者惣代ニも相当り迷惑仕候間、今一応」村方不殘御寄合、御考之趣御申聞被成候上ニ而、兎も角も御取計」可被下段、違之申出ニ付、無拠尚又幸十郎宅へ只今罷出候様、」保頭ヲ以申触候

一同日昼幸十郎宅へ且中寄合申触候所、町谷之者一同寺内江寄合、一等寺」代判承知いたし候様村役人より尚又理解有之義候間、不承知申立置、」直ニ出訴可致様子承り、八軒屋大庄屋早々出張御理解被申候様、」判頭石五郎ヲ以申遣し候処、出張いたし候ハ、御噂申上候上ならでハ」出張難致、出張之上取調候ハ、正面ニ可相成もの事ニ而出勤無之、」村方寄合申触候へ共、役宅江者参り不申、藤戸寺へ一同寄合被申」由ニ付、同夕同寺へ

村役人判頭同道罷出、代判承知いたし、奥書之上」早々差出し候様御差図有之趣ヲ以、夫々理解申聞候へ共、一等寺より」手違之取計いたし候段申立聞入不申、尚種々及理解候所、代判願・」注進面等御差出し候義、今少し御猶予、代判一等寺之義ニ候ハ、同寺法印へ」面会いたし、且中難念筋一々相尋事実相分得心いたし候ハ、」且中よりも代判相頼申度尋之始末返答差支候義ハ無之と存申候、若返答口之品ニより事実相分り不申候ハ、代判不居合」難計、何様法印江直面ならてハ何事も相分かたく、明朝面会相成』候様大庄屋殿へ御達し、一等寺法印藤戸寺へ御出難被成候ハ、一等寺へ」惣方罷出可申段申出候へ共、如何相成候義とも相知不申ニ付、尚又理解」申聞、代判一応承知之上、双方難之義者別ニ相歎候様折返し」逸々理解申聞候所、一等寺代判不勝手ニ有之候得ども、」御上様へ対し一応承知仕可申、併早速大慈院代判ニ被 仰付、」小僧早々罷帰り御国印御返しニ相成候様奉歎願候、右三ヶ条」相叶不申候ハ、一等寺代判不勝手ニ御座候間、相断可申、此段」書付ヲ以申上候間、御取次御上様江御差出し、尚宜歎願呉」候様申出、一等寺代判一応承知之上、歎筋と申義ハ随分相聞」候得共、願相叶不申時者、同寺代判相断可申旨、容易ならざる」義如何相心得候哉と押而申聞候処、其義相除候様被 仰聞候ハ、」代判不承知申立候外無之と申出、左候ハ、右願之趣大庄屋へ」申達、注進面・代判願奥書いたし差出可申旨申聞候所、檀中」より差出し可申願書相添差出し呉候様申出、併なから此上」如何相成候事か相分不申候へ共、達而申出ニ候間、大庄屋へ可申達候」、出訴杯と申義者御法相も有之、ケ様成企而決而相成不申、」与得相心得早々銘々宅へ引取候様申聞、何れも承知致し」早速引取候ニ付、村役人判頭罷帰り申候、惣方引取候段、請取ヲ以役頭江申遣し候』

一廿六日茂一郎・大三郎同道、八軒屋江罷出掛、粒江村ニ而役頭ニ逢ひ、」前夕之始末夫々申達候処、惣方申出之趣承知いたし候、御目附様」御廻村済、明日一等寺江罷出、同寺代判相断大慈院代判ニ相成、」小僧罷帰り御国印差返し候様及談示、若不納得申立候ハ、」及御噂相伺可申との返答有之候

奉願上

一藤戸村藤戸寺代判曾原村一等寺ニ被 仰付候段、檀家」一同不勝手ニ御座候へ共、御上様江恐入奉畏候

一当月九日ニ申出置候趣、植松村大慈院代判奉願上并小僧」御戻し被下度

一御国印早速御戻し被下候様奉願上候

右願之通り被 仰付候ハ、難有奉存候、

猶、願之通り相叶不申候得者、一等寺代判不同心ニ御座候、此段御歎奉申上候、右之通奉願上候、乍恐御取次ヲ以御指出し可被下候、以上

卯十月

檀家之者共

村役人中様

但、右願十月廿七日且中之者より差出し候ニ付、一等寺より差越し候注進面・代判』願面通ニ幸十郎書筆ニ而奥書いたし、調印之上、右檀中より出し候、願面相添、都合五通幸十郎ヲ以八軒屋大庄屋へ差出し置申候

(赴)

一十一月朔日尾原村慈眼院相見、前藤戸村諦実我物相渡し不申而ハ」寒ニ趣難渋と察、一等寺へ度々罷出、及談候へとも、渡し方兎角故障」有之折柄、大庄屋大吉同寺へ参り、

寺沢様へ福田様より御当り之節、」自分退院取計候義者我物等引分け遣し候様可相成もの義、大庄屋より」一等寺へ相咄し候ニ付、最早彼是故障可申候様も無之处ヲ以、口り込」候所引渡し取計可然、併村役人且中之者より渡與候様頼出不申、」村役人より断申出候ハ、相渡し候様一等寺より申聞候間、一応同寺へ被申出」候様申被參候へとも、諸道具改之節者檀中一同寄合候様兼々」申出被申、我物丈ニ而も又候大勢寄合、若龜言等申掛候而者」貴院へ改之品無之、且村役人ニ而も心配いたし可申、如何ニ候哉と申談候処、」尤之義ニ有之、先当分見合我物丈相渡し候而可然、都合も有之候ハ、」書状ニ而も申越し候様申聞、歸られ申候

一九日大三郎方へ罷出候処、八軒屋役頭より且中之者一等寺代判承知いたし」候様理解可申とのよし、承り候へ共、委細之義相分り兼候ニ付、尚又」同道ニて役頭へ罷出可申様申談候

(城)

一十六日天キ村より大三郎書状差越し、急々同村へ罷出與候様申来』罷出候処、寺一件之よしニ付、同人と一緒に役頭出張先ニて承り候所、御目附様」御廻村済、一等寺へ罷出、尤瑜伽山隠居尾原慈眼院も同様参り、代判植松」大慈院へ願替與候様、三人共より達之申談候へ共聞入不申ニ付、其段」福田様・瀧川様へ相伺候所、一等寺へ当り合頼入候而も聞入不申上者何と」致方無之間、一等寺代判承知いたし候様、与得及理解候もの御差図」候間、徒理解いたし候様被申、左候ハ、役頭より御理解被下候様相頼候へ共、村役人より」判頭共へ申聞との事ニ付、同夕大三郎方ニて立会申付置候

一十八日早朝、村方嘉四郎・俊蔵・初之介・音五郎相見、寺一件御理解之趣、」判頭より承り事前双方立会申談候処、一等寺法印ニ逢候上ニて代判相頼」申度、藤戸寺へ御出可被下義、尤御出かたく候ハ、双方同寺へ罷出可申、此段可然」取計與候様申来候ニ付、判頭呼寄、清吉ヲ以八軒屋役頭出張先天キ江大三郎も」参り居申ニ付、右申出候趣申遣候所、大三郎歸り村役人判頭同道双方寄合」居申、藤戸寺へ罷越手続申聞、御両頭様よ

(ママ)

り御理解有之通、此所ニて」承知いたし可申様与得申聞候へ共、彼是申立、是悲一等寺法印ニ」面談致せ與候様達之申出、左候ハ、村役人より理解可致義を聞入不申哉」為理

(ママ)

解候へ共、難聞入義ニ候ハ、其段御達し可申旨繰返し申聞候処、」御理解之通り致度心得ニハ候へ共、大勢之義故御口返難致、両三日猶予」致與候様判頭共ヲ以申出候付、尚理解申聞、早々返答申出候様申聞」置、歸り掛大三郎ニ相分れ、後真吉方へ参り、判頭共より一組五六人ツハ、」呼寄、双方納得可致様厚理解ニおよひ可然段、尚又申聞置候一廿日判頭共参り、一組五六人ツハ呼寄理解申聞候所、双方へ申談、追而」返答可然段申出候』

一同日家父并義兵衛より判頭共へ組之四五人ツハ呼寄、一等寺代判」承知いたし可申様、理解ニおよひ可申、其段与得申聞候様理解」有之候、同廿一日判頭相見へ御手厚く御理解之趣申聞候所、夫々」承知いたし、双方へ申聞き納得可致様連々可申談申出候由、」判頭申出候

一曾原村一等寺より相廻し候注進書、御郡方へ差出し可申段檀中居合」一等寺より代判ニ相成、藤戸寺諸道具改尾原村天城一等寺小僧共」三四人相見夫々相改、尤密書等ハ相見

(経カ)

せ不申、一等寺代判中」且中法事相弔不申、死人有之候ハ、送り輕ニて相済候様子、」一

(終)
同不請、後住備中生坂村東雲院住職転住ニ相成相納り申候、」始修大入組之事ニ候
(止)

撮影史料目録

【宇和島伊達文化保存会】(2001.8.)

《フィルムNo.1》

- 1 丙：御記録及御日記類：黒 10 越後光長公御領没収之節御用控
10-3 越後守様御帰府之一帳
 - 2 10-5 延宝七末年十月十八日同九酉年六月廿三日ニ至ル稿本
 - 3 丙：御記録及御日記類：黒 11 高田御目付衆ヨリ御渡御帳其外数々入箱
 - 4 (目録番号なし、箱の中にあった史料) 井伊掃部頭宛書状案 7月26日
 - 5 11-1 越後高田御本城廣間并三階櫓御道具帳
 - 6 11-2 同御本城雜蔵道具帳
 - 7 11-3 越後高田御本城所々御道具帳
 - 8 11-4 同三ノ丸内方々ニテ相渡外道具帳
 - 9 11-5 呉服物金粉金箔塩島請取帳 天和元年10月12日
 - 10 11-6 宿主共へ為取物ノ品請取中炭ノ掛帳 天和元年10月25日
 - 11 11-7 越後守様御刀脇差當分御預リ引渡帳
 - 12 11-8 越後御本城ニテ受取御腰物之内此方様へ御預リ之分控帳
 - 13 11-9 雜道具長恩寺へ送遣帳 天和元年10月14日
 - 14 11-10 越後様三河様御道具目録
 - 15 11-11 三河様御道具帳
 - 16 11-12 三河様御屋敷在之御道具覚
 - 17 11-13 三河様御屋敷在之荒道具受取帳 天和2年3月6日
 - 18 11-14 御讓物之類
 - 19 11-15 御拝領物之類
 - 20 11-16 本帳外請取道具帳 天和元年10月18日
 - 21 11-17 御道具帳
 - 22 11-17 御道具帳 ※番号・内容同じ別帳
 - 23 11-18 諸道具払拂帳 天和元年10月23日
 - 24 11-19 名物之御道具共改請取帳 天和元年10月17日
 - 25 11-20 高田御道具之内故在之分覚書
 - 26 11-21 貞享二乙丑年覚書 貞享2年8月1日
 - 27 丙：御記録及御日記類：黒 10 越後光長公御領没収之節御用控
10-1 延宝七丁末年ヨリ同九年辛酉迄 片山外記御預被仰出覚 一
 - 28 10-1 延宝九辛酉年六月廿一日ヨリ廿五日迄 二
 - 29 10-1 延宝九辛酉年六月廿六日ヨリ廿八日迄 三
- 【途中まで。《フィルムNo.3》に続く】

《フィルムNo.2》

- 1 乙：御記録及御日記類：赤 36 寛文十一年吉田御養子一件ニ付宇和島ト確執一件

1 冊

- 2 丁：18－記－41 扇松丸様御順御養子御願扣 御勤方 天保8年2月
- 3 丙：御記録及御日記類：黒34 民政ニ関スル宗利公ヨリ郡奉行へ被申渡覚写
天和2年 1通
- 4 甲：公文書及上書類：赤 5 宗城公御参内手続書 3通 文久3年正月2日
- 5 乙：御図書類：赤 2 弊政改革秘話 佐藤信淵著 1冊 宗城公に奉呈
- 6 乙：御図書類：赤 3 秘伝種樹園法 佐藤信淵著 1冊 同上
- 7 丙：公文書及上書類：赤2 参勤交代ノ件御書付 3通 文久2年8月22日
- 8 甲：御書翰類：赤27 三万石引渡並目錄控 1冊
- 9 丙：御記録及御日記類：赤10 元禄十三年庚辰六月領分附伊予国郷帳 1冊
- 10 丙：御記録及御日記類：赤110 扇松丸殿九方御事 1冊
- 11 乙：御記録及御日記類：赤123 伊達本末記 1冊
- 12 丁：17－ホ－21 鳴物停止之事 天保2年より 1冊
- 13 丁：17－ホ－62 御仏事鳴物停止之事 弘化4年 1冊
- 14 丁：17－ホ－94 御仏事鳴物停止之事 万延元年 1冊
- 15 丙：御図書類：黒31 御即位見聞私記 1冊
- 16-1 甲：御書翰類：赤1 宮内少輔宗純殿より桜田監物へ宛御書翰
延宝2年5月2日 1通
- 16-2 甲：御書翰類：赤1 井伊掃部頭殿より桜田監物宛御書翰
延宝2年6月22日 1通

《フィルムNo.3》

【《フィルムNo.1》からの続き】

- 29 10－1 延宝九辛酉年六月廿六日ヨリ廿八日迄 三
【途中から】
- 1 10－1 延宝九辛酉年六月廿九日ヨリ晦日迄 四
- 2 10－1 延宝九辛酉年七月朔日ヨリ二日迄 五
- 3 10－1 延宝九辛酉年七月三日ヨリ六日迄 六
- 4 10－1 延宝九辛酉年七月七日ヨリ廿九日迄 七
- 5 10－1 延宝九辛酉年八月朔日ヨリ廿八日迄 八
- 6 10－1 延宝九辛酉年九月朔日ヨリ廿九日迄 九
- 7 10－1 天和元辛酉年十月朔日ヨリ廿九日迄 十

《フィルムNo.4》

- 1 丙：御記録及御日記類：赤142 諸家官位昇進之次第書 文化末年カ 1冊
- 2～5 丙：御記録及御日記類：赤115 御留守居申合 1袋
- 2 丙：記録赤115 御留守居参会之儀ニ付佐竹右京大夫様御使者御用人を以被仰遣候一件 1冊
- 3 丙記録赤115-8 大広間御席留守居被仰合 1冊
- 4 丙記録赤115-7 留守居役年記略 1冊

- 5 丙記録赤 115-6 御留守居心得之儀ニ付従公辺古来被仰出之書拔 1冊
- 6 伊達家稿本目録 1冊
- 7 丙：御記録及御日記類：赤 152 江戸御屋敷之記録 1冊
- 8 丙：御記録及御日記類：赤 116 武家殿上之間席図及日光御参詣御勤向取調之事
1袋
天保十四卯年四月日光御参詣ニ付、用向頼候役人、其外贈物一条
- 9 丙：御記録及御日記類：赤 116 武家殿上之間席図及日光御参詣御勤向取調之事
1袋
天保十四卯年四月日光山御参詣一条書面本帳ニ写ニ付、不用之分（□印）
- 10 丙：御記録及御日記類：赤 116 武家殿上之間席図及日光御参詣御勤向取調之事
1袋
天保十四卯年四月日光山御参詣一条書面本帳ニ写ニ付、不用之分（ウス印）
- 11 丙：御記録及御日記類：赤 116 武家殿上之間席図及日光御参詣御勤向取調之事
1袋
天保十四卯年四月日光山御参詣一条書面本帳ニ写ニ付、不用之分（無印）
- 12 丙：御記録及御日記類：赤 116 武家殿上之間席図及日光御参詣御勤向取調之事
1袋
天保十四卯年四月日光山御参詣一条書面本帳ニ写ニ付、不用之分（△印）
- 13 丙：御記録及御日記類：赤 116 武家殿上之間席図及日光御参詣御勤向取調之事
1袋
天保十四卯年四月日光山御参詣一条書面本帳ニ写ニ付、不用之分（○印）
- 14 丙：御記録及御日記類：赤 116 武家殿上之間席図及日光御参詣御勤向取調之事
1袋
天保十四卯年四月日光山御参詣一条書面本帳ニ写ニ付、不用之分（ひょうたん印）
- 15 丙：御記録及御日記類：赤 116 武家殿上之間席図及日光御参詣御勤向取調之事
1袋
天保十四卯年四月日光山御参詣一条書面本帳ニ写ニ付、不用之分（◇印）
- 16 丙：御記録及御日記類：黒 44 大神君御遺言 乾
- 17 丙：御記録及御日記類：黒 44 大神君御遺言 坤
- 18 甲：御直書類：黒 29 村侯公御書民政ニ関スル御下知書 1通 天明7
- 19 甲：御直書類：黒 26 大通院殿御文 1通
- 20 甲：御直書類：黒 24 大通院殿御自筆御餞別御自詠 1通
- 21 甲：御直書類：黒 23 大通院殿御教諭書 1通 付御符五ふく
- 22 甲：御記録及御日記類：赤 1 宗利公御行状記 下1冊
- 23 丁：1-07 御用大控 貞享五：貼付文書「覚書」貞享5年8月28日
- 24 丙：御図書類：黒 32 御即位ニ関スル書類 1束 明和8年
24-1 日々書付 1通 《即位前後の流れ》
24-2 御即位次第 1冊
- 25 丙：御記録及御日記類：黒 53 御老中上使之儀御内々御願一卷入 八封
元禄15年ヨリ宝暦13年迄

【途中まで。《フィルムNo.6》へ続く。】

《フィルムNo.5》

- 1 10-1 天和元辛酉年十一月三日ヨリ廿七日迄 十一
- 2 10-1 天和元辛酉年十二月中 十二
- 3 10-1 天和式戊戌年二月ヨリ四月迄終 十三
- 4 10-1 天和元辛酉年御道具之覚 十四
- 5 乙:御系譜及御履歴類:黒1 明和四年丁亥御系図 箱入
1-4 系譜覚(吉田) 寛政2年 1冊
- 6 1-2 伊達系図 元文5年 1冊
- 7 1-11 公辺披露之年附加心得 1冊
- 8 丙:御記録及御日記類:黒51 密御用帳 正徳4年4月 1冊
- 9 丁:17-ホ-29 吉田之事 1冊{途中(25)までNo.8で撮影}
- 10 丙:御系譜及御履歴類:赤7 御歴代記録書抜
7-1 秀宗公
- 11 7-2 秀宗公
- 12 7-3 伊達御歴代事記二号之付録 宗利公御代諸被仰付定書付附御勘定仕方
【途中まで。《フィルムNo.7》へ続く。】

《フィルムNo.6》

【《フィルムNo.4》からの続き】

- 25 丙:御記録及御日記類:黒53 御老中上使之儀御内々御願一卷入 八封
元禄15年ヨリ宝暦13年迄
【途中から】
- 26-1 乙:御記録及御日記類:黒12 宗紀公御隠居宗城公御家督前後御用控 乾
弘化元年辰年
- 26-2 乙:御記録及御日記類:黒12 宗紀公御隠居宗城公御家督前後御用控 坤
弘化元年辰年
- 27 乙:御記録及御日記類:赤58-10 四品御礼参勤之節土州留 一封(一折)
- 28 乙:御記録及御日記類:赤58-11 文化十戌年・同十四丑年・天保六丑年・
文化十一亥年・文政元寅年・天保七申年 嫡子ニ而参暇御礼之留書抜 二通 一封
(二通)
- 29 乙:御記録及御日記類:赤58-15 御三家途中出会之節心得留書 一封(二通)
天保8年3月3日
- 30 乙:御記録及御日記類:赤58-16 天保十四年癸卯正月有馬ヨリ到来御三家へ轅之
節致出会心得因州先例書留訖有馬別帋共四通 一封(二通)
 - 1 乙:御記録及御日記類:赤58-18 四品ニ而初入御暇之留 一折
 - 2 甲:御辞令書類:赤48 宗城公叙正二位ノ位記并特旨ヲ以テ位階被進辞令共 4通
明治19年6月9日ほか
 - 3 甲:御辞令書類:赤8 宗城公左近衛権少将御沙汰書 1通 元治元年4月10日

- 4 丙：御記録及御日記類：黒 36 義三郎様御養子控一件 1冊 文久3年
- 5 丙：御記録及御日記類：黒 28 伊織様青木様へ御養子被仰合控書 2冊ノ内1
明和6年

【途中まで。《フィルムNo.8》へ続く。】

《フィルムNo.7》

【《フィルムNo.5》からの続き】

- 12 7-3 伊達御歴代事記二号之付録 宗利公御代諸被仰付定書付附御勘定仕方
【途中から】
- 1 7-3 附録 御二代目天梁院様御行状附 伊達家御歴代事記 第二号之附録甲号
- 2 7-4 宗利公御行状附
- 3 7-5 宇和島巻号 伊達家御歴代事記 天正十九年ヨリ明暦三年マデ
- 4 7-6 宇和島二号 御二代目伊達家御歴代事記 明暦三年丁酉七月ヨリ延宝七年四月
マデ
- 5 7-8 宇和島二号 御二代目伊達家御歴代事記 延宝七年五月ヨリ元禄六年十二月迄
- 6 乙：御図書類：黒 63 陶斎筆記（息心筆記）全2冊
- 7 乙：御図書類：黒 63 陶斎筆記
- 8 乙：御図書類：黒 65 息心筆記（息心老人筆記）全3冊
- 9 乙：御図書類：黒 65 息心筆記（息心先生筆記）
- 10 乙：御図書類：黒 65 息心筆記（筆記）
- 11 乙：御図書類：黒 66 息心先生筆記 1冊
- 12 乙：御図書類：黒 64 陶斎筆記（一）全20冊

《フィルムNo.8》

【《フィルムNo.6》からの続き】

- 5 丙：御記録及御記録類：黒 28 伊織様青木様へ御養子被仰合控書 2冊ノ内1
明和6年
- 【途中から】
- 1 丙：御記録及御日記類：黒 28 伊織様青木様へ御養子被仰合控書 2冊ノ内2
- 2 稿本目録
- 3 歴代藩主行状目録No.1 初代公～4代公
- 4 歴代藩主行状目録No.2 5代公～7代公
- 5 歴代藩主行状目録No.3 藍山公記 1巻～73巻
- 6 歴代藩主行状目録No.4 藍山公記 73巻～⑤-50巻

【途中まで。《フィルムNo.10》へ続く。】

《フィルムNo.9》

- 1 乙：御図書類：黒 64 陶斎筆記（二）
- 2 乙：御図書類：黒 64 陶斎筆記（三）
- 3 乙：御図書類：黒 64 陶斎筆記（四）

- 4 乙:御図書類:黒 64 陶斎筆記(五)
- 5 乙:御図書類:黒 64 陶斎筆記(六)
- 6 乙:御図書類:黒 64 陶斎筆記(七)
- 7 乙:御図書類:黒 64 陶斎筆記(八)
- 8 乙:御図書類:黒 64 陶斎筆記(九)
- 9 乙:御図書類:黒 64 陶斎筆記(十)
- 10 乙:御図書類:黒 64 陶斎筆記(十一)
- 11 乙:御図書類:黒 64 陶斎筆記(十二)
- 12 乙:御図書類:黒 64 陶斎筆記(十三)
- 13 乙:御図書類:黒 64 陶斎筆記(十四)
- 14 乙:御図書類:黒 64 陶斎筆記(十五)
- 15 乙:御図書類:黒 64 陶斎筆記(十六)
- 16 乙:御図書類:黒 64 陶斎筆記(十七)
- 17 乙:御図書類:黒 64 陶斎筆記(十八)
- 18 乙:御図書類:黒 64 陶斎筆記(十九)
- 19 乙:御図書類:黒 64 陶斎筆記(二十)
- 20 乙:御図書類:黒 13 田園類説 1冊
- 21 丙:御記録及御日記類:赤 157 御入内御祝儀御使者勤書 1冊

《フィルムNo.10》

【《フィルムNo.8》からの続き】

- 6 歴代藩主行状目録No.4 藍山公記 73巻～⑤-50巻

【途中から】

- 1 歴代藩主行状目録No.5 竜山公記 ⑨-1～24巻、⑩-1～22-1
- 2 歴代藩主行状目録No.6 22-2～35-84

【安芸市立歴史民俗資料館】(2001.8.)

《五藤家文書No.1》

(露出不足に付き失敗。没)

《五藤家文書No.2》

- | | |
|----------------------------------|----------------|
| 1 大坂在役報告 御国物産値段等 亥 11月3日 1通 | 《五藤家文書No.6098》 |
| 2 大坂在勤家士動静報告 横目 亥 11月3日 1通 | 《五藤家文書No.6099》 |
| 3 銀子借用につき大坂にて借用 元和6年カ9月16日 1通 | 《五藤家文書No.5814》 |
| 4 御政事御改之節覚等 材用不如意ニ付 元和7年 3通 | 《五藤家文書No.5815》 |
| 5 御政事御改之節覚等 材用不如意ニ付 元和7年 3通 | 《五藤家文書No.5815》 |
| 6 御政事御改之節覚等 材用不如意ニ付 元和7年 3通 | 《五藤家文書No.5815》 |
| 7 諸代官物奉行運上銀入札控 入札一覧 元和8年3月15日 2通 | 《五藤家文書No.5816》 |

- 8 諸代官物奉行運上銀入札控 入札一覧 元和8年3月15日 2通
《五藤家文書No. 5816》
- 9 夫米御算用之事 寛永15年11月12日 1通
《五藤家文書No. 5817》
- 10 夫米御算用之事 寛永19年4月18日 1通
《五藤家文書No. 5818》
- 11 夫米御算用之事 寛永19年4月18日 1通
《五藤家文書No. 5818》
- 12 御代官所高知分物成御算用之事 正保2年10月21日 1通
《五藤家文書No. 5819》
- 13 大塚屋新左衛門銀返弁内証之割方覚 寛文13年5月1日 1通
《五藤家文書No. 5820》
- 14 大塚屋新左衛門銀借用証文控 寛文13年5月1日 1通
《五藤家文書No. 5821》
- 15 大塚屋新左衛門より借金払方申合 寛文13年8月7日 1通
《五藤家文書No. 5822》
- 16 御在江戸御入目増減引批覚 忠義様他 元禄5年2月22日 2冊
《五藤家文書No. 5824》
- 17 御在江戸御入目増減引批覚 忠義様他 元禄5年2月22日 2冊
《五藤家文書No. 5824》
- 18 御借滞銀一ヶ年分御払覚 天明7年9月 1冊
《五藤家文書No. 5834》
- 19 大坂・江戸・御国御借滞銀覚 天明8年 1冊
《五藤家文書No. 5836》
- 20 極秘書留 御蔵銀の額 寛政2年～同8年 1通
《五藤家文書No. 5837》
- 21 礼状 山内豊常跡目相続ニ付 享保5年 2通
《五藤家文書No. 4496》
- 22 御書写等 豊興公養子並遺領之事等 文化6年6月29日 1通
《五藤家文書No. 4536》
- 23 覚書 雅楽助様御養子詮議 文化4年8月 3通
《五藤家文書No. 4535》
- 24 控 民部婿養子ニ付 2月12日 1通
《五藤家文書No. 4540》
- 25 書状 御養子之儀ニ付 8月30日 1通
《五藤家文書No. 4541》
- 26 書状 兵部様御養子之儀 11月16日 1通
《五藤家文書No. 4542》
- 27 遠江守様御養子之儀 未詳 1通
《五藤家文書No. 4543》
- 28 御家並御連枝様御誕生 天文14年～正徳 1冊
《五藤家文書No. 4598》
- 29 御門葉方御家督並御奉公始 慶長～ 1冊
《五藤家文書No. 4495》
- 30 御扱方之御次第 安永8年 3冊
《五藤家文書No. 4531》
- 31 山内主計殿御養子之一件 享保2年7月 21通
《五藤家文書No. 4530》
- 32 御請書草案 御連枝様方養子之儀 辰11月13日 1通
《五藤家文書No. 4539》
- 33 公用書状書付控帳 参勤火消他 貞享1年2月 1冊
《五藤家文書No. 331》
- 34 火消方諸事覚帳 貞享1年9月 1冊
《五藤家文書No. 332》

《五藤家文書No. 3》

- 1 参勤交代書付 諸大名一覧表 享保7年7月3日 1通
《五藤家文書No. 4799》
- 2 東照宮御祭礼当年は差延 年未詳4月4日 1通
《五藤家文書No. 5434》
- 3 江戸御留守居江勤方注意 文政1年12月 1通
《五藤家文書No. 5549》
- 4 神君御文写全 天保2年7月18日 1冊
《五藤家文書No. 2655》
- 5 覚 鳴物停止御示中御不審木ヤリ不苦 10・14 1通
《五藤家文書No. 1440》
- 6 位階覚書 未詳 1通
《五藤家文書No. 2725》
- 7 覚書之写 若君様御任官之儀ニ付 巳2月 1通
《五藤家文書No. 4491》
- 8 書状 若殿様侍従被仰付 12月25日 1通
《五藤家文書No. 4492》

- 9 御意之写 昇進被仰付ニ付家臣江 未詳 4 通 《五藤家文書No. 4493》
- 10 御家並御連枝様御官位 未詳 1 冊 《五藤家文書No. 4494》
- 11 覚 御昇進祝儀ニ付国内一統宥免 天保 4 年 6 月 1 通 《五藤家文書No. 4559》
- 12 草案 少将ニ御昇進祝詞 1 月 1 日 1 通 《五藤家文書No. 4560》
- 13 草案 御着城御祝儀 昇進 名書 未詳 1 通 《五藤家文書No. 4561》
- 14 役人共心得 若殿様任官ニ付 7 月 22 日 1 通 《五藤家文書No. 4731》
- 15 豊敷公御書写 惣家老共頂戴 侍従任官ニ付報知 享保 13 年 12 月 22 日 1 通
《五藤家文書No. 4043》
- 16 豊敷公御書写 惣家老共頂戴 国松様叙位及革名他 明和 1 年 11 月 4 日 1 通
《五藤家文書No. 5069》
- 17 春嶽殿御演達之写 田安大納言官位御辞退隠居願ニ付 未詳 2 通
《五藤家文書No. 5128》
- 18 書付写 土佐少将宛 征討ノタメ御紋御旗二流下賜 1 月 2 通 《五藤家文書No. 5132》
- 19 邦之丞様御革名後御附等前例調 寛政 10 年 1 月 22 日 2 通 《五藤家文書No. 5244》
- 20 覚 大廊下上ノ御部屋御三家様方等 寛政 12 年 4 月 17 日 1 通 《五藤家文書No. 5245》
- 21 御同席様御大名名順 大広間御席順 寛政 12 年 4 月 17 日 1 通 《五藤家文書No. 5246》
- 22 書状 家督を蒙り国政を預かる覚悟 卯年 3 月 1 通 《五藤家文書No. 5261》
- 23 備前家老池田出羽家中聞書 未詳 1 通 《五藤家文書No. 5288》
- 24 藩主交替ニ付告諭 卯 3 月 8 日 2 通 《五藤家文書No. 5430》
- 25 触 御家督被為蒙ニ付 卯 3 月 8 日 1 通 《五藤家文書No. 5431》
- 26 覚 倒幕杯唱者有之儀ニ相聞以而之外 卯 8 月 1 通 《五藤家文書No. 5444》
- 27 覚 松平内蔵頭嫡子於御前元服聞書 寛政 2 年 6 月 2 日 1 通 《五藤家文書No. 5990》
- 28 御大名様江被仰渡事 遠山金四郎等に拝領物被仰付 寛政 6 年 3 月晦日 1 通
《五藤家文書No. 6022》
- 29 御大名様之事 松平出羽守他叙位 寛政 7 年 1 月 15 日 1 通 《五藤家文書No. 6026》
- 30 長崎珍事写 唐軍勢日本攻撃の陰謀 3 月 16 日 1 通 《五藤家文書No. 6051》
- 31 御目附方日記写 家老領地百姓科あるときの処理 宝永 8 年 8 月 28 日 1 通
《五藤家文書No. 7809》
- 32 宮地助次考書写 妾腹に男子出生私考 寛政 5 年 7 月 1 通 《五藤家文書No. 7969》
- 33 書状 松平伊予守様御使者甲浦ヨリ 元禄 14 年 12 月 23 日 1 通
《五藤家文書No. 5215》
- 34 歴代天皇名 神武〜後桃園 未詳 1 冊 《五藤家文書No. 1332》
- 35 天子公儀上儀御代附 未詳 3 冊 《五藤家文書No. 4471》
- 36 覚書写 女御入内ニ付 寛政 6 年 5 月 1 通 《五藤家文書No. 4630》
- 37 御葬方角日時之吉凶及葬送後覚 10 月 13 日 3 通 《五藤家文書No. 4693》
- 38 御家中江御料理被遣覚 御家督御祝儀 明和 6 年 11 月 1 通 《五藤家文書No. 5219》
- 39 御老中御若年寄姓名覚 天明 7 年 7 月 1 通 《五藤家文書No. 5223》
- 40 書状 松平和泉守様家中江被仰出書写 未詳 1 通 《五藤家文書No. 5289》
- 41 名書 酒井雅楽頭様御家老衆 未詳 1 通 《五藤家文書No. 5291》
- 42 殿様と若殿様同時在府は無御座等 未詳 3 通 《五藤家文書No. 5645》

- 43 覚 聚楽御普請年暦 貞享3年2月19日 1通 《五藤家文書No. 5962》
- 44 公家衆行状写 寛政5年3月 1通 《五藤家文書No. 6016》
- 45 公家衆江被仰渡之事 処罰 8月25日 2通 《五藤家文書No. 6057》
- 46 京都御使者勤方覚書写 松下長兵衛 寛政3年3月写 1通 《五藤家文書No. 8004》
- 【47～52 撮り直し】
- 47 少将様景翁ト御革名御触之事 1月10日 1通 《五藤家文書No. G6》
- 48 御用回文 大守様叙四品御名土佐守ト御革名 1月29日 2通
《五藤家文書No. G7》
- 49 覚 女院様崩御鳴物停止被仰付 7月2日 1通 《五藤家文書No. G13》
- 50 覚 七夕此度鳴物停止中につき 7月5日 ※断簡、吉田他宛西野・小口書状
《五藤家文書No. G14》
- 51 覚 生業之殺生不苦旨御触出 8月27日 1通 《五藤家文書No. G16》
- 52 口述 太守様御病症諸事御慎相達候 11月29日 2通 《五藤家文書No. G17》
- 53 口上覚 女院様崩御ニ付鳴物停止 11月5日 1通 《五藤家文書No. G75》
- 54 京都御使者被仰付 御即位使者外記 文化14年5月23日 4通
《五藤家文書No. G3678》
- 55 公書 官位御改正・松山藩等伺他 明治2年 1冊 《五藤家文書No. G3998》
- 56 御家中変儀(1) 未詳 1冊 ※慶長6年～元文2年 《五藤家文書No. 7894》
- 57 御家中変儀(3) 未詳 1冊 ※文政9年～天保11年 《五藤家文書No. 7895》
- 【※目録に(2)とあるのは誤り。(2)は欠】

《五藤家文書No. 4》

- 1 公用書状書付控帳 貞享1年9月 1冊 《五藤家文書No. 333》
- 2 日記 貞享1年11月1日 1冊 《五藤家文書No. 926》
- 3 公用書状書付控帳 貞享2年1月 1冊 《五藤家文書No. 334》

【土佐山内家宝物資料館 その1】(2001.8.)

《土佐山内家宝物資料館フィルム No. 1》

- 1 老中奉書 享保4年4月27日 仮番号：享保79
老中奉書 享保4年分 13点(山内豊隆宛13点) 《山内家文書No. 老中奉書 p.192》
- 2 老中奉書 享保5年5月26日 仮番号：享保91
老中奉書 享保5年分 13点(山内豊隆宛4点・同豊常宛9点)
《山内家文書No. 老中奉書 p.192》
- 3 老中奉書 享保5年6月5日 仮番号：享保92
老中奉書 享保5年分 13点(山内豊隆宛4点・同豊常宛9点)
《山内家文書No. 老中奉書 p.192》
- 4 老中奉書 享保10年4月19日 仮番号：享保152
老中奉書 享保10年分 35点(山内豊常宛28点・同豊敷宛7点)
《山内家文書No. 老中奉書 p.192》

- 5 老中奉書 享保 10 年 4 月 19 日 仮番号：享保 153
 老中奉書 享保 10 年分 35 点（山内豊常宛 28 点・同豊敷宛 7 点）
 《山内家文書№老中奉書 p.192》
- 6 老中奉書 享保 10 年 9 月 13 日 仮番号：享保 174
 老中奉書 享保 10 年分 35 点（山内豊常宛 28 点・同豊敷宛 7 点）
 《山内家文書№老中奉書 p.192》
- 7 老中奉書 享保 10 年 10 月 21 日 仮番号：享保 175
 老中奉書 享保 10 年分 35 点（山内豊常宛 28 点・同豊敷宛 7 点）
 《山内家文書№老中奉書 p.192》
- 8 老中奉書 享保 10 年 10 月 27 日 仮番号：享保 176
 老中奉書 享保 10 年分 35 点（山内豊常宛 28 点・同豊敷宛 7 点）
 《山内家文書№老中奉書 p.192》
- 9 老中奉書 享保 10 年 12 月 17 日 仮番号：享保 179
 老中奉書 享保 10 年分 35 点（山内豊常宛 28 点・同豊敷宛 7 点）
 《山内家文書№老中奉書 p.192》
- 10 老中奉書 享保 10 年 12 月 27 日 仮番号：享保 180
 老中奉書 享保 10 年分 35 点（山内豊常宛 28 点・同豊敷宛 7 点）
 《山内家文書№老中奉書 p.192》
- 11 老中奉書 元和 2 年 4 月 17 日 仮番号：元和 14
 老中奉書 元和 2 年分 3 点（山内忠義宛 3 点） 《山内家文書№老中奉書 p.190》
- 12 老中奉書 （元和 8 年カ）6 月晦日 仮番号：元和 27 の包紙のみ
 老中奉書 元和 8 年分 2 点（山内忠義宛 1 点・同忠豊宛 1 点）
 《山内家文書№老中奉書 p.190》
- 13 老中奉書 寛永 11 年 10 月 13 日 仮番号：寛永 19
 老中奉書 寛永 11 年分 4 点（山内忠義宛 4 点） 《山内家文書№老中奉書 p.191》
- 14 老中奉書 寛永 11 年極月 14 日 仮番号：寛永 21
 老中奉書 寛永 11 年分 4 点（山内忠義宛 4 点） 《山内家文書№老中奉書 p.191》
- 15 老中奉書 寛永 15 年卯月 7 日 仮番号：寛永 23
 老中奉書 寛永 15 年分 3 点（山内忠義宛 3 点） 《山内家文書№老中奉書 p.192》
- 16 老中奉書 慶安 1 年 4 月 28 日 仮番号：慶安 3
 老中奉書 慶安元年分 6 点（山内忠義宛 6 点） 《山内家文書№老中奉書 p.191》
- 17 老中奉書 寛永 15 年卯月 7 日 仮番号：寛永 23（撮影№ 15）の包紙撮直し
- 18 老中奉書 寛永 11 年極月 14 日 仮番号：寛永 21（撮影№ 14）の包紙撮直し
- 19 老中奉書 寛永 11 年 10 月 13 日 仮番号：寛永 19（撮影№ 13）の包紙撮直し
- 20 老中奉書 （元和 8 年カ）6 月晦日 仮番号：元和 27（撮影№ 12）の包紙撮直し
- 21 老中奉書 （慶安 3 年カ）正月 13 日 仮番号：慶安 7
 老中奉書 慶安 3 年分 13 点（山内忠義宛 13 点） 《山内家文書№老中奉書 p.191》
- 22 老中奉書 （慶安 3 年カ）正月 13 日 仮番号：慶安 7（撮影№ 21）の撮り直し
- 23 老中書付 （元禄 9 年）仮番号：元禄 1
 老中奉書 元禄 9 年分 29 点（山内豊昌宛 29 点） 《山内家文書№老中奉書 p.192》

- 24 伺書及老中付紙 享保 10 年 5 月 1 日 仮番号：享保 10-4-1,2
老中付紙類 享保 10 年分 13 点（伺書 13 点） 《山内家文書No.老中付紙類 p.197》
- 25 伺書及老中付紙 享保 10 年 6 月 10 日 仮番号：享保 10-5-1,2
老中付紙類 享保 10 年分 13 点（伺書 13 点） 《山内家文書No.老中付紙類 p.197》
- 26 伺書及老中付紙 享保 10 年 6 月 10 日 仮番号：享保 10-6-1,2
老中付紙類 享保 10 年分 13 点（伺書 13 点） 《山内家文書No.老中付紙類 p.197》
- 27 伺書及老中付紙 享保 10 年 10 月 22 日 仮番号：享保 10-7-1,2
老中付紙類 享保 10 年分 13 点（伺書 13 点） 《山内家文書No.老中付紙類 p.197》
- 28 伺書及老中付紙 享保 10 年 10 月 22 日 仮番号：享保 10-8-1,2
老中付紙類 享保 10 年分 13 点（伺書 13 点） 《山内家文書No.老中付紙類 p.197》
- 29 伺書及老中付紙 享保 10 年 10 月 22 日 仮番号：享保 10-9-1,2
老中付紙類 享保 10 年分 13 点（伺書 13 点） 《山内家文書No.老中付紙類 p.197》
- 30 伺書及老中付紙 享保 10 年 10 月 23 日 仮番号：享保 10-10-1,2
老中付紙類 享保 10 年分 13 点（伺書 13 点） 《山内家文書No.老中付紙類 p.197》
- 31 伺書及老中付紙 享保 10 年 10 月 25 日 仮番号：享保 10-11-1,2
老中付紙類 享保 10 年分 13 点（伺書 13 点） 《山内家文書No.老中付紙類 p.197》
- 32 伺書及老中付紙 享保 10 年 11 月 15 日 仮番号：享保 10-12-1,2
老中付紙類 享保 10 年分 13 点（伺書 13 点） 《山内家文書No.老中付紙類 p.197》
- 33 伺書及老中付紙 享保 10 年 11 月 15 日 仮番号：享保 10-13-1,2
老中付紙類 享保 10 年分 13 点（伺書 13 点） 《山内家文書No.老中付紙類 p.197》
- 34 伺書及老中付紙 享保 10 年 11 月 19 日 仮番号：享保 10-14-1,2,3
老中付紙類 享保 10 年分 13 点（伺書 13 点） 《山内家文書No.老中付紙類 p.197》
- 35 伺書及老中付紙 享保 10 年 12 月 18 日 仮番号：享保 10-15-1,2,3
老中付紙類 享保 10 年分 13 点（伺書 13 点） 《山内家文書No.老中付紙類 p.197》
- 36 老中奉書（元禄 11）年 4 月 15 日 仮番号：元禄 248
老中奉書 元禄 11 年分 26 点（山内豊昌宛 26 点） 《山内家文書No.老中奉書 p.192》
- 37 老中奉書（万治 3）年 2 月 13 日 仮番号：万治 22
老中奉書 万治 3 年分 7 点（山内忠義宛 7 点） 《山内家文書No.老中奉書 p.191》
- 38 老中奉書（万治 3）年 11 月 27 日 仮番号：万治 28
老中奉書 万治 3 年分 7 点（山内忠義宛 7 点） 《山内家文書No.老中奉書 p.191》
- 39 老中奉書（寛文 3）年 5 月 29 日 仮番号：寛文 31,4
老中奉書 寛文 3 年分 2 点（山内忠義宛 1 点・同忠豊宛 1 点）
《山内家文書No.老中奉書 p.191》
- 40 老中奉書（正徳 2）年 3 月 5 日 仮番号：正徳 30
老中奉書 正徳 2 年分 21 点（山内豊隆宛 21 点） 《山内家文書No.老中奉書 p.192》
- 41 老中奉書（正徳 5）年 3 月 27 日 仮番号：正徳 92
老中奉書 正徳 5 年分 22 点（山内豊隆宛 22 点） 《山内家文書No.老中奉書 p.192》
- 42 老中奉書（正徳 5）年 4 月 25 日 仮番号：正徳 94
老中奉書 正徳 5 年分 22 点（山内豊隆宛 22 点） 《山内家文書No.老中奉書 p.192》
- 43 老中御書付（正徳 5）年 3 月 仮番号：正徳 5

- 老中奉書 正徳 5 年分 22 点 (山内豊隆宛 22 点) 《山内家文書No.老中奉書 p.192》
- 44 大老奉書 (正徳 2)3 月 7 日 仮番号:直該 19
大老奉書 正徳 2 年分 8 点 (井伊直該→山内豊隆宛 8 点)
《山内家文書No.大老奉書 p.199》

《土佐山内家宝物資料館フィルム No. 2》

- 1 豊常公紀 196 第 1 卷 享保 5 年 5 月—同年 8 月 1 冊
《山内家文書No.山内家史料-196/p.231》
- 2 豊常公紀 197 第 2 卷 享保 5 年 9 月—同年 12 月 1 冊
《山内家文書No.山内家史料-197/p.231》
- 3 豊常公紀 207 第 12 卷 享保 10 年 1 月—同年 5 月 1 冊
《山内家文書No.山内家史料-207/p.231》
- 4 豊常公紀 208 第 13 卷 享保 10 年 6 月—同年 9 月 1 冊
《山内家文書No.山内家史料-208/p.231》
- 5 上野寛永寺絵図部分 享保 7 年 1 月 7 日 1 枚
《山内家文書No.絵図・指図類 (17) /p.219》
- 6 芝増上時絵図部分 享保 7 年 1 月 7 日 1 枚
《山内家文書No.絵図・指図類 (16) /p.219》
- 7 上野予参之図 (指図付) (宝暦 7 力) 断間 諸役 2
《山内家文書No.絵図・指図類 (18) /p.219》
- 8 増上寺境内図 宝暦 11 年～ 1 枚 諸役 4 《山内家文書No.絵図・指図類 (23) /p.219》
- 9 芝増上寺境内図 享保元年以前 1 枚 諸役 3
《山内家文書No.絵図・指図類 (22) /p.219》
- 10 長帳 3 甲第 3 号 元和年間 (上) 分編年文書 1 冊 (元和元年～3 年より抜粋)
《山内家文書No.長帳-3/p.223》

617-1-3	元和 3 年卯月 14 日	山内伊豆守玳土州宛
617-1-2	元和 3 年 3 月 8 日	山修理玳松平土佐宛
617-1-13	元和 3 年 7 月 4 日	毛利伊勢守外玳松土州宛
617-1-8	元和 3 年卯月 29 日	山内伊豆守玳土州宛
617-1-9	元和 3 年 5 月 20 日	山内伊豆守玳土州宛
- 11 長帳 119 甲第 118 号 宝永 4・5 年分編年文書 1 冊 (抜粋)
《山内家文書No.長帳-119/p.225》

宝永 4-8	当分養子願書下書
宝永 4-22	当分養子御願書下書 5 月 22 日 松平土佐守玳老中宛
宝永 4-42	言上書 10 月 9 日
宝永 4-25	言上書 卯月 15 日
宝永 4-51,2	口上書 (2 通) 10 月 21 日
宝永 4-53	指上書 10 月 27 日
宝永 4-54	御書 土佐守玳山内蔵人外宛 11 月 6 日
- 12 長帳 118 甲第 117 号 宝永 3 年分編年文書 1 冊 (抜粋)

宝永 3-8	鳥居右京ヨリ深尾若狭他宛 6月
宝永 3-9	松平土佐守ヨリ土屋相模守他老中宛 願書下書 6月6日
宝永 3-10	松平土佐守ヨリ土屋相模守宛 願書下書 6月6日
宝永 3-11	松平土佐守ヨリ松平美濃守宛 願書下書 6月6日
宝永 3-12	鳥居右京ヨリ山内蔵人他宛 6月13日
宝永 3-13	孕石主水ヨリ斎藤甚五兵衛宛 6月11日
宝永 3-14	西野惣右衛門他ヨリ右京宛 6月12日
宝永 3-15	西野惣右衛門ヨリ斎藤甚五兵衛宛 6月18日
宝永 3-16	西野惣右衛門他ヨリ斎藤甚五兵衛宛 6月18日
宝永 3-17	西野惣右衛門他ヨリ斎藤甚五兵衛宛 6月18日
宝永 3-18	書付 6月18日
宝永 3-19	鳥居右京ヨリ山内蔵人他宛 6月19日
宝永 3-20	鳥居右京ヨリ山内蔵人他宛 6月21日
宝永 3-21	鳥居右京ヨリ山内蔵人他宛 6月21日
宝永 3-26	深尾若狭ヨリ西野惣右衛門宛 7月3日
宝永 3-27	深尾若狭返書 7月
宝永 3-38	伊右衛門ヨリ山内主馬宛 8月10日

13 長帳 7 甲第 7 号 寛永 2 年分編年文書 1 冊 (抜粋)

《山内家文書No.長帳-7/p.223》

625.1.23	山内伊豆守一雄ヨリ土州宛 寛永 2 年 7 月 8 日
625.1.28	日下部兵右衛門ヨリ土州宛 寛永 2 年 7 月晦日

14 長帳 13 甲第 13 号 寛永 9 年 (上) 分編年文書 1 冊 (抜粋)

《山内家文書No.長帳-13/p.223》

632.1.2	山内豊前守一雄ヨリ土州宛 寛永 9 年正月 25 日
632.1.20	柴田覚右衛門ヨリ岩崎又右衛門宛 寛永 9 年卯月 8 日
632.1.25	山内伊豆守一雄ヨリ土州宛 寛永 9 年 4 月 18 日
632.1.27	酒井雅楽頭忠世ヨリ松平土佐守宛 寛永 9 年 4 月 27 日
632.1.28	松平対馬守忠豊ヨリ岩崎又右衛門宛 寛永 9 年 4 月晦日
632.1.33	柴田覚右衛門ヨリ岩崎又右衛門宛 寛永 9 年 5 月朔日
632.1.39	松平対馬守忠豊ヨリ岩崎又右衛門宛 寛永 9 年 5 月 18 日
632.1.61	柴田覚右衛門ヨリ岩崎又右衛門宛 寛永 9 年 6 月 17 日

【土佐山内家宝物資料館 その 2】(2002.3.)

《土佐山内家宝物資料館フィルム No. 1》

1 長帳 13 甲第 13 号 寛永 9 年 (上) 分編年文書 1 冊 (前回続き)

《山内家文書No.長帳-13/p.223》

1-1	62	6月19日	書状1通	岩崎又右衛門宛	柴田覚右衛門
1-2	63	6月19日	書状1通	岩崎又右衛門宛	山内修理亮(忠直)

- 1-3 64 6月20日 書状1通 岩崎又右衛門宛 松平対馬守(忠豊)
- 1-4 69 6月29日 書状1通 小倉少介宛 忠義
- 2 長帳 14 甲第14号 寛永9年(下)分編年文書 1冊 《山内家文書No.長帳-14/p.223》
- 2-1 72 7月朔日 書状1通 岩崎又右衛門宛 柴田覚右衛門
- 2-2 74 7月8日 書状1通 松平土佐守宛 加藤遠江守
- 2-3 76 7月12日 書状1通 岩崎又右衛門宛 柴田覚右衛門
【撮影番号2-2で撮影】
- 2-4 80 7月23日 書状1通 岩崎又右衛門宛 孕石内蔵佐
【撮影番号2-3で撮影】
- 2-5 94 8月10日 書状1通 松平土佐守宛 小浜民部丞
- 2-6 104 8月16日 書状1通 岩崎又右衛門宛 松平対馬守忠豊
- 2-7 105 8月16日 書状1通 岩崎又右衛門宛 柴田覚右衛門
- 2-8 107 8月18日 書状1通 岩崎又右衛門宛 山内修理亮忠直
- 2-9 109 8月18日 書状1通 松平土佐守宛 山内伊豆守一唯
- 2-10 110 8月20日 書状1通 岩崎又右衛門宛 松平対馬守忠豊
- 2-11 113 8月23日 書状1通 岩崎又右衛門宛 山内修理亮忠直
- 2-12 114 8月23日 書状1通 岩崎又右衛門宛 柴田覚右衛門
- 2-13 118 8月27日 書状1通 岩崎又右衛門宛 松平対馬守忠豊
- 2-14 120 8月晦日 書状1通 岩崎又兵衛宛 山内修理亮忠直
- 2-15 123 9月朔日 定(「於他国万定」) 1冊 忠義
- 2-16 126 9月23日 定(「於御旅馬人足渡定」) 1冊 桐間兵庫他四名
- 2-17 132 10月25日 書状1通 野中玄蕃宛 忠義
- 2-18 133 10月25日 書状1通 小倉少介宛 忠義
- 3 長帳 70 甲第69号 寛文2年(3)分編年文書 1冊 《山内家文書No.長帳-70/p.224》
- 3-1 253 5月21日 到来状1通 生駒木工宛 山内修理太夫忠直
- 3-2 253 5月21日 言上書1通 生駒木工宛 山内右近太夫豊直
- 3-3 256 5月23日 到来状1通 松平対馬守宛 松山勝山定行
- 3-4 257 5月25日 御書1通 高島孫右衛門他宛 忠義
- 4 長帳 78 甲第77号 寛文4年(3)分編年文書 1冊 《山内家文書No.長帳-78/p.224》
- 4-1 248 9月23日 言上書1通 吉田猪左衛門宛 野々村長左衛門
- 4-2 249 9月23日 言上書1通 忠豊宛 松平筑後守豊昌
- 4-3 250 9月23日 言上書1通 前野七右衛門宛 松平対馬守忠豊
- 4-4 251 9月23日 御書1通 松平筑後守宛 松平対馬守忠義豊
- 4-5 252 9月23日 御書1通 山下下総・孕石頼母宛 対馬守忠豊
- 4-6 253 9月23日 到来状1通 松平対馬守宛 本多下野守
- 4-7 254 9月23日 言上書1通 前野七右衛門宛 松下加兵衛正経
- 4-8 255 9月23日 言上書1通 生駒木工宛 山内式部安豊
- 4-9 256 9月23日 言上書1通 生駒木工宛 筑後守豊昌
- 4-10 257 9月25日 言上書1通 関九郎右衛門宛 孕石頼母・山内下総
- 258 9月25日 到来状1通 松平対馬守宛 松平備後守

【撮影番号 4-10 で 2 通撮影】

4-11	259	9月26日	到来状1通	松平対馬守宛	松新太郎
4-12	260	9月26日	御書1通	松平対馬守宛	松平土佐守忠義
4-13	263	9月28日	御書1通	松平筑後守宛	松平土佐守忠義
5	長帳 16	甲第 16 号	寛永 11 年分編年文書 1 冊	《山内家文書No.長帳-16/p.223》	
5-1	5	卯月2日	書簡1通	松土州宛	山内伊豆守一唯
5-2	47	8月5日	言上書1通	岩崎又右衛門宛	柴田覚右衛門
5-3	48	8月5日	書簡1通	岩崎又右衛門宛	山内修理太夫忠直
5-4	57	9月14日	書簡1通	岩崎又右衛門宛	山内修理太夫忠直
5-5	58	9月14日	言上書1通	岩崎又右衛門宛	柴田覚右衛門
5-6	59	9月16日	御書1通	岩崎又右衛門宛	柴田覚右衛門
5-7	60	9月16日	御書1通	岩崎又右衛門宛	松平対馬守忠義
5-8	61	9月18日	御書1通	前野孫兵衛他宛	忠義
5-9	62	9月28日	御書1通	岩崎又右衛門宛	松平対馬守忠義
5-10	63	9月28日	御書1通	岩崎又右衛門宛	柴田覚右衛門
6	長帳 17	甲第 17 号	寛永 12 年分編年文書 1 冊	《山内家文書No.長帳-17/p.223》	
6-1	46	10月13日	御書1通	野中玄蕃宛	忠義
7	長帳 79	甲第 78 号	寛文 4 年(4)分編年文書 1 冊	《山内家文書No.長帳-79/p.225》	
7-1	264	10月2日	言上書1通	池田木工宛	山内式部安豊
7-2	265	10月2日	到来状1通	松平対馬守宛	尾張中納言光義
7-3	266	10月2日	御書1通	松平筑後守宛	松平対馬守忠義
7-4	267	10月8日	御書1通	酒井雅楽頭宛	松平土佐守忠義
7-5	268	10月8日	言上書1通	忠豊宛	松平筑後守豊昌
7-6	269	10月8日	言上書1通	忠豊宛	松平筑後守豊昌
7-7	270	10月8日	到来状1通	村越長門守他宛	松平土佐守忠義
7-8	271	10月8日	御書1通	松平対馬守宛	松平土佐守忠義
7-9	272	10月8日	言上書1通	生駒木工宛	山内修理太夫忠直
7-10	273	10月9日	言上書1通	生駒木工宛	山内右近太夫豊直
7-11	305	霜月10日	言上書1通	生駒木工宛	山内次郎太夫一泰
8	長帳 93	甲第 92 号	延宝年間(中)分編年文書 1 冊	《山内家文書No.長帳-93/p.225》	
8-1	21	5年10月10日	御書付1通	松平土佐守他宛	山内右近太夫
8-2	22	5年10月10日	御書付1通	松平土佐守他宛	山内右近太夫
8-3	23	5年10月14日	到来状1通	松平土佐宛	松新太郎
8-4	24	5年10月23日	御書1通	大場彦三郎宛	松平土佐守豊昌
8-5	25	5年10月27日	御書1通	大庭彦三郎宛	松平土佐守豊昌
8-6	26	5年10月28日	到来状1通	松土州宛	松新太郎
8-7	29	5年11月19日	到来状1通	松下彦四郎他宛	山内式部安豊
8-8	32	5年12月6日	言上書1通	土州宛	山内大膳直久
8-9	33	5年12月12日	御書1通	大庭彦三郎宛	松平土佐守豊昌
8-10	34	5年12月16日	言上書1通	土州宛	山内大膳直久

- 8-11 35 5年閏12月2日 御書1通 大庭彦三郎宛 松平土佐守豊昌
 8-12 37 5年閏12月27日 御書1通 大庭彦三郎宛 松平土佐守豊昌
 8-13 4 6年2月18日 御書1通 大庭彦三郎宛 土佐豊昌
 8-14 5 6年2月19日 書狀之写1通 大庭彦三郎方より
 9 長帳 94 甲第93号 延宝年間(下)分編年文書 1冊 《山内家文書No.長帳-94/p.225》
 9-1 * 月日なし 覚書1通
 9-2 26 8年8月29日 御書1通 松平土佐守宛 酒井雅楽頭
 9-3 27 8年閏8月11日 御書1通 松平土佐守宛 酒井雅楽頭
 9-4 28 8年閏8月26日 御書1通 松平土佐守宛 酒井雅楽頭
 10 長帳 18 甲第18号 寛永13年分編年文書 1冊 《山内家文書No.長帳-18/p.223》
 10-1 13 4月3日 御書1通 野中玄蕃宛 松平対馬守忠豊
 10-2 14 卯月14日 御書1通 野中玄蕃宛 対馬守忠豊
 10-3 15 卯月16日 書簡1通 松平土佐守宛 内藤伊賀守忠定
 10-4 16 卯月17日 書簡1通 土州宛 山内豊前守一唯
 10-5 17 卯月28日 御書1通 野中主計他三名宛 忠義
 10-6 18 卯月晦日 御書1通 野々村七兵衛宛 松平対馬守忠豊
 10-7 19 5月9日 書狀1通 土佐守宛 稻葉権佐政吉
 10-8 20 6月6日 御書1通 前野弥五兵衛他宛 忠義
 10-9 21 6月8日 書簡1通 松平土佐守宛 松平隠岐守定行
 10-10 66 極月26日 書簡1通 松平土佐守宛 中根伝七郎
 10-11 67 12月27日 書簡1通 土佐守宛 松田善右衛門
 11 長帳 28 甲第29号 正保4年分編年文書 1冊 《山内家文書No.長帳-28/p.223》
 11-1 39 卯月11日 言上書1通 岩崎又右衛門宛 伊藤玄丞
 11-2 41 5月12日 書簡1通 生駒木工宛 山内修理太夫忠直
 11-3 91 12月晦日 書簡1通 土州宛 山内豊前守一唯

《土佐山内家宝物資料館フィルム No.2》

- 1 長帳 29 甲第30号ノ1 慶安元年(上)分編年文書 1冊 《山内家文書No.長帳-29/p.223》
 1-1 6 2月25日 御書1通 野中主計宛 忠義
 1-2 7 2月25日 御書1通 小倉少介他宛 忠義
 1-3 21 3月22日 言上書1通 岩崎又右衛門宛 山内修理太夫忠直
 1-4 23 卯月朔日 書簡1通 岩崎又右衛門宛 山内修理太夫忠直
 1-5 24 卯月朔日 御書1通 岩崎又右衛門宛 松平対馬守忠豊
 1-6 26 卯月14日 御書1通 岩崎又右衛門宛 松平対馬守忠豊
 1-7 27 卯月14日 書簡1通 土州宛 山内豊前守一唯
 1-8 28 4月15日 書簡1通 岩崎又右衛門宛 山内修理太夫忠直
 1-9 29 4月23日 書簡1通 松平土佐宛 秋山修理亮
 1-10 30 卯月24日 書簡1通 土州宛 山内豊前守一唯
 1-11 31 4月28日 書簡1通 岩崎又右衛門宛 山内修理太夫忠直
 1-12 32 卯月28日 書簡1通 岩崎又右衛門宛 松平対馬守忠豊

1-13	33	4月28日	書簡1通	土州宛 山内豊前守一唯
1-14	36	5月3日	書簡1通	土州宛 山内豊前守一唯
1-15	37	5月3日	御書(自筆)1通	野中玄蕃 宛松対馬守忠豊
1-16	39	5月4日	書簡1通	岩崎又右衛門宛 松平対馬守忠豊
1-17	40	5月8日	書簡1通	岩崎又右衛門宛 松平対馬守忠豊
			(目録と不一致か)	
1-18	41	5月8日	書簡1通	土主宛 山内豊前守一唯
1-19	42	5月19日	御書1通	岩崎又右衛門宛 松平対馬守忠豊
1-20	44	6月6日	書簡1通	高島孫右衛門宛 忠義
1-21	58	7月23日	言上書1通	岩崎又右衛門宛 高島孫右衛門

2 長帳 30 甲第30号ノ2 慶安元年(下)・2年分編年文書 1冊

《山内家文書No.長帳-30/p.224》

2-1	7	2年2月15日	御書1通	岩崎又右衛門宛 松平対馬守忠豊
2-2	14	2年3月27日	到来状1通	土州宛 山内豊前守一唯
2-3	15	2年3月27日	到来状1通	岩崎又右衛門宛 山内修理太夫忠直
2-4	16	2年5月2日	御書1通	野中主計宛 松平対馬守忠豊
2-5	19	2年5月21日	御書1通	野中主計他宛 忠義
2-6	20	2年5月22日	御書1通	岩崎又右衛門宛 松平対馬守忠豊
2-7	21	2年5月25日	御書1通	岩崎又右衛門宛 松平対馬守忠豊
2-8	22	2年6月5日	御書1通	岩崎又右衛門宛 松平対馬守忠豊
2-9	23	2年6月19日	御書1通	岩崎又右衛門宛 松平対馬守忠豊
2-10	27	2年8月朔日	御書1通	岩崎又右衛門宛 松平対馬守忠豊
2-11	31	2年10月1日	御書1通	岩崎又右衛門宛 山内修理太夫忠直

3 長帳 95 甲第94号 天和元年分編年文書 1冊 《山内家文書No.長帳-95/p.225》

3-1	*	(7月7日封)	覚書1通	
3-2	20	3月16日	到来状1通	土佐守宛 大久保加賀守
3-3	21	4月16日	到来状1通	松平土佐守宛 大久保加賀守
3-4	22	卯月16日	請書下書1通	大久保加賀守宛 松平土佐守
3-5	23	3月16日	覚書下書1通	
3-6	25	3月22日	到来状1通	松平土佐守宛 堀田筑前守
3-7	26	3月22日	返書扣1通	堀田筑前守宛 松平土佐守
3-8	32	(4月14日)	覚書下書1通	豊昌
3-9	53	8月19日	到来状1通	松土州宛 板倉内膳正重道
3-10	57	日付なし	御書下書1通	堀田筑前守宛 松平土佐守
3-11	58	日付なし	御書下書1通	大久保加賀守他宛 松平土佐守
3-12	59	日付なし	御書下書1通	板倉内膳正宛 松平土佐守

〈3-13 撮影史料なし〉

3-14	63	9月24日	到来状1通	松平土佐守宛 老中(堀田・阿部・大久保)
3-15	64	9月25日	到来状1通	松平土佐守宛 堀田筑前守
3-16	65	9月26日	到来状1通	松平土佐守宛 板倉内膳正重道

- 3-17 69 10月21日 御書下書1通 大久保加賀守他宛 松平土佐守豊昌
- 3-18 77 12月5日 到来状1通 松土佐宛 松新太郎
- 4 長帳 96 甲第95号 天和2年分編年文書 1冊 《山内家文書No.長帳-96/p.225》
- 4-1 21 5月12日 添状1通 松平土佐守宛 大久保加賀守忠朝
- 4-2 27 5月28日 到来状1通 松平土佐守宛 阿部豊後守
- 4-3 28 5月28日 願書1通 堀田筑前守他宛 松平土佐守豊昌
- 4-4 29 3年4月27日 添状1通 松平土佐守宛 阿部豊後守
- 4-5 30 3年4月27日 御報扣1通 阿部豊後守宛 松平土佐守豊昌
- 5 長帳 97 甲第96号 天和3年分編年文書 1冊 《山内家文書No.長帳-97/p.225》
- 5-1 16 2月22日 覚書
- 5-2 17 2月21日 到来状1通 松土佐守宛 稻葉石見守正休
- 5-3 18 日付なし 願書雛形1通
- 【撮影番号5-2で撮影】
- 5-4 19 日付なし 願書雛形1通
- 5-5 20 日付なし 親類書雛形1通
- 5-6 21 2月28日 御書1通 山内市正他宛 松平土佐守豊昌
- 5-7 23 2月日 覚書
- 5-8 24 2月28日 御書1通 山内市正他宛 松平土佐守豊昌
- 5-9 37 5月4日 願書扣1通 堀田筑前守他宛 松平土佐守豊昌
- 5-10 38 5月5日 到来状1通 松平土佐守宛 大久保加賀守
- 5-11 39 5月5日 御書扣1通 大久保加賀守宛 松平土佐守
- 5-12 40 5月4日 願書写1通 堀田筑前守他宛 松平土佐守
- 5-13 41 5月4日 到来状1通 松平土佐守宛 加藤平八郎泰亮
- 5-14 43 5月6日 御書1通 山内市正宛 土佐守豊昌
- 6 長帳 28 甲第29号 正保4年分編年文書 1冊 (追加分2点) 《山内家文書No.長帳-28/p.223》
- 6-1 18 2月25日 言上書1通 岩崎又右衛門宛 井上加兵衛他
- 6-2 21 2月28日 御書1通 岩崎又右衛門宛 山内修理太夫忠直
- 7 長帳 29 甲第30ノ1号 慶安元年(上)編年文書 1冊 (追加分2点) 《山内家文書No.長帳-29/p.223》
- 7-1 22 3月29日 書簡1通 松平土佐守宛 山内豊前守一唯
- 7-2 23 4月朔日 書簡1痛 岩崎又右衛門宛 山内修理太夫忠直
- 8 長帳 101 甲第100号 貞享4年分編年文書 1冊 《山内家文書No.長帳-101/p.225》
- 8-1 46 7月6日 御書付1通
- 8-2 47 7月8日 覚1通
- 9 長帳 103 甲第102号 元禄2年(下)分編年文書 1冊 《山内家文書No.長帳-102/p.225》
- 9-1 164 8月18日 書付1通 松平土佐守
- 9-2 166 8月21日 覚書1通 西野惣右衛門
- 9-3 167 8月21日 切紙1通 西野惣右衛門宛 松平美濃守
- 9-4 170 8月26日 伺書写1通 松平土佐守

9-5	171	9月25日	覚書1通	西野惣右衛門
9-6	172	8月26日	覚書写1通	松平土佐守
9-7	173	9月22日	返書1通	松平土佐守宛 阿部豊後守
9-8	174	8月27日	御書1通	松平民部宛 土佐侍従豊昌
9-9	175	8月27日	御書1通	松平民部宛 土佐侍従豊昌
9-10	179	已9月	覚書写1通	松平土佐守宛 老中・勘定奉行連署
9-11	186	9月6日	御状1通	松平土佐守宛 土屋相模守政直
9-12	190	9月11日	御書1通	松平民部宛 土佐侍従豊昌
9-13	197	9月21日	言上書1通	山内久左衛門宛 仙石猪太夫
9-14	198	9月21日	覚書1通	仙石猪太夫
9-15	199	9月21日	覚書1通	仙石猪太夫
9-16	215	10月16日	御書1通	松平民部宛 土佐侍従豊昌
9-17	216	10月17日	手紙之写1通	近藤吉左衛門宛 仙石猪太夫
9-18	217	10月17日	返書1通	戦国猪太夫宛 近藤吉左衛門
9-19	226	10月26日	言上書1通	豊昌宛 松平民部豊房
9-20	231	11月2日	御書1通	大久保加賀守宛 松平土佐守豊昌
9-21	232	11月3日	御書1通	大久保加賀守宛 松平土佐守豊昌
【張付紙面下「無忝奉存候、以上」とあり】				
9-22	233	11月3日	御書1通	松平民部宛 松平土佐守豊昌
9-23	234	11月4日	言上書1通	豊昌宛 松平民部豊房
9-24	235	11月4日	言上書1通	
9-25	244	11月25日	言上書1通	山内彦作他宛 松平民部豊房
10	長帳 105	甲第 104 号	元禄4年(上)編年文書 1冊《山内家文書No.長帳-105/p.225》	
10-1	19	4月14日	御書1通	山内彦作他宛 松平土佐守豊昌
10-2	28	4月29日	御書1通	山内彦作他宛 松平土佐守豊昌
10-3	29	5月3日	御書1通	山内彦作他宛 松平土佐守豊昌
10-4	30	5月3日	御書1通	山内彦作他宛 松平土佐守豊昌
10-5	*	(5月14日)	覚書下書	
10-6	30	5月3日	御書1通	山内彦作他宛 松平土佐守豊昌
【撮影番号 10-4 重複撮影】				
10-7	32	6月22日	御書1通	大庭彦三郎宛 侍従豊昌
10-8	81	7月22日	書状下書2通	
10-9	82	7月22日	言上書1通	山内彦作宛 松平民部豊房
10-10	98	8月6日	御書1通	松平民部大輔宛 土佐守
10-11	99	8月6日	追書1通	松平民部大輔宛 土佐守
10-12	107	8月16日	御書1通	大庭彦三郎宛 侍従豊昌
10-13	125	8月25日	言上書1通	豊昌宛 松平民部大輔豊房
11	長帳 101	甲第 100 号	貞享4年分編年文書 1冊(追加分2点)	
《山内家文書No.長帳-101/p.225》				
11-1	37	5月16日	覚書1通	

- 11-2 39 5月22日 覚書1通
- 12 長帳 110 甲第109号 元禄9年編年文書 1冊 《山内家文書No.長帳-110/p.225》
- 12-1 65 12月9日 覚書1通 (中村返還覚書) 西野惣右衛門
- 12-2 66 12月9日 御書1通 山内源藏他宛 松平土佐守豊昌
- 12-3 67 12月9日 御書3通 山内彦作他宛 松平土佐守豊昌
- 12-4 68 (元禄12年閏9月26日) 覚書1通
- 12-5 69 月日なし 覚書1通 松平土佐守
- 12-9 70 12月9日 御書1通 山内彦作他宛 松平土佐守豊昌
- 13 長帳 97 甲96号 天和3年分編年文書 1冊 (追加分1点) 《山内家文書No.長帳-97/p.225》
- 13-1 * 7月3日 書付1通
- 14 長帳 114 甲第113号 元禄13年分編年文書 1冊 《山内家文書No.長帳-113/p.225》
- 14-1 * 8月14日 書付1通 山内藏人
- 14-2 144 11月23日? 御書扣1通
- 14-3 145 日付なし 御書案文1通
- 14-4 148 11月晦日 願書1通 阿部豊後守宛 松平民部大輔
- 15 長帳 115 甲第114号 元禄14~16年分文書 1冊 1冊 《山内家文書No.長帳-115/p.225》
- 15-1 5 14年3月13日 覚書3通 松平土佐守
*撮影番号15で撮影
- 15-2 12 14年卯月3日 書付1通 仙石伊太夫
- 15-3 12 14年卯月3日 口上之覚
- 15-4 16 14年6月12日 願書扣1通 阿部豊後守他宛 豊房
- 15-5 17 14年6月12日 御書扣1通 阿部豊後守宛 松平土佐守
- 15-6 22 14年8月9日 御書付1通 阿部豊後守宛
- 15-7 3 16年4月29日 御書写1通 阿部豊後守他宛 松平土佐守
- 15-8 4 16年6月24日 到来状1通 松平土佐守宛 松平伊予守綱政
- 15-9 21 16年12月11日 御書1通 阿部豊後守宛 松平土佐守豊房
- 15-10 22/22 16年12月21日 勤怠帳 合冊
- 15-11 24 16年12月28日 御書案文1通 西野他宛 豊房公
*撮影番号15-10で撮影
- 16 長帳 117 甲第116号 宝永元年・2年分編年文書 1冊 《山内家文書No.長帳-117/p.225》
- 16-1 20 元年3月26日 覚1通 生田市郎兵衛宛 西野惣右衛門他
- 16-2 24 元年4月5日 御切紙1通 松平土佐守宛 小笠原佐渡守
- 16-3 25 元年4月29日 願書1通 阿部豊後守他老中宛 松平土佐守
- 17 長帳 118 甲第117号 宝永6・7年分編年文書 1冊 《山内家文書No.長帳-118/p.225》
- 17-1 16 6年丑ノ5月 御書付1通 土屋相模守他老中宛 松平土佐守
【番号なしで撮影】
- 17-2 22 7年4月7日 御切紙1通 松平土佐守宛 井上河内守
- 17-3 23 6年4月27日 願書1通 土屋相模守他老中宛 松平土佐守
- 18 長帳 119 甲第118号 正徳年間分編年文書 1冊 《山内家文書No.長帳-119/p.225》

- 18-1 17 2年10月14日 書付1通
 18-2 18 2年10月9日 御遺言状
 18-3 19 2年10月9日 御遺戒
 18-4 12 6年未6月14日 書付1通
 19 長帳 117 甲第116号宝永元年・2年分編年文書 1冊（追加分8点）
 《山内家文書No.長帳-117/p.225》
 19-1 15 元年2月27日 御書付1通（豊房公遺言）
 19-2～8 41～47 山内九郎太郎赦免一件書類
 20 長帳 33 甲第33号 慶安4年分編年文書 1冊（追加分1点）
 《山内家文書No.長帳-33/p.224》
 20-1 24 2月7日 書簡1通 生駒木工宛 山内修理太夫忠直

【土佐山内家宝物資料館 その3】（2002.8.）

《土佐山内家宝物資料館フィルム No.1》

- 1 長帳 60 甲第59号 万治3年(上)分編年文書 1冊 《山内家文書No.長帳-60/p.224》
 1-1 13 正月9日 御書1通 高嶋孫右衛門・伊藤太郎右衛門宛 忠義
 1-2 28 正月18日 書簡1通 生駒奎宛 山内修理太夫
 1-3 32 正月20日 御書1通 対州様宛 松平筑後守豊昌
 1-4 40 正月28日 御書1通 高嶋孫右衛門・伊藤太郎右衛門宛 忠義
 1-5 48 2月4日 御書1通 松平筑後守宛 松平対馬守忠豊
 1-6 53 2月12日 書簡1通 生駒奎宛 山内右近太夫豊直
 [寛文元年]
 1-7 55 2月16日 御書1通 高嶋孫右衛門・伊藤太郎右衛門宛 忠義
 1-8 56 2月17日 書簡1通 松対州宛 山内豊前守一唯
 1-9 58 2月19日 御書1通 高嶋孫右衛門・伊藤太郎右衛門宛 忠義
 [万治2年]
 1-10 60 2月19日 御書1通 高部全右衛門・同甚介宛 忠義
 1-11 65 2月22日 書状1通 生駒奎宛 山内修理太夫忠直
 1-12 68 2月26日 言上書1通 土州宛 山内豊前守一唯
 1-13 69 2月29日 言上書1通 土州宛 山内豊前守一唯
 2 長帳 61 甲第60号 万治3年(中)分編年文書 1冊 《山内家文書No.長帳-61/p.224》
 2-1 136 4月7日 到来状1通 生駒奎宛 山内修理太夫忠直
 2-2 168 卯月28日 言上書1通 対州宛 山内次郎右衛門一輝
 2-3 193 5月29日 言上書1通 前野七右衛門宛 松平対馬守忠豊
 2-4 200 5月晦日 言上書1通 土州宛 山内豊前守一唯
 2-5 201 6月朔日 御書1通 野中清七宛 対馬守忠豊
 2-6 202 6月朔日 書簡1通 野中伯耆宛 対馬守忠豊
 2-7 203 6月朔日 言上書1通 前野七右衛門宛 松平対馬守忠豊
 2-8 204 6月3日 言上書1通 土州宛 山内次郎右衛門一輝

2-9	205	6月5日	言上書1通	前野七右衛門宛 松下加兵衛正綱
2-10	206	6月5日	言上書1通	土州宛 山内豊前守一唯
2-11	207	6月5日	言上書1通	土州宛 山内次郎右衛門一輝
2-12	208	6月5日	御書1通	前野七右衛門宛 松平対馬守忠豊
2-13	209	6月5日	御書1通	野中伯耆宛 対馬守忠豊
2-14	210	6月5日	御書1通	生駒全宛 山内右近豊直
2-14	211	6月6日	書簡1通	松平対馬守宛 松土佐守忠義

【撮影番号重複】

2-15	225	6月12日	御書1通	松平筑後守宛 松土佐守忠義
2-16	240-1	6月19日	御書控1通	(酒井雅楽守宛 松平土佐守)
2-17	240-2	6月19日	御書控1通	久世大和守宛 松平土佐守
2-18	244	6月20日	御書1通	松平対馬守宛 松土佐守忠義
2-19	247	6月20日	御書控1通	酒井雅楽頭宛 松平土佐守
2-20	248	6月20日	御書控1通	久世大和守宛 松平土佐守
2-21	249	6月20日	御書控1通	関兵部大輔宛 松平土佐守
2-22	250	6月20日	御書控1通	松平出雲守宛 松平土佐守
2-23	251	6月20日	御書控1通	村越長門守・曾根源左右衛門宛 松平土佐守

3 長帳 62 甲第 61 号 万治 3 年(下)分編年文書 1 冊 《山内家文書No.長帳-62/p.224》

3-1	277	7月13日	書簡1通	松平土佐守宛 久世大和守広之
3-2	283	7月15日	御書1通	前野七右衛門宛 松平対馬守忠豊
3-3	285	7月15日	御書1通	野中伯耆宛 対馬守忠豊
3-4	290	7月22日	御書1通	野中伯耆宛 対馬守忠豊
3-5	392	12月25日	書簡1通	土州宛 山内豊前守一唯
3-6	394	12月29日	書簡1通	土州宛 山内豊前守一唯
3-7	395	12月晦日	書簡1通	生駒全宛 山内右近太夫豊直
3-8	396	極月晦日	御書1通	前野七右衛門宛 松平対馬守忠豊
3-9	397	極月晦日	書簡1通	松平土佐守宛 朝比奈左近
3-10	398	12月晦日	書簡1通	土州宛 山内豊前守一唯
3-11	399	極月晦日	書簡1通	前野七右衛門宛 松下加兵衛正綱
3-12	400	極月晦日	御書1通	林三郎右衛門他2名宛 対馬守忠豊

4 長帳 19 甲第 19 号 寛永 14 年分編年文書 1 冊 《山内家文書No.長帳-19/p.223》

4-1	2	正月3日	書簡1通	松平土州宛 鍋島信濃守好茂
4-2	4	正月6日	言上書1通	岩崎又右衛門宛 柴田覚右衛門
【脱あり。「《フィルムNo.1》撮影No.8-1」で取り直し】				
4-3	6	正月6日	書簡1通	岩崎又右衛門宛 山内修理太夫
4-4	7	正月8日	書簡1通	松平土佐守宛 松平出雲守

5 長帳 20 甲第 20 号 寛永 15 年分編年文書 1 冊 《山内家文書No.長帳-20/p.223》

5-1	17	2月12日	書簡1通	岩崎又右衛門宛 山内修理太夫忠直
5-2	42	3月27日	言上書1通	岩崎又右衛門宛 谷川七右衛門・柴田覚

				左衛門	
5-3	43	3月29日	言上書1通	岩崎又右衛門宛 谷川七右衛門・柴田覚 左衛門	
5-4	47	卯月14日	御書1通	岩崎又右衛門宛 松平対馬守忠豊	
5-5	48	卯月14日	言上書1通	岩崎又右衛門宛 谷川七右衛門・柴田覚 左衛門	
5-6	51	4月23日	書簡1通	岩崎又右衛門宛 山内修理太夫忠直	
6	長帳 21	甲第 21 号	寛永 16 年分編年文書	1 冊	《山内家文書No長帳-21/p.223》
6-1	17	卯月25日	書状1通	野中主計宛 忠義	
7	長帳 22	甲第 22 号	寛永 17 年分編年文書	1 冊	《山内家文書No長帳-22/p.223》
7-1	19	3月15日	御書1通	野中主計宛 忠義	
7-2	22	卯月3日	御書1通	河本太郎左右衛門宛 忠義	
7-3	24	卯月14日	御書1通	野中主計他3名宛 忠義	
			【目録番号 28 か】		
7-4	31	卯月24日	御書1通	岩崎又右衛門宛 松平対馬守忠豊	
8	長帳 19	甲第 19 号	寛永 14 年分編年文書	1 冊	《山内家文書No長帳-19/p.223》
8-1	4	正月6日	言上書1通	岩崎又右衛門宛 柴田覚右衛門	
			【「《フィルムNo.1》撮影No.4-2」の再撮影】		
9	長帳 71	甲 70 号	寛文 2 年 (4) 分編年文書	1 冊	《山内家文書No長帳-71/p.224》
9-1	360	11月18日	言上書1通	野中伝右衛門宛 対馬守忠豊	
9-2	361	11月18日	言上書1通	前野七右衛門宛 松平対馬守忠豊	
10	長帳 98	甲第 97 号	貞享元年分編年文書	1 冊	《山内家文書No長帳-98/p.225》
10-1	14	3月22日	書付1通	[覚(朱印下賜関係)]	
10-2	15	3月～12月	1 冊	[言上控書状控之内書抜] ③.23 ~ 12.7	
10-3	22	5月	1 冊	[公儀江被差出御書付写]	
10-4	23	5月11日	書付1通	[土佐国郷村之寄]	
10-5	28	6月10日	御書1通		
11	長帳 102	甲第 101 号	元禄元・2 年 (上) 分編年文書	1 冊	《山内家文書No長帳-102/p.225》
11-1	17	2月9日	願書1通	大久保加賀守他宛 松平土佐守	
11-2	18	2月12日	返書案文1通	大久保加賀守宛 松平土佐守	
11-3	19	2月	御書案文1通	山内源藏他5名宛 土佐守	
11-4	20	2月12日	書状案文1通		
11-5	21		書状案文1通		
11-6	22	2月12日	御書案文1通	山大膳亮宛 松平土佐守	
11-7	23	2月16日	到来状1通	土佐守宛 鳥居播磨守	
11-8	24	2月16日	添別紙1通	土佐守宛 鳥居播磨守	
11-9	25	2月22日	御書案文1通		
11-10	26	2月22日	御書案文1通		
11-11	27	2月22日	御書案文1通		

11-12	28	2月22日	御書1通	山内彦作・孕石小右衛門・桐間兵庫宛 土佐守豊昌
11-13	29	3月朔日	御書1通	山内彦作他2名宛 土佐守豊昌
11-14	30	3月3日	御書1通	松平土佐守宛 阿部豊後守
11-15	31	3月3日	御書案文1通	部豊後守宛 松平土佐守
11-16	32	3月12日	御書1通	山内彦作他2名宛 土佐守豊昌
11-17	33	3月12日	御書1通	山内彦作他2名宛 土佐守豊昌
11-18	34		添1通	[御礼献上物之覚]
11-19	35	3月15日	到来状1通	松平土佐守宛 右大将(転法輪)
11-20	37	3月23日	到来状1通	松平土佐守宛 右大将
11-21	38	3月26日	御書1通	山内彦作他2名宛 土佐守豊昌
11-22	40	3月28日	到来状1通	松平土佐守殿 右大将
11-23	42	4月18日	御書1通	山内彦作他2名宛 土佐守豊昌
11-24	56	5月25日	言上書1通	豊昌宛 松平民部豊房
11-25	57	5月25日	言上書案文1通	
11-26	68	6月10日	御書1通	松平民部宛 土佐侍従
11-27	71	6月13日	言上書1通	豊昌宛 松平民部豊房
11-28	74	6月13日	言上書1通	豊昌宛 松平民部豊房
11-29	76	6月13日	言上書1通	森岡七丞宛 大庭彦三郎
11-30	77	6月13日	覚書1通	森岡七丞宛 大庭彦三郎
11-31	82	6月23日	言上書案文1通	豊昌宛 松平民部
11-32	83	6月23日	言上書案文1通	
11-33	91	6月29日	御書1通	大庭彦三郎宛 侍従豊昌
12	長帳 108	甲第 107 号	元禄 6 年分編年文書	1 冊 《山内家文書No.長帳-108/p.225》
12-1	17	3月16日	御追書1通	山内彦作・桐間将監宛 土佐守豊昌
12-2	19	3月28日	御書1通	山内彦作・桐間将監宛 土佐守豊昌
12-3	32	5月26日	書付1通	森岡七丞宛 大庭彦三郎
12-4	46	6月~12月	書付25通	[民部大輔様(豊房公)御容躰書]
6.14/6.26/7.3/7.11/8.2/8.4/8.11/8.16/8.21/8.28/9.3/9.4/9.7/9.15/9.19/ 10.3/10.15/10.25/11.3/11.15/11.28/12.7/12.12/12.15/12.28				
12-5	59	7月10日	言上書1通	豊昌宛 松平民部大輔豊房
13	長帳 23	甲第 23 号	寛永 18 年・19 年分編年文書	1 冊 《山内家文書No.長帳-23/p.223》
[寛永 18 年]				
13-1	42	8月4日	御書1通	野中主計他4名宛 忠義
13-2	43	8月4日	御書1通	松平対馬守宛 松平土佐守忠義
13-3	48	9月28日	書状1通	岩崎又右衛門宛 松平対馬守忠豊
13-4	50	10月25日	御書1通	野中主計宛 忠義
13-5	49	霜月22日	書状1通	岩崎又右衛門宛 松平対馬守忠豊
[寛永 19 年]				
13-6	55	2月5日	御書1通	小倉小介宛 忠義

13-7	60	3月15日	御書1通	野中主計他3名宛 忠義
13-8	61	3月17日	御書1通	岩崎又右衛門宛 松平対馬守忠豊
13-9	62	卯月10日	御書1通	野中主計宛 忠義
13-10	65	卯月19日	御書1通	前野弥五兵衛他 忠義
13-11	66	卯月23日	御書1通	野中主計宛 忠義
13-12	83	8月10日	御書1通	岩崎又右衛門宛 松平対馬守忠豊
13-13	72	閏9月朔日	書簡1通	岩崎又右衛門宛 山内修理太夫忠直
13-14	89	11月23日	書簡1通	岩崎又右衛門宛 山内修理太夫忠直
14	長帳 59	甲第 58 号	万治 2 年 (5) 分編年文書	1冊 《山内家文書No.長帳-59/p.224》
14-1	385	11月24日	言上書1通	吉田猪右衛門宛 高崎孫右衛門・伊藤太郎右衛門
14-2	386	11月24日	書簡1通	松平土佐守宛 小倉忠右衛門
14-3	387	11月25日	書簡1通	松平対馬守宛 松平河内守定頼
14-4	393	11月29日	書簡1通	生駒壱宛 山内修理太夫忠直
14-5	404	極月朔日	御書1通	野中伯耆宛 忠義
14-6	405	極月朔日	御書1通	高崎孫右衛門・伊藤太郎右衛門宛 忠義
14-7	409	極月4日	書簡1通	松平対馬守宛 木下左近
14-8	410	12月4日	書簡1通	生駒壱宛 山内修理太夫忠直
14-9	422	極月16日	御書1通	高崎孫右衛門・伊藤太郎右衛門宛 忠義
14-10	424	12月20日	書簡1通	生駒壱宛 山内修理太夫忠直
14-11	426	12月23日	書簡1通	松平土佐守宛 中根宗閑
14-12	428	12月24日	言上書1通	吉田猪左衛門宛 高崎孫右衛門・伊藤太郎右衛門
15	長帳 111	甲第 110 号	元禄 10 年分編年文書	1冊 《山内家文書No.長帳-111/p.225》
15-1	1	正月12日	言上書1通	森岡七丞宛 山内彦作・桐間将監・山内半右衛門
15-2	3	正月18日	御書1通	山内彦作他2名宛 民部大輔豊房
15-3	4	正月25日	御書1通	山内彦作他2名宛 土佐守豊昌
15-4	5	正月25日	御書1通	山内彦作他5名宛 土佐守豊昌
15-5	6	正月28日	言上書1通	森岡七丞宛 山内彦作・桐間将監・山内半左衛門
15-6	19	3月27日	書付1通	[覚 山内豊昌自筆書付]
15-7	24	4月15日	書付1通	[覚 山内豊昌自筆添書]
15-8	25	4月15日	書付1通	[領地宛行状写]
15-9	26	卯月16日	御書控1通	阿部豊後守宛 松平土佐守
16	長帳 112	甲 111 号	元禄 11 年分編年文書	1冊 《山内家文書No.長帳-112/p.225》
16-1	11	7月11日	書付1通	[山内主膳様地方知行拝領二付御請取之郷村帳]

【土佐山内家宝物資料館 その4】(2003.8.)

《土佐山内家宝物資料館フィルムNo.1》

- 1 長帳3 甲第3号 元和年間(上)分編年文書 1冊(元和元~3年 抜粋)

《山内家文書No.長帳-3/p.223》

- 616-1-6 元和2年4月3日 高木平七ヨリ生駒木工宛書状
616-1-8 元和2年5月2日 山内吉兵衛(良豊)ヨリ生駒木工宛書状
616-1-10 元和2年5月29日 高木平七ヨリ生駒木工宛書状
617-1-3 元和3年卯月25日 山内伊豆守(一唯)ヨリ土州宛書状
617-1-4 元和3年卯月18日 山内伊豆守(一唯)ヨリ土州宛書状
617-1-10 元和2年6月3日 土井大炊頭ヨリ松土佐守宛書状

- 2 長帳4 甲第4号 元和年間(中)分編年文書 1冊(元和4~8年 抜粋)

《山内家文書No.長帳-4/p.223》

- 618-1-10 元和4年10月19日 忠義ヨリ山内壱岐・福岡丹波宛書状
619-1-1 元和5年正月14日 忠義ヨリ餘太之介他7名宛書状
619-1-2 元和5年正月15日 山内備後他4名ヨリ野々村勘七宛書状
619-1-3 元和5年正月16日 修理ヨリ道口番之者中宛書状

- 3 長帳13 甲第13号 寛永9年(上)分編年文書 1冊(抜粋)

《山内家文書No.長帳-13/p.223》

- 632-1-29 寛永9年4月晦日 松平美作守ヨリ之覚書
632-1-30 寛永9年卯月晦日 孕石内蔵佐・孕石小右衛門ヨリ岩崎又右衛門宛書状
632-1-31 寛永9年卯月晦日 松平対馬守忠豊ヨリ岩崎又右衛門宛書状

- 4 長帳20 甲第20号 寛永15年分編年文書 1冊(抜粋)

《山内家文書No.長帳-20/p.223》

- 寛永15-9 寛永15年2月2日 忠義ヨリ野中主計宛書状
寛永15-88 寛永15年9月18日 谷川七左衛門・柴田覚右衛門ヨリ岩崎又右衛門宛書状

- 5 長帳22 甲第22号 寛永17年分編年文書 1冊(抜粋)

《山内家文書No.長帳-22/p.223》

- 寛永17-* 寛永17年卯月19日 忠義ヨリ野中主計他3名宛書状
寛永17-33 寛永17年卯月28日 忠義ヨリ河本太郎右衛門宛書状

- 6 長帳23 甲第23号 寛永18・19年分編年文書 1冊(抜粋)

《山内家文書No.長帳-23/p.223》

- 寛永18-46 寛永18年9月16日 忠義ヨリ小倉勝介宛書状

- 7 長帳29 甲第30号 慶安元年(上)分編年文書 1冊(抜粋)

《山内家文書No.長帳-29/p.223》

- 慶安元-39 慶安元年5月4日 松平対馬守忠豊ヨリ岩崎又右衛門宛書状

- 8 長帳59 甲第58号 万治2年(5)分編年文書 1冊(抜粋)

《山内家文書No.長帳-59/p.224》

- 万治2-413 万治2年12月5日 山内豊前守一唯ヨリ対州宛書状

- 9 長帳60 甲第59号 万治3年(上)分編年文書 1冊(抜粋)

《山内家文書No.長帳-60/p.224》

万治 3-50 万治 3 年 2 月 7 日 山内修理大夫忠直ヨリ対州宛書状

10 長帳 69 甲第 68 号 寛文 2 年 (2) 分編年文書 1 冊 (抜粋)

【撮影No.9で撮影】

《山内家文書No.長帳-69/p.224》

寛文 2-200 寛文 2 年卯月 8 日 忠義ヨリ高島孫右衛門・由比茂右衛門宛書状

寛文 2-223 寛文 2 年 4 月 27 日 山内修理大夫忠直ヨリ生駒木工宛書状

11 長帳 70 甲第 69 号 寛文 2 年 (3) 分編年文書 1 冊 (抜粋)

《山内家文書No.長帳-70/p.224》

寛文 2-299 寛文 2 年 6 月 27 日 山内豊前守一唯ヨリ土州宛書状

12 長帳 71 甲第 70 号 寛文 2 年 (4) 分編年文書 1 冊 (抜粋)

《山内家文書No.長帳-71/p.224》

寛文 2-305 寛文 2 年 7 月 11 日 忠義ヨリ高島孫右衛門・伊藤太郎右衛門宛書状

寛文 2-306 寛文 2 年 7 月 11 日 松土佐守忠義ヨリ松平対馬守宛書状

寛文 2-309 寛文 2 年 7 月 11 日 忠義ヨリ野中伝右衛門宛御書

寛文 2-330 寛文 2 年 8 月 3 日 山内豊前守忠直ヨリ土州宛言上状

寛文 2-350 寛文 2 年 9 月 24 日 松平対馬守忠義ヨリ松平筑後守宛御書

寛文 2-351 寛文 2 年 9 月 24 日 松平対馬守忠義ヨリ前野七右衛門宛言上書

寛文 2-352 寛文 2 年 9 月 27 日 山内右近大夫豊直ヨリ生駒木工宛言上書

寛文 2-383 寛文 2 年極月 10 日 忠義ヨリ高部金右衛門宛御書

寛文 2-385 寛文 2 年極月 15 日 松土佐守忠義ヨリ松平対馬守宛御書

13 長帳 75 甲第 74 号 寛文 3 年 (4) 分編年文書 1 冊 (抜粋)

《山内家文書No.長帳-75/p.224》

寛文 3-351 寛文 3 年 9 月 13 日 松土佐守忠義ヨリ松平対馬守宛御書

寛文 3-550 寛文 3 年 12 月 28 日 松平出雲守・中根宗閑ヨリ松平土佐守宛到来状

14 長帳 76 甲第 75 号 寛文 4 年 (1) 分編年文書 1 冊 (抜粋)

《山内家文書No.長帳-76/p.224》

寛文 4-27 寛文 4 年 2 月 11 日 山内修理大夫忠直ヨリ生駒木工宛言上書

15 長帳 77 甲第 76 号 寛文 4 年 (2) 分編年文書 1 冊 (抜粋)

《山内家文書No.長帳-77/p.224》

寛文 4-130 寛文 4 年 5 月 9 日 山内式部ヨリ生駒木工宛言上書

16 長帳 79 甲第 80 号 寛文 4 年 (4) 分編年文書 1 冊 (抜粋)

《山内家文書No.長帳-79/p.225》

寛文 4-285 寛文 4 年 10 月 25 日 桐間兵庫・並河志摩ヨリ前野七右衛門宛言上書

寛文 4-286 寛文 4 年 10 月 25 日 松平対馬守忠義ヨリ松平筑後守御書

寛文 4-287 寛文 4 年 10 月 25 日 対馬守忠義ヨリ山下下総・孕石頼母宛御書

寛文 4-288 寛文 4 年 10 月 25 日 由比藤右衛門他 2 名ヨリ前野七右衛門宛言上書

寛文 4-294 寛文 4 年 11 月 8 日 松平土佐守忠義ヨリ中根宗閑宛御書

寛文 4-298 寛文 4 年 11 月 8 日 松平土佐守忠義ヨリ松平対馬守宛御書

寛文 4-310 寛文 4 年 11 月 11 日 松平勝山ヨリ松平土佐守宛到来状

寛文 4-313 寛文 4 年 11 月 19 日 対馬守忠義ヨリ山下下総他 3 名宛御書

17 長帳 3 甲第 3 号 元和年間（上）分編年文書 1 冊 （抜粋）

《山内家文書No.長帳-3/p.223》

- 615-1-16 元和元年 5 月 13 日 山修理ヨリ松土佐守宛書状
- 616-1-4 元和 2 年 3 月晦日 山内吉兵衛秀豊ヨリ監物宛書状
- 616-1-7 元和 2 年卯月 9 日 加田越後ヨリ山備後宛書状
- 616-1-11 元和 2 年 6 月 4 日 山吉兵衛ヨリ生駒木工宛書状
- 616-1-12 元和 2 年 6 月 7 日 樋口関大夫・真鍋善右衛門ヨリ勘七宛書状
- 616-1-13 元和 2 年 6 月 7 日 山内吉兵衛ヨリ生駒木工宛書状
- 616-1-14 元和 2 年 6 月 11 日 山内吉兵衛ヨリ生駒木工宛書状
- 616-1-15 元和 2 年 6 月 13 日 山内吉兵衛ヨリ生駒木工宛書状
- 616-1-17 元和 2 年 6 月 16 日 山内吉兵衛ヨリ木工宛書状
- 616-1-16 元和 2 年 6 月 14 日 山内吉兵衛ヨリ生駒木工宛書状
- 616-1-18 元和 2 年 6 月 16 日 山吉兵衛ヨリ真鍋善右衛門他 3 名宛書状
- 616-1-19 元和 2 年 6 月 19 日 山内吉兵衛ヨリ木工宛書状
- 616-1-20 元和 2 年 6 月 26 日 本多上野介正純ヨリ松平土佐守宛書状
- 616-1-20 / 2 元和 2 年 7 月 11 日 修理ヨリ山内対馬守宛書状
- 616-1-21 元和 2 年 7 月 15 日 山内吉兵衛ヨリ生駒木工宛書状

18 長帳 80 甲第 79 号 寛文 5 年（上）分編年文書 1 冊 （抜粋）

《山内家文書No.長帳-80/p.225》

寛文 5-44 寛文 5 年卯月 20 日 対馬守忠豊ヨリ山内下総他 3 名宛御書

19 長帳 83 甲第 82 号 寛文 6 年（下）分編年文書 1 冊 （抜粋）

《山内家文書No.長帳-83/p.225》

寛文 6-148 寛文 6 年 9 月 19 日 松対馬守忠豊ヨリ松平土佐守宛御書

20 長帳 84 甲第 83 号 寛文 7 年（上）分編年文書 1 冊 （抜粋）

《山内家文書No.長帳-84/p.225》

- 寛文 7-55 寛文 7 年 3 月 12 日 対馬守忠豊ヨリ百々刑部他 3 名宛御書
- 寛文 7-58 寛文 7 年 3 月 12 日 仁賀保内記誠次ヨリ松対馬守宛到来状
- 寛文 7-60 寛文 7 年 3 月 13 日 諏訪彦兵衛定直ヨリ松対馬守宛到来状
- 寛文 7-61 寛文 7 年 3 月 14 日 吉良若狭守義冬ヨリ松平対馬守宛到来状
- 寛文 7-62 寛文 7 年 3 月 15 日 酒井日向守ヨリ松平対馬守宛到来状
- 寛文 7-63 寛文 7 年 3 月 15 日 高木伊勢守ヨリ松平対馬守宛到来状
- 寛文 7-64 寛文 7 年 3 月 15 日 松平備前守ヨリ松平対馬守宛到来状
- 寛文 7-65 寛文 7 年 3 月 16 日 横田次郎兵衛ヨリ松平対馬守宛到来状
- 寛文 7-66 寛文 7 年 3 月 16 日 朝比奈勘右衛門ヨリ対州宛到来状
- 寛文 7-67 寛文 7 年 3 月 17 日 北条安房守氏長ヨリ松平対馬守宛到来状
- 寛文 7-68 寛文 7 年 3 月 18 日 神尾内膳元清ヨリ松平対馬守宛到来状
- 寛文 7-72 寛文 7 年 3 月 24 日 土佐守豊昌ヨリ孕石頼母他 3 名宛御書
- 寛文 7-73 寛文 7 年 3 月 24 日 土佐守豊昌ヨリ百々刑部他 3 名宛御書
- 寛文 7-76 寛文 7 年 3 月 28 日 百々刑部他 3 名ヨリ吉田猪右衛門宛言上書
- 寛文 7-87 寛文 7 年 4 月 15 日 土佐守豊昌ヨリ孕石頼母他 3 名宛御書

寛文 7-88 寛文 7 年 4 月 15 日 土佐守豊昌ヨリ百々刑部他 3 名宛御書
 寛文 7-89 寛文 7 年 4 月 15 日 津田長四郎ヨリ松平対馬守宛到来状
 寛文 7-93 寛文 7 年 4 月 22 日 土佐守豊昌ヨリ孕石頼母他 3 名宛書状
 寛文 7-95 寛文 7 年卯月 22 日 対馬守忠豊ヨリ百々刑部他 3 名宛書状
 寛文 7-100 寛文 7 年 5 月 9 日 対馬守忠豊ヨリ百々刑部他 3 名宛書状
 寛文 7-105 寛文 7 年 5 月 13 日 対馬守忠豊ヨリ孕石頼母他 3 名宛書状

21 長帳 85 甲第 84 号 寛文 7 年（下）分編年文書 1 冊（抜粹）

《山内家文書No.長帳-85/p.225》

寛文 7-234 寛文 7 年 9 月 25 日 松平土佐守ヨリ忠豊宛言上書写
 寛文 7-245 寛文 7 年神無月 15 日 松平対馬守忠豊ヨリ松平土佐守宛御書
 寛文 7-246 寛文 7 年 10 月 15 日 松平土佐守 「申定」
 寛文 7-248 寛文 7 年 10 月 16 日 松平土佐守豊昌ヨリ忠豊宛言上書
 寛文 7-258 寛文 7 年 10 月 21 日 松平美作守定房ヨリ松平対馬守宛到来状
 寛文 7-262 寛文 7 年 10 月 25 日 松平備前守ヨリ松平対馬守宛到来状
 寛文 7-274 寛文 7 年 12 月 3 日 土佐守ヨリ孕石頼母・百々刑部宛御書

22 長帳 87 甲第 86 号 寛文 8 年（下）分編年文書 1 冊（抜粹）

《山内家文書No.長帳-87/p.225》

寛文 8-161 寛文 8 年 7 月 29 日 石丸石見守定次ヨリ松平対馬守宛到来状
 寛文 8-165 寛文 8 年 7 月晦日 松平丹後守光茂ヨリ松平対馬守宛到来状
 寛文 8-167 寛文 8 年 8 月 5 日 丹羽若狭守長次ヨリ松平対馬守宛到来状
 寛文 8-177 寛文 8 年 8 月 12 日 山内右近大夫豊直ヨリ対州宛到来状

23 長帳 88 甲第 87 号 寛文 9 年分編年文書 1 冊（抜粹）

《山内家文書No.長帳-88/p.225》

寛文 9-5 寛文 9 年正月 18 日 対馬守忠豊ヨリ孕石頼母他 2 名宛御書
 寛文 9-15 寛文 9 年 2 月 15 日 土佐守豊昌ヨリ孕石頼母他 2 名宛御書
 寛文 9-36 寛文 9 年 7 月 14 日 土佐守豊昌ヨリ孕石頼母・安田弥一右衛門宛到来状
 寛文 9-37 寛文 9 年 8 月 22 日 土佐守豊昌ヨリ孕石頼母宛到来状
 寛文 9-38 寛文 9 年 8 月 22 日 松平美作守ヨリ松平土佐守宛到来状
 寛文 9-39 寛文 9 年 8 月 22 日 土佐守ヨリ孕石頼母宛御書

24 長帳 89 甲第 88 号 寛文 10 年分編年文書 1 冊（抜粹）

《山内家文書No.長帳-89/p.225》

寛文 10-10 寛文 10 年 3 月 6 日 土佐守豊昌ヨリ孕石頼母宛御書
 寛文 10-11 寛文 10 年 3 月 6 日 土佐守豊昌ヨリ孕石頼母他 3 名宛御書
 寛文 10-15 寛文 10 年 4 月 28 日 土佐守豊昌ヨリ孕石頼母他 3 名宛御書
 寛文 10-17 寛文 10 年⑤月 22 日 覚書（御帰城より御発籠迄）

25 長帳 90 甲第 89 号 寛文 11 年分編年文書 1 冊（抜粹）

《山内家文書No.長帳-90/p.225》

寛文 11-3 寛文 11 年正月 28 日 土佐守豊昌ヨリ孕石頼母他 3 名宛御書
 寛文 11-5 寛文 11 年 2 月 11 日 土佐守豊昌ヨリ孕石頼母・桐間兵庫宛御書

寛文 11-6 寛文 11 年 2 月 18 日 土佐守豊昌ヨリ孕石頼母他 3 名宛御書
 寛文 11-7 寛文 11 年 2 月 18 日 土佐守豊昌ヨリ孕石頼母他 3 名宛御書
 寛文 11-8 寛文 11 年 2 月 21 日 土佐守豊昌ヨリ孕石頼母他 3 名宛御書
 寛文 11-9 寛文 11 年 2 月 21 日 土佐守豊昌ヨリ孕石頼母・桐間兵庫宛御書
 寛文 11-18 寛文 11 年 5 月 7 日 土佐守豊昌ヨリ孕石頼母他 3 名宛御書
 寛文 11-19 寛文 11 年 5 月 7 日 土佐守豊昌ヨリ孕石頼母・桐間兵庫宛御書
 寛文 11-20 寛文 11 年 5 月 7 日 土佐守豊昌ヨリ孕石頼母他 3 名宛御書
 寛文 11-42 寛文 11 年 11 月 16 日 土佐守豊昌ヨリ大庭彦三郎・臼井半之介宛御書

26 長帳 91 甲第 90 号 寛文 12 年分編年文書 1 冊 (抜粋)

《山内家文書No-91/p.225》

寛文 11-11 寛文 12 年 5 月朔日 土佐守豊昌ヨリ孕石頼母他 3 名宛御書

27 長帳 105 甲第 104 号 元禄 4 年 (上) 分編年文書 1 冊 (抜粋)

《山内家文書No. 105/p.225》

元禄 4-28 元禄 4 年 4 月 29 日 土佐守豊昌ヨリ山内彦作他 3 名宛御書
 元禄 4-29 元禄 4 年 5 月 3 日 土佐守豊昌ヨリ山内彦作他 3 名宛御書
 元禄 4-98 元禄 4 年 8 月 6 日 土佐守ヨリ松平民部大輔宛御書
 元禄 4-99 元禄 4 年 8 月 6 日 土佐守ヨリ松平民部大輔宛追書

28 長帳 116 甲第 115 号 元禄年間年次未詳分編年文書 1 冊 (抜粋)

《山内家文書No. 105/p.225》

未詳-65 9 月 27 日 松平民部大輔豊房ヨリ豊昌宛御書
 未詳-66 9 月晦日 松平民部大輔豊房ヨリ豊昌宛御書
 未詳-67 11 月 10 日 松平民部大輔豊房ヨリ豊昌宛御書
 未詳-71 10 月 12 日 土佐守ヨリ松平民部大輔宛御書
 未詳-83 霜月 10 日 松平民部大輔豊房ヨリ豊昌宛言上書
 未詳-92 12 月 9 日 神尾市左衛門ヨリ松平土佐守宛到来状

《土佐山内家宝物資料館フィルムNo. 2》

1 伺書及老中付紙類 文政 5 年 9 月 26 日 仮番号：文政－11

老中付紙類 文政 5 年分 1 点 (願書差戻 1 点) 《山内家文書No. 老中付紙類 p.198》

2 伺書及老中付紙類 嘉永元年 9 月 6 日 仮番号：嘉永－2－1,2

老中付紙類 嘉永元年分 15 点 (伺書 13 点、願書 1 点他) 《山内家文書No. 老中付紙類 p.199》

3 伺書及老中付紙類 嘉永元年 9 月 6 日 仮番号：嘉永－3－1,2

老中付紙類 嘉永元年分 15 点 (伺書 13 点、願書 1 点他) 《山内家文書No. 老中付紙類 p.199》

4 伺書及老中付紙類 嘉永元年 9 月 12 日 仮番号：嘉永－4－1,2

老中付紙類 嘉永元年分 15 点 (伺書 13 点、願書 1 点他) 《山内家文書No. 老中付紙類 p.199》

5 伺書及老中付紙類 嘉永元年 9 月 29 日 仮番号：嘉永－5－1,2

老中付紙類 嘉永元年分 15 点 (伺書 13 点、願書 1 点他) 《山内家文書No. 老中付紙類 p.199》

6 伺書及老中付紙類 嘉永元年 12 月 25 日 仮番号：嘉永－11－1,2

老中付紙類 嘉永元年分 15 点 (伺書 13 点、願書 1 点他) 《山内家文書No. 老中付紙類 p.199》

- 7 伺書及老中付紙類 嘉永元年12月27日 仮番号：嘉永－12－1,2
老中付紙類 嘉永元年分15点(伺書13点、願書1点他)《山内家文書No老中付紙類 p.199》
- 8 伺書及老中付紙類 嘉永元年12月27日 仮番号：嘉永－13－1,2
老中付紙類 嘉永元年分15点(伺書13点、願書1点他)《山内家文書No老中付紙類 p.199》
- 9 伺書及老中付紙類 嘉永元年12月28日 仮番号：嘉永－14－1,2
老中付紙類 嘉永元年分15点(伺書13点、願書1点他)《山内家文書No老中付紙類 p.199》
- 10 伺書及老中付紙類 嘉永2年正月8日 仮番号：嘉永－15－1,2
老中付紙類 嘉永2年分14点(伺書14点) 《山内家文書No老中付紙類 p.199》
- 11 伺書及老中付紙類 嘉永2年正月18日 仮番号：嘉永－19－1,2
老中付紙類 嘉永2年分14点(伺書14点) 《山内家文書No老中付紙類 p.199》
- 12 伺書及老中付紙類 嘉永2年正月29日 仮番号：嘉永－20－1,2
老中付紙類 嘉永2年分14点(伺書14点) 《山内家文書No老中付紙類 p.199》
- 13 伺書及老中付紙類 嘉永2年2月13日 仮番号：嘉永－22－1,2
老中付紙類 嘉永2年分14点(伺書14点) 《山内家文書No老中付紙類 p.199》
- 14 伺書及老中付紙類 嘉永2年2月13日 仮番号：嘉永－23－1,2
老中付紙類 嘉永2年分14点(伺書14点) 《山内家文書No老中付紙類 p.199》
- 15 伺書及老中付紙類 嘉永2年2月19日 仮番号：嘉永－24－1,2
老中付紙類 嘉永2年分14点(伺書14点) 《山内家文書No老中付紙類 p.199》
- 16 伺書及老中付紙類 嘉永2年4月12日 仮番号：嘉永－26－1,2
老中付紙類 嘉永2年分14点(伺書14点) 《山内家文書No老中付紙類 p.199》
- 17 覚(代替時の財政大積) 天保14年3月 《山内家文書Noその他文書類 p.211》
- 18 書式覚 天和2年4月 1冊 (芝御屋鋪ヨリ出火火消人数行列他)
仮番号：火事1 《山内家文書No書式覚 p.215》
- 19 書式覚 天和2年4月 1冊 (増上寺火之御番被仰合之覚書他) 仮番号：火事2
《山内家文書No書式覚 p.215》
- 20 書式覚 天和3年正月 1冊 (増上寺方分之絵図) 仮番号：火事4
《山内家文書No書式覚 p.215》
- 21 書式覚 不詳 1冊 (於増上寺御馬立場之絵図) 仮番号：火事6
《山内家文書No書式覚 p.215》
- 22 書式覚 不詳 1冊 (火事之節御上屋鋪御姫様御退被成候御行列他)
仮番号：火事7 《山内家文書No書式覚 p.215》
- 23 書式覚 不詳1冊(公方様増上寺江御参詣並芝筋江御成之節火之番御勤被成様之下知
状他) 仮番号：火事8 《山内家文書No書式覚 p.215》
- 24 書式覚 不詳 1冊 (芝御屋敷ヨリ増上寺火消方下知状他) 仮番号：火事9
《山内家文書No書式覚 p.215》
- 25 老中奉書 嘉永元年3月23日 仮番号：嘉永－13
老中奉書 嘉永元年分49点 《山内家文書No老中奉書 p.195》
- 26 老中奉書 嘉永元年3月23日 仮番号：嘉永－14
老中奉書 嘉永元年分49点 《山内家文書No老中奉書 p.195》
- 27 老中奉書 嘉永元年3月25日 仮番号：嘉永－15

- 老中奉書 嘉永元年分 49 点 《山内家文書No.老中奉書 p.195》
- 28 老中奉書 嘉永元年 3 月 25 日 仮番号：嘉永－16
老中奉書 嘉永元年分 49 点 《山内家文書No.老中奉書 p.195》
- 29 老中奉書 嘉永元年 4 月 9 日 仮番号：嘉永－23
老中奉書 嘉永元年分 49 点 《山内家文書No.老中奉書 p.195》
- 30 老中奉書 嘉永元年 7 月 12 日 仮番号：嘉永－34
老中奉書 嘉永元年分 49 点 《山内家文書No.老中奉書 p.195》
- 31 老中奉書 嘉永元年 9 月 5 日 仮番号：嘉永－35
老中奉書 嘉永元年分 49 点 《山内家文書No.老中奉書 p.195》
- 32 老中奉書 嘉永元年 9 月 15 日 仮番号：嘉永－40
老中奉書 嘉永元年分 49 点 《山内家文書No.老中奉書 p.195》
- 33 老中奉書 嘉永元年 9 月 15 日 仮番号：嘉永－41
老中奉書 嘉永元年分 49 点 《山内家文書No.老中奉書 p.195》
- 34 老中奉書 嘉永元年 9 月 16 日 仮番号：嘉永－42
老中奉書 嘉永元年分 49 点 《山内家文書No.老中奉書 p.195》
- 35 老中奉書 嘉永元年 9 月 16 日 仮番号：嘉永－43
老中奉書 嘉永元年分 49 点 《山内家文書No.老中奉書 p.195》
- 36 老中奉書 嘉永元年 10 月晦日 仮番号：嘉永－44
老中奉書 嘉永元年分 49 点 《山内家文書No.老中奉書 p.195》
- 37 老中奉書 嘉永元年 11 月 19 日 仮番号：嘉永－45
老中奉書 嘉永元年分 49 点 《山内家文書No.老中奉書 p.195》
- 38 老中奉書 嘉永元年 11 月 21 日 仮番号：嘉永－46
老中奉書 嘉永元年分 49 点 《山内家文書No.老中奉書 p.195》
- 39 老中奉書 嘉永元年 12 月 25 日 仮番号：嘉永－49
老中奉書 嘉永元年分 49 点 《山内家文書No.老中奉書 p.195》
- 40 伺書及老中付紙類 嘉永 2 年 4 月 25 日 仮番号：嘉永－28－1,2
老中付紙類 嘉永 2 年分 14 点 (伺書 14 点) 《山内家文書No.老中付紙類 p.199》
- 41 八代豊敷公紀 第 45 卷 1 冊 元文 2 年 8 月～12 月
《山内家文書No.八代豊敷公紀 p.232》

【丸亀市立資料館】(2002.3.)

《丸亀市立資料館フィルム No.1》

- 1 御系図並御官位ノ次第 1 点 《丸亀市立資料館No.1-27》
- 2 御所参内時の覚書 三条大納言 1 点 《丸亀市立資料館No.6-7》
- 3-1 少将成御礼献上金控 寛永 3 年 京極忠高 1 点 《丸亀市立資料館No.7-7》
- 3-2・3 少将成御礼の請取写 寛永 3 年 木村越前守他 2 名 2 点
《丸亀市立資料館No.7-8》
- 4 將軍家齋公被任太政大臣覚書 1 点 《丸亀市立資料館No.33-21》
- 5 年々参向之公家衆並御馳走方姓名録 ※延宝 8 年～安政 6 年 1 点

- 《丸亀市立資料館No. 6-18》
- 6 武家官禄帳 各藩主職録 寛文 10 年 1 点 《丸亀市立資料館No. 5-1》
- 7 御下屋敷火災に焼失の物品覚書 1 点 《丸亀市立資料館No. 6-40》
- 8 萬覚書 巻物 明和 9 年 多度津藩家中某 1 点 《丸亀市立資料館No. 6-80》
- 9 東照宮 250 回御神忌出勤 慶応 3 年 1 点 《丸亀市立資料館No. 6-90》
(原本は観音寺大通寺所蔵)
- 10 日光諸家御代拝記 1 点 《丸亀市立資料館No. 15-23》
- 11 書籍外物品引渡書並目録 寛文 4 年 3 点 《丸亀市立資料館No. 6-3》
東鑑等書籍目録 《丸亀市立資料館No. 6-3-①》
書籍その他物品引渡書 《丸亀市立資料館No. 6-3-②》
書籍その他物品引渡書 《丸亀市立資料館No. 6-3-③》
- 12 忠学 魯庵 慶応 3 年 1 点 《丸亀市立資料館No. 15-39》
- 13 京極系譜下調 宝暦頃 1 点 《丸亀市立資料館No. 1-3》
- 14 系譜(自 2 代高豊至 5 代高中) 京極高中 寛政 2 年 1 点 《丸亀市立資料館No. 1-5》
- 15 系譜(初代高和一代) 京極高中 寛政 5 年 1 点 《丸亀市立資料館No. 1-8》
- 16-1・2 御系図御家記御書継下書 森崎亮九郎 文政 3 年 2 点 《丸亀市立資料館No. 1-13》
- 17 系譜(自寛政元年~弘化 2 年) 京極高朗 弘化 2 年 4 点 《丸亀市立資料館No. 1-14》
【4 点(内容ほぼ同じ)のうち完成体と思われるもの 1 点のみ撮影】
- 18 系譜(自高郎至朗徹) 京極朗徹 元治元年 1 点 《丸亀市立資料館No. 1-17》
- 19 京極家系譜下書(自高次至高豊) 2 点 《丸亀市立資料館No. 1-18》
【2 点のうち 1 点行方不明につき、1 点のみ撮影】
- 20 喜内様へ御分知之帳 元禄 10 年 1 点 《丸亀市立資料館No. 4-45》
- 21 御記録下書 天明 8 年~文化元年 御記録方 1 点 《丸亀市立資料館No. 1-63 (旧 6-19)》
- 22 喜内様御好による替村の覚 元禄 14 年 1 点 《丸亀市立資料館No. 4-53》
喜内様替村せしときの覚書 原稿 元禄 14 年 2 点 《丸亀市立資料館No. 4-53》
- 23 京極忠高養子高和覚書 1 点 《丸亀市立資料館No. 6-5》
- 24 京極高和御自筆覚書草案 京極高和 1 点 《丸亀市立資料館No. 6-6》
- 25 朗徹様御子の記録(安政 2 年・慶應元年) 1 点 《丸亀市立資料館No. 6-32》
- 26 知行朱印に関する依頼 1 点 《丸亀市立資料館No. 7-157 (旧 6-45)》
- 27 領知に関する届出書 京極高或 宝永 8 年 1 点 《丸亀市立資料館No. 4-86 (旧 7-21)》
- 28 婿養子願写 京極高朗 弘化 3 年 1 点 《丸亀市立資料館No. 21-1》
養子縁組願 京極弘 明治 3 年 1 点 《丸亀市立資料館No. 21-4》
- 29 分家多度津藩歴代之記 1 点 《丸亀市立資料館No. 33-18》
- 30 手習教訓書 写本 1 点 《丸亀市立資料館No. 15-40》

《丸亀市立資料館フィルム No. 2》

- 1 寺子屋教育用 写本 1 点 《丸亀市立資料館No. 15-1-3 (旧 15-42)》
- 2 佐々木京極系図 大熊平太 寛政 7 年 1 点 《丸亀市立資料館No. 1-9》

- 3 百姓往来 写本 飯麓堂我寿山人写 文久3年 1点 《丸亀市立資料館No. 15-37》
- 4 商売往来 田中筆太郎写 慶応元年 1点 《丸亀市立資料館No. 15-38》
- 5 女大学教文庫 貞享4年 貝原益軒述 3点 《丸亀市立資料館No. 16-60 (旧 16-93)》
- 【3点(内容ほぼ同じ)のうち1点(絵入り)のみ撮影】
- 6 御書付留・諸覚書留 貞享5年～天明3年 1点 《丸亀市立資料館No. 6-42》

【香川県歴史博物館所蔵松平家文書収集史料】

- 鶏窓私言 1冊 《松平家文書No. 437》
- 旧記写 1冊 《松平家文書No. 469》
- 元祖暦代由緒 上・下 《松平家文書No. 481-1・2》
- 南木総要 全3冊 《松平家文書No. 604》
- 養護金 1冊 《松平家文書No. 630》
- 日光供奉記并附録 寛文3年 《松平家文書No. 876》
- 日光御名代記 1冊 寛政3年 《松平家文書No. 877》
- 日光御名代記并附録 1冊 寛延3年 《松平家文書No. 878》
- 日光御名代記 1冊 (元禄13年) 《松平家文書No. 879》
- 日光御名代記并附録 1冊 正徳3年 《松平家文書No. 880》
- 日光御名代記并附録 1冊 天明元年 《松平家文書No. 881》
- 日光自拝記 1冊 安永6年5月 《松平家文書No. 882》
- 日光自拝記 1冊 明和2年 《松平家文書No. 883》
- 京都奉使録附録 安永元年 《松平家文書No. 871》
- 京都奉使録并附録 延享2年 《松平家文書No. 872》
- 京都奉使録并附録 宝永5年 《松平家文書No. 873》
- 京都奉使録并附録 享保元年 《松平家文書No. 874》
- 京都奉使録并附録 天和3年 《松平家文書No. 875》
- 京都奉使録 安永元年 《松平家文書No. 884》
- 京都奉使録附録 文政5年 《松平家文書No. 885》
- 京都奉使録 文政5年 《松平家文書No. 886》
- 京都奉使録并附録 天明7年 《松平家文書No. 887》
- 京都奉使録并附録 宝暦10年 《松平家文書No. 888》
- 京都奉使録并附録 明暦2年 《松平家文書No. 890》
- 京都奉使録目録 天明2年 《松平家文書No. 891》
- 京都奉使録要抄 [江戸中期] 《松平家文書No. 892》
- 武家補任 4冊 《松平家文書No. 966》
- 英公家訓 【部分コピー】 《松平家文書No. 855》
- 英公外記1 【部分コピー】 《松平家文書No. 856-01》
- 英公外記2 【部分コピー】 《松平家文書No. 856-02》

※これらの史料は撮影依頼のため、フィルムはありません。焼き付け・コピーです。

【徳島城博物館】(2002.8.)

《フィルムNo.1》

- 1 井戸村寺子屋資料 1997015 至誠講義二篇 1冊 井戸村橋本姓
- 2 武藤家文書 蜂須賀家政知行宛行状 慶長2年正月8日付 武藤長次郎宛
- 3 同上 黙宗和尚由緒書
- 4 同上 福島正則知行宛行状 慶長6年11月7日付 武藤助左衛門宛
- 5 同上 福島正則知行宛行目録 慶長6年11月7日付 武藤助左衛門宛
- 6 同上 福島正則判物写 (年未詳)5月21日付 坂井しなの守・村上ひこへもん宛
- 7 徳島城博物館蔵(沖野家) 徳川秀忠御内書 (年未詳)3月26日付 蓬庵宛
- 8 同上 徳川家康御内書 (年未詳)12月18日付 蜂須賀阿波守宛
- 9 徳島城博物館蔵(購入) 蜂須賀蓬庵書状 (年未詳)10月22日付 池田内膳正宛
- 10 徳島城博物館蔵 1991136 池田光仲書状 蜂須賀山城守宛 1通
- 11 徳島城博物館蔵(上山家) 1992063 蜂須賀蓬庵書状写 (年未詳)10月9日付
了丁老宛

- 12 同上 1992064 蜂須賀蓬庵書状写 (年未詳)8月27日付 宛所欠カ
- 13 同上 1992065 蜂須賀蓬庵書状写 (年未詳)9月晦日付 道通老・了丁老宛
- 14 同上 1992066 蜂須賀蓬庵書状写 (年未詳)卯月25日付 炭屋了丁老宛
- 15 同上 1992067 蜂須賀蓬庵書状写 (年未詳)7月8日付 すミや了丁老宛
- 16 同上 1992068 蜂須賀蓬庵書状写 (年未詳)7月朔日付 すミや了丁老宛
- 17 同上 1992069 蜂須賀蓬庵書状写 (年未詳)5月27日付 道通老・了丁老宛
蜂須賀蓬庵書状写 (年未詳)2月28日付 すミや了丁老宛

【折紙の上下に写】

- 18 同上 1992070 蜂須賀蓬庵書状写 (年未詳)10月9日付 了丁老宛
- 19 同上 1992071 蜂須賀蓬庵書状写 (年未詳)12月8日付 道通老・れうてい老宛
- 20 同上 1992072 蜂須賀蓬庵書状写 元和7年正月6日付 墨屋了丁老宛
- 21 同上 1992073 蜂須賀蓬庵書状写 (年未詳)7月8日付 すミや又左衛門宛
太田忠助・多所以真書状写 (年未詳)10月20日付 炭屋了丁老宛
- 22 同上 1992074 蜂須賀蓬庵書状写 (年未詳)7月21日付 今小屋道通老・墨屋了丁老宛
- 23 同上 1992075 蜂須賀蓬庵書状写 (年未詳)12月14日付 了丁老宛
- 24 同上 1992076 蜂須賀蓬庵書状写 (年未詳)11月12日付 すミや了丁老宛
- 25 同上 1992077 蜂須賀蓬庵書状写 (年未詳)8月16日付 すミや了丁老宛
- 26 同上 1992078 蜂須賀蓬庵書状写 (年未詳)8月8日付 堺灰や了丁老宛
- 27 同上 1992079 蜂須賀蓬庵書状写 (年未詳)5月28日付 了丁老宛
- 28 同上 1992080 蜂須賀蓬庵書状写 (年未詳)11月27日付 炭や了丁老・六左衛門宛
- 29 同上 1992081 蜂須賀蓬庵書状写 (年未詳)卯月17日付 すミや了丁老宛
- 30 傍木家文書 書状2 織田常真書状 (年未詳)正月10日付 佐渡半兵衛宛
- 31 同上 書状4 蜂須賀蓬庵書状 (年未詳)2月5日付 傍木才次宛
- 32 同上 書状8 蜂須賀蓬庵書状 (寛永11年)閏7月19日付 佐渡左近宛

- 33 林家文書 1 蜂須賀蓬庵書狀 (年未詳) 初冬 7 日付 道感老宛
 34 同上 2 蜂須賀至鎮書狀 (年未詳) 7 月 2 日付 津川四郎右衛門等 13 名宛
 35 同上 21 浅野幸長書狀 (年未詳) 8 月 10 日付 林好雪斎宛
 36 同上 22 浅野幸長書狀 (年未詳) 8 月 14 日付 林道感老宛
 37 同上 23 浅野幸長書狀 (年未詳) 10 月 22 日付 宛所欠
 38 同上 24 浅野幸長書狀 (年未詳) 11 月晦日付 林好雪斎宛

[デジタルカメラ撮影]

《デジタル№ 1》

1. 蜂須賀至鎮書狀 蜂須賀家政宛 1 通 《徳島城博物館蔵№ 1992155》
2. 蜂須賀家政知行宛行狀 慶長 4 年 7 月 3 日付 森九一郎宛 《徳島城博物館蔵》
3. 蜂須賀蓬庵書狀 (年未詳) 7 月 6 日付 森甚太夫宛 《徳島城博物館蔵》
4. 蜂須賀蓬庵書狀 (年未詳) 正月 19 日付 いなた丹波宛 《徳島城博物館蔵》
5. 蜂須賀至鎮知行宛行狀 元和元年 9 月 5 日付 森甚太夫宛 《徳島城博物館蔵》
6. (同上)
7. 蜂須賀蓬庵書狀 (年未詳) 5 月 21 日付 森甚太夫宛 《徳島城博物館蔵》
8. 蜂須賀家政書狀 (慶長 2 年) 11 月 11 日付 加藤左馬助宛 《徳島城博物館蔵》
9. 徳川家康判物 (年未詳) 7 月 12 日付 蜂須賀阿波守宛 《徳島城博物館蔵》
10. 蜂須賀蓬庵書狀 (年未詳) 5 月 16 日付 いなた修理亮宛 《徳島城博物館蔵》
11. 蜂須賀至鎮書狀 (年未詳) 極月 25 日付 泰雲宛 《徳島城博物館蔵》
12. 蜂須賀至鎮書狀 (年未詳) 7 月 29 日付 里村昌琢宛 《徳島城博物館蔵》
13. 蜂須賀至鎮書狀 (年未詳) 正月 13 日付 慈光寺宛 《徳島城博物館蔵》
14. 千利休書狀 (天正 14 年) 3 月 13 日付 魚屋立安宛 《徳島城博物館蔵》
15. 同 添書付(表) 《徳島城博物館蔵》
16. 同 添書付(裏) 《徳島城博物館蔵》
- 17～22. 蜂須賀蓬庵書狀 (年未詳) 3 月 21 日付 稲田修理等 3 名宛
《徳島城博物館蔵長谷川家文書》
- 23～28. 蜂須賀至鎮書狀 慶長 18 年正月 17 日付 長谷川但馬宛
《徳島城博物館蔵長谷川家文書》
- 29～32. 蜂須賀至鎮書狀 (年未詳) 卯月 13 日付 長谷川越前宛
《徳島城博物館蔵長谷川家文書》
- 33～36. 蜂須賀至鎮書狀 (年未詳) 仲春 12 日付 長谷川伊豆宛
《徳島城博物館蔵長谷川家文書》
- 37～38. 蜂須賀至鎮書狀 (年未詳) 10 月 10 日付 長谷川越前宛
《徳島城博物館蔵長谷川家文書》
- 39～42. 蜂須賀忠英書狀 (年月未詳) 6 日付 長谷川越前宛
《徳島城博物館蔵長谷川家文書》
- 43～54. 日光絵巻 1 巻 矢野典博画、阿波国文庫 《徳島城博物館蔵№ 1993036》
- 55～56. 蜂須賀蓬庵書狀 (年未詳) 2 月 6 日付 伏屋源兵衛宛
《徳島城博物館蔵伏屋家文書》

- 57～58. 蜂須賀蓬庵書状 (寛永3年) 閏4月9日付 伏屋源兵衛宛
《徳島城博物館蔵伏屋家文書》
- 59～61. 蜂須賀蓬庵書状 (年未詳) 5月2日付 伏屋源兵衛等3名宛
《徳島城博物館蔵伏屋家文書》
- 62～63. 蜂須賀蓬庵書状 (年未詳) 5月8日付 伏屋源兵衛宛
《徳島城博物館蔵伏屋家文書》
- 64～65. 蜂須賀蓬庵書状 (年未詳) 6月18日付 伏屋源兵衛宛
《徳島城博物館蔵伏屋家文書》
- 66～69. 蜂須賀蓬庵書状 (年未詳) 11月14日付 伏屋源兵衛宛
《徳島城博物館蔵伏屋家文書》
70. 蜂須賀家政定書 天正13年12月11日付 矢野百姓中宛
《徳島城博物館寄託(小熊文書)》
- 71～72. 千鶴丸書状 永禄2年6月26日付 塩屋惣左衛門尉宛
《徳島城博物館寄託(木戸家文書)》
- 73～74. 篠原実長・加地盛時・三好康長連署状 永禄2年6月26日付
塩屋惣左衛門尉 《徳島城博物館寄託(木戸家文書)》
- 75～76. 篠原実長・篠原長勝連署状 永禄11年11月28日付 塩屋惣左衛門尉宛
《徳島城博物館寄託(木戸家文書)》
- 77～80. 蜂須賀家政書状 (年未詳) 3月8日付 栗井半左衛門等3名宛
《徳島城博物館寄託(木戸家文書)》
- 81～84. 長宗我部元親書状 蜂須賀正勝宛 1通 天正13年8月5日付
《徳島城博物館蔵No.1994013》
- 85～87. 徳川家康書判物 (慶長19年) 12月24日付 森甚大夫宛
《徳島城博物館寄託(森家文書)》
- 88～90. 徳川秀忠判物 慶長20年正月11日付 森甚大夫宛
《徳島城博物館寄託(森家文書)》

《デジタルNo.2》

蜂須賀家書状(デジタルNo.1と重複)

1997018 阿波国村尽 1冊 井戸村寺子屋資料 【一部のみ】

2000063 心地流兵法伝授記 卷子本 「楽翁(花押)」

根来家(医者)の楽翁と名乗る人物による

【徳島県立博物館】(2002.8.)

《フィルムNo.1》

撮影番号/資料番号/資料名/製作者/関係地/時期・年代

- 1 H 001499 蜂須賀家実記(一) 文久2年正月～2月
- 2 H 001511 蜂須賀家実記(二) 文久2年閏8月
- 3 H 001512 蜂須賀家実記(三) 文久2年閏8月～9月1日

- 4 H 001513 蜂須賀家実記（四） 文久2年9月1日～9日
- 5 H 001514 蜂須賀家実記（五） 文久2年9月7日～18日
- 6 H 001510 蜂須賀家実記（六） 文久2年9月10日～12日
- 7 H 002009 若殿様御縁組御一卷 寛政9年11月ヨリ
- 8 H 001502 参勤交代制緩和之御触写 文久2年（1862）閏8月
- 9 H 001509 松平阿波守斉裕書状写 安政6年（1859）6月
- 10 H 001498 京都町奉行与力石黒某逸事 大塩平八郎 江戸時代
- 11 H 001922 おかげまうての日記 1830年（文政13）5月
- 12-1 H 002434 家督相続文書 蜂須賀隼人 妻木七右衛門宛 1通
- 12-2 H 002434 家督相続文書 賀嶋主水 妻木七右衛門宛 1通
- 13 H 002010 万石以上並交代寄合衆覚帳 1821年（文政4）4月
- 14 H 000385 諸願旧記 江戸時代，文政11年（1828）1月
- 15 H 000386 板野郡徳命村御譜代家来相調帳 江戸時代，文化4年2月
- 16 H 000388 御家老一手御備之記 江戸時代
- 17 H 000904 御系図（飯沼家文書） 江戸時代
- 18 H 000903 略御一系（飯沼家文書） 文政6年（1823）袖帳

《フィルムNo.2》

- 1 H 000276 山陵修覆建白書写 江戸時代，文久2年（1862）（原文書）
- 2 H 000277 諸大名評判記 江戸時代，文久元年（1861）（原文書）
- 3 H 000579 寺子屋教本 江戸時代，嘉永5年（1852）閏2月13日
- 4 H 000700 徳島藩藩校長久館沿革 江戸時代
- 5 H 000663 呪咀秘伝 江戸時代
- 6 H 000890 伝授護符守札集類 江戸時代 江戸時代
- 7 H 002233 太平記英勇伝・八菅與六正勝 江戸時代
- 8 H 000920 徳島藩主書状卷子 江戸時代
- 9 H 000279 元治甲子雜纂 江戸時代，元治元年（1864）（原文書）
- 10 H 000285 徳島藩士江戸引払一件写 江戸時代，文久3年（1863）4月（原文書）
- 11 H 000281 松平阿波守斉昌御咄書 江戸時代
- 12 H 000282 足利將軍三代木像梟首一件写 江戸時代，文久3年（1862）2月（原文書）
- 13 H 000284 手続書控 江戸時代，慶応元年（1865）（原文書）
- 14 H 000016 徳島御城下切絵図（3）助任ト前川 江戸時代
- 15 H 000023 徳島御城下切絵図（10）福嶋 江戸時代
- 16 H 000024 徳島御城下切絵図（11）住吉嶋 江戸時代
- 17 H 000025 徳島御城下切絵図（12）出来嶋 江戸時代
- 18 H 000928 蜂須賀蓬庵書状写 江戸時代
- 19 H 000933 蜂須賀正勝書状写 江戸時代
- 20 H 000935 松平阿波守重喜治昭略伝 江戸時代
- 21 H 000278 文書目録 江戸時代

[デジタルカメラ撮影]

《デジタルNo.1》

91. 蜂須賀至鎮書状 江戸時代, 江戸時代 《徳島県立博物館No. H000698》
92～97. 豊臣秀吉朱印状 豊臣秀吉 安土・桃山時代, 1592年(天正20)4月28日
《徳島県立博物館No. H001887》
98～100. 松平阿波守書状 江戸時代 《徳島県立博物館No. H001923》
101. 蜂須賀家政千松丸養育方沙汰状 江戸時代 《徳島県立博物館No. H000912》
102. 蜂須賀至鎮書状 江戸時代 10日 《徳島県立博物館No. H001459》
103. 蜂須賀綱矩書状 江戸時代 4月23日 《徳島県立博物館No. H001460》
104. 細川幽斎書状 安土・桃山時代, 安土・桃山時代 《徳島県立博物館No. H000264》

《デジタルNo.2》

H 002233 太平記英勇伝・八音與六正勝

【徳島県立文書館】(2002.8.)

《フィルムNo.1》

- 1 ハチス 00083000 綱矩様御己来御旧記書拔二添候書付四通 元禄 蜂須賀家文書
※朝鮮人来朝之節書拔、葉草為見分公儀御役人罷出候節之書拔
元禄15年書拔、銀札通用書拔
2 ハチス 00081000 至鎮様御代御記録書拔原書虫喰付写 元禄 蜂須賀家文書
3 ハチス 00082000 至鎮様御代御記録書拔元書 元禄 蜂須賀家文書 ※明治写カ
4 ハチス 00092000 斉裕様御位階一卷 万延 蜂須賀家文書
5 ハチス 00084000 治昭様御隠居齐昌様御家督御一卷(三冊之内) 文化
蜂須賀家文書
6 ハチス 00087000 若殿様御参府御手続控 万延 蜂須賀家文書
7 ハチス 00088000 (年々記録) 寛政 蜂須賀家文書
8 ハチス 00089000 (五拾七力村總高之事) 寛延 蜂須賀家文書
9 ハチス 00094000 尊語集 天保 蜂須賀家文書
10 ハチス 00095000 旧記写 文化 蜂須賀家文書
11 ハチス 00096000 (諸寺記) 元禄 蜂須賀家文書
12 ハチス 00093000 政保撮要集 天保 蜂須賀家文書

【《フィルムNo.4》で撮り直し】

《フィルムNo.2》

- 1 ハチス 00024000 蜂須賀蓬庵(御内書) 元和 蜂須賀家文書
2 ハチス 00048000 覚 慶安 蜂須賀家文書
3 ハチス 00049000 覚 万治 蜂須賀家文書
4 ハチス 00050000 覚 万治 蜂須賀家文書
5 ハチス 00052000 御書付写 文化 蜂須賀家文書

- 6 ハチス 00051000 御書付写 正徳 蜂須賀家文書
 - 7 ハチス 00053000 蜂須賀家先祖由緒書 元和 蜂須賀家文書
 - 8 ハチス 00054000 蓬庵公御生母に関する具陳書 大正 蜂須賀家文書
 - 9 ハチス 00055000 蔵所用事 寛政 蜂須賀家文書
 - 10 ハチス 00056000 其方共勸方之儀 寛政 蜂須賀家文書
 - 11 ハチス 00057000 光隆（書状） 蜂須賀家文書
 - 12 ハチス 00058000 御添翰 万治 蜂須賀家文書
 - 13 ハチス 00059000 御添翰 万治 蜂須賀家文書
 - 14 ハチス 00060000 山内忠兵衛（書簡） 万治 蜂須賀家文書
 - 15 オオク 00888000 東照宮御遺訓（写） 慶応 大久保家文書
 - 16 ハチス 00069000 当家大祖（御先祖様御戒名御命日呉服橋共） 享保
蜂須賀家文書
 - 17 ハチス 00070000 蜂須賀系図 元禄（記載は正徳3年迄あり） 蜂須賀家文書
 - 18 ハチス 00071000 右御調に付文通並書付類 元禄 蜂須賀家文書
 - 19 ハチス 00072000 明和7年御指出に相成候書附 明和 蜂須賀家文書
 - 20 ハチス 00073000 （忌辰録） 寛政 蜂須賀家文書
 - 20-1 御続合書 御右筆間
 - 20-2 量姫様御続書
 - 20-3 御代々様御正当月日控
 - 20-4 阿波守様・弾正大弼様・御前様御続書
- 【途中まで】

《フィルムNo.3》

- 12 ハチス 00093000 政保撮要集 天保 蜂須賀家文書
【《フィルムNo.4》で撮り直し】
- 1 ハチス 00074000 御続合覚 天保 蜂須賀家文書 （包紙のみ、2～7の包紙）
- 2 ハチス 00074000-1 御続合書 御右筆間
- 3 ハチス 00074000-2 量姫様御続書
- 4 ハチス 00074000-3 御代々様御正当月日控 天保9年6月
- 5 ハチス 00074000-4 阿波守様・弾正大弼様・御前様御続書
- 6 ハチス 00074000-5 御代々様・御親類様御改名 天保15年～ 御本城
- 7 ハチス 00074000-6 年中御祝之覚
- 8 ハチス 00073000 （忌辰録） 寛政 蜂須賀家文書
- 9 ハチス 00080000 正勝公家政公至鎮公忠英公光隆公両国記事 元禄 蜂須賀家文書
- 10 ヨシモ 00092000 阿波淡路御両国御記録御掟（写） 寛政 吉守家文書
- 11 ニュウ 00212000 宗門御改一卷 寛政 入田村文書
- 12 ワタナ 00045000 諸国雅俗交之記武術之巻 慶応 渡辺家文書
- 13 ワタナ 00044000 兵法大事（兵法極意書） 天明 渡辺家文書
- 14 アマ 200294000 剣術奥義 安政 天野家文書（石井町覚円）
- 15 サカイ 00228000 騒動風説書（写） 安政 酒井家文書

- 16 サカイ 00510000 日本国ハ神国で（おかげ参りの歌と金比羅大権現神圖歌写）
慶応 酒井家文書
- 17 ハチス 00120000 松平阿波守系図 寛政 蜂須賀家文書
- 18 タケタ 00023 端山（ハバヤマ）村誌
（美馬郡誌抜書端山村分外美馬郡誌之内各村古城趾分抜書）
郡誌（美馬郡各村古塁趾書抜、明治 25 年美馬郡役所ニ於テ謄写ス）
武田家文書
- 19 イノウ 07775 徳島県阿波国那賀郡辰巳新田村地誌村誌（辰巳新田地図添付）
井上家文書
- 20 T-183 那賀郡村誌 中
（小松島市公民館の蔵印あり、同所より移管カ）
【途中まで。フィルムNo.4 に続く】

《フィルムNo.4》

【《フィルムNo.3》から続く】

- 20 T-183 那賀郡村誌 中
（小松島市公民館の蔵印あり、同所より移管カ）
【途中から】
- 1 シノハ 01370 小学阿波国地誌 全 阿波国教育会 明治 25 年 11 月 25 日
篠原家文書
- 2 シノハ 01371 阿波地誌 全 阿波国教育会 明治 28 年 12 月 5 日 篠原家文書
- 3 ハチス 00093000 政保撮要集 天保 蜂須賀家文書
【《フィルムNo.1》撮影No.12、《フィルムNo.3》撮影No.12 を撮り直し】

〔デジタルカメラ撮影〕

《デジタルNo.2》

- アヘ 00130000 おろそかにすなを（教訓の歌） 慶応 阿部家文書
- アマ 200294000 剣術奥義 安政 天野家文書（石井町覚円）
- ウチ 00043000 於くり判官（写） 明治 井内家文書
- ヨカイ 01760000 易書之部（目録） 慶応 酒井家文書
- サカイ 01502000 妙薬集 慶応 酒井家文書
- サカイ 01501000 いろはわけ救民妙薬集 明治 酒井家文書
- サカイ 01496000 口傳妙薬集 慶応 酒井家文書
- サカイ 01495000 庭訓往来註書（写） 慶応 酒井家文書
- サカイ 01493000 妙薬集 慶応 酒井家文書
- サカイ 01488000 萬咒咀本（写） 文政 酒井家文書
- サカイ 01445000 天地凡性両解全（写） 天保 酒井家文書
- サカイ 01444000 学者心得之大綱（写） 天保 酒井家文書
- サカイ 01443000 学者心得之大綱（写） 天保 酒井家文書
- サカイ 00922000 伏羲一神農（中国歴代仁王系統表付孔子儒学系統表） 慶応

	酒井家文書		
サカイ 00745000	東鑑抜書全 (写)	安政	酒井家文書
サカイ 00734000	系図北条九代記楠三代記 (写)	嘉永	酒井家文書
サカイ 00701000	楠氏壁書完 (写)	天保	酒井家文書
サカイ 00655000	吉凶占東方朔秘傳置文 (写)	安政	酒井家文書
サカイ 00510000	日本国ハ神国で (おかげ参りの歌と金比羅大権現神圖歌写)	慶応	酒井家文書
サカイ 00152000	庚申祓甲子祝文 (写) (吉田殿学館守護職玉田永教)	天保	酒井家文書
サカイ 00719000	當國主御代々尊靈	慶応	酒井家文書
サカイ 00746000	御太平記抜書 (写)	明治	酒井家文書
サカイ 00095000	南無大慈大悲觀世音菩薩種々重罪五逆消滅自他平等即身成佛 (説法聞き書き)	文久	酒井家文書
サカイ 00151000	京師手島先生作妙薬集いろは歌	明治	酒井家文書
サカイ 00230000	太平樂 (写)	文久	酒井家文書
サカイ 00714000	上 (東照宮源家康公御條目) (写)	明治	酒井家文書
オオク 00009000	窮理問答并二自説雜書全	天保	大久保家文書
オオク 00295000	老いて榮化する人 (心学処世歌)	天保	大久保家文書
オオク 00296000	盛大流行之一元 (心学問答)	天保	大久保家文書
オオク 00298000	石門伝授之心法 (心学問答)	天保	大久保家文書
オオク 00299000	問氣充ハ於天ニ (心学問答)	天保	大久保家文書
オオク 00301000	心虚靈底ノ一説 (心学問答)	天保	大久保家文書
オオク 00302000	水氣不合の論 (心学問答)	天保	大久保家文書
オオク 00303000	無極ハ不見不聞 (心学問答)	天保	大久保家文書
オオク 00304000	必要教文 (心学・子供の教育法)	天保	大久保家文書
オオク 00305000	一毎ニ生 (陰陽奇偶の説)	天保	大久保家文書
オオク 00306000	儉約丸法 (心学教訓)	天保	大久保家文書
オオク 00307000	夫家業ニ不精と (心学・家業心得の件草案)	天保	大久保家文書
オオク 00311000	根心舎夜驚 (根心舎日誌学舎造立出銀覚他)	文化	大久保家文書
オオク 00313000	天保七申夏 (心学問答)	天保	大久保家文書
オオク 00316000	仰而以觀乎天文 (天眼通器天斗の効用の件)	弘化	大久保家文書
オオク 00317000	孟春月 (日星運行之図の件)	弘化	大久保家文書
オオク 00318000	(天斗による觀測書の件)	安政	大久保家文書
オオク 00319000	天文地形図	安政	大久保家文書
オオク 00320000	天文地形図	安政	大久保家文書
オオク 00497000	大久保昌太郎敷地方位家相正選図書	慶応	大久保家文書
オオク 00498000	日月出運図並日星運行之図	慶応	大久保家文書 部分
オオク 00499000	改半田之図	慶応	大久保家文書
オオク 00500000	地球万国山海輿地全図説	天保	大久保家文書
オオク 00888000	東照宮御遺訓 (写)	慶応	大久保家文書

材 00889000	撰釈集ノ伝 (写)	慶応	大久保家文書
材 00895000	小夜物語 (写)	慶応	大久保家文書
材 00896000	学者夢中物語全 (写)	元治	大久保家文書
材 00926000	心学知活性法全 (写)	元治	大久保家文書
材 00927000	洗心蔵密気神論弁 (写)	安政	大久保家文書
材 00928000	洗心蔵密気神論弁 (写)	安政	大久保家文書
材 00929000	洗心蔵密気神論弁 (写)	安政	大久保家文書
材 00930000	心学聞書控	文化	大久保家文書
材 00932000	心学伝授養心之弁 (写)	元治	大久保家文書
材 00933000	急務明倫集 (為鏡金言集写)	元治	大久保家文書
材 00934000	洗心蔵密気神論々 (写)	安政	大久保家文書
材 00935000	大病長長介抱心得之条々	元治	大久保家文書
材 00936000	朔望祝言弁四番	元治	大久保家文書
材 00939000	見聞発明説	元治	大久保家文書
材 00940000	見聞発明説	天保	大久保家文書
材 00941000	本心発明之慎書	天保	大久保家文書
材 00942000	問答磨礪草 (写)	天保	大久保家文書
材 00943000	当家秘事一子相伝明倫記録 (大久保家分家遠族姻族隣家等記録)	元治	大久保家文書
材 00955000	出雲国造神寿後釈上	寛政	大久保家文書 部分
材 01020000	通俗三国志卷之二十一	慶応	大久保家文書
シ 00091000	斯波足利尾張守高経裔源姓蜂須賀系圖	天保	吉守家文書
ヨシ 00065000	軍術秘法大事 (源九郎判官義経鞍馬大僧正坊傳)	寛政	吉守家文書
ワ 00044000	兵法大事 (兵法極意書)	天明	渡辺家文書
ワ 00045000	諸国雅俗交之記武術之巻	慶応	渡辺家文書
ワ 00079000	口伝とせり抄物 (日本記神代写)	慶応	渡辺家文書

【岡山市立中央図書館】(2002.8.)

《フィルムNo.1》

- | | | | |
|----|-----------------|----------------------|--------------------|
| 1 | 諸御用御廻文并御指紙留帳 | 天保 4 年 | 《藤原文庫 093.1-A9》 |
| 2 | 諸御用御廻文并御指紙留帳 | 天保 10 年 | 《藤原文庫 093.1-A11》 |
| 3 | 日記帳 | 天保 15 年 | 《小西家文書 099.1-1》 |
| 4 | 諸御用向手控 | 天保 13 年 11 月 海面村治右衛門 | 《小西家文書 093.1-2》 |
| 5 | 諸御用御廻文并御指紙留帳 | 文政 13 年 | 《藤原文庫 093.1-A20》 |
| 6 | 寺江相尋候口上之覚 (妙林寺) | 年未詳 | 《安井文庫 091.8-18》 |
| 7 | 〔盛隆寺の願書〕 | 文久 3 年 10 月 | 《妹尾村役場文書 091.8-1》 |
| 8 | 高嶋寺領山林御折紙控 | 寛永 12 年 宮浦村 | 《甲浦村役場文書 091.6-3》 |
| 9 | 萬秘伝控帳 | 天保 5 年 9 月 (上仁保村) | 《上仁保村役場文書 090.3-4》 |
| 10 | 社寺諸書類 | 甲浦村 | 《甲浦村役場文書 091.6-1》 |

【部分撮影】

- 11 諸御用御廻文并御指紙留帳 文政 11 年
【途中まで。《フィルムNo.2》に続く】

《藤原文庫 093.1-A23》

《フィルムNo.2》

【《フィルムNo.1》から続く】

- 11 諸御用御廻文并御指紙留帳 文政 11 年
【途中から】

《藤原文庫 093.1-A23》

- 1 御廻文類其外諸御用一切留 文政 9 年
2 諸御用御廻文并御指紙留帳 天保 12 年
3 遊行上人様御逗留中御用諸事留 嘉永 7 年 5 月
4 寺社方富ニ似寄義御指留 4 月 28 日
3 遊行上人様御逗留中御用諸事留 嘉永 7 年 5 月

《藤原文庫 093.1-A24》

《藤原文庫 093.1-A26》

《国富文庫 092-104》

《国富文庫 093-214》

《国富文庫 092-104》

【撮り直し】

- 4 寺社方富ニ似寄義御指留 4 月 28 日

《国富文庫 093-214》

【撮り直し】

- 5 禅石密通の件 安政 2 年 2 月 2 通
6 訴訟事件綴 安政 2 年・5 年ほか 7 通
7 社寺方御入用請取留 明治 4 年 6 月 2 冊のうち 1 冊
8 社寺御入用 辛未(明治 4 年)6 月 2 冊のうち 1 冊
9 社寺方切手留帳 明治 4 年 6 月
10 寺寄せ帳 嘉永 7 年 8 月

《国富文庫 093-39》

《国富文庫 093-24》

《国富文庫 091-15-1》

《国富文庫 091-15-2》

《国富文庫 091-16》

《国富文庫 091-11》

【部分撮影】

- 11 新太郎少将宛伊達忠宗書状 (承応 3 年カ)10 月 3 日
(洪水、天子崩御、忠宗熱海湯治)

《木畑文庫 092.89-239》

- 12 日記帳 文久 3 年 小西長貴

《小西家文書 099.1-16》

- 13-1 日記 天保 10 年 10 月 15 日ヨリ(大晦日マデ)

《小西家文書 092.89-17-1》

- 13-2 日記 天保 11 年

《小西家文書 092.89-17-2》

【10 月晦日まで撮影】

- 14-1 秘録 木畑徳 天保 11 年ヨリ(文久 2 年マデ)
14-2 秘録 慶応 2 年 木畑文庫 093.3-15-2》

《木畑文庫 093.3-15-1》

【鳥取県立博物館】(2003.3.)

★印はコピー版から撮影

《フィルムNo.1》

- 1 御書控 1 明和 4 年～天明 3 年 1 冊
2 雑記京都大坂御勤向 元禄 8 年～享保 16 年
3 御国御家来 元禄 8 年～安永 3 年
4 御国御家来 明和 4 年～天明 7 年

《鳥取藩政資料 No.6759/p.31》

《鳥取藩政資料 No.6790/p.32》

《鳥取藩政資料 No.6780/p.32》

《鳥取藩政資料 No.6782/p.32》

- 5 御帰国道中日記 安永 7 年 4 月 23 日—5 月 19 日 1 冊 《鳥取藩政資料 No. 4189/p.303》
- 6 御帰国道中日記 安永 7 年 4 月 23 日—5 月 19 日 山本七郎右衛門・小泉十兵衛
1 冊 《鳥取藩政資料 No. 4190/p.303》
- 7 日光御廻り御帰国御道中御用状控 安永 7 年 4 月 1 冊
《鳥取藩政資料 No. 4369/p.303》
- 8 日光御宮御霊屋御参詣御次第書 日光山御宿坊安居院 天保 7 年 4 月 1 冊
《鳥取藩政資料 No. 6437-1/p.401》
- 9 日光御宮御霊屋太守様御参詣御次第書 天保 7 年カ 1 冊
《鳥取藩政資料 No. 6437-2/p.401》
- 10 日光街道・中山道例幣使御休泊御本陣絵図面 1 冊 《鳥取藩政資料 No. 14559/p.306》
- 11 御留守年中行司 西村庄兵衛撰 天明 2 年 11 月 1 冊 《鳥取藩政資料 No. 6804/p.33》
【途中まで】

《フィルム No. 2》

- 11 御留守年中行司 西村庄兵衛撰 天明 2 年 11 月 1 冊 《鳥取藩政資料 No. 6804/p.33》
【途中から】
- 1 御在府年中行司 西村庄兵衛撰 天明 2 年 11 月 1 冊 《鳥取藩政資料 No. 6805/p.33》
- 2 斉訓公御伝 1 冊 《鳥取藩政資料 No. 326/p.22》
- 3 斉衆公御伝 1 冊 《鳥取藩政資料 No. 327/p.22》
- 4 英俊公御伝 1 冊 《鳥取藩政資料 No. 328/p.22》
- 5 吉泰公御婚礼覚書 1 冊 御用部屋 宝永 5 年（享保 13 年写） 1 冊
《鳥取藩政資料 No. 6589/p.25》
- 6 久姫様御結納御婚礼記 1 冊 御用部屋 寛保元年 7 月—3 月 1 冊
《鳥取藩政資料 No. 6586/p.25》
【途中まで】

《フィルム No. 3》

- 6 久姫様御結納御婚礼記 1 冊 御用部屋 寛保元年 7 月—3 月 1 冊
《鳥取藩政資料 No. 6586/p.25》
【途中から】
- 1 賢丸様越中守殿江御引移式御当日以来諸事留 御用掛嶋村惣左衛門 安永 3—4 年
《鳥取藩政資料 No. 6590/p.26》
- 2 智賢院様御逝去別記 御勤部屋 文政 2 年 9 月（天保 10 年写） 1 冊
《鳥取藩政資料 No. 6723/p.28》
- 3 英俊院様御逝去別記 御勤部屋 文政 9 年 3 月（天保 10 年写） 1 冊
《鳥取藩政資料 No. 6724/p.28》
【途中まで】

《フィルム No. 4》

- 3 英俊院様御逝去別記 御勤部屋 文政 9 年 3 月（天保 10 年写） 1 冊

【途中から】

- 1 耀国院様御逝去別記 御勤部屋 文政13年6月(天保8年写) 1冊
《鳥取藩政資料 No.6725/p.28》
- 2 義徹院様御逝去別記 御勤部屋 天保5年3月(天保8年写) 1冊
《鳥取藩政資料 No.6726/p.28》
- 3 雑集拔華 1冊
《鳥取藩政資料 No.14710/p.31》
- 4 備前様問合之内書抜 1冊
《鳥取藩政資料 No.6793/p.32》
- 5 御判物御根帳抜書 1冊
《鳥取藩政資料 No.7044/p.156》
- 6 両御館御出見出し 嘉永4年6月 1冊
《鳥取藩政資料 No.1274/p.257》
- 7 政事秘要聞見録 1冊
《鳥取藩政資料 No.12765/p.480》
- 8 璋瓦庭訓 1冊
《鳥取藩政資料 No.12841/p.490》
- 9 源烈公日光紀行 彩雲堂 嘉永7年 文久2年写
《鳥取藩政資料No.12844/p.490》
- 10 御入内に付御書并被進御目録控 文政8年9月
《鳥取藩政資料No.6676/p.31》
- 11 登坂中並御即位御用日記 御使者鶴殿藤輔 弘化4年4月～10月 1冊
《鳥取藩政資料No.4809/p.31》

【途中まで】

《フィルムNo.5》

- 11 登坂中並御即位御用日記 御使者鶴殿藤輔 弘化4年4月～10月 1冊
《鳥取藩政資料No.4809/p.31》

【途中から】

- 1 年中行事1(正月1日～3日) 1冊
《鳥取藩政資料No.6825/p.34》
- 2 年中行事2(正月3日～晦日) 1冊
《鳥取藩政資料No.6826/p.34》
- 3 年中行事3(2月～3月) 1冊
《鳥取藩政資料No.6827/p.34》
- 4 年中行事4(4月～5月15日) 1冊
《鳥取藩政資料No.6828/p.34》
- 5 年中行事5(5月～6月) 1冊
《鳥取藩政資料No.6829/p.34》
- 6 年中行事6(7月～9月) 1冊
《鳥取藩政資料No.6830/p.34》
- 7 年中行事7(10月～12月) 1冊
《鳥取藩政資料No.6831/p.34》
- 8 非常取扱事 原田有秋写 安政5年 1冊
《鳥取藩政資料No.621/p.314》
- 9 御一新循則 在御目付頭 明治元年 1冊
《鳥取藩政資料No.608/p.314》

【途中まで。ただし20頁ほどなのでフィルム6では最初から撮影】

《フィルムNo.6》

- 1 御一新循則 在御目付頭 明治元年 1冊
《鳥取藩政資料No.608/p.314》
- 2 若殿様御書控 1冊
《鳥取藩政資料No.6762/p.31》
- 3 鶴五郎君紀州等姫御縁組別記 御勤部屋 安永5年(天保9年写) 1冊
《鳥取藩政資料No.6591/p.26》
- 4 銀之進様薩州於操様御縁組別記 御勤部屋 寛政8年3月(天保9年写) 1冊
《鳥取藩政資料No.6597/p.26》

- 5 銀之進様御家督御目見御書御目録控 寛政10年 1冊 《鳥取藩政資料No.6647/p.24》
 6 永之進様御家督別記 御勤部屋 文化4年9月 1冊 《鳥取藩政資料No.6652/p.24》
 7 孝徳院様御逝去別記 御勤部屋 天明元年7月（天保9年写） 1冊
 《鳥取藩政資料No.6717/p.27》
 8 御刑罰之部 享和元年～文政5年 1冊
 《鳥取藩政資料No.8713/p.317》

【途中まで】

《フィルムNo.7》

- 8 御刑罰之部 享和元年～文政5年 1冊 《鳥取藩政資料No.8713/p.317》

【途中から】

- 1 御刑罰之部 文政6年～弘化4年 1冊 《鳥取藩政資料No.8714/p.317》
 2 ★種々抜書8 （大坂之部並京伏見他国使者之部並書通） 1冊
 《鳥取藩政資料No.1252/p.169》
 3 ★部分古帳 君事之部1 1冊 《鳥取藩政資料No.1219/p.189》
 4 ★部分古帳 君事之部2 1冊 《鳥取藩政資料No.1220/p.189》
 5 ★部分古帳 君事之部3 1冊 《鳥取藩政資料No.1221/p.189》

【途中まで】

《フィルムNo.8》

- 5 ★部分古帳 君事之部3 1冊 《鳥取藩政資料No.1221/p.189》

【途中から】

- 1 ★部分古帳 君事之部4 1冊 《鳥取藩政資料No.1222/p.189》
 2 ★部分古帳 君事之部5 1冊 《鳥取藩政資料No.1223/p.189》
 3 ★江戸御留守居日記 明和6年1月～4月 1冊 《鳥取藩政資料No.3320/p.279》

【途中まで】

《フィルムNo.9》

- 3 ★江戸御留守居日記 明和6年1月～4月 1冊 《鳥取藩政資料No.3320/p.279》

【途中から】

- 4 ★江戸御留守居日記 明和8年1月～3月 1冊 《鳥取藩政資料No.3327/p.279》
 5 ★江戸御留守居日記 明和8年4月～6月 1冊 《鳥取藩政資料No.3328/p.279》

【岡山大学附属図書館 その1】(2003.3.)

《フィルムNo.1》

- 1 [藤戸村池・寺院・宝殿・宮書上] 元禄16年 1通 《日笠家文書 No.※1893》
 2 [藤戸村・粒江村・鞭木村相合池番水差縄一件藤戸村役人など連署書状控]
 宝永4年6月 1通 《日笠家文書 No.※1904》
 3 手鑑帳 天明5年3月 1帖 《日笠家文書 No.※1530》
 4 児島郡藤戸村諸入用割帳 寛政5年11月 1帖 《日笠家文書 No.※1542》

- 5 西岡溝歩つき・寺領名主諸遣米・寺領水役米立 寛政7年12月 1帖
《日笠家文書 No.※ 1545》
- 6 興除新田手鑑 天保10年2月 1帖
《日笠家文書 No.※ 1516》
- 7 御内意書上留帳 弘化3年5月 1冊
《日笠家文書 No.※ 1509》
- 8 品々袖覚 弘化4年1月 1帖
《日笠家文書 No.※ 35》
- 9 児島郡村々名主五人組頭勤年数書上帳 嘉永3年4月 1帖
《日笠家文書 No.※ 49》
- 10 名主役用記 未詳 1冊
《日笠家文書 No.※ 1502》
- 11 [藤戸村・植松村山論一件訴状并返答書写] 文政5年6月 2冊
《日笠家文書 No.※ 4057》
- 12 藤戸村・植松村山論出入日記 文政8年6月 1帖
《日笠家文書 No.※ 4059》
- 13 断申由緒之事 寛政10年8月 1冊
《日笠家文書 No.※ 2452》
- 14 御用留帳 元禄6年 1冊 味野村
《荻野家文書 No.※ 614》
- 15 諸御用留帳 元禄9年 1冊 味野村
《荻野家文書 No.※ 615》
- 【途中まで】

《フィルムNo.2》

- 15 諸御用留帳 元禄9年 1冊 味野村
《荻野家文書 No.※ 615》
- 【途中から】
- 16 諸御用留帳 宝永5年 1冊 味野村
《荻野家文書 No.※ 618》

[デジタルカメラ撮影]

- 御内意書上留帳 弘化3年5月 1冊
《日笠家文書 No.※ 1509》
- 品々袖覚 弘化4年1月 1帖
《日笠家文書 No.※ 35》
- 諸郡百姓惣代騒動一件書類 明治4年 18通
《日笠家文書 No.※ 2261》

【岡山大学附属図書館 その2】(2003.8.)

《フィルムNo.1》

- 1 公儀江御届留1 元禄4年6月～元文2年12月
《池田家文庫No. A-1-718》
- 2 公儀江御届留2 元文3年正月～宝暦2年11月
《池田家文庫No. A-1-719》
- 3 公儀江御届留3 宝暦2年12月～同 14年2月
《池田家文庫No. A-1-720》
- 【途中まで】

《フィルムNo.2》

- 3 公儀江御届留3 宝暦2年12月～同 14年2月
《池田家文庫No. A-1-720》
- 【途中から】
- 1 公儀江御届留4 宝暦14年3月～明和8年12月
《池田家文庫No. A-1-721》
- 2 公儀江御届留5 明和9年正月～同 5年3月
《池田家文庫No. A-1-722》
- 【途中まで】

《フィルムNo.3》

- 2 公儀江御届留 5 明和9年正月～安永5年3月 《池田家文庫No. A-1-722》
【途中から】
- 1 公儀江御届留 6 安永5年4月～同 9年12月 《池田家文庫No. A-1-723》
2 公儀江御届留 7 安永10年正月～天明7年12月 《池田家文庫No. A-1-724》
3 御届留 天明8年～寛政3年 《池田家文庫No. A-1-725》

《フィルムNo.4》

- 1 日録 宝永7年7月～正徳元年5月 1冊 《三浦家文書No. A-9》
2 日録 正徳元年5月～正徳2年10月 1冊 《三浦家文書No. A-10》
3 日録 正徳2年10月～正徳3年6月 1冊 《三浦家文書No. A-11》
4 日録 正徳3年6月～正徳4年4月 1冊 《三浦家文書No. A-12》
5 日録 正徳4年5月～正徳4年12月 1冊 《三浦家文書No. A-13》
6 日録 正徳5年1月～正徳5年7月 1冊 《三浦家文書No. A-14》
7 日録 正徳5年7月～正徳6年6月 1冊 《三浦家文書No. A-15》
8 日録 享保元年7月～享保2年12月 1冊 《三浦家文書No. A-16》
9 諸廻文留帳 元禄4年 1冊 《荻野家文書No. 2》
【途中まで】

《フィルムNo.5》

- 9 諸廻文留帳 元禄4年 1冊 《荻野家文書No. 2》
【途中から】
- 1 諸廻文留帳 元禄13年 1冊 《荻野家文書No. 4》
2 「備前国岡山城破損所絵図並御奉書」 天明8年 6通1枚 《池田家文庫No. ※ T7-26》
【枝番号2・3・4-1～4-5・5・6・他2点を撮影】
- 3 「備前岡山城破損所絵図及び御城廻り御繕一件返書」 天明8年 8通1枚 《池田家文庫No. ※ T7-27》
【枝番号1・2・3・4・5・6・8・7・9の順に撮影】
- 4 「御白石垣修復御伺之絵図並御奉書」 天和3年 5通1枚 《池田家文庫No. ※ T7-39》
【枝番号4を撮影】
- 5 「備前国岡山城廻石垣破損窺絵図控」 元禄14年 3枚 《池田家文庫No. ※ T7-83》
【枝番号3を撮影】
- 6 「備前国岡山城廻石垣破損窺絵図控」 元禄14年 3枚 《池田家文庫No. ※ T7-83》
【枝番号ナシを撮影】
- 7 「岡山御城廻石垣修復御願之絵図並御奉書」 元禄14年 1通1枚 《池田家文庫No. ※ T7-169》
【枝番号2を撮影】
- 8 「破損所御絵図並御目録・書付」 元禄15年 1冊4通2枚 《池田家文庫No. ※ T7-170》
【枝番号1・3・4・5・6・7を撮影】

- 9 「増上寺御御霊屋御廟御普請仕様帳」 未詳 1冊3枚 《池田家文庫No.※ T7-50》
【枝番号1・3・4・5を撮影】
- 10 「小田郡走出村江貸銀返済滞一件倉敷村孫大夫訴状控」 寛文7年2月9日 1通
《小野家文書No.2200》
- 11 倉敷村伝兵衛訴状 寛文8年8月19日 1通 《小野家文書No.2288》
- 12 差上ヶ申一札之事 寛文10年6月 1通 《小野家文書No.2342》
- 13 倉敷村役人連署書付控 宝永2年11月 1通 《小野家文書No.2402》
- 14 「中島屋彦兵衛岡山悪所江罷越候一件済口証文」 宝永4年12月4日 1通
《小野家文書No.3698》
- 15 「戸川日向守様・戸川内蔵之助様御領分高沼新田用水出入一件倉敷村役人等連署
口上書」 宝永2年12月 1通 《小野家文書No.4559》
- 16 「栗坂村百姓八十人と庄屋兵右衛門諸勘定差繰出入一件内済届書案」
宝永3年5月 1通 《小野家文書No.4047》
- 17 「中島屋彦兵衛血判状写」 1通 《小野家文書No.4074》
- 18 倉敷村之内向倉敷与市より八浜屋十右衛門江相掛り衣類取込一件八右衛門返答書
延宝8年3月8日 1通 《小野家文書No.5265》
- 19 玉島村笹屋清右衛門より中島村庄屋清左衛門外五人江相掛り買取申候田地相渡不
申候一件口上書 宝永6年7月 1通 《小野家文書No.5402》
- 20 乍恐口上 享保19年6月 1通 《日笠家文書No.4069》
- 21 乍恐口上 元禄10年4月16日 1通 《日笠家文書No.4066》
- 22 乍恐口上之次第 寛文13年2月16日 1通 《日笠家文書No.1302》
- 23 「粒江村と鞭木村番水出入一件藤戸村役人連署願書控」 宝永4年6月 1通
《日笠家文書No.1275》
- 24 「藤戸村・粒江村・鞭木村相合池水論関係文書」 寛文11年 5通
《日笠家文書No.4070》
- 25 取替ス書物之事 元禄10年6月19日 1通 《日笠家文書No.2258》
- 26 連判書物之事 宝永4年6月13日 1通 《日笠家文書No.2181》

〔デジタルカメラ撮影〕

- | 撮影番号／ | 表題 | 年代 | 数量 | 目録番号 |
|-------|-------------------|-----------|----|-------------------------|
| 1 | 児島郡藤戸村内存書上帳 | 天保12年5月 | 1帖 | 《日笠家文書 No.1897》 |
| 2 | 奉願上(藤戸村氏宮地広ヶ申度ニ付) | 享保2年9月2日 | 1通 | 《日笠家文書 No.1994》 |
| 3 | 口上(藤戸村寺領ニ付) | 元禄16年9月8日 | 1通 | 《日笠家文書 No.2724》 |
| 4 | 東御代官東組手鑑帳 | 嘉永7年 | 1帖 | 《日笠家文書 No.1528》 |
| 5 | 備前国郡々石高品々留帳 | 嘉永5年8月 | 1帖 | 《日笠家文書 No.73》 |
| 6 | 御用密事留帳 | 慶応2年 | 1冊 | 《日笠家文書 No.1482》 |
| 7 | 日笠家密用留 | 安政3年 | 1冊 | 《日笠家文書 No.3441》 |
| 8 | 在方医者御触書留 | 安永7年5月 | 1冊 | 味野村善左衛門
《荻野家文書 No.7》 |
| 9 | 元禄元年諸事割府書付帳 | 元禄元年 | 1帖 | 味野村
《荻野家文書 No.751》 |
| 10 | 日記 | 未詳 | 1帖 | 半左衛門
《荻野家文書 No.989》 |

- 11 留守守万覚帳 元禄 11 年 4 月 1 帖 味野持宝院留守居覚専 《荻野家文書 No.991》
- 12 藤戸村藤戸寺住持諦実離末寺ニ相望候条退院ニ相成跡一等寺代判其外同寺取向方不宜
候段檀中一統不居合出入日記 安政 2 年 1 冊 《日笠家文書 No.3943》
- 13 奉願上(藤戸寺本堂建立之義ニ付) 享保 17 年 2 通 《日笠家文書 No.2032》
- 14 村々高家数人数書上帳 天保 12 年 11 月 1 帖 《日笠家文書 No.1504》

【山口県文書館】(2003.8.)

《フィルム No.1》

- 1 江戸京都大坂御用状控 1 正徳 6 年 1 冊 《毛利家文庫 No.49-28-1》
- 2 江戸京都大坂御用状控 1 正徳 6 年 1 冊 《毛利家文庫 No.49-28-2》
- 3 大坂御奉書 正徳 6 年 1 冊 《徳山毛利家文庫 No.奉書録 26》
- 4 大坂御状控 元禄 3 年 1 冊 《徳山毛利家文庫 No.奉書録 1》
- 5 大坂御屋鋪御殿并諸国屋敷蔵々其外分間割差図宅括 大坂御作事方
嘉永 4 年 9 月 《毛利家文庫 No.58-535》
- 6 大坂長藩邸差図 《毛利家文庫 No.58-531》
- 7 大坂御屋敷差図 寛政 5 年改 《毛利家文庫 No.58-534》

《フィルム No.2》

- 1 元和十年以来江戸大坂禁裏御普請事 1 元和 10 一宝永 4 年 1 冊
《毛利家文庫 No.42-28-1》
- 2 元和十年以来江戸大坂禁裏御普請事 1 元和 10 一宝永 4 年 1 冊
《毛利家文庫 No.42-28-2》
- 3 御城廻御普請御手伝御務之趣公儀江仰出候記録(慶長年中～寛永年中)
享保 7 年 1 冊 《毛利家文庫 No.42-32-1》
- 4 京都大坂長崎御屋敷事 1 冊 《毛利家文庫 No.8-4》
- 5 官邸事(写) 安政 4 年一文久 2 年 1 冊 《毛利家文庫 No.8-51》
- 6 大坂御状控 元禄 5 年 1 冊 《徳山毛利家文庫 No.奉書録 3》

【岡山県総合文化センター郷土資料室】(2003.8.)

〔デジタルカメラ撮影〕

撮影番号／史料名／年代／数量／数量／目録番号(冊子目録の旧番号)

- 1 御代官役所向公事方諸事取斗方覚留 安永・天明年中 1 冊 No.79 (8)
- 2 備中倉敷附公事方取斗方 文化年中 1 冊 No.84 (7)
- 3 (表題なし)(岡山藩法令写か) 万治～ 2 冊のうち 1 冊 No.78 (3?)
- 4 仙石家御裁許写 天保期 1 冊 No.83
- 5 天保六末年仙石道之助殿元家来転事友鷲被召捕一条従一月寺願書写 天保期 1 冊
No.82

吾老^テ縦^レ機^ヲ意之所^レ適趙遥^{トシテ}帰^ル讚州^ニ。通^ス国子君^ニ。君^{キミ}請^フ
兵書^ヲ。是^レ所^レ不^レ謂^ニ仲尼^ノ之乎。雖^レ然^{リト}適問^ニ不^レ應^ル則^ハ謂^ニ
碩鼠^ノ一乎。況又歷代賢聖不^レ得^レ止^{ムコトヲ}而不^レ棄^レ之。又仏祖之言
說比^{スルヲ}絃弓^ニ一哉。故^ニ曾^テ拳^テ所^ニ見聞^{スル}之十一^上ヲ。以示^ニ之幸書^{シテ}
楮余^ニ為^レ之跋^ス。月海此歲六十六。元祿四辛未極月。謹而書。
印 印

(第三冊目終わり)

附記

本史料の閲覧に際しては、香川県歴史博物館学芸課の方々にお
世話になりました。また、山口大学附属図書館での閲覧に際し
ては、山口徹氏にお世話になりました。厚くお礼申し上げます。

偽ノ教ヲタテ、愚者ヲアザムキ、善道ニ入ルト云人アリ。非ナリ。然ニ非ス。神道ノ教靈驗ヲ云事仏伝ニ比シテハ、因果ノ理ナリ。儒伝ニ視テ云ハ、積善積惡ノ理ナリ。隱徳アル者ハ、必陽報アリ。是神ノ靈驗也。眼前ナレトモ、愚者ニ不レ見、偽ノ教ニハ非ス。無明癡暗ノ衆生不レ達^{アヤマツ}謬^{マコト}テ轍チ不レ悟方便ハ偽ノ教ナリト云。權ニ設クル名ナル事不レ弁言句ニ迷テ不レ錯哉。

一 仏典西方ノ引導弥陀經ノ説、偽ニ似テ虚ニ非ス。死スレハ西方ニ行、有性非性皆然リ。万物子ヨリ始リ、西ニ終ル。乾ニ於テ玄ナリ。日月辰星、皆然リ。方ヲ云ハ出雲ノ国ナリ。月ヲ云ハ十月、日ヲ云ハ亥ナリ。六陽地中ニ隠レ、六陰皆顯ル。故ニ神無月ト云也。神ナキニハ非スシテ、神本ニアリ。故ニ異国ニハ陽月ト云有ハ無也。無ハ有ナリ。十月諸神出雲ニアツマリタマフト云。本朝ノ地四州九州二嶋ヲ去テ、出雲ハ国ノ亥ナリ。此地ニテ諸神縁ヲ定給ト云。万慮分別ノ本一身ノ亥ナリ。出雲他ニ非ス。阿字本不生ノ地也。弁才天女陰中ノ陰也。龍宮海藏諸仏諸神ノ住所道ヲ悟人ハ成^{ナリ}タキ者ニナル也。自在神道也。吉田ノ兼好法師出雲ト云ハズ、伊勢ノ国ト記ス事、神道ノ秘事也。仏典弥陀ノ浄土西方ト書セシ。理又同^シ。西方ニ死シ、出雲ニ終ル。出雲ハ一身ノ亥也。腰ニアルナリ。無窮ノ源ナリ。分別ノ本ナリ。

一 西方弥陀ノ仏、国土ハ十万八千里ト云事、十波羅密多ト成就ノ修行難キヲ云也。無一物ノ所、無尽藏多ハ無量ノ実コ、ニアリ。成就トハ不レ勉シテ法ニ中ル。大聖孔子モ七十二シテ從容トシテ道ニ中ル。難キニ非スヤ十惡八邪ヲ去テ、然モ又去ルトモ覺ヘズ。理ト氣ト一体ニシテ法ニ中ル。大賢聖モ不レ及。

天道一ナル故ニ極樂浄土ト名付、彼岸トモ云也。人存命ニシテ彼国ニ至ル事遠キニ非スヤ。十惡ハ殺生偷盜邪婬兩舌惡口綺語妄語貪瞋癡^ヒ。八邪ハ邪見邪思邪語邪業邪精進邪定邪念邪命。摩訶般若波羅密多者、無上大涅槃ノ所ナリ。不及トイヘトモ聖人願^レ之聞事安シテ、行^{コト}カタシ。不^レ宜。速^ニ説有^レ難起事ヲトナリ、祖師偽テ、ムツカシク云ナリ。(師ノイツハリハタシカニ悟ラシメンタメナリ。方便ヲ実ト心得信アル人ニハ方便ニテ治メ置也。サノミハザハイナシ。智者ハ云ハザレ共、自得スルナリ。)見解スル処一ノタガイアレハ、外万言万行皆違フ。

一 浄土門ハ下愚ノ為、大乘ハ智者ノ為、大賢以下ニハ性ト天道トハ孔子モ語リ給フ。

一 教外別伝禪者ノ道ハ、三乗ヲ超過シテ天ニ至ルノ道ナリ。性ニ率ノミ。(超過スレハ、仏祖不伝ノ地ヲシレバ何コトモ無事也。無量ノ方便ハ但菩薩界ノ方便ナリ。)是非ヲ離レテ善道ヲ行ス。然モ又非道ヲ行セズ。法義ヲ不レ破己ヲ去テ衆生ヲ度ス。是ヲ菩薩行ト云ナリ。法ト云ハ、世間ノ礼、少モ乱レザル事也。礼儀三百威儀三千仏ニハ成安シテ、菩薩行ハ難シ。仏是也。釈迦如来歷代ノ祖師皆同シ。覺^{サトリ}ヲ破リ、愚ニ帰リ十善ヲ行ヲ修シ、衆生ヲ導ヒキタマフ。下愚ヲ導ニハ方便モ又道ナリ。

一 障ニ不成偽ヲ以障而惡シキヲ止ルニハ、偽モ又可ナリ。小ヲ害シテ大ヲ救ハバ人ヲ殺モ可ナリ。一惡ヲ作テ、万惡ヲ止メハ、盜人モ可ナリ。故王者止コト得ズシテ、戰ヲ作ス。好ニハ非ス。武ノ常ナリ。遠キ慮ナケレハ近キ愁アリ。治世ニ乱ヲ不^レ思事勿レ。仍曰、殺人刀治人劍。

ナキナト、クチニハイヒテスキヌヘシ

コ、ロノトハ、ナニトコタヘン

コ、ロタニマコトノミチニカナヒナハ

イノラシトテモカミヤモラン

二首ノ歌イカナル愚不肖モ伝ヘテ聞世ノ口ニアルナリ。ヨキモアシキモ吾ハシラネト、仏神ヨクハヤクシルナリ。仏神トハ心ナリ。心ノ外ニ仏神ナシ。三法ト云モ智仁勇ノ三ナリ。又仏法僧ト名付タリ。仏ト云ハ心也。法ト云ハ是非ヲ弁ル智ナリ。僧ト云ハ行ヒ正ク、邪氣ニヒカレサルヲ云ナリ。心ヲ三ツ二分テ、始ヲ仏ト云。中比ヲ法ト云。終リヲ僧ト云ナリ。

一 三身ノ事人天眼目宗門雜錄ニ云、三身ト云ハ法身毘盧遮那仏也。報身ハ盧遮那仏、仏化身ハ釈迦牟尼仏。名ノミ別ナリ。理ハ一ナリ。右ニ同シ。衆生ノ身中ニ有也。即寂智用也。寂ハ是法身智、是報身用ハ是化身。又下篇ニ大相智通示シテ曰、三身ノ事清淨法身、汝力性ナリ。円満報身、汝力智ナリ。千百億化身、汝力行也。右ニ同。若人有テ本心ヲ離レテ外ニ三身ヲ説者アラハ則、有心無智ノ外道ナリト云フヘシ。

一 三身ハ弥陀觀音勢至也。清淨法身トハ阿弥陀仏、円満報身トハ觀音、千百億化身トハ勢至ナリ。又右ニ同。

一 三身一仏、一仏三体ニ反化ス。阿弥陀仏ト云ヘハ一體也。初中終分レハ、三体ト成。阿ノ字ハ仏、弥ノ字ハ法ナリ。陀ノ字ハ僧ナリ。カクノゴトク云ヘハ、又三宝トナル。仏法僧ナリ。

太神宮トイヘハ、仏也。春日ト云ヘハ法ナリ。八幡ト云ヘハ僧也。理又右ニ同。智仁勇ノ三德也。三德ハ合テ一也。一ハ誠也。誠ノミ分別ナキ一ヲ以、三德四德貫レ之。天人一ナリ。

一 三歸依トハ、自性ノ三宝ニ歸依スル也。仏ニ歸依スルトハ、散乱ノ氣ヲ引止ルナリ。南無阿弥陀仏々々一念、或ハ十念必散乱ノ波浪シツマリ、密ト成一念不生ノ地ニ歸依スルナリ。阿字ノ処ナリ。達摩ハ此ヲ理入ト云。一念不生処、諸仏吾一體也。安樂ノ地也。

一 法ニ歸依ストハ、心無異ナレハ、諸善諸惡能通達ス。是非ヲ弁ヘ非ニ順セス。惡道ニ落ス。如レ此心ニシルヲ法ニ歸依スト云也。

一 僧ニ歸依トハ、善惡是非ヲ弁ヘシトモ、勇ナケレハ行事不能、諸善奉行ス。大勇也。速ニ非ヲ去テ道ヲ行、如レ斯会スルヲ、名付テ僧ニ歸依トハ云ナリ。三宝ニ歸依スト云是ナリ。三法外ニムカツテ求ムヘカラス。人々自性ニ本ヨリ備リ得也。他歸依ト云。本文ナシ。自歸依ト云。本文アリ。

一 三社ノ神ヲ尊敬スル事、右ニ等シ。更ニ別ナシ。

一 太神宮ヲ尊敬スルノ道、正直ヲ体トシ、禍福ノ利養ヲ心ニ掛ズ、只アリノマ、ニ義理ヲ尊ヒ行ヘシ。良智ノ故也。良智ハ性善。

一 春日ヲ信スルニハ、正直ナリトイヘトモ、愚ナレハ仁慈悲モ理ニ中ラサレハヨカラス。只孝弟忠信ノ理ニ背ク事ナク、明徹ナルヲ仁ニ中ルノ道トス。

一 八幡ヲ信スルニハ、智仁アリトイヘトモ、行処ヨワケレハ、何ノ益カアラン。善ヲ見テ、速カニ進ミ、惡ヲ知テハ、速ニ退ケ。強剛ナルヲ勇ニ中ル理トス。

一 神ノ妙怪、靈驗ノ徳ヲノヘテ民ニ信ヲ進ル事、小智短才ノ下愚、皆イヘリ。仏典淨土門ノ教西方ノ引導ニ似タリ。理又同

一 神ヲ求ムルノ要、先六根ヲ清淨ニ、内外ヲ清メ、深キニ入テ、至心ニ止リ、行住座臥、恭敬ニシテ、而モ恭敬タル事ヲ不_レ持不_レ失不_レ進、又不_レ退。進退不_レ度不_レ思不_レ勉。如_レ斯ナル則、語默動靜灑掃應對進退、皆理ニ中ル。是則神也々々。神学ノ大概是也。

一 三種ノ神器ノ事。一二神璽、二ニ内侍所、三ニ宝劍ナリ。此三ツノ者ハ、天子ノ宝也。此故 天子御即位ノ始メ、先此三ツノ物具_ヲラテハ、天下治リ難キ。其故ニ先王第一番ニ三種ヲ授リマシマス君主、若御若年ナレハ、時ノ摂政、是ヲ授リ御成長ノ日、君ニ移スト聞ヘリ。智仁勇ノ三德ナリ。神璽ハ智也。内侍所ハ仁ナリ。宝劍ハ勇ナリ。三德一ツモカケテハ天下治メカタシ。故末世ニ此三德亡ヒモヤセント、三器ニ形ドリ付テ内裡ニ納ル法也ト知レリ。誠ニ能記セリ。天下ノ万民ニ此三德ヲ尊敬アラセンカ為ニ、三社ニ祭ル。伊勢春日八幡、是ナリ。太神宮ハ智神也。智ハ良智ナリ。良智ハ性善ナレハ、智ハ始也。太神宮ニ祭ル也。仁ハ学而知ル。第二ニ置也。勇ハ勉ヲ強シテ行末ナリ。第三神也。三社ハ一ニシテ天照皇太神宮ニ歸ス。始テ終リ、終テ又始ル。本末ナシ。此事秘藏ナレハ、其器ニ非ンハ伝ヘカラス。二人一所ニ在ルニ伝ヘカラス。此法露顯スル則、五常ノ道トモモ破レナン事ヲ先王深ク秘シ玉ヒ、忽ニシ玉ハズ。君此法下愚ニモレ知ル則、三法共ニ亡ヒナン。別而我国ハ神国也ト民ニ教ヘテ信アラシムル政也。事ノ大事ヲ定ルニ起請誓ヲ以テ実否ヲ定ム。大聖孔子文宣王モ性ト天道ノ事ヲハ民ニハ知ラシムヘカラス、倚ラシムヘシトナリ。釈伝ニモナマサトリノ不仁者ヲ名付テ外道因果発無見ト、仏モ惡ミ給ヘリ。若見性ナ

クシテ一切時中無作ノ想ヲナサント擬セハ、是大罪人ナリ。是癡人ナリ。無記ノ空中ニ落テ、昏々トシテ如_ニ醉人_ニ好惡ヲ不_レ弁。若又無作ノ法ヲ修セント擬セハ、先只見性ナルヘシ。見性ノ人ハ仁不仁ヲ弁ル。故ニ諸惡ヲ制シ、諸善ヲ行ス。惡道ニ落ル事ナシ。恐ルヘシ。謹シムヘシ。因果經ニモ仏ノ方便ヲ、シリカホニテロヲキク慈悲ナキ惡人ヲハ好苦凡士ト名付テ、己ト苦痛ヲ好ム凡民也ト云。今ノ世モ凡僧凡民ノナマシイニ学シテ、小見解有テ、見性タシカナラス。精微ヲツクサス。修シ行セサル輩ハ尼入道ノ下愚ニモ劣レル者也。而モ又天罰ノカレ難シ。魔道ニシツミ、地獄ニ落テナガク浮事アルヘカラス。

一 上將ハ学ヲ好而、道ヲタシナミ精微ヲ極メ、理ニ通シ、不義ニ順セス。克_テ己_ニ復_ス礼_ニ。身心正シキ故ニ、国家ヨク治ル。一 中將ハ中道ノ理ニ不_レ通。三法ニ於テ己カ耳スルヲ是トシ、不_レ知ヲ以テ他ヲ非シ、誹謗シ、嫉妬シナキニ劣レル妄物ナリト慢ル。

一 下士ハ学ヲ好メトモ、道ヲ不_レ好。諸語ヲ学テ口ヲ利ル。皆空言ナリ。

一 上士ハ道ヲ失ナハン事ヲ恐レ、心ニ至善ノ信ニ住シテ、恭敬德行、明ナリ。此ハ人間ノ中ノ神ナリ。

一 中士ハ外神ヲ敬シ、參詣供養ヲ行トシ、己身神ナル事ヲ悟ラス。然レトモタヨリニフレテ、不義ヲ恐ル。小利アリ。

一 下士ハ外神ヲ頼、不義ニ順、愚人疾ヲ惡ミ、藥ヲノメトモ又毒ヲ喰、藥ノマハリハ遅ケレトモ毒ハ早ク順ル。好事門ヲ出ザレトモ、惡事千里ヲ行、学文ノ道無_レ他、只独ヲ慎ムノミナリ。 古歌ニ

心眼ニテ見ル也。是ヲ見性ト名付ク。又ハ弥陀ニ逢トモ云。此弥陀トハ何者ソ。吾心ナリ。心ノ如ク言行アル。則チ弥陀ナリ。心ノ如クナラス。氣随ヲ行。是衆生ナリ。衆生ノ氣随ヲ去テ、本体ノ主人公ヲ吾体トシテ言ト行ニアヤマタス。孝弟忠信ノ事業礼義ニ中リ欠ル事ナキハ道ニ近シ。中庸ノ書ニ忠恕ハ道ヲ去ル事遠カラストアル。心一理ナリ。天道ニ非シテ人ノ道ナリ。未レ至シテ、勉ノ内ナレハナリ。自性ト四体ト忠恕一和ニシテ、從容ト理ニ中ルヲ道トスル也。又成仏トモ云。大悟トモ云。見性ハ安ケレトモ、大悟成仏ハ難シ。理ハ頓ニ悟ツトイヘトモ、事ハ漸ナリト云ノ理也。知ル事安シテ、行事カタシ。行解等キヲ祖ト云ト達磨大師ノ語ノ如シ。歷代ノ祖師皆然云。大聖孔子モ五十二テ思而得勉而中ルト也。六十二シテ不レ思而得勉而中ルト也。七十二シテ不レ思シテ得レ勉而中ルトナリ。事理一体從容トシテ道ナリ。大悟成仏ノ義ナリ。

一 神儒仏ノ三法、其理一ニシテ、三国ノ法也。殊神道ハ和国ノ教ナレハ、必馴慢ルヘカラス。仏典ハ天竺ノ神道、儒道ハ震旦ノ神道更無レ別。

一 三法ニ於テハ、是非ノ沙汰、皆愚者ノ云所ナリ。天照皇太神ハ、吾国ノ主也。親也。タトヒ他ノ国ノ法ニ劣レル所アリトモ、言ヘカラス。先ツ人々吾親ヲ親トシ、吾主ヲ主トス。吾君父惡シケレハトテ、他人ヲ取テ愛敬セン哉。神道ヲ非シ而儒道ヲ是トセハ、和国ヲ去而渡唐セハ可ナラン哉。神儒トモ不是トセハ、早ク此国ヲ去テ、渡天セハ可ナラン哉。不善ノ君ニハ不レ事ノ例アリ。不善ノ親ヲ去ルノ道ナシ、サレハ和国ノ人々此国ニ生レ、君父ノ重恩ヲ得ナカラ、他国ノ法度ヲ善ナリトシ用

而吾国ノ法度ヲ不善ナリトテ不レ用破ラハ、其咎如何シテカノガレン哉。君父是ヲ怡バンヤ。此ヲ以是ヲ見レハ、神道ニ於テ不足ノ言若モアルナラハ、儒語ヲ借り仏語ヲ仮リテナリトモ、神道ヲ補ナハン事、忠孝ノ道ニ非スヤ。吾国ノ神書秘シスコシ実書不レ正故而云ノミ。

一 神道ハ三才ノ本。万法ノ根也。宗源ハ天地ヲ成齊元ハ日祚ヲ立、靈宗ハ心性ヲ明ニス。三部ハ道ヲ一ニス。此ヲ以体トス。大社ハ天下ヲ衛、国社ハ国家ヲ護リ、縣社ハ郡民ヲ守ル。三社風雨ヲ領シ、禍福ヲ掌。是ヲ以用トス。体用一ニシテ、其治ヲ成。吾国ノ基トス。祭ニ礼ヲ以シ、祈ニ理ヲ以シ、事ニ以レ信ヲスル則、神我一ニ和シ道在レ茲。

二曰、神ハ正直ヲ以体トス。靈驗ヲ以用トス。天ヲ御、地ヲ鎮。故神職ノ者己カ正直真善ノ性ヲ認得シテ、敗テ放遺セス。神ノ妙怪靈驗ノ德ヲ信崇シテ、更馴慢ス。神我ノ一二住シテ奉事拝陪。

三曰、奉幣ノ法ハ慎敬ニ止テ、日アマツコハ、ロツ心於神極ニ安、重手玉串ヲ取り、以斜ナ、メニシテ心ニ中ツ。左ノ足ハ陽天ヲ踐、右ノ足ハ陰天ヲ踐、広前ヲ渡リ、静々然嚴々如トシテ、内門ニ陪リ、敬而蹲ニ踞ス自己一。神靈ヲ躬ニセヨ。宝幣ハ神ノ表識、祝言ハ神ノ身理、正殿ハ天ノ德宮、神明ハ天ノ法生。五法一ニシテ正シク奉ルニ礼ヲ以セヨ。

此外十四ヶ条不記憲法ニ見ヘタリ。

一 神ニ事ル法、誠信恭敬ニ止ル。至心恭敬ハ百邪ニ勝ツ。邪ハ吾心ノ外、氣質ノ濁ナリ。心ハ清也。真也。神也。

一 神ヲ求メテ神ヲ亡シ。自身真心至心神。

門ニ入事未^レ得、自性ヲ未^レ見事ヲト云リ。

慧能偈シテ曰

菩提本無^レ樹

明鏡亦非^ス台

本来無一物

何處惹^ス塵埃^一

此偈見不見ノ間疑ハシ則心則仏性ヲ知ルカ未^レ知シテ、法不現前ノミヲ知ルカ、五祖慧能力為ニ金剛經ヲ説、応無所住而生、其心ト云処ニ至テ慧能大悟スト云リ。一切万法自性ヲ離レス。暫クモ休セス。是大悟ノ見ナリ。孟子ノ曰、命ニ非スト云事ナシ。順テ其正シキヲ得意又同。

一 神道ハ吾國ノ教ナリ。是非ノ沙汰ニヨルヘカラス。天神七靈ハ仏典ニ云ル過去ノ七仏トシルヘシ。神世ノムカシ文字ナシ。誰カ知リ、誰カ伝^{ツタヘ}ン。釈迦仏自性天性ナル事ヲ本ヨリ説タマヘトモ、衆生聞入ス。故自讃^{ツヅク}言ズ。七仏ニヨリ第二ノ説法アル時、愚者少シ心柔ケリ。是方便ナリ。神道ノ始リ。吾曾不^レ知。他又不^レ可^レ知。神ノ為德其盛矣乎。視^レ之弗^レ見聽^レ之而弗^レ聞^レ物不^レ可^レ遺。天地ニ満テ万物ヲ作ス。皆之鬼神ノ德也。

唯天下ノ人齊明盛服シテ、祭祀ニ承ルコト洋々乎トシテ、其上ニ在カ如ク、其左右ニ在カ如ク、夫德微ナレトモ顯ハレ擯コトアタハス。隱德アレハ陽報アル也。盛德ニハ神必^{サレハイ}福ノ靈驗新也。神ハ信ナリ。真ナリ。深也。道ヲ知ル人默シテ見^バ之可ナラン。震旦ノ儒書ニモ深く高ク微ニシテ、言説ノ絶タル億意ヲハ神ナリト伸^ノ、仏典ノ説法ニモ至心至極ノ所ニテハ、神力神變神道ト説ク。然ルニ邪見ノ僧等、仏ト神トハ水波ノ隔アリ。湍流水ノ如ク、本末ナト云ハ愚ナリ。天地ノ道ニ本末ナシ。本末皆仏ナリ。本末皆神ナリ。名ニヨルヘカラス。聖德太子ノ曰、

仏法ハ天竺ノ神道、儒法ハ震旦ノ神道ナリ。國ニヨリ其名ノ別ナルノミ。太子ハ王子也。何故ニ神ヲ第二義トシ、仏ヲ第一義ト言給ハム乎。儒語ニ云、忠恕ノ別アリ。忠ハ本ニシテ、恕ハ末也。中ノミアリ恕ナキハ己^レ正^{シテ}シテ外物ニ応シ、言行理ニ中ラサルカ如シ。己正シキハ、外事理ニアテンカ為ナリ。外理ニ中ラヌハ、其中^{チウ}不是。孔子先進後進ノ事ヲ曰、先進ハ質文ニ過タリ。後進ハ文質ニ過タリ。質ハ生得ノ智ニシテ学ニ非ス。文ハ学、智有テ生得惡シキカ如シ。前後皆中和ノ德ニ非ス。文質彬々ト而後君子也。内外皆宜調テ合テ道ナリ。本末々々又本大道ニ端ナシ。

一 誠ト云ハ自己ヲ成ノミニ非ス。物ヲ成所以也。己ヲ成ハ仁ナリ。物ヲ成ハ智ナリ。性ノ德也。内外合セテ道ナリ。故ニ時ニ措テ宜也。此中庸ノ語ナリ。大道ニ本末ナシ。

一 忠恕ノ二字ヲ謂則、忠ハ本ナレトモ中有テ恕ナキハ己ヲ成ノミニシテ、物ヲ成所以ヲ知ラス。故孔子一言ニシテ國ヲ治ムルニハ恕ナリト曰ヘリ。忠ト不^レ言ヲ以可^レ知。

一 忠ハ未發ノ中ニ一念發ル者アリ。仁義ノ種也。恕ハ心ノ如クト書。文字ノ如シ。言行ニ顯ルヲ云。忠アレトモ不^レ行ハ不忠徒善トス。心ニ萌ス誠也。誠ノ如ク知ルヲ忠ト云也。不起一念ノ中ノ字ノ所へ、心一ツ出テ動ヲ忠トス。忠ノ如ク行ヲ恕トス。恕ハ性善ナリ。

一 善惡自性ニ知ル。自性本天性也。何ソ外ニ求メン。求ルハ此自性ヲ求ム。他ヨリ得ルニ非ス。本ヨリ己カ者ナレハ、求メ安シ。

一 自性ヲ求テ天性ナル事ヲ見ル。見ルトハ肉眼ニテ見ニ非ス。

オアル者神書ヲ彰シ出来レリ。家々ノ秘書トテ、其言マチクニシテ不定ナリ。其詞ニマトヒテ知ラサレハ、儒語仏語ヲ借りマジヘテ、神書モ多ク出来レトモ、推量ノ沙汰ノミナリ。蓋シ其大概ハ、皆以利世安民ノ為ナリ。神道ノ教靈驗多ク、語ルノ理、又仏法ノ方便、下愚ノ心ヲ恐ラシメ善ニ引入ルノ道、智者為ニハ非ス。智者ニハ教ヘサレトモ自得スル者ナリ。愚ヲ退ケ善ニ進ムノ道ハ方便トハ云ヘカラス。因果ヲ恐レテナリ。積善積惡ノ事、誠ニ恐レルヘキ事ナリ。下愚ハ恐レズ。恐レサルハ忽ナル事ヲ弁ヘサレハナリ。此故ニ聖人後世ヲアワレミ、色々ノ方便ヲ語り、其身ヲ輕シメ、苦勞ヲカヘリミス。母ノ赤子ヲ安スル如ク、大慈大悲ノ仁道アリ難キ事ニ非スヤ。民ニハ真理ヲシラシメス。恐ラシメテノ政道也。智者ハ自得ス。太公カ智ヲ使ヒ愚ヲ使其意同。

一 申其蒙童ノ昔ヨリ乱舞遊興ニ交ル事ナク書籍ヲ好ミ、武門ニ居テ兵法ヲ学フ。十有三歳ニシテ、仏道禪門ニ問テ、生死ノ根元ヲ知ラン事ヲ欲ス。幸アリテ或禪師ニ逢、仏魔ヲ弁ヘ、即心是仏ナル事ヲ学ヒ知ル。他ニ仏ヲ求ムル。下愚ヲ見テアザ笑ヒ、心氣高フリ臂ヲ張、朋友ニ背キ人ニ惡マレリ。

一 予歳三十三ニシテ性善ナル事ヲタシカニ覺ヘ、志立テント欲スルニ、是非ニ惑ヒ、言行不_レ中シテアヤマチ多カリキ。

一 四十歳ニ及ヒ、始メテ性氣ノ論ヲソシリ進ム事、退テ存ヲ忘セム事ヲ願ヒ、礼ヲ事トス。

一 性ノ善ナル事ヲ知ルトイヘトモ養氣ノ論コマヤカナラサレハ、言行過テ後悔アリ。心広カラス。四体_{フタヤ}胖カナラス。

一 予先祖ヨリ武ノ家ニ生レ、兵法ノ道ステカタク、久シク此

ヲ学ブトイヘトモ技芸ハ君子ノ事トセサル所ナリ。軍法ハ又武芸ノ宗タリ。故ニ軍伝ヲ学ス。軍伝又文ノ外ニ非ス。文トハ神儒仏ノ三法ナリ。三法ノ正理ヲ不_レ弁シテ、軍ニ利ナシ。故ニ予カ教所ノ兵法ハ、文ヲ以而先トス。

一 或人予ニ問テ曰、神儒仏、何レカ勝ン。曰、神也。問、何故道ハ神ナリト云。曰、震旦国ノ政道、儒伝ハ天道ノ常ノミ。云ナレハ一毛モ欠ル事ナク、又余ル事モナシ。毫釐モ加損アレハ、道ニ於テ天地懸ニ隔ル性ニ率ノミナリ。

一 天竺輪王仏典又是中和ノ常ナリト云トモ、中国ニ比スレハ、異ノ国ナリ。故衆愚慢ニシテ通セス。故釈迦衆生ニ応化シテ一方便ヲタレテ導キ和ス。一仏ニ帰シ、一方ニ依ル法アリ。是又仏典諸經ノ中ノ一儀也。是ヲ一行三昧ト云。虚妄ニ非ス。又大道ニモ非ス。釈学ノ人モ智アルハ、是ヲハ道トハ云ハス。王道ニ於テ猶又道ト云ハス。異端ナリトイヘリ。濁世ノ下愚ヲ和スルニ於テハ可ナリト言フヘシ。小補アルノミナリ。又曰ク諸惡莫作衆善奉行ノ数人ノ修ス所ノ道也ト、未大道ニハアラス。然ルヲ聖德太子此語ニ依テ修行セハ大道也ト宣少アヤマチナラクノミ。然レトモ仏学小乗ノ下愚ニ対シテハ大乘ナレハ可ナリト云フヘシ。釈学ノ人モ最上乘ヲ知ル人ハ大道ト云ヘカラス。諸惡莫作衆善奉行、此句ニ因テ修行セハ、惡道ニ墮ル事ヲ免レン。大ニ利益モアルヘシ。大道ト云ヘカラス。

黄梅ノ五祖弘忍大師ノ会下神秀トイヘル僧アリ。偈ヲ書シテ曰、

身是菩提樹 心_ハ如_ニ明鏡_ノ台_一

時々_ニ勤_テ仏拭_{セヨ} 勿_レ使_レ惹_ニ塵埃_一

此偈諸惡莫作ノ心ナリ。是修行ノ内ノ偈ナリ。五祖ノ云。神秀

乱ニ対スル者ハ治ナリ。不道ニ対スル者ハ道也。不仁ニ対スル者ハ仁ナリ。不義ニ対スル者ハ義也。不礼ニ対スル者ハ礼也。愚ニ対スル者ハ智也。偽ニ対スル者ハ信ナリ。仁義礼智信、五ツノ者、本ヨリ人々具足ス。学^レ焉^ヲ知^レ焉^ヲ、己ニ備テ不^レ離、全不^レ失ヲ賢トス。賢者ノ往行、其前ニ無^レ敵。故ニ王者ノ兵ハ不^レ勝云事ナシ。夫人情ハ安逸ヲ樂ミ、乱ヲ不^レ悦。故学者ハ治ヲ好テ乱ヲ好マス。衆ト好惡ヲ共ニス。道ヲ以人ニ親ム。故備而全一和ナリ。一和ヲ以不和ニ勝、仁ヲ以不仁ニ勝、義ヲ以不義ニ勝、礼ヲ以不礼ニ勝、信以信ナキニ勝。此五ツノ者軍不^レ備シテ前ニ先勝、軍備而勝者十三アリ。衆ヲ以寡ニ勝、親ヲ以疎キニ、能ヲ以不能ニ勝、安キヲ以勞ニ勝、近キヲ以遠キニ勝、謀ヲ以謀ナキニ勝、謀多ヲ以謀少ニ勝、飽ヲ以飢タルニ勝、險ニ居テ易ニ勝、山ニ陣シテ阻ニ勝、陸ニ陣シテ船ニ勝、五列全シテ不全ニ勝、約ヲ以約ナキニ勝、先勝而後戰。戰而不^レ勝ト云事ナシ。故王者ノ兵ハ戰ヲ学ニ勝事ヲ事トシ、戰事ヲ事トセス。戰而可^レ勝者正奇ナリ。奇ヲ以敵ヲサソヒ、虚実ヲ知ルノミ。前卷ニ記。戰ヲ為^スハ、止事得サルカ故ナリ。太公ノ曰、全勝者ハ不^レ闕、大兵無^レ劍鬼神ト同ス。甲兵ノ備ヘ無シテ勝、衝機無シテ攻、溝壟無シテ守ル。或人予ニ問、德ヲ以軍シテ勝。德ハ仁義礼智信五常正シキヲ德トス。吾身ヲ全シテ見聞覚智ノ邪氣ニ奪ハレス。心ヲ正シ、忠恕ノミニテ五倫ニ交ル。其業孝忠信ノミ。此道ヲ心得知ル事去テ（去ルハ不見ノ見）言行理ニ中ルヲ道トス。去ルトハ存ヲ忘スルノ理ナリ。見ヲ超過シテ

不見ノ見也。此理ヲ心得未^ル去ハ人道ナリ。從容トシテ道ニ中ル天道也。聖人此ニ比ス。夫聖人ハ無妄ニシテ法ニ中ル也。謂心赤子ノ如シ。赤子ハ其心意念ノ分別ナキ也。只性ニマカセテ名利ヲ知ラス。聖人ノ言行ニ等シ。然レトモ言行法ニ中ラス。学智ナケレハ也。有情非情草木国土ナヘテ皆成仏ト云。仏語ノ如シ。過去真仏ニ近ケレハナリ。成長アルニ順ヒ、父母ヨリ稟タル所ノ五行ノ氣、過不及アルカ故ニ其氣ノ重キニヒカサレ、剛ニシテ言ト行ニ過チアリ。其氣ノ輕ニヒカサレ、弱ニシテ過チアリ、火ニ薪ヲ加ル如ク、剛強ナル者ハ言行益進ムニ過^ステアヤマチ多シ。柔ニシテ弱ナルハ火ニ水ヲ掛ルカ如ク。益退キタラサルノミ也。人生レテ早く此理ヲ弁ヘ、吾氣ノ過ト不及ヲ損益アル則至ラストイヘトモ強メ慮テ行ヘハ、不^レ中トイヘトモ遠カラス。此是賢者ノ道ナリ。小人ハ制^スレ^ル焉所以ヲシラズ。不義ノ無道ニ落入ノミナリ。如斯事ハ師命ニ依テトク弁^スレ^ル焉キ神道仏道二流ノ事心得カタシ。委ク引導シ給ヘ。予対曰、儒釈神ノ三法、其引導ハ三ツナリト云トモ、其趣ハ一ツナリ。神道ハ吾国ノ政道、仏伝ハ天竺ノ国ノ政道、儒道ハ震旦国ノ政道也。皆是利世安民ノ方便ナリ。然ルニ中国ハ三国ノ中嶋ナレハ、国ノ風俗人ノ心モ善ニシテ、道ヲ語ルニ通シ安シ故、四民ノ分レモ早く、天道ノ常、仁義礼智ノ性、五倫ノ交リヲ語リ始メテ、天下ニ道ス。伏羲神農黃帝堯舜禹湯文武ノ君臣ニハ皋陶伊傳周召ノ人々教ヲ立テ、天性ヲ導キ、仁道ノ常ヲ語リ給ヘリ。神道ハ和国ノ法ナレトモ神世ノ昔ハ文字ノ記ナケレハ古ヲシル人ナシ。震旦ノ文字来朝ノ後モアマリニ秘シ、伝授ノモノトテ其理ヲ語ラス。法ノミ立テアル故ニ其实理シルモノ寡シ。中比

処少ノ働キ仕レハトテ、年比^{トシコロ}ノ御恩ニ当リ不^レ申、御大事ニ逢奉リ、一命ヲステ申スコソハ奉^レ存ルニ、只今ノ御褒美事新シク奉^レ存儀也。悦可^レ申処還而ナケキ入申ト可^レ申上^二。是礼也。世人道ヲシラサレハ、主君ノ大恩ヲ忘^レ少ノ事ニ恨ムルタグヒ多ケレハ、諸人ニ道ヲ進ムルノ一方便トモナルヘシ。愚人道ヲシラサル故二年比日比ノ御恩ヲ忘、褒美所領ニ心ヲ掛ルハ比興ノ至リナリ。心得シルヘシ。又日比ノ郎從扶持人ニ非、始而与力ノ侍ハ右ニ異ナリ、御褒美幾等モ請ヘシ。又日比ノ郎從タリトモ、世治リテ戦場ノ働キヲ感シ、新恩加増ハ格別ナルヘシ。数ヶ所ノ所領ヲ被^レ下トイヘトモ、吾一身ノ為ニ非ス。君ノ御為也。所領多ケレハ又多クノ士卒ヲ扶助ス。所領少ナケレハ郎從少シ。故戦場ニ出テ功少シ。十人五人ニ勝、天道ノ常ナリ。小勢ニシテ多ニ勝ト云理モアレトモ、止事得スシテ謀レハ也。不^レ謀バ小勢必多ニマクル。

一 或人問テ曰、一ヲ以十二勝ト云事ハ、古人ノ戦ニ多ク沙汰セリ。是モ味方ノ一万ハ一和シテ余念ナシ。敵ノ十万ハ心分レ而十トナル。十二分テモ一万ナレハ、是又等々ノ戦ナリ。十五ニモ又二十二モ分ル。謀故カ 曰、今古和漢ノ兵人謀テ曰、皆以多少ノ沙汰ナリ。然ノミニ非ス。周ノ太公二万七千ヲ以、商王ノ軍兵億万ニ勝、兵ヲ分テ多少ノ沙汰ノミニ非ス。敵ノ志ヲ分ル也。軍兵ノ衆寡ニハ非サル也。衆寡ヲ以謂ハ太公始テ牧野ニ陣シ、天下ヲ麾ク諸侯ノ来リ集ル事八百、其兵億万ト記セリ。少ナリトテ引而帰ル。其故ハ兵ノ多少ノ心ニハ非ス。商王ノ臣、仁者三人内、一人モ来ラス。武王ト隱謀シテ、猶重而商王ノ内ヲ乱シ、彼三賢退ケテ后、間ニ髪ヲ入ス、太公二万余ノ小勢ヲ

以、商王ノ億万ノ兵ヲ恐レス而、立所ニ勝、衆寡ノ故ニ非ス。君ニ対シテ親疎ニ有リ。親疎ノ道ハ仁ト不仁也。太公仁ヲ以彼商王ノ不仁ニ勝事火ニ薪ヲ加ル如ク、飢タル者ニ食ヲ宛力如シ。智以仁ヲ学シ、勇是ヲ行。仁智ナケレハ軍不^レ和。和セサレハ戦而必利ナシ。故王者ノ兵ハ不^レ戦先ニ勝ツ。仁ノ用ハ和ヲ貴トシトス。仁ヲ求ムルニハ学文ニヨル。学ナケレハ智ナシ。智ナケレハ人ヲ救ノ仁ナシ。仁ヲシラサレハ行ヘキ勇ナシ。智ト仁ト勇ト、三ツ者備ル則、天下ヲ見ル事手ノ内ニアリ。

一 四百石

鑓一本 鉄炮一挺

一 三百石

同

一 二百石

鑓一本

右ハ御代御定ノ法

予此書ニ記所ノ軍役、右ニ異也。旗鉄炮ノ事、学者自得スヘシ。只陣中人馬諸具費ナキ様ニ諸事カサリ道具無之様ニ、古ノ法ナリ。

矢玉藥大体大積リ

一 弓鉄炮毎日十放宛相渡心得也。然レトモ大事ノ前ノ心得ハ、猶少ナルカヨシ。五放是正成公ノ法ナリ。猶口伝アリ。

兵粮積ノ事

一 士卒ハ毎日扶持一升宛。馬ハ大豆一升也。

黒鍬役積リ

一 一軍ニ鍬四百人 一 鋤百人

一 ツルノハシ百人 一 金ツキ百人

一 金デコ百 一 ケンノウ百

一 ハツリ百人

右同前也。御代官役積是ナリ。

此外 一カマ 一ナタ 一ノコキリ。

一マサカリ 一細引 一ノホリ橋

一木ヤ道具 一川渡道具 一火消ノ具

色々アレトモ出陣遠近時宜ニヨリカワレル事多シ。一反ニ定

ムヘカラス。常ニ心ニ掛、人夫一人モ費ナキ様ニ心得シルヘシ。

一 貴人ノ御首ヲハ、錦ノ袋ニ包、朱ノ櫃ニ入ナリ。日久ク形ノ損セヌ様ニ品ニヨリ、敵ノ古郷ヘ送ル事モアリ。死骸ヲトリテ首ヲ添イツクシミ、イタハリ古郷ノ妻子父母等ヘ送ルモ、一ツノ謀ナリ。昔義経熊谷ニ命シテ、送状ヲ弁慶ニ書セ、八嶋ヘ遣シ給ヘリ。大キニ味方ニ得アリ。死骸ヲ見テナケキカナシムニ、勇氣サメリ。其得一ツ敵ナカラナサケアリト感シ、味方ニ興スル利アリ。其ニツ謀ニ怠ル。其三ツ此事義経心得而死骸ヲ送ルトハ、正成常ニ語り給ヘリ。忠義其言ヲ聞覺テ、正成ノ首ヲ千劍振ヘ送ル。正成ノ郎從ハ此理ヲ知ル故ニアザ笑テ、謀ニオチズ。アワレ尊氏兄弟河内ヘヨセヨガシ先君ノ弔ヒ合戦而打死セントイサメリ。良将ノ為事、敵ニ因テ転化ス。正成公ニ聞シ謀ヲ以テ、正成ノ家ノ子郎從ヲ謀ランニ、豈利アランヤ。忠義智浅而敵ノ心ヲサトセス、ヨキ事ヲナセトモ利ナシ。将タル者可知事ソ。

一 貴人ノ首ヲ取タルニハ見クルシカラヌ様ニ、能面ヲ洗テ楊枝マテヲツカハセ、常ノ如ニシテ三方ニノセテ、主ニ披露スルニモ又サラスニモ礼儀ヲ破ラス。俄ノ事ニテ三方モ用意ナクハ、其心得ヲ以テセヨ。寺方仏前ニアルナリ。

一 於戦場主人ヨリ高名手柄ノ褒美ナト給則、先一応数ヘシ。請ヘカラス。申上言^{コト}バニ曰、誠ニ身ニ余リ御意忝ハ奉^レ存トモ、此度ノ御褒美ヲハ願クハ御免被^レ下候様ニト可^レ申、其故ヲ問ヘシ。御恩ハ治世ノ常ニ沢山ニ被^レ下置^二付、一身ノミニ非ス。父母妻子マテヲ養育仕ル。多ク下人ヲ扶助皆君ノ御恩ナリ。誠重キ御ナサケ也。アワレ此事アラハ、御恩ヲ報セムト奉^レ存ノ

夜戦ノ事

一 夜討ニ非ス。夜軍ヲ好ム將アリ。夜ルノ戦ハ火鼓ヲ多調ヘ置、昼ノ軍ノ如ク無二別事一。夜ル戦ハ猶昼ヨリ大事ナリ。遠近險易水澗山阻地ノ利ヲ不_レ失事ヲ肝要トス。夜ルノ馬印惣大將ヨリ組頭マテ、皆火ナリ。故武將タル人ハ常ニ不_レ怠。諸將ノ馬印ノ火、ヨク心得知ルヘシ。

一 火業ノ事、品々アリ。右ニ記懷中火ハ地雷ノ仕掛ノ如シ。鉄炮モアリ。口伝ニ委シ。

一 明松ニ仕掛、明礬紙ニ包持火モ有リ。口伝。

一 火繩ノ事。木綿ニテモ竹ニテモ、イホタヲフシカネニ入テ煎シ、火繩ノ黒ク赤ク成程ニ久シク煎シ、引上テ夜露ヲ二夜モ三夜モトリテ用レハ、金ノ香ナシ。雨ニモ消ズ。火繩水ニヒタシテモ火ハ常ノ如ク、ヨク付也。口伝モアリ。

出行ノ事

一 押出ス事ハ、未明寅ノ刻、卯ノ刻吉ナリト云事ハ古法ナリ。朝ノ氣進メハ也。天ノ時ニ非ス。唯時宜ニヨルヘシ。早クテヨキモアリ、遅クテヨキモアリ。必ト時定有ルハ、愚將ノ業ナリ。今打立ナラハ、敵モ又相寄ニ来ルヘシ。敵ノ来ルハ軍使アレハヨク知ルイワレノ地ニテ、行逢ハン。彼地ハ敵ノ為ニ吉也。此地ハ味方ノ為ニ吉也。出テ不吉ヲ將知ルナラハ出ルフリニテ、何トナク刻ヲノハセ、遲出スヘシ。出テヨキ利有アラハ、(雨に月)ヨリナリトモ、出テ待ヘシ。此利ヲ心得スシテ、味方ノ

内モ先ヲ争出ハ、吾モ先ヲ争如クニシテ、彼ヲ先ニ立餌ハニスヘシ。敵ヲツカラカシ、二ノ勝ヲトル心得尤然ナリ。不諫シテ餌ニナス事ハ、上將ヘタイシ不忠ナリ。理ヲツクシ、イサメテモ不可ナラハ餌ニカフヘシ。必ニノ勝アルナリ。新田義貞摂津国手嶋川原ニテ正成理ヲ尽シ、謀アル事ヲ宣テ諫レトモ用ヒ給ハス。勝負不定ノ利ヲトリ可勝図ヲハズシ給ヒ、士卒多損サシ給ヲ以シルヘシ。正成先生二時殿給ヒ出テ戦ニ大イニ利アリ。新田ハ官軍ノ惣大將ナレハ、餌ニセムトニハアラネトモ、新田血氣ノ勇者故承引セス。此戦正成地形ヲ能知ルト計ニハ非ス。太平記評判伝記ニハ、地形一遍ノ沙汰ノミ也。南木武経ニ委記隠謀アリキ。

軍役

一	高壹万石	馬上拾四騎	旗五本	鎧二十本	鉄炮三十挺
一	五千石	馬上六騎	旗三本	鎧十五本	鉄炮十五挺
一	四千石	馬上四騎	旗三本	鎧十本	鉄炮十二挺
一	三千石	同	旗二本	鎧十本	鉄炮七挺
一	二千石	馬上二騎	旗一本	鎧三本	鉄炮五挺
一	千五百石	馬上二騎	旗一本	鎧三本	鉄炮五挺
一	千石	自分	旗一本	鎧二本	鉄炮五挺
一	九百石			鎧二本	鉄炮三挺
一	八百石			鎧二本	鉄炮二挺
一	七百石			同	
一	六百石			鎧二本	鉄炮一挺
一	五百石			同	

一 十人二十人トモアリテ可用小屋ハ、一本鏈ニテハ不足ナリ。鏈ナラハ二本。然共時ニヨリ夜中ナトハ急用ニ不相故ニ残置ク具足櫃ノ棒力挟箱ナト何ニテモ棒ノ類、荷物ノ棒ニ拵アルナリ。櫓ノ木一寸二分四角、長サ一間、是ヲ四ツ合セテ棒ニシテ持セ取ハナセハ、六尺ノ棒四本トナル。二本宛繞伸而中ヲ鉄ニテツカイヲナシテ、二間ノ棒ニツアリ。末ニ石ツキアリ。一方クワンアリ。此間ノ棒三間ヘタテ押立、四方六方ニヒカヘ細引ナリ。上ニハ油紙二枚、小屋ノ大小ハ人数次第、如何程モ広狭アルヘシ。

大小屋ノ事

右ハ将ヨリ調、士卒ニ分配ス。自分ノ用意ニ及ハス。其為ニ手明人歩足輕長柄等ノ小人多。故ニ調相渡ス。是ハ長陣城セメ時宜ニヨルナリ。

トウ油練様

一 油壹桮 一 蜜陀僧三文目 一 櫛ノ葉十枚入テ、炭火ニテソロ／＼ト煮ルナリ。程ヨキ事油ノ中ヘ灯心ヲ入テ、引上少サマシ見レハ、トウシン折ル者也。ソレヲ程トス。少煮スコシタルカヨシ。

紙ツキ様ノ事

一 コンニヤク玉ヲヨク煮テスリテ、米ノスニテトキスルナリ。紙ハ喰サキニシテ、右ノノリニテツキ、扱又後ニコキシフニテ、ウラオモテ二反ソメテ後薄シフニテ四五反ソメテ扱後ニトウ油

ヲ引也。陣張諸事ニ用ル也。紙ハシノモミモヨシ。其マ、モヨシ。又皮船杯調ニハ皮ヲ用ル也。

皮ニ引トウ油ノ事

一 水一計ニ油二合^{ス也}。右白皮ノ塩氣ナキヲ、右ノ水ニ油ヲ加ヘ、半切桶ニ入ヨクヒタシ引上、影干ニシテ又右ノ水ニヒタシ引上干ナリ。後又本トウ油ヲツギニテ、三反引ナリ。年ヲ重而少コワハリタラハ、アツキ湯ニ少シ間入置、引上ムシロニ包、暫オケハ、右ノ如ク新シクナルナリ。

進得サルヲ、味方ハ兼テ此理ヲ知ル故ニ、少モサワカス。ヨキホトヲ窺ヒ敵軍ノ脇ヨリ中ノ手トオホシキ上將ノ本陣ヘ、間ニ髪ヲ不_レ入オメヒテ掛ル。必時ヲトリコニス。是軍術ノ秘藏ナリ。此藥秘事タル故ニ不記。口伝々。

一 右ノ藥方古今三国ニ未人ノシラサル所也。秘中ノ深秘。今名付テ霧霞ノ印ト云。

一 地雷筒打刻、毒藥鉄炮ヲ少々マセテ伏置ヘシ。地雷打放テ後、鉄炮打タル人彼霞ノマキレニ引トルヤウニ心得アルヘシ。

川渡ノ事

一 大河ノアル地ハ、兼テ知ル地ノ是非ニヨリ、渡シテヨキ地アリ。彼ニ渡サセテヨキ地アリ。時ノ宜ニ隨而吉ナリ。渡サテ不叶地ナラハ、在家ヲコホツテ柱ヲ取ヨセ、幾程モナカク結合セ、川ヨリ流セハ一方川向ヘツク。扱細引ノ事皆人ノシル処ナリ。五七人モ取付渡リ、扱後大綱ヲ向ヘ引越、幾等モナクノ如ク、此心得ニテ渡スモ有、又具足櫃ヲ舟_{フネ}ニ用テ越モ有、櫃ヤラウ蓋_{フタ}ノ間ニ皮ヲ入ル。一反スレハ水少モモラス。此ヲ角船ト云。又皮舟ト云モアルナリ。此タカクヒハ早川ニテハ越難シ。水ユルヤカナレハ越ヤスシ。鑓ヲミサホニ用ル也。

馬川渡シ

一 浮沓アリ。アホリノ跡ノシホテヲトキテ、左右前ヘマワシ、上ニテシメ付テ、ヨシアホリ拵ヤウニ、二重ニシテ中ヘ風ヲ入ル。

馬上ノ楯ノ事

一 長サ壹尺八寸、横九寸、重サ一貫目。

右ノ楯一両筒ニ藥二文目込テ通ラス。木引ノコキリ前引キト云。古キヲ求メ二枚ニテモ、三枚ニテモ合セテ九寸ニ足程ニシテ、鉄ノ針ヲ打也。ヨク砂ニテミカキ白クナルヤウニシテ、上ヲ漆ニテタメニヌル。サヒアレハ玉通ル。実吾為ニ持ヘキ楯ハ重サ二貫目ニテモ猶ヨシ。敵間近ケレハ二三町ノ内ナリ。少重キトテモ苦勞にナルヘカラス。右ノ前ヒキヲ二枚重ネヌレハ、ナル程アツキカヨシ。表ハミカキヌル。ウラモ同前ニシテナメシ皮ニテ包ミタルカ見ヨシ。世間ニ輕キ楯ト秘藏ストモウラヤムヘカラス。世無事ナレハ、浪人多、珍_{メツ}シキ輕楯ナト云テ、ダシヌキ多シ。中ハ誠ノ楯ニシテ外ハ木ナリ。又楯ノ中ニシノキヲ立タルハ、スヘリテワキヘソヒレ吾身ニ玉中ラストイヘトモ、又味方ニ中ル也。用ユヘカラス。楯ハ品々多ケレトモ、此外ヨキハナシ。然レトモ物ノ上手、年ヲ遂テ世ニ多ケレハ、必ヨキ楯アルマシキニモ非ス。

水連ノ事 水中透ト云

右ハ水中ニテ呼吸自由ニ幾時モ水中ニ隠レ忍ヒテ堀ナトヲ越ス。案内シラン為ナリ。少ノ道具アリ。懷中シテ口ト鼻ニ指込息スルナリ。口伝アリ。

早小屋ノ事

右ハ一騎役五七人ノ仮小屋ハ、一本鑓ヲ用ル也。鑓一本中ニ立トウ油紙一枚、細引鑓ハ中柱トナルナリ。

一 二文目 牛糞 一 二文目 松脂。

一 二文目 蓬艾^{モウサ} ヨキ焼酒ニテ堅ル。

右ノ九味、竹ノ筒ニツニ刻込、入テツキ堅メ、扱後ニ竹ヲ刻テ焰硝紙ニ薄ノリヲ引、右ノ藥ヲ卷ク。美濃紙ニ反扱其上ヲ奉書紙ヲ焰硝昏ニシテ、一反上ヲ卷ク。久シク持ニハ又上ヲ水ハリニハリテ、其上ヲ渋ハリニ張テ漆ニテ又ヌリテ置ナリ。一方ニ緒ヲ付タルカヨシ。鑪ニモ付ル為ナリ。不^レ入剋ハ吹消テ持テ行ナリ。用ル時ハ吹立テイカ様ニモ自由ナル故柔明松ト云也。

又一方

一 厚キ奉書紙ヲ焰硝ニテヨク煮テ十枚計、扱重ネヤウ又焰硝ト樟腦等分、硫黄少マセテ粉ニシテ薄ノリヲ引而、其上ニ焰硝硫黄ノ粉ヲフリカケ^{くく}十枚重テ五分切ニキリテ持ナリ。右ノ明松消ス時ハ紙ニテモ明松ヲヒタト卷、火口ノミ残テ堅クマケハ、火モエ出ル事ナシ。火ハ内ニアリ。右ノ明松同前也。

懷中火ノ事 万年火トモ云ナリ

右誠ノ火ニ非スシテ、火打ヲ鼻紙袋ニ仕込、火ヲ出スナリ。懷中鉄炮共云也。 拵様口伝多シ。

地雷ノ事

右同前箱ノ内ヘ火打ヲ三ツ仕掛コハセヲ作テ掛テ置ナリ。細引繩ヲ付、二三町モ他ニ隠レ居テ、敵寄来ル道筋ヨキ程ノ地ニ、竹鉄炮ヲ千モ万モ伏テ、路火ヲ調ヘ一度ニトツト放ツ様ニスルナリ。鉄炮ハ本筒非ス。大竹一ヨキリニシテ、節ヲ一ツコメテ

節ヨリ跡ニ練土ヲ込テ火口ヲ上ニシテ、タンソクヲ入、短燭ノ上ニ女竹ヲ二ツニ刻テ中ニ道藥ヲ所々ニ入置、二ツ合セ所々結合テ道竹ニモ火穴ヲ明下ニアルヤウニシテ、鉄炮ノ火穴ニ指入タル短燭ヲ上ノ道竹ノ穴ニツキ合セ、二町モ三町モヨキ所ニナラヘ置也。鉄炮道竹ノ上ニ何ニ而モアクタヲトリ掛置テ、敵思ヒヨラヌ様ニ臥^ふテ、先陣ヲ通シ、本陣ト覺シキ所ニテ、笛ノ細引ヲ跡ヨリ引ハ、箱ヨリ火出テ、彼道火ニ移。十間二十間ノ内ニテ放ツ様ニ拵置ナリ。藥ハ常ノ胴藥也。玉ハ土ニテ堅メ焼テ込ナリ。タトヒ玉人ニ中ヲサレトモ、大筒ナレハ備ヲ破ル。其一ツノ謀トナル。増テ当レハ大筒ナリ。扱五町モ十町モ程ノケテ、又思ヒヨラヌ場ニ、埋置ナリ。幾^{いくところ}所モアレハ敵ノ氣ヲ奪者ナリ。又イカナル伏火ヤアリト疑恐而進得ス。然則戰而必勝利アリ。此火ノ心得ヲ以幾品モ火業ノ謀計アリ。秘事故ニ具ニ不記工夫アルヘキ事ナリ。

一 小荷駄奉行不覺シテ、敵ニ小荷駄ヲ奪レタル様ニ謀而、少々矢軍ナトシ、小荷駄ヲステ、敵ニトラセ、食物酒ニ毒ヲ入置謀アリ。毒藥ノ事猶口伝多シ。

霧ノ印ノ事 霞ノ印共云。

一 紙鉄炮ノ仕様アリ。百目ヨリ一貫目ニ及大筒ヲタクサンニ調、此筒ニ毒藥ヲ込テ持セ、足輕矢軍ノ後、侍鑪ノ合ヘキ剋、右ノ大筒二十挺三十挺モ一度ニトツト放セハ、敵ノ備五町八町十町マテモノ間、前後左右霧霞ノフリタル如ク目見ヘス。息ツキ難ク目鼻口ニ入テ、呼吸止リテ死スル藥ナリ。多ク掛レハ死ス。少ナケレハ目ミヘス。ハツト計ニテ前後ヲ忘レ、戰ヲ忘レ、

鑓ノ事異ニハ上古ヨリアリ

和国ニハ中興ヨリ初レリ。建武ノ比楠正行兄弟安間ナト四条繩手ニテ持タル由。是比皆直鑓ヲ用タルト見エタリ。後又鎌十文字鑓鑓ヌクタヤリアリ。今又鍊炮鑓ト云事アル也。鑓一本ニ鍊炮三挺仕掛而、敵味方ノ間十間ノ内ニテモ又ハ五間ノ内ニテモ三放出シ、其後常ノ鑓ニ用ル直鑓ナリ。

鑓筒仕立様

- 一 牛ノ首皮ヲ用ル也。金槌ニテヨクタ、キ、堅クシテ用ル。
- 一 兩玉ノ筒ハ。
- 一 大形皮二寸四分一同矢六分五リン。但小口也。
- 一 中形矢五分四リン。一寸ノ矢。四分九リン九ネジ赤カシ久ク小便ニヒタシ干也。
- 一 下地練 一文目添 二文目サビコ 小牛皮ニテ巻也。
- 一 巻練 美濃紙一枚ヲ十六ニ切り合ヨリニシテ、但筒一寸ニ付一間半宛。口伝アリ。

三文目筒

- 一 大形皮 二寸 一同矢 小口六分一リン。
- 一 中形矢 五分 一 ネチ四分二リン。赤檜右同。

右練様同前ナリ。

- 一 鑓筒ノクタ長サ惣一尺二寸。カウシ口筒ヨリ先へ五三分モ出筒アタリノ底ハ鉄鑓也。口伝。
- 一 金具ハシンチウクタ。此図ノ如シ。

「図入ル」

右ノクタイタメ皮ニテ調上下ニツハノ如クニ鍊炮ヲ指込ナリツハニ穴ヲ三ツ宛三方ニアケテ、鍊炮ヲ上ヨリ入テ筒トメ、鉄ニテ三所ニアル也。筒ノ長サハ七寸計ニシテ、火繩ヲハ火繩ハサミヲシンチウニテ調へ、左ノ大指ニサシ込ナリ。筒ノ火穴ハ跡ニアクルナリ。口葉ハタンソクナリ。

一 タンソク拵様吉野紙ニ薄キフノリヲ引而、口葉ヲアツクヌリ付干而三分計ニ切テ、ヨリニヨリ二寸計ニ切テ火穴ニ指込、火繩ヲ左ノ大指ニ持テ、右ノ手ニテ鑓ヲヒネレハ、火タンソクニ当ル。遅速ハ此方心得次第打也。常十間七間積リ打習タルカヨシ。腰タメナリ。

籠明松 大ニスレハ大カ、リニ用テ吉

- 一 百目 樟腦 一 二十目 松脂。
- 一 十文目 肥松 一分四方二切 一 二十目 焰硝。
- 一 十文目 硫黄 一 三文目 灰。
- 一 三文目 牛糞 一 三文目 艾葉。
- 右八味木形ニ入ル。久シク持ニハ、紙ニテヨク張ヌリテ置也。風引ハ樟腦ニクル。

柔統松

- 一 二十目 焰硝 冬ハ五匁増也 一 二十目 樟腦。
- 一 十五文目 硫黄 一 三文目 松ノ引粉。
- 一 壹文目 灰 一 壹文目 鼠糞。

在之、打時上ノ皮ヲキリステ、中ノ玉モ所々小刀ニテ切目付テ打也。ホシカタマリタルヲウテバ、玉計上ル煙ナキナリ。相図ノ火モ同前也。

一 拾文目 牛糞。

一 二文目 硫黃。

一 壹文目 鼠糞。

一 三文メ五分 狼糞。

一 四文目 焰硝。

右イツレモ粉ニシテ、ウスキノリニテ丸シ、玉ニシテ其上ニ又鉄炮ノ藥八九文目程粉ニシテ、ウスノリニテトキ、スリ付テ日二千ナリ。

一 十文目 桐藥 三文目殘シ、上ニ込ナリ。

又方

一 百目 藥 一五文目 牛糞。

一 壹文目 松脂。

右ノ三種薄キノリニテ、コワメニキリ、堅メテ水氣ノナキ程ニシテ扱又。

一 艾葉^{モクサ} 八方 一口藥五分 此二種ヲ揉和シ。焰硝ニテヨク煮タル糸ニテ上ヲ巻ナリ。巻様糸ハ少ニテモ艾葉ノクツレサル為ナリ。此モグサヲ心ニシテ右三種ノ藥ヲ上ニヌリ付、カタメテ干ナリ。

右打様桐藥十文目内三文目殘シ上ニ込也。筒ハ百日紅^{サルスヘリ}又大竹ヲヨク巻テモヨシ。

夜相図ノ火ノ事

一 壹文目四分 艾草^{モクサ} 成程ヨク揉和シ、桐藥ヲ紛ニシテ沢山マセテ焰硝糸ニテ柔カニ巻也。

一 十五文目 藥一六文目 鉄^{但ナヘカネクタキテモヨキナリ}

又一方

一 百目 藥 一十文目 鉄

一 壹文目 松脂 一八分 艾葉

右ノ二種調合ノ事成程ヨキ焼酒又古酒等分ニシテセウフノリヲ入コハメ丸メヤウハ形ニ入、鉄炮ノ玉ノ如ク、形ハ木ニテイカタヲ調也。

右ハ玉一ツ分也。大小ハ其人々心得次第。

一 此玉打出様ハ玉指渡シ、三寸アラハ藥五文目程二寸ノ玉ハ藥三文目カ三文目五分カ、右ノ藥少シノコシ上ニ込ナリ。

一 右ノ筒ノ木百日紅^{サルスヘリ}ヨシセ、ナキノ土中へ半年モ入置、引上千シテ筒ヲ調ナリ。右ノ筒火穴ヨリ下ヲ長クトカラシ、土中へ指込タレソクノ指火ナリ。筒ノ上ヲハ竹ノ輪ニテモ鉄輪ニテモヒシト輪ヲ入タルヨシ。打時ハ明礬^{ミヤウ}十文目水一升ノ積リ煎シ筒へ入置、筒ヲシメスナリ。上ノ輪モシメシタルカヨシ。

〔図入ル〕

右ノ筒多調カタクハ大竹ヲ一ヨ切りニシテ、上ヨクハリ、クワンセヨリニテマキテモヨシ。又曰、紙筒モヨシ。紙筒ノ事口伝。

俗ノ譽処ノ賢皆佞人ナラクノミ。

一 或人間今ノ世ノ人ノ如ク、佞奸不道ニシテ不忠不孝極重惡人タリト云トモ、良將軍ヲ備戰ヲ為ハ、惡人モ善ニヒルカヘシ、忠孝ノ人トナルヘケンヤ。曰、然リ。良將ノ下ニ弱兵ナシ。主君正シケレハ、法礼正シ。故賞信罰親疎ノ私ナケレハ士卒皆和ス。人情古今符節ヲ合スル如シ。賞罰明ナレハ、士命ヲ重シ、心ヲ變セス。麻間ニ生ル蓬ノ如シ。將ノ命令親疎ノ私アレハ、善人變シテ惡ト成事泥中ノ玉ノ如シ。士卒將ノ命ヲ疑。故ニ諸民手足ヲ置所ナシ。三ツ者備則俄ニ衆ヲ集メテ令ヲ定、軍ヲ備トイヘトモ疾カラス。止事得スシテ如ス。然レトモ經令不正ハ、將ノ不器用ヲ士卒常ニ能知ル則、事ノ大事ニ及ヒ、俄ニ令ストイヘトモ上部計ハ請而下心ニハ嘲ル者也。孫子カ宮女ヲ以テ兵トシ、令ヲ正ス事ヲシレ。其実ナル事ヲ。

一 間令如何シテ定メン。曰、尉繚子ニ東伍ノ令アリ。下五ヨリ三軍ニ至ルマテ、賞罰時ヲ移サス。只速ナラン事ヲ善トス。經卒令ニ曰、三分三色ノ定アリ。左軍ハ蒼旗ニシテ卒モ又蒼羽ヲ戴ク。右軍ハ白旗ニシテ卒又白羽ヲ戴ク。中軍ハ黃旗ニシテ、卒又黃羽ヲ戴。卒ニ五章アリ。前ノ一行、次ノ二行、次ノ三行、次ノ四行、次ノ五行、五色ノ章也。皆相図ノ章ナリ。本陣ニ五色ノ旗有リ。五色ノ旗ハ麾ナリ。

一 金鼓鈴旗貝狼煙夜ルノ火皆相図ノ章也。約不レ正ハ諸卒命ヲ疑、鼓スル則ハ進ミ、太鼓重ル則擊、金スル則止ル。鈴スル則座ス。旗ハ左ニ麾ハ左ニシ、右ニ麾ハ右ニシ、中スル則中ヲス。此心得ヲ以皆約ヲ定、家々ノ伝ナリ。必一色ニヨルヘカラス。貝ハ本朝ノ章ナリ。

一番貝二番貝三番貝相図ノ具敗軍集貝首実檢ノ貝トキノ声。

一番貝九ツユリ三反朝オコシ貝ナリ。

二番五段七音朝飯ノ時。

三番五段七音伸末一声ハ切声也。打立貝相図五段七音散シ。

敗軍アツメ貝三声中一音切声。

首実檢伸ナカクシツカニ。

勝トキノ貝三声散シ 何レモ口伝有。

右ハイツレモ約束ナレハ、家々ノ心得必然ト定ムル法アルヘカラス。將ノ心得次第幾品モアルヘシ。口伝ニアリ。

一 太鼓ハ押太鼓歩行烈早急得勝鼓。

一 押太鼓發起伝アリ。一步二一鼓歩行ノ列也。

一 早メ太鼓遅速大將軍本陣次第也。

一 得勝鼓三声三度。

一 金序発急アリ。

右イツレモ同前。將ノ指図次第。家々ノ法有リ。法令不レ疑

ヲ本トスルナリ。

一 太鼓小口広サ一尺二寸計 (金に屏) 八十一アリ。胴一

尺四五寸計。龍ヲ画ク皮ニハ巴ヲ画也。

一 金小口一尺二寸計。二人指合ニテ持程也。

一 本陣ノ太鼓ハ一尺八寸計。数二ツ金鼓惣陣何モ十四宛。

大小アリ。

一 狼煙相図ノ火イツレモ陣中ニ数多用意カルヘキ事。

狼煙

一 玉常持ヤウ、上ヲヨク紙ニテ張、漆ニテヨクヌリ、風引サルヤウニ所持可

サレハ、戦而必利ヲ失。其一二曰、士卒其主ヲ鬼神ノ如ク恐テ不レ親。其二三曰、從威ヲ争。其三四曰、從軍ノ勝負ヲ事トセス、臣々威ヲ争、吾高名ヲ心ニ掛、名聞ノミヲ事トス。其四二曰、士卒先ヲ争ヒ備乱ル。軍争ハ善トス。士卒ノ争ハ不可ナリ。其五二將勇ヲ頼ミヨキ地、利ヲ越^{アヤマツ}テ死地ニ陣ス。其六二不レ謀シテ勇アレハ、士卒多ク亡ス。七二無^レ智勇アレハ、必敵ノ謀ニ落ツ。八二曰、將仁ヲシラサレハ、寒暑飢飽ヲ共ニセス。下知ストイヘトモ士卒命ヲ不^レ重^セ。九二仁無シテ勇ナレハ士卒喧嘩ノ絶^タル間ナシ。十二智仁無シテ勇ナレハ、士卒主ヲ恨ム。故味方敵ニ志ヲ通シ、終ニ主ヲ亡ス。此十失ヲ本トシテ、無量ノ惡事アケテ計難シ。主タル人々必シルヘキ事ソ。此故ニ血氣ノ勇ハ臆病ノ花ナリ。

一 士タル者智仁ナケレハ勇ナシ。血氣ノ勇理義ニ不^レ中。今天下ノ士、血氣ニツノリ勇アリカ等ニ肩^{カク}ヲイカラカシ、臂^{ヒデ}ヲハリ、利口ヲ以武トス。学無シテ主人ノ大事ニ不^レ合者也。愚ナル哉。愚ナルカ故ニ忠孝ノ道ニ惑^{マド}ヒ、是非ヲ弁ス。是一ツ。学文ナケレハ善惡ヲ弁ヘス。何ヲ証トシ道ヲ行セム。是二ツ。吾道ヲ不^レ知ハ他人ノ賢愚ヲ知ル事ナシ。是三ツ。他人ノ賢愚ヲ不^レ知ハ惡人ニ親ク善人ニ疎シ。友皆不道ナリ。是四ツ。友ヲ以仁ヲタスク。聖賢ノ教ニ違。是五ツ。吾道ヲ不^レ知ハ不肖ヲ挙テ君ニ謂^{モウ}シテ威邪ヲ作ス。不忠不孝ノ行ヒ多シ。是六ツ。諸士皆ナヘテ不義ニ順シ、利欲ノ立身ヲ事トシ実ノ忠人退ク。是七ツ。君ニ事テ忠ナケレハ親ニ孝ナシ。是八ツ。忠孝皆ソムケハ何ヲ以人トセム。人面畜心トハ是ナリ。九ツ。畜生同心ナレハ何ソ武德カアラム。此十失ヲ本トシ、無量ノ惡事勝而計難シ。

今ノ世ノ武士皆如斯倭奸無道ニシテ、邪利弁明^{ヘンメイ}ニシテ功言令色身ニアマル惡人ヲ、当世是ヲナヘテ譽テ曰ク、ヨキ奉公人也。物ニ馴^{ナレ}タル者ナリ抔云而、然モ又高知ヲ臨ミ終ニハ愚者ヲダマシ得ルト見ヘタリ。人ニ主タル人々由断シ給ナ。今ノ世ノ學者儒仏神ノ三法ヲ行スル者如^レ斯。学返而邪トナル。名聞利養ノ奸佞ナリ。佞人ノ道ヲ破リ、愚者ヲ誑^{タフ}カシ、世ヲマトハス事、勝而計難シ。如^レ斯士卒余多アレハトテ、士卒ヲ頼ミ、戰場ニ出ハ物ノ用ニ不^レ立ノミニ非ス。子食ノ犬ニ足ヲ喰ル、ト哉ラ。世話ニ云カ如シ。頼ミ少キ者也。今天下百歳ニ及ヒ、世無異ナル故ニ諸大名人ヲ扶助スル事タシナマス。浪人多ケレハ色々様々奸佞ヲ以何レノ御家毎ヘ立入、オトナ出頭人ヲダマシ、主君ヘトナサセ召出サル、ト見ヘタリ。由断アルヘキニ非ス。人ニ主タル者ハ心得多カルヘキ事ト知り給ヘ。子貢、孔子ニ問テ曰、今ノ政ニ從者如何。子ノ曰ク、噫斗筭ノ人何ソ算ルニ足ン。今又同孔子ノ言ヲ以、当世ヲ筭ハ、世人皆善ナリト云ハ不可ナリ。世人皆惡ナリト云ハ不可。国人ノ善ナル者ニハ善ゼラレ、不善ナル者ニハ惡マレンニハ如^シジ。是又孔子ノ言ナリ。然レトモ今^ハ又孔子在世ノ節ニ優^{マサリ}テ、奸佞不善者多ク善ナル者ハ少ナカラ。心得知ルヘキ事ソ。善ト云ハ性善。性ニ率ノ道ナレハ、若ハ道アル者万カ一人モアリト云トモ、一ツノ直ナル猿カ九ツノ鼻欠猿^{ヘナカケ}ニ笑レ^ニ去カ^{ヒト}ル如クアルヘキカ。賢者ハ不賢ニ揜^{カサ}レ賢者君辺ニアラサレハ、君善ト見給モ奸人不善ト見給モ賢ナラン。吾ト賢不肖ヲ見給智アラサレハナリ。然則彼倭奸人ノ邪智ヲ以譽又不譽ノ訴ヲ以是非ヲ正シ給ト見ヘタリ。危^{アヤシ}キ事也。某^{シヤク}若年ノ比ヨリ、諸国ヲ周^{メク}リ、諸家ノ風俗見聞致ニ、世

百騎二十万ノ敵ニ恐レス。勝故ヲ知り、疑ナケレハナリ。將其利ヲ弁ヘサレハ、血氣ヲ以恐レス。士卒ニ血氣ノ教ヲ作ス。暫勇剛アルニ似タレト、彼本心ニ歸リ見レハ勝ヘキ利ナキニ恐ル。無理ニシテ戰ハントスル者、皆血氣ノ邪勇也。然モ内意揣ル、也。士卒ノ心別々ニシテ更ニ一和無シ勝事非ス。人性本智ナキニハアラサレトモ学智ナキ故ニ、血氣ヲ争フ。狐疑スル也。学智精微ニシテ無物ノ地ニ住シテ虚ナラス。慮レ皆智謀ハ無窮ノ源ヨリ^ヲ發^ル。

一 出行月ヲ急^イキテ、吉有凶有日モ又同シ時、剋モ又同シ。地形ニ因ル。異国ハ不知、和朝ニ於テハ日本一州地形狡ケレハ、遠近險易死生広狹ノ地周ク人ノ知ル所也。故進退遲速ノ地記スニ及ハス。海岸山川同シ。先常ニ能弁ヘサレハ、將師トハ云ヘカラス。故日本六十八ヶ国ヲ知ル所々ノ図尽テ国ノ大小ヲ知り、前後左右ヲ心得高下ヲ弁ヘ、兵ノ衆寡ヲ知り、広狹ヲ知り、行路ノ積リ遠近死生險易山川海陸、人ノ善惡ヲ心得知ル事、是先地利ヲ知ルノ始メ也。

(第二冊目終わり)

大聖孔子ノ曰、門ヲ出ルニ大賓ヲ見ルカ如ト也。呉子カ曰、門ヲ出ルヨリ大敵ヲ見カ如シ。戰勝トイヘトモ始ルカ如ク、將士ニ至マテ此心得ナリト武田信玄ノ曰、夫婦一所ニアリト云トモ刀ヲ忘ル、事ナカレ。士農工商皆其家職ヲ心ニ掛而速^ツノ間モ由断アルヘカラス。下烈ノ世話ニ由断強敵トイヘリ。又勝而甲ノ緒ヲシメヨト也。故戰勝テ先備ヲ堅メ首実見スト云モ、是也。愚將勝ニ怠リ侈リテ、不覺アル事古今多シ。故二王者ノ兵ハ天高シトイヘトモ腰ヲ屈メ、地厚シトイヘトモヌキ足、深キ淵ニ臨テ薄キ氷ヲフムカ如ク、十方ニ敵アリト心得須臾モ心ヲ放タスシ、戒慎恐懼シテ、其独ヲ慎ム。此軍術ノ秘法ナリ。敵ヲ待テ而后ニ行ル。待トハ事ヲ好テ乱ヲ待ニハ非ス。天ノ禍ヲ視ル。又人ノ禍ヲ見テ動ク。必四体ニ動ク禍福ノ萌ハ善惡ノ先知事著龜ニ見ル。著龜ハ求メテ筮スルトニ非ス。吾四体ニアルナリ。聖德ノ人ニ非ス。誰カヨク知ラン哉。

一 守ヲ不堅者三ツ。一曰、將智ナケレハ也。智ナキハ学ハサレハ智ナシ。其二ニ学ナケレハ仁ヲ知ラス。不知故ニ仁ヲ守ヲ先トス。其三ニ曰、迷アル故ニ是非分明ナラスシテ行事アタハス。行ナハサルハ勇ナケレハナリ。仁ヲ学而行ハ勇也。勇理ニ中ラサレハ、進退時ヲ失、智ト仁ト勇ト三ツノ物將軍体トセサレハ將威皆失ス。

一 戰而不勝ハ智無シテ謀ナク、仁ナケレハ衆不^レ知。勇ナケレハ士卒臆ス。

一 愚者多ク勇ヲ以能トス。勇ハ智仁ノ後也。勇ハ智仁ニ中ラ

一 終日戦勞シ、敵味方共ニ相引ニ退キ己日暮舎ニ近寄半ハ甲ヲ解、半ハ路ニ有リ。未食セルヲ衝ヘシ時、爰ヲ攻ル則必上將軍ヲ蹶ク。如斯ノ節味方夜食ノ心得アルヘシ。引返追詰衝而大利アリ。

一 吾攻ル所ヲ敵疑ヒ、守所多終夜寢ス。或又碁双六酒宴シ、其夜明方卯ノ刻計ニ討ヘシ。

一 君將ニ命セラレ、諸卒ヲ出シ、分散シ旗本虚ナルヲ衝ヘシ。

一 敵勝軍シ、富メル町屋ニ陣シ、遅ク退ヲ引返シ衝ヘシ。兵乱望ノ実ニ心掛、旗本少キ者也。急ニ追返シ討ヘシ。

一 敵川ヲ渡ラハ少シ引退テ、半ハ渡シ、半ハ川ニ、半ハ未川ニ不入ヲ討ヘシ。

一 町屋ノ軍ハ風上ヨリ火ヲ放テ又大網勢ノ心得アルヘシ。

一 船ヨリ上ル敵ヲハ半過マテ岡へ上テ備、未タテ定ラサルヲ討ヘシ。故十町モ二十町モ舟場ヨリ引退テ陣スル者也。

一 籠城ハ暫ノ難ヲノカレン為ナレハ、出テ戦ニ利少シ。敵國ノ助救ヲ心ニ掛謀アルヘシ。

一 多勢ノ入乱タル陣中ナラハ、味方ノ内勇剛ノ士ヲ択ヒ、ヨキ將ヲ添テ笠印指物等引チキリ、敵軍ニマキレタカイニ相引ニ、引様ニ見セシメテ取テ返シ、声ヲ発スルニ、敵ノ備ノ内ヨリ声ヲ合、約ヲ以速ニ衝ハ敵ノ兵味方ニ逆心ノ者アリト疑ヒ恐レテ、必破シ。乱ル、者也。

一 敵城ヨリ出テ戦ハ、右ニ言処ノ心得アリテ城中へ付入ノ謀アルヘシ。又跡ヲキル心得アルヘシ。

一 敵偽テ和ヲ請則実不実共ニ味方ノ利ニナシテ謀レ。円謀ノ心得アルヘシ。

一 行軍ノ事常ハ一日五里ト定メ勝ヘキ利アラハ、夜中ニ迂テ十五里モ進メ勞スル兵ハ後陣ニ備ヨ。一里宛モ引後三所ニヒカヘ、一二三ノ勝ヲトレ、伏兵ノ心得ナリ。

一 孫子カ曰、ヨク兵ヲ用ヨ。三軍ヲハ氣ヲ奪フ、ヘシ。將軍ヲハ心ヲ奪ヘシ。是故ハ朝ノ氣ハ銳ニ、昼ノ氣ハ惰ル暮ノ氣ハ帰ル。其銳氣ヲ避テ其惰ル氣ト帰ル。氣ヲ撃ト云リ。是古法ナレトモ其銳氣モ静ニ惰ル氣モ銳氣ト変スルハ將ノ心ニアリ。故ニ將軍ヲハ心ヲ奪フヘシ。故氣ハ心ニ因テ變化ス。柔ヲ以剛ニ勝、弱ヲ以強ニ勝。柔ハ徳ナリ。剛ハ賊ナリ。弱ハ人ノ助クル所ナリ。強ハ怨ノ攻ル処ナリ。剛モ施ス所アリ。強モ加ル処アリ。此四ツノ物ハ將ノ心ナリト。太公ノ曰キ。治ヲ以乱ニ対シ、静ヲ以譁ニ対シ、和ヲ以不和ニ対シ、安佚ヲ以勞タルニ対シ、多キヲ以少キニ対シ、衆ヲ以寡ニ対シ、山ニ陣シテ谷ニ対シ、陸ニ陣シテ舟ニ対シ、備ニ有テ不備ニ対ス。皆是將ノ心ニアリ。將智有テ戦ノ前ニ勝事明カナレハ恐ル事ナシ。三軍ノ災ハ狐疑ニ過タルハナシ。將疑則士卒恐ル。良將ノ下ニ弱兵ナシ。孔子ノ曰、千万人ト云トモ恐ルヘカラス。理ヲ以然曰ト。昔曾子ノ謂ナリ。夫子ニ大勇ヲ聞ケリ。自反而不縮ハ褐寬伝ト云トモ慄レシハ非ス。自反シテ縮ハ、千万人ト云トモ往ン謂心ハ、勝ヘキ利前ニ見ヘタラハ何ソ慄ル事カアラム。勝ヘキ利前ニ見ヘスハ、一人武者ト云トモ、慄レシハ非ス。故孔子ノ事ニ臨テ恐レ、謀ヲ好而ナサン者也ト曰ヘリ。尤人情ノ常、天性如レ是克兵ヲ用ル者ハ英雄ノ心ヲ驍ル心高キニ臨テ下キヲ見カ如シ。克勝事ヲ見ル故ニ恐レス士卒狐疑スレハ、語而勝利ヲ知ラシム。故ニ兵モ又恐レス。楠先生千劍振ニ籠城、其勢ハ

愚者ノ知ラサル処ナリ。敵ニ因而転化ス。事ニ臨ンテ不_レ語。兵ヲ用テ不_レ言。良将ハ先勝而戰事ヲ後トス。愚将ハ変_レ焉戰而後勝事ヲ求ム。太公ノ曰、智ハ衆ト同キハ国師ニ非ス事ハ必勝ヨリ大イナルハナシ。用ハ玄默ヨリ大イナルハナシ。動ハ不意ヨリ大イナルハナシ。謀ハ不識ヨリ大イ成ハナシ。先勝者ハ敵ニ弱キヲ見セ而后戰者ナリ。弱ヲ見スルハ奇ナリ。勝者ハ正ナリ。正反シテ奇々変シテ正奇正ノ變勝而窮ムヘカラス。故敵疑恐レテ備乱ル。又守所多シ。若敵佚スレハ、謀而勞セシム。飽ヲミレハ飢ス。安ンスレハ能動_レ焉其趣_{オモムカ}サル所ニ出テ、其意ナラサル所ニ趣ク。故味方千里ニ行而勞セサル事ハ人ナキノ地ニ行ハナリ。戰而必勝ハ其不_レ守所ヲ攻レハナリ。敵守テ必固者ハ其不_レ攻所ヲ守ラシムルナリ。故克守者ハ攻ル所ヲ不_レ知前ニアルカトスレハ後ヲ攻ル。味方カト思ヘハ敵ナリ。十方二分迷ニシテ微妙也。更ニ形ナシ。至レル哉。神ナル哉。声ナキニ至ル進メトモ禦_{アヘ}コトアタハス。其虚ニ衝_{ムカ}ヘハナリ。退ケトモ追事アタハサルハ速ニシテ及フヘカラサレハナリ。故敵恐レ引退キ城ヲ固クシテ閑籠_{イソ}ルトイヘトモ久シカラス。又出テ吾ト戰ハント欲スル故ハ、其城郭ヲ救ハント欲スル。近国ノ助ヲ攻レハ也。戰則必勝千詞万語人ニ形サセ、吾ハ形ナキ則味方專ニシテ敵分ル。吾專ニシテ一ト成。敵ハ別レテ十ト成。吾十ヲ以敵ノ一ヲ攻。吾ハ衆ニシテ敵ハ寡ク、多キヲ以少キヲ衝、天道ノ常ナリ。味方ハ紛ニシテ戰ノ地ヲシル。敵ハ疑ヒマトヒ戰ノ地ヲシラス。不_レ知則敵備所ノ場数多シ。備分レテ多則共、戰所ノ者ハ少シ。故前固ク備レハ、後ハ少シ後ヲ備ル則前寡シ。左右前後皆備ル則、寡ナカラスト云。地モナシ故ニ敵ハ少ク吾ハ

多シ。戰ヘキ日ヲ敵ニシラシメス。敵思ヒヨラサル日ヲ以、吉辰ト定メテ、其不意ヲ攻ムル則、前後左右救事能ス。況遠キ者ハ数十里、近キ者ハ数里ナリ。今本朝ノ兵百万ニ及ト云トモ吾以_レ焉度_レ之、東西南北何ソ救ニ利有ラン哉。夫良将ハ勝易スキニ、勝而取放ツ事ナシ。勝カタキヲ後トシ、諸国ノ救ヲ疑カハシメテ謀而内通ヲセヨ。是奇正ノ不窮ヲ以敵ノ虚実ヲ見ルト云大略ナリ。楠正成此意ニ通シテ、武門ノ大功ヲ得タリ。四ヶ国ノ兵都テ二万ト記セリ。此兵多キヲ疑ヒ井田ノ法ヲ度テ見_{ミルニ}焉、今和国ノ兵数十万石二千騎百万石二万ナリ。二万騎ヲ以戰ハ天下ヲ引請、兵ニ不足ナシ。奇正不窮ノ源ニ居住シ、敵ノ虚実ヲ知ルナラハ、一ヲ以十ヲ衝、十ヲ以百ヲ伐。兵ニ形スルノ極ハ形ナキニ至ル。形ナキ則深間ニシテ敵窺事アタハス。智者モ謀事能ス。形有テ形ナシ。形無シテ形アリ。勝事ハ未_タサルニ勝勝未_タサルニ戰。戰皆是太公ノ隱謀ナリ。凡軍ハ高キヲ好而下キヲ惡ム。陽ヲ貴テ陰ヲ賤トス。生ヲ養而実ニ処スル。然スル則軍二百ノ疾_{ウレ}ナシ。是必勝ト云ナリ。

一 敵ノ虚実ヲ窺ハシメテ、進戰ヘキ者多シ。敵長途ヲ来而、人馬勞レタルヲ可_レ攻。

一 陣シテ未_レ定ヲ衝ヘシ。

一 大寒味方ハ飽、彼ハ飢タルヲ衝ヘシ。

一 敵勝軍シテ大ニ侈リ、喜怡スルヲ可_レ衝。

一 味方勇ミ、勇テ衆口疑ナク鼓声ヲ待時衝ヘシ。

一 味方勝軍シテ敵未_レ近国ノ救遅キヲ討ヘシ。

一 城郭未_レ調半ナルヲ衝ヘシ。

一 粮食ナク飢渴ノ処ヲ討ヘシ。

措テ殃ナクンハ、必攻事勿レ。天下広大也。外皆以吾物トシ、城一ツヲハ、彼ニ得サセヨト正成ノ、タマイキ。良将ハ国ヲ治テ他国ニ勝、軍ヲ備テ他国ニ勝、旅ヲ全シテ他国ニ勝、卒伍ヲ全スル事ヲ先トス。故ニ曰、太公ノ曰、全勝者ハ不闕、大兵ハ無レ劍鬼神ト同ス。微ナル哉。聖人ノ軍人ト好惡ヲ同ス。甲兵ヲ備無クシテ勝、衝機無シテ攻メ、溝塹無シテ守ル。大智ハ不_レ智、大謀ハ不_レ謀、大勇ハ不_レ勇、大利ハ不_レ利、天下ハ天下ノ天下ナレハ、天下ト志ヲ同ス。故城ヲ攻ルハ味方ヲ損、小利ニ掛リ大利ヲ失止事得スシテ、攻ハ平城ハ火攻ニシクハナシ。在家ヲ崩シ、風上ニ山ノ如ク積、揚而時日ヲ窺、火ヲ放テ、堅城ヲハ焼ヘシ。又一方ニ土俵ヲ高ク山ノ如ク積上、石火矢ヲ仕掛、城中ヲ焼ヘシ。石火矢ノ事口伝。和朝ニ古今未人ノ知ラサル処ノ秘事ナリ。(秘中密意此ニアリ)。山城ナラハ水絶シ。食絶返忠ノ進メ如斯謀ハ、ナヘテ世間ノ知処トイヘトモ、士卒ハ拙ナキ物ナル故ニ、下女下部ノトナヘニ驚キ、勇猛ヲオトシ、心ツカレテ謀ニオツル者ナリ。左ナクハ指テ山一ツヲハ敵ニ宛テ免シ置、城外ニ堀ヲホリ、サカモ木ヲツヨク結、大網ヲオロシ、克口々ニ番將ヲ置出テハ伐、入ハステ、置、天下ト志ヲ一ツニシ、敵方ニ近国ノタスケナキ様ニ謀アラハ、終ニハ落城スヘシ。正成公千劍振ニ籠城利ヲ得給事ハ、高時愚将ノ故ナリ。正成公良将ナレハ、関東ノ政人望ニソムキシ事、手ノ内ニトルカ如ク、三年籠城セハナト、味方ニ組スル者ナカラム哉ト思ヒ定メシ故ナリ。将タル者知ヘキ事ナリ。城ヲ攻ムルニモ又城ヲ守ルニモ勝ヘキ理ヲ心得スシテ軍ヲ出スハ愚将ノ故也。或人問テ曰、王者ノ兵ヲ用ルニ礼ヲ以スレハ、必勝ト云事何ト云事ソ。金声ヲ

聞テハ怒リ鼓声ヲ聞ハ、怡トイヘリ。曰、礼将ハ然ナリ。太公ノ云、将ハ冬ノ寒ニモ^{カワコロモ}裘ヲ服ス。夏モ扇ヲ操ス。両ニモ蓋ヲ張ス。名付テ礼将ト云。将ノ身礼ニ服サレハ士卒ノ寒暑ヲ知ル事ナシ。寒暑好惡ヲ共ニナサ、レハ、将ト士ノ心別ナリ。隘塞ヲ出泥塗ヲ犯則、将先下リテ歩行スルヲ名付テ力将ト云ナリ。吾身歩行ナケレハ士卒ノ劳苦ヲ知ル事ナシ。三軍皆次而ヲ定メテ、将舍ニ就^{イ、カシク}炊^{キツ}者皆熟シテ、将食ニ就軍中火ヲ^{アツ}挙サレハ、将猶アケス。是ヲ名付止欲ノ将ト云ナリ。将身止欲アラサレハ、士卒ノ飢飽ヲ知ル事ナシ。将ハ士卒ト寒暑ヲ共ニシ。劳苦飢飽ヲ共ニスレハ、三軍ノ衆鼓声ヲ聞則怡ヒ、金声ヲ聞則怒ル。如何ナル高城、イカニ深キ池川矢石^{シキ}繁ク下ルトイヘトモ先達而登ラン事ヲ^{アラツ}争者也。白刃始テ合時ハ、諸卒先ニ趣カン事ヲ争者ナリ。人情死スル事ヲ好ミ傷ク事ヲタノシムニハアラネトモ、大将仁德厚ケレハ、士卒ヲ憐ミイタハル事、吾一身ノ如ク子ノ如ク思力故、士卒其君ヲ親ム事父母ノ如ク、貴ヒ奉ル事日月ノ如ク思力故ニ、戰テ不_レ勝ト云事ナキナリ。故ニ良将ノ下ニ弱兵ナシ。嗚呼実ニ人ニ主タル者ハ、文德ナクテハアルヘカラス。故ニ文ハ武ノ親也。文道ナクテ武ニ功アル者古今ナシト云リ。若又過去ノ善因ニ由テ、惡逆不道ノ主君ナレトモ一生幸アル。アレ共二代相続ナル難シ。其身ノ一世ニテ果終ル者ナリ。積善積惡ノ事、早ク是ヲ弁ヘ後世ヲ怒ルヘシ、慎ムヘシ。仏法ニ因果ノ二報ヲ立ルモ此理リナリ。後生善所ト願モカクノ如シ。善惡共ニ道ハ玄妙ニシテ、明々タリ。愚者ノ知ラサル処ニシテ智者ハ恐而此ヲ慎ム。天ヲシル人カクノ如シ。問手云、奇正ノ變ヲ以敵陣ノ虚実ヲ知ル事如何。曰、奇正ハ無窮ノ源ヨリ発ル。

百六十反化極ナシ。数五ニ起ル。其本陰陽、其本太極。太極本無極ナリ。如斯ハ皆名ナリ。空言ノミ。覚ヘ何ノ用ソヤ。

天地トハ、旗号ニ本ツク。旗ハ大旗ナリ。大馬印ノ事ソ。大馬印ハ大将ノ本陣不_レ動シテ備置ナリ。ソレヲ天地ニタトヘテ云ノミナリ。小馬印ハ天ナリ。本大将殿四武八陣ヲ見計ヒノタメニ忍ヒテ通ル事アリ。小馬印ヲ先達而陣中ヲ環ル内、印大小是ヲ天地ト云ナリ。風雲ハ幡名ニ本ツク。幡ハ諸將ノ馬印ナリ。龍虎鳥蛇ハ隊五ノ別レアルニ本付ナリ。軍ノ進退紛々トシ、法乱レス。或渾リ鬱トシ止リ、又明白清静ニシテ沌々タリ。形円ニシテ勢井方也。合シテハ乱レ、乱レテハ又合ス。五ヨリ起テ八ニ終ル。八々タル物又一帰ス。是本皇帝ノ制兵神略ナリ。深ナル哉。神ナル哉。故ニ諸將ノ治世ノ常、軍ヲ武士ノ心トシテ諸將ノ馬印ヲ尽テ能覚ヘ、軍中見知り易様ニ心得知ルヘキ者也。

一 惣大将ノ 大馬印何ニ☆。

一 小馬印 何ニ○。

一 纏_{マヒ} 何ニ△。

纏ハ乱レタル諸兵ヲ引アツムル印ナリ。常ハマキテ不出。

一 三百ノ將馬印 紋内印アリ。

一 五十一手ノ馬印、右同前三百ノ將ノ馬印ヨリ少チイサク。

一 二十五ノ組頭ノ馬印一手ノ將ノ幡ヨリ又少シ小ナリ。

右惣幡ノ紋ハ上將軍定給所紋。何モ同シ内印ハ面々ノ紋ナリ。

一 使番指物何ニ尽而皆一樣ニ定ル也。何モ内印アリ。

物頭指物又一色ニ相定内印アリ。

右馬印ノ外旗旌トテ、外ニ無用ノカサリハ人夫ノ費ヘ、陣中足

手マトヒナレハ用ヘカラス。是良將ノ古法ナリ。

右ノ外番組惣兵ノ番指物上將ヨリ常ニ定メテ、是又尽テ内印一々はヲ見知事常ノ心得ナリ。上ハ大将ヨリ下士ニ至マテ、心得知ルヘキ事ハ常ノタシナミナリ。金鼓貝五色ノ旗ノ事、相図ノ約束ナレハ、上ヨリ段々ニ教ヘ下ス事、常ノ法也。戰ニ臨テ必勝事ヲ致スハ、虚実ヲ知ル所以也。実ヲ以虚ヲ衝事天理ノ常ナリ。道ハ猶路ノ如シ。水ノ方円ノ器ニ随如シ。將ハ智アツテ敵味方ノ謀ヲシルトイヘトモ兵ハ拙シテ知ラサル。故ニ迅速ナル事ヲ悦、ユルヤカナル事ヲ愁ル者也。故ニ軍ニ赴キ必勞ス。唯千事万語人ヲ致而人ニ致サレス。先スル則人ヲ制シ、後則人ニ制セラル。人間云、何ヲ以力虚実ヲ知ラン。曰、奇兵ヲ以敵ヲ動シ、正兵ヲ以、敵ヲ討ツ。此理今爰ニ記スルニ及ハス。孫子虚実ノ卷ヲ見テ知ルヘシ。又正成先生軍教ノ序ニモ見タリ。火攻ノ事孫子四宿ノ時日ヲ以火ヲ起スト云リ。箕壁翼軫ニアリト云。伝アリ強而因ル所ナキナリ。四宿ニ風起ラサル日多シ。其实ヲ謂ハ浦方ノ船頭能風ノ起止ヲ知ル者多シ。彼ニ問事可ナラシカ。諸葛亮雨ヲ降セ、風ヲ起ス。吾朝ニテモ、高野大師雨ヲ龍神ニ請事歴然タリ。其皆智謀ニヨル愚者ノ心ヲイサメ、兵勢ニ威ヲ加フ。神道ノ秘事ナリ。火戰ハ其実其道ニ得タル処ノ人ヲ用ル也。城ヲ攻ムルニ多々用事アリ。殊更当世百歳ニ及テ天下無異ナル故ニ国々所々能城多シ。攻之コト止ム事得サレハナリ。良將ハ国ヲ全シ、軍ヲ全シ、旅ヲ全シ、卒ヲ全シ、五ヲ全ス。故ニ百度勝トイヘトモ誠ノ勝ニ非ス。不_レ戰シテ敵ノ兵ヲ屈スルハ、実ノ勝ナリ。故ニ上兵ハ謀ヲ伐、其次ハ交リヲ伐、其次ハ兵ヲ伐、其下ハ城ヲ攻ル。城ヲ攻ルハ止事得サルカ為也。

右ノ外備ノ内ヘ無益ノ人ヲ入オクヘカラズ。足手マトヒニナルトテ云ナリ。右備ル所ノ騎馬三千二百、諸將物頭六百五十、足輕三千、惣兵四万二千五百九十五人。此兵ヲ以戦ハ百万騎ニ対シ不足ナシ。

左ニ備ル処ノ兵九百諸將物頭虚兵ヲ合シテ一千余也。足輕小人諸役人都合三千計雜兵一万余也。本陣左右前後ヲ拘役積、南木武経ニモ在之。此書同前。

「図入ル」

右ノ備雜兵一万余也。小刻右ニ同。此心得ヲ以、何万人モ同シ。小屋取此心得ニテ幾品モアリ。兵ノ多少ニヨル者ナリ。心得ヘシ。

南木惣要卷第六配部三

或人間八陣ノ分数。曰、其本一ナリ。太極ヲ主將トス。本陣ナリ。陰陽分レテ前後トス。天地ニ象ル主宰ヲ兼テ三才トス。陽ヲ先トシ、陰ヲ後トス。先以正トシ、後ヲ以奇トス。前後正ナレハ、本陣ヲ奇トス。奇ハ正、正ハ又奇也。正ノ反化アケテ極ムヘカラス。

「図入ル」

陰中陽、陽中陰、反シテ四ツトナル。所謂四武ナリ。号シテ青竜朱雀白虎玄武、此陣法ナリ。

「図入ル」

陰陽ニ形ナシ。四武ニ形彰ル。主將土ナリ。四方中五ニ起ル。

「図入ル」

天ハ四時ヲ転シ。周ク覆而外ナシ。名付而天陣ト云。蛇能首尾ヲ合ス。雲克乱テ又アツマル。竜ヨク寛剛ニシテ進ム。退ニ時アリ。風克スキマヲ伺ヒ、敵ノ虚実ヲ知也。鳥ヨク急ニ金鼓ノ音ニ動ク。地ヨク不動シテ、柔剛強弱ヲ兼得タリ。敵ニ因テ転化ス。虎克千里ノ翼ヲ張ル。此理ヲ以八名ヲ挙タリ。名ヲ設クルノミナリ。何ソハツノミナランヤ。反シテ八々ト成。分而三

士卒ノ働ヲ心掛テ乱ルヘカラス。一手ヲ離ヘカラス。進退五十
ヲ一手トス。散シテハ合シ。合而ハ散シ。散スレトモ一組ヲ乱
スベカラズ。一手ノ間散スレトモ、百歩ヲ去ルヘカラス。一隊
ハ一手ヲ離レザル心得、一手ハ六手ヲ去ラザル心得戦乱レテ分
ルトイヘトモ三百歩過ス。合而ハ分レ、分而ハ合、五合一和ノ
法ナリ。小大皆同シ。敵強ニシテ、先陣乱ル、カ又味方ノ將誤
テ乱ル、カ実セス。虚トナルヲ見聞セハ、中ノ手ノ三百ノ將、
本陣ヘ軍使ヲ遣シ、新而上將ノ命ヲ待ズ。速ニ進而救ヘシ。
若敵其中ヲ衝ハ、左右皆救、四面八向準ヲトル。陣ノ間ニ陣ヲ
容、隊ノ間ニ隊ヲ容、前ヲ以後トシ、後ヲ以前トス。四頭八尾
触処ヲ首トス。是レ此ノ謂ナリ。將軍能靜ニ能清ク、能此ヲ知
リ、能此ヲ心得、ヨク士ニ教ヨ。然ル則ハ士卒戦ニノソソテ臆
スルモノナシ。故ニヨク兵ヲ戦シムル勢ハ円石ヲ千仞ノ山ニ転
スルカコトキ勢ナリ。故ニ吾伝処ノ兵法ハ、先仁政ヲ心ニ掛、
井田ヲヒラキ、経界ヲタ、シフシ、民ヲ富シメ、国ヲ豊シ、今
ノ世ノ諸將ノ分限ニスキテ、兵ヲ多ク扶助シ、常ニ軍ヲマナバ
セ、小ヲ以テ大ニ敵セズ、十人五人ニ勝ハ、天道ノ常ナリ。常
ノ法他国ニ勝則軍ニ人多ク、兵多キ則戦必利アリ。戦利アレハ
忠孝ノ道ナリ。故ニ王者ハ心功アリ。

「図入ル」

- 右ノ備、惣軍人積リ。
一 騎馬三千二百人。
一 物頭一隊九人宛ナレハ、五百七拾六人。

- 一 將十二人。
一 小荷駄奉行二人。
一 足輕三千二百人、押足輕六百四十、合シテ三千八百四十人。
一 長柄三千二百心得アリ。
一 一手ニ旗三本宛ナレハ、百九十二旗指三百八十四人。
一 一手ニ金一宛ナレハ、本陣トモニ六十五ナリ。人夫百九十
二人。
一 太鼓同六十五、太小アリ。人夫百九十二人。
一 本陣ノ左右前後歩行士五十人。
此歩行ノ士ハ当世用ル処ニ違セリ。力量人ニ越、早業行歩
達者ニシテ、然モ又勇有テ鑓長刀太刀打等、常ヨク心得タル者
エラヒテ用焉楠正成公四十人扶助スルトイヘリ。新田義貞、正
成ニマナヒ、天下ヲタツネ、十六騎力等ト云。是ナリ。若先陣
敗スル事アレトモ、本陣ニテサ、ヘテミタレザレハ、敗シタル
先陣又取而返シ、備ヲ立チナシ、前ノ耻ヲ雪カンタメニ、猶ヨ
ク戦ヒ憶セス。
一 馬二疋馬副アルソ。
一 弓持二人左右ニアリ。
一 十人役ノ者、褒美等持者アリ。
一 使ノ武者二十人。
一 旗指如法大將ノ下知ニ付奉行アリ。
一 五色ノ旗本陣トモ九ツ八ツハ八陣ニアリ。中ノ手ハ本陣ニ
近ケレハ、言伝ニ通ス。
一 相図ノ火狼煙。
一 夜ルノ馬印。

三十三人。是ハ十五万石ヨリ出ル歩卒ナリ。十一万二千五百石ヨリ出ル。是ハ兵数五百人騎馬ナリ。郎從二千人合テ二千五百人、是ハ四人連ナリ。常吾扶助スル処ノ下人二人引合六人連也。実ニ三千五百人余リヲ軍外ノ用トス。宛^{アテオコナフ}行処ノ高一万二千五百石、外ニ又五十人一手ノ將アリ。一手將所領二百石宛行則五百人ノ騎馬二十人高二千石出ツ。右ニ引合一万四千五百石、是九人連ニシテ上下百人、右ニ引合、実ニ三千六百人、騎馬五百十人、歩数三千百人ナリ。是十一万二千五百石ヨリ出ル賦ナリ。外ニ又高九百石ニ一人ノ庄司九万石二百人一人ニ高十石宛行、百人二千石、大庄屋十人高二十石宛行則二百石合千二百石、此大庄屋トハ國中ノ代官ナリ。此心得ヲ以國ニヨリ時ニ中而損益將ノ心得ニアリ。是ハ國中ノ大積リナリ。常ニ扶助スル処ノ家ノ子郎從ハ勿論、上中下分限相応ノ所領ヲ宛行ノ上ハ軍役定メノ通、人馬并軍器ノ兵具、毎年はヲ改、治世ニ乱ヲ忘レス、將ノ下知ヲ相待ノミノ心得云ニ不足軍教ノ次第法ノ如ク下五人ヲ伍トス、五ノ内智アルヲ扱ヒ、五ノ長トス。伍々ヲ一組トス。重祿ハナシ。馬印羽織等ハ將ヨリ常ニ預置、五十人ヲ一手トス。諸手ハ百騎ナリ。一卒ト云。五六三百ヲ以一師トシ、三千二百ヲ一軍トス。和國小國ノ法ナレハ異國ノ次第第二違ス図南木武経ニ記ス。正成ノ法ナリ。問テ曰、今ノ世モ用レ之可レ整哉。曰、可レ用國々所々ニ於テ百姓ノ内、田畑ノ高多く持タル百姓ニハ祿ヲ^{バク}宛ズトイヘトモ人歩六七人或十人十五人拘置者多シ。今ノ諸大名ノ家中ニテ所領三百石四百石給ル程ノ者^{イクラ}幾等モアルヘシ。祿ナケレトモ然ナリ。彼ヲ改メ扶助シ、二十五石ノ高ヲ給リ、城下諸侍常ノ郎從並ニ組頭ヲ定出仕等、常ノ

郎從ノ如ク可レ在レ之旨、將ヨリ命シ給ハ、大キニ怡ヒ、侍ノ学似ヲスヘシ。特ニ上ヨリ其法ヲ教ヘ下ス。主一人ヨリ諸將ニ教段々ニ下五マテニ命令、同閭巷庠序学校ノ次第ノ如シ。(右以侍ノ事イツレノ御家中ニモ少ニアリトイヘトモ、教ナシヲシエナク宛行所領ハ、何ニモタ、ズ。下部人定同前ナリ。廿五ノ長ヨリ段ニ上ノ將ハ城下ニアル所ノ智者ヲ定預ケ置ナリ。武具馬ノ用意ハ一年ノ物成ニテ不足ナシ。二年目ヨリハ米高五石宛与頭アズカリ、遠國ヘ出行ノニイナイノタメナリ。十年アツムレハ米五十石、猶心得多アルコト也。口伝。)孝悌忠信ノ道次ニ金鼓貝旗旌ノ相図、一年ニ二三度城下ヘアツメ、弓馬武芸ノ是非ヲ見聞シ、善ニハ挙テ怡バシメ、惡ニハ怒ラズ、耻シメ給ハ、今ノ世ノ諸家中諸士ニハ似ヘカラズ。皆可ナラン。良將兵ヲ用ルニ、兩陣相逢テ能戰者ハ、其勢險ニシテ、其節短カシ。^{イキライ}勢弓ヲ^{ハル}彊ガ如シ。節ニ臨而早キ事矢ノ如シ。二十五人ヲ一隊トシテ隊ヲ去ル事左右十五歩、隊ヲ止メテ相去事前後三十歩一隊ヲ隔而一戰ヲ立ル五十歩又ハ七十歩、図ノ如シ。一声一金スレハ、諸隊皆座シテ、鑼ヲ立テ^{ヒサマツ}跪ク。一鼓シテ一声スレハ、諸隊皆立ツ。二度鼓テ二聲スレハ進ミ行、百歩ニ至リ声ナク金ス。二度金スレハ諸隊皆坐ス。於レ此敵ノ變ヲ伺ナリ。是本諸葛亮八陣ノ法也。大陣ハ小陣ヲ包、大營ハ小營ヲ包、隅ヲ落シテ曲折而相對ス。李靖因茲面シテ内ヲ環リテ円ニス。六花ノ陣ト云。因レ焉今又此陣法ヲ画ク。

此図ナリ。

「図入ル」

右ハ五十一手ノ備也。將ニ教ルニハ自分ノ働ヲ心ニ掛ル事勿レ。

ハ三人、小ノ国ヘハ二人、忍ヒノ兵ヲ入置、国々ノ図ヲ致サセ、又ハ道路遠近險易海川、国主ノ嗜ミ、諸侍ノ心得、主人ヘ親疎、義不義、諸人ノ思ヒ入、人馬ノ積リ、兵糧ノ多少、里多シ、山多シ、海遠シ近シ、舟ノ有リ無シ、山林茂穢、百姓ノ強弱、親疎、勇剛柔和、国主ニ対シ恨ノアルナシ、国ニ善人賢人アルナシ、此心得ヲ以時ニ宜ク可レ知条々書付ヲ相渡、其使ノ妻子等念比ニイタハリ、二心ナキ様ニ怡バシメ、彼国々ノ老中番頭以下マテノ器量ヲ常ニ悟^{サトル}シムル謀ヲメクラシ、告来ルヲ以、地ノ利ヲ知ルト云也。四^ニ曰、将智信勇嚴ナリ。将ノ器用ヲ知ルニ、士ノ外貌ト中情ト相応セサル者十五ノ別アリ。是ヲ知ル事八徴アリ。南木武経ニ記ス。太公、文王ニ語ル法ナリ。五ニ曰、法トハ太守常ニ定置法ナリ。五組ヨリ始メ、一組一手一卒数五ニ始リハニ終ル軍記ヲ定メ、金鼓貝旗相図ノ言ヲ知ラシムル事ヲ云ナリ。金銀米錢ノ用意、タトヘハ関東ヨリ九州マテモ出陣、他国ニ於テモ諸兵ニ糧ヲ饋ル事ハ、本国ヨリスレハ国費ヘ百姓恨。百姓恨、百姓不^レ親則ハ歩卒北走ル。今ノ世ノ足輕ヨリ以下、皆然ナリ。歩卒散スル則、義兵ヲ鈍^{ツイヤ}シ、銳氣ヲ挫^{グシ}ク。城ヲ攻レトモ力屈ス。久^{ヒサシク}他国ニ陣スレハ、国用不足、力屈シ、宝費^{ツツ}シ殫ス則、其弊^{ツイヘ}ニ乘シテ又外ヨリ起ル。諸人味方ヲ侮^{アサト}ル故ニ、敵ニ与力スル者国々ヨリ出ル者ナリ。将タル者ハ智アリトイヘトモ、兵ハ拙^{ツタナフシテ}而速カナル事ヲ喜者也。漸^{ユルヤ}カナルニハ利アルヲモ知ラス。其久シキヲ愁、楠先生昔千劍振ニ籠城ノ時、速ニ落城ナキヲ以士卒皆国々ニ北走^{ニテ}ル。高氏義貞左右ニ事ヨセ、関東ヘ北下^{ニテ}ル。赤松播州ヨリ旗ヲ挙、皆正成ニ組ス。諸将ノ中ニハ智者アリトイヘトモ其後ヲ能スル事非ス。終高時亡ビシ事

孫子カ言ニ少モ違ハス。先生後生一揆ニ而正成能是ヲ知ル。故ニ高時カ政ノ不善ヲ知り、三年籠城スルナラハ、其久シキニ退屈シ、必正成ニ与スル者ナトカナラム哉ト、手ニ覺シ故ニ、手勢八百人ニテ、天下ヲ引請終ニ其本意ヲ達シキ吾朝ニ於テ、神武此方正成ニ比ス將ナシ。或人問而曰、百姓ノ公役軍賦如何シテ定メン。軍法ノ諸師、其空言ノミ。其實弁難シ。曰、精微ナル哉。是軍備ノ大事ナリ。易シテ難キ是ナリ。楠正成摂河泉紀四ヶ国ヲ領ス。其勢二万。是騎馬也。今ノ世ノ軍備四ヶ国ヲ集メテ三千騎ニハ過ス。正成郎徒ハ其十倍ニ及然トモ千劍振ニ在所ノ郎從百五十、其兵皆郷中ニ居住ス。是古ノ法也。今モ又古法ヲ学フ。良将アラバ正成ニ随ハン。其法如何トナレハ、太公ノ本法ニヨルヘシ。彼国ノ法百姓一人ノ請処ノ田畑高四十五石代、異国ハ和国ニタガヒ土性惡キ故ニ、上田ハ毎年耕シ、中田ハ二年ニ一度耕シ、下田ハ三年ニ一度耕ナリ。故ニ地ハ広ケレトモ狡^{セウ}キニ同シ。此国ハ土性能上田ハ一年ニ三度、中田ハ二度、下田ハ一度耕ス。百姓一家妻子ヲ合セテ、五人ノ積ナレハ、老若男女合シテ其力一人半、或ハ二人三人ノ役積リナリ。一家公役ニ定ル則、一人役トス。其一人ニ宛処ノ高十五石代、是此国ノ土性相応也。年貢諸役ノ積リ外ニ記ス。百姓十五家ニ一人ノ長アリ。此長ニ宛処ノ録田高二十五騎馬千人ニ二万五千石出ツ、高十五万石ニ妻子ヲ合テ五万人ノ積ナレハ、一万家ナリ。一万人ノ歩数三分一ヲ取テ、軍役ニ用ル則、田畑草管穀ニ勝^{カク}ズ。少々不足アレトモ可ナリニ調十五家ニ一人ノ長、常ニ器量ヲ見聞シ、彼ニヨク教、扱十五人ノ内四人引取而長是ヲ戦場ノ郎從ト定、残十人助耕則不足少シ。万人ノ歩数三分一ハ三千三百

決勝スルノミニ非ス。良將常ニハ此ヲ用イ人ニモ猶教ヘ大事ニ掛而秘伝スルハ真実用イマシキカ為ナリ。民ニハ是ヲシラシムヘカラズ由ラシムヘシト云ハ、此心ナリ。和朝ニ於テモ良將多ク是ヲ用而其実不_レ用、神ノ妙怪靈驗ヲ語り愚者ニ信ヲ進メル也。仏法ニ西方ノ道ヒキ、因果ノ二法觀音力通ノ說法ノ等、白地ニ不_レ説、迷_{マド}ハシヌルニ似タレト智者ハ是ヲ權テ知ル。又積善積惡ノ理明々トシテ不昧ナリ。愚者ハ真理ニ通セズトイヘトモ恐レテ是ヲ貴ヒ、惡行ヲマヌカル。衆生ニ頓漸智愚アル故ナリ。教モ又等々_{シナク}別アリ。仏伝ニ四乗ノ次第此故ナリ。昔田單燕ノ為ニ_{カコ}罫_{カコ}ル士一人ニ命シテ神トナシテ、此_ヲ祠_{ミツ}ル。神ノ曰、燕破ルヘシ。單是ニ於テ火牛ヲ作り出シテ燕ヲ撃ツ。大ニ破ル天官時日向背猶カクノ如シ。昔源ノ義經神恠ニ託シテ平家ノ勇猛ヲオトセリ。其神ノ歌ニ世ノ中ノウサニハ神モナキ物ヲ何祈ルラン心ツクシニ。楠正成八幡ヲ勸請シ、人ニ命シテ託宣シ、又水ヲ熱湯トスル事神慮ニ誠アル事ヲ諸兵ニ知シメン為ナリ。積善積惡ニ由テ因果ノ法ハ明々タレトモ愚人ノ為ニ視ル事聰事アタハサレハ、唯目前ノ小利ヲノミムサホル故ニ、タ_ハチニ見セザレバ信ゼズ。故ニ明將多ク妙怪靈驗ヲナシテ国家ヲ治メ給事ヒガ事ニ非ス。正成先生天下ノ為ニ計謀多事愚者ノ及_レ処ニ非ス。元弘積書ニ河東ノ虎閔師鍊ノ記シ置給事妙怪多シ。愚者ハ只書ノ如ク見ルニ咎ナシ。智者ハ權而是ヲ貴トブ贊アルモアリ。(又ナキモアリ。此心得ヲ以、妙怪ヲサトルヘシ)。一ヲ以テ万ヲ知ルヘシ。秘事也。正成公赤坂ノ城落城ノ時、觀音經一心称名二句ノ偈ニ矢尻止マリシ事ヲ士卒ニ語ル。又天王寺未來記ノ事、其外無量ノ神變アル事多シ。南北武經二記。又新田義貞鎌倉合戰ノ時、

稻村カ崎_{サキ}干カタトナル事山伏ノ告トテ、越後勢武藏野ニ走付タル事トモ足利尊氏忠義六波羅合戰ノ剋、篠村ノ八幡ニ願書山鳩一番出シ事、前日人ニ命シ神トナスル事、二品法親王熊野都津川御難ニ逢_{アヒタマフ}給時、老松ノ足ニ土ノ付タル事、不意ニ宮方加勢多ク馳付タル事、如_レ斯ノ品々良將ノ仏神ノカヲ借りテ、軍ニ用、明王ノ妙怪靈驗ヲ以、天下ヲ治メ給事、異国本朝共ニ其例多シ。軍用ノ為_{バカリ}計ニ非ス。利世安民ノ法ナリ。神道ノミニ非ス、仏説皆然リナリ。太宗ノ曰、田單ハ神ニ託而燕ヲ破ル。太公著龜ヲ焚テ紂ヲ滅ス。二事相反ル事何ソヤ。靖カ曰、其機ハ一ナリ。或ハ逆ニシテ利アリ。或ハ順ニシテ利アリ。昔太公牧野ニ陣ス。雷雨甚シ。三軍皆恐ル。旗鼓毀折ス。時ニ散宣生吉凶ヲト而後ニ行ト云。神ニ問而吉ナリト。諸卒ニ知セ怡バシメテ進ム。太公ハ腐草枯骨、豈聖人ノ智ニ如ン哉ト破テ出ツ。実ニ臣トシテ君ヲ伐、再_{フタ}ヒスヘケンヤ。然ルニ散宣生ハ機ヲ前ニ發シ、太公ハ機ヲ後ニス。順逆異ナリトイヘトモ、其理致ハ同シ。是ハ此天官陰陽ノ利ヲ謂ノミ。寒暑向背モ同キ内ニモ又トル利アルナリ。日月星辰風雨皆天文ナレトモ向テ吉、向テ凶ハ人事ニアル者ナレハ、或時ニハ西ニシ、或時ハ東ニシ、或時ハ北ニシ、或時ハ南ニス。物ト能推移ル變動常ナシ。敵ニ因テ転化ス。何ソ常方アラシヤ。敵ヲハ彼ニ由ラシメヨ。智者ハ此ニ異ナル者ナリ。三曰、地トハ遠近險易広狭死生ノ地ナリ。聖人ト云トモ一人ノ身ニシテ百工ノ事備ラサル者也。此ニ因而窺_{ウカミ}視レハ、唯人ヲ用ルニアル也。九州四州東国北国中国其国々ノ人ヲ求メテ、常ニ能其国其國ノ險易広狭死生ノ地ヲ知ル。又日本六十八ヶ国ノ内、国ニ大小アリ。大国ヘハ五人、中ノ国ヘ

一 陣中ニ於テ何事ニヨラス高声乱舞堅制^レ之煩ナクハアルヘカラサル事。

一 於ニ陣屋ニ放馬可^レ為ニ過錢一事。付放火同前品ニヨリ死罪タルヘキ事。

一 陣屋不淨過錢ノ事。

一 陣屋遊女并乱酒博奕一切諸勝負死罪ノ事。

一 喧嘩同前ノ事。

如^レ斯事法ノ蓋^{オホムネ}ヲ挙グ時ニ中リ、所ニヨリ損益アルヘシ。法ハ將ノ善惡ニヨルナリ。賞罰ハ時日ヲ移サス。早速執^トリ行ヘシ。戰場ノ古法ナリ。善惡共ニ五ヨリ上ニ訴ル則外咎ヲノカル。五ヨリ訴ヘズシテ、他ヨリ上ニ聞則全五共ニ罰セラル。

南木惣要配部卷第二

孫子曰、用^レ兵ヲ要五ツ。其一ニ曰道、一二曰天、三曰地、四ニ曰將、五ニ曰法。道ハ民ヲシテ上下其志ヲ同スル也。三略ニ太公カ曰、衆ト好ヲ同スル則成ラスト云事ナシ。衆ト惡ヲ同スレハ傾^{カタフカ}ズト云事ナシ。六韜ニ兵ヲ用ルノ要、野獸ヲ逐^{ツツ}カ如シ。天下皆分肉ノ心アリ。舟ヲ同シテ濟^{ワタ}ルカ如シ。濟ル則ハ皆利ヲ同ス。敗ル則皆其害ヲ同ス。此故ニ衆ト好惡ヲ同セスンハ、戦利ナシ。其二ニ曰天。天トハ陰陽寒暑時日ノ制ナリ。陰陽向背時日ノ事ハ唐ノ太宗、李靖ニ問。此ヲ用ル事勿ラン哉。靖曰、宣^{ノタマフコト}言不可ナリ。是ヲ用ヘシ方便ナリ。太公ノ曰、貪ヲ使ヒ、愚ヲ使ヒ、廢^{ヤブ}ル事勿^レレ。太宗ノ曰、古ヨリ良將皆不^レ用。闇將此ニ拘^カルト云則廢セム事宜カルヘシ。靖カ曰、昔紂甲子ノ日ヲ以テ亡^{ホロ}ベリ。武王甲子ノ日ヲ以テ興レリ。天官時日甲子ノ日ハ一也。殷ハ乱レ周ハ治ル。興亡異ナリ。又宋ノ武帝往^{ワウモウ}亡ノ日ヲ以、兵ヲ起ス。軍士皆曰ク、不可ナリト。惡日トテ進ムヘカラスト云。帝ノ曰、吾往テ彼ヲ亡スト云リ。果而戦而勝^カテリ。此ニ由テ此ヲ言ヘハ、天官時日ハ人事ニ如^{シカ}ズ。敵ヲハ彼ニ由ラシメヨ。將能此理ヲ弁ヘ平常猶又此ヲ大事ト用ル如ク而、心ニ必用ヘカラズ。毛髮此ニ拘^カレハ、良將ニ非ス。源ノ義經ノ歌トテ時ト日ハ味方ヨケレハ、敵モヨシ。只肝要ハ方角ヲ見ヨ。方角トハ向背ノ事。尉繚子ニ昔^{セイ}シ齊^{セイ}ト魯^ロト戦客星出ツ柄ヲトル方勝ト云リ。柄齊ニ有。然ルニ魯勝ツ。此ニ由テ言ハ天文ニヨル所ナシ。向背モ又人事ニ如^{シカ}ズ。然レトモ向背ハ朝夕^{テウセキ}ヲ心得ヘシ。又風雨ノ心得アルヘシ。是又人事ナリ。尉繚子ニ天官時日ヲ以

国治リ覇道ニ帰ス。覇道至リテ王道ニ帰ス。王道至リテ五帝、五帝至テ三皇、三皇モ未^タ天ニ及バス。王モ又覇、覇モ又王ナリ。時ナリ。天ヲ知り時ヲシリ、人ヲ知ル事、其材アラズンバ誰力能天下ヲ知ラン。

戰場ニ趣時法度

一 彼ヲ惡ンテ戰ヲ好ムニ非ス。利世安民ノ為也。行軍道路ニ於テ庶民ノ宝ヲ奪事勿レ。民ノ室ニ乱入、酒食物ヲ奪ベカラズ。人馬ヲカタリテ民ヲ勞セシムル事勿レ。不礼スル事勿レ。物ヲ調ニ価^{アタイ}ヲ少ク押買スル事勿レ。樹ヲ切ル事勿レ。神社寺塔ニ乱入、僧侶ヲ輕シメ侮^{アナ}トル事勿レ。礼儀ヲ正シク尊崇スヘシ。塚^{ツカ}ノ木ヲ切ル事勿レ。陣中女ヲ入ル事勿レ。小歌尺八其外一切バサラ事アルベカラズ。是皆常ノ小礼也。此心得ヲ以、戰国ノ時ハ猶又常ヨリ礼ヲ正シク行軍アル則、諸民頼モシゲ多親ヲ進ム者也。出陣ノ始メ法正シカラザレバ、路次中下士人夫ニ及マテ、法外ノ行^{オコナヒ}アル者也。他国自国共ニ將ヲ恨ムル者ナリ。

一 五ハ長ノ下知ヲ破リ私ノ働^{ハタ}キ有ヘカラス。組頭ハ又一手ノ將ノ下知ヲ背^{ソムク}ヘカラス。一手ノ將ハ命ヲ旅ニ請、旅ハ師將ニ受、師將ハ將軍ニ命ヲ請テ令下ニ通ズ。三將軍其志ヲ一ニシ、其功ヲ別ニス。

一 出陣行軍ノ始ヨリ、士卒心ヲ置ベキ所アリ。義理ヲ忘レズ、勇ヲ重シ、死ヲ輕シ、下五ノ内、会合ノ剋敵ノ剛強ヲ語ルヘカラズ。味方ノ柔弱ヲ語ルヘカラズ。故アリ將ニ訴ヘタキ事ハ頭ニ早速告ベシ。尤忠節タルヘキ事。

一 敵方ヨリ若^{モシカヘリ}返リ忠ノ進メ於^ハ有^レ之者、思案ヲ遂^{トケ}重而返答アルベシト申、先使ヲ返シ、早速直ニ上將ヘ訴ヘシ、所領ナリ

トモ又ハ金銀ナリトモ、敵ノ將ヨリ宛ベキト云。其一倍此方ヨリ宛行ヘシ。戰場ニ於テ第一ノ忠タルヘキ条、寸陰^{フコクダ}滯ル事ナカルヘシ。士タリト云トモ、智ナキニ非ス。若敵方吉ナル利ヲ見聞セハ、是又早速上將ニ訴ヘシ。凶ナル利ヲ見聞セハ是又早速訴ヘ告ヘシ。告知^{ツケシラ}スル則、將ノ心得智謀モ出來ル者也。味方ノ吉凶是又同前タルヘシ。可^レ為^ニ忠節^ニ事。

一 太公ノ曰、目ハ明ヲ尊ヒ、耳ハ聰ヲ貴ヒ、心ハ知ヲ貴フ者也。三軍ノ目ヲ以見レハ不^レ見云事ナシ。三軍ノ耳ヲ以聽ハ不^レ聽ト云事ナシ。三軍ノ心ヲ以慮レハ、不^レ知ト云事ナシ。輻湊^{フツツ}シテ並ヒ進則ハ明、不^レ蔽三軍皆心ヲ一ニ一人ノ切ヲタツヘカラサル事。

一 行軍始ヨリ私ノ意根ヲ以、朋友ニ對シ怨^{ウラミ}ヲナシ、軍ノ為ニ利ニ中ラスンハ、父ノ怨ト云トモ不^レ可^レ討、増而少分ノ私ヲヤ。只忠節ヲ心ニ掛而小利ヲ心ニ掛ヘカラズ。戰場ニ於テ平常ノ心得可^レ為^ニ各別^ニ事。

一 陣屋ヘ女法師山伏猿引世ステ人、其外何者ニハヨラズ、覺^{オホツカ}束ナキ者入ル事勿レ。若^{モシ}子細有テ尋來ル者有ラハ留置、早速頭ヘ訴ヘ可^レ任^ニ指圖^ニ事。

一 長陣ノ則商人ハ出入ナケレハ、諸人ノ勞タル者ナレハ由緒ヲ吟味セシメ、タシカナル者ヲハ幾人^{イクタリ}モ入ヘシ。將ノ謀タヨリアルヘキ者也。能々心底ヲ可^レ見計^ニ事。

一 行烈ノ時、大小弁利ノ剋郎徒ハ備ノ場ニ指置跡ヨリ追付ヘキ事。

一 小荷駄奉行宿刻ノ者ニ對シ惡口、更ニ不^レ可^レ有^レ之子細ノ事アラハ、ヒソカニ可^レ斷^レ之事。

法ナリ。法ハ正理ヲ以法ヲ立ルナリ。正理ノ良法ハ天有ノ四德仁義礼智ノ天性ニ違事ナク、行所ハ孝悌忠信也。至ル所ハ利世安民。民ヲ安ンズル事ハ堯舜モ猶病メリトナリ。一和ヲ以大人ト云。一和ナキヲ小人ト云。一和トハ天下皆志ヲ同ス。人情ハ聖モ凡夫モ同シモノナレハ、心得知ルベキ事ナリ。南木武経ニモ此図ヲ記ス。彼ニ委シ。今ノ世々間ニ取ル処ノ城取ノ法、古人ノ文ニ合哉。不合哉。

「図入ル」

太宗曰、皇帝ノ井地陳数九ツ。中心ノ零將握レ之。四面八向、皆準ヲトル。陣ノ間ニ陣ヲ容、隊ノ間ニ隊ヲ容ル。前ヲ以後トシ、後ヲ以テ前トス。進ニ速ニ奔ル事勿レ。遽テ、退キ走事勿レ。四頭八尾、触所ヲ首トス。敵其中ヲ衝ハ、両頭皆救数五ニ起而八ニ終ル。是此図ナリ。(今本朝ニ此ヲ知ル者ナシ。南木武経ニ和シテ記セトモ、曾テ此意ニ通セス。天理ノ良法ナレハ、此城取一切ニ用ル。皇帝ノ法少モ作意ヲ不用。自然ノ妙用、人はヲ知ラサルハ猶宜シ。学者秘スヘシ。本書ノ文ニ合セテ、是非ヲ知ルヘシ。世間ノ城取ハ皆分別私意ナリ。曾テ文ニ不合事ヲ知ルヘシ)

山アル則山ニ便リ、川アル則河ニ便リ。溪谷險阻海岸池沼、一切便リ有地ハ皆城ノ為便リニ用而成セ。此城取ハ平地ナリ。法八陣ノ委細ナリ。便リアル方ヲ欠テ其造作ヲ表ニ加ベシ。今皆此法ニ通ゼス誤テ邪法ヲ立ル。千万学ブト云トモ理通叶ガタシ。天理ノ自然ニ非ス。私意ヲ以画ク皆非ナリ。更ニ益ナシ。吾朝ニ於テハ楠正成此ニ通ス。南木武経ニ和書ス。此ニ略ス。

靖太宗ニ語テ曰、靖臣按スルニ、黄帝始テ丘井ノ法ヲ立テ、因テ以丘ヲ制ス。故井ニ四道ヲ分ツ。八家此ニ処ル。其形井ノ字也。方ヲ開ク事九ツ。五ツヲ陣法トス。四ツヲ閑地トス。所謂数五ニ起而其中ヲ虚トス。大将居レ之。其四面ヲ環リ諸部連リ繞ル。此所謂八ニ終ル變化シテ敵ヲ制スル則紛々紆々トシテ、闕乱テ法不レ乱。渾々沌々トシテ形円ニシテ、勢敵セス。此所謂散シテ八ツニナシテ、合テ又一トナル者ナリ。太宗曰、深手黃帝ノ制兵也。後世天智神略アリト云トモ能其闕闕(門戸ノカキリ)ヲ出ス事勿ラン。靖カ曰、周ノ始メ太公實ニ其法ヲ繕ス。岐都ニ始テ井畝ヲ建ツ。太公没而齊人其遺法ヲ得タルハ管仲ナリ。皆是周ノ司馬法也。張良カ学フ処、太公カ六韜三略是也。韓信カ学フ処、穰苴孫武是ナリ。此皆皇帝ノ井田ヨリ出タリ。太宗ノ曰、陣数九ツ中心ノ零、大将握レ之、四面八向皆準ヲ取ル。陣ノ間ニ陣ヲ容レ、隊ノ間ニ隊ヲ容ル。前以後トシ、後ヲ以前トス。進ニ速ニ奔ル事勿レ。退クニ遽テ、走ル事勿レ。四頭八尾触処ヲ首トス。敵其中ヲ衝ハ両頭皆救数五ニ起テ八ツニ終ル。此何ノ謂ソヤ。靖カ曰、諸葛亮石ヲ以縦横シ布テ八行ヲナス。陣法即此図也。世ノ伝処握機ノ文、蓋シ其粗ヲ得タリ。太宗曰、天地風雲龍虎鳥蛇、此八陣ハ何ノ義ゾ。靖カ曰、伝焉者誤リ、古人秘藏而此法ヲ詭リ、八名ヲ設クルノミ本一ナリ。分テ八ツトナル天地ハ、旗(大ハタ)号ニ本ツキ、風雲ハ幡(コハタ)名ニ本ツキ、龍虎鳥蛇ハ隊五ノ別ニ本ツク。後世詭テ物ノ象ニ設ル者也。何ソ唯八ノミナラン乎。太宗ノ曰、数五ニ起テ八ツニ終ル則、象ヲ設ルニ非ス。寔ニ古ノ制ナリ。八陣ハ其名也。故ニ古人ノ曰、王者廢レテ霸道發ル。霸道廢レテ戰国ト成。戰

棟梁トモナル主君出来レカシ。アナ氣ノ毒ノ世ヤト私語ハ止

マズ。如レ斯ノ乱レタル世ヲ治メンニ、仁政ヲ行明君有ラハ、時雨ノ草木ヲ潤ワス如クアルベキ者ヲ乱ル、則ハ、手ノ裏ヲ返スカ如クアヤウキ事アルベシ。故ニ然ル則ハ、武ノ家ニ生レシ者ハ止ム事得ズシテ、兵道ヲ学フ。知ラズンバアルベカラズ。常ニ兵具ヲ調ヘ求ム。此時ノ為ナリ。呉起文侯ニ謂テ曰、平常ニ用所ノ兵器、若進而ハ戦退テハ守ル。然ル所以ニ備ニ於テハ用ル所宜キヲ求メヨ。若然ル宜キヲ求ル事ナクンバ、闘心アリ共進マバ必死ナン。昔承桑子ガ君修徳ヲ、廢レ武ヲ、其国ヲ滅セリ。有虞子ガ君衆ヲ恃、勇ヲ好而其社稷ヲ喪ス故明王ハ茲ヲ鑒テ内ニ文徳ヲ治メ外ニ武備ヲ治ム。武ハ文ノ飾リナリ。衆ヲ救ハム為ニ而進ム。仁剛ニ非ズヤ。戦ハ勝事ヲ要トス。義ハ仁ノ花ナリ。ヨク実ナル事ヲ利ス故仁者ハ常ニ定ルニ文ヲ先トシ、武茲ニ次ク軍師ノ始メナリ。

定（治世ニ乱ヲ忘レス。乱ヲ心ニ掛ル。遠ク慮ナケレハ近キ愁アリ。又武士ノ常其役トスル処文法ナリ）

一 文道ヲ学ヒ、仁義礼智ノ心ヲ悟リ、孝悌忠信ノ事業心得可レ知事。

（士タル者ハ勿論、農工商ノ下庶人ニ至マテ、五倫ノ常ヲ知ラザレハ、善法ナレトモ、是ト知ラズ。非法ナレトモ非トセズ。是非ニ迷ヘハ国法タチカタキ者也。仍而云）

一 武道ハ文ノ末ナリト云ヘトモ止事得スシテ逆乱アリ。士タル者其時ノ用器也。家職ヲ可レ知事。

一 君父其恩一ナリ。然ルヲ傍軍ノ親ヲ取而党ヲ結ヒ、主人ヲ次ニス。可レ知ニ輕重一事。

一 親キニヨリ非中ノ是ヲ挙、疎キニヨリ是中ノ非ヲ挙ク。可レ申ヲ不レ謂ハ尸位也。益而非法ニ与シ、言行ニ私アルハ義理ニ疎ケレハナリ。其本愚ヨリ發レリ。其旨ヲ計ニ臆病ノ至リト云フヘシ。仍曰、理ト無理トヲ学而弁ヘ、其道ヲ心得、志ヲ立、善道ニ進ミ、礼義ヲ正シ、朋友ニ睦シク互ニ忠ヲ進メ、信ヲ以交リヲ実ニセヨ。慎ナクハアルベカラザル事。

一 学文ナケレハ義理ヲシラズ。五倫ノ交リ平常ニタガヘリ。戰場ニ於テ臆病也。難ニ臨テ敵ニ与シ、君父兩恩ヲ忘却シ、一命ヲ助ラン事ヲノミ思ハ、畜生ニ等シ。仍曰、志ハ勇剛ナラム事ヲ思ヒ怠ル事アルベカラザル事。

如斯ノ法度ハ治世ノ常ナリ。軍法ハ常ニアリト云ハ可様ノ事也。常ニ五組ヲ定、五伍二十五ノ小頭、五十人ノ番頭一ヶ月ニ一度宛与頭能ク学ハセ、組頭又左右ノ頭ニ座シテ五十人ノ長番組ヲアツメテ、委細ニ教ユ。閭巷ノ数ノ如シ。諸侍敬シテ聞レ之。扱士卒ノ内、智アル者アツテ、国ノ為君ノ為公儀ノアヤマチヲ見聞アル則、謹而謂ス。可レ申ヲ謂ス、忠トス。知テ不レ申ヲ不忠トス。不レ知シテ不レ謂ヲ愚トス。将事ヲ行時、良臣ヲ集メ、烈座ノ時、事ノ意趣ヲ書付出ス。面々ニ硯ヲヒカヘ善惡是非可ト不可トノ思ヒ入、賞罰ノ浅深輕重入札ニ定ムレハ、益余多アルナリ。多ノ人ノ智ヲ集メテ、主将ノ智トス。故ニ迷ハズ。郎徒ノ智見ヘ頭ル故ニ郎徒学ニ怠ル事ナシ。親疎ノ私ナシ。賞罰明カナリ。罪アル者恨ミズ。郎徒学ヲ好メハ、智人多、忠臣出ツ。政ニ非法ナシ。国家能治マル。士卒頼モシゲ多シ。諸人ニ忠ヲ進ム。善人多、惡人退ク。其外無量ノ利、多クアルト也。新田義貞此ヲス。楠正成是ヲ譽而又自用トス。良将ノ常ノ備ト云事

經界ハ井ノ字ノ如シ。後人号而井田ト云也。田ハ四方中八陣備ハレリ。天一地二天三地四天五地六天七地八天九地十。田ハ伝ニ曰、上下ハ天地、中ハ人ナリ。三貫スルヲ王トス。王ハ四方ヲ備。仍テ曰、田トス。田本太極ヨリ生。太極ハ無極ニシテ東西モナク、南北モナシ。号シテ太極ト云。分而陰陽アリ。陽一ヲ天トシ、陰二ヲ地トス。君ハ天ナリ。臣ハ地ナリ。太極ハ円ニシテ方円ノ名ナシ。○四方中八方、此中ニアリ。是ヲ軍伝ニ比シ謂則城取ニ本有ノ繩ト云。而后分而二重トナルヲ分數ノ繩ト云。◎如斯陰陽ニカタトリ、名ツクルノミ。■(三重丸)三重而王城ニ比ス。未精微ニ非サレハ、十字繩トモ云ナリ。十四満字五天地繩ナト云事アリ。天地仁ノ三ツヲ精微ニ伸而城取ニ用ル也。出行烈ニ用、小屋取ニ用、又備ニ用ル事アリ。正如斯田字ノ略也。未王城ニ非ス。五天地ノ繩トハ田ナリ。東西南北中、五行備ル。八陣ハ田字ノ精微ナリ。〔図入ル〕井ノ字ノ備分而四武八陣ハ方ナリ。

皇帝井田ヲ開キ后稷民ニ稼穡ヲ教、五穀ヲ樹芸シ、万歳不易ノ良法トス。周政猶又精微ヲ尽ス。是太公ガ智謀ニ発ル。其法来朝シ神世ノ昔ヨリ其趣ヲ似タリトイヘトモ、書籍無ケレハ其実弁ヘカタシ。昔時撰政殿吾国ノ制法ヲ改出セリ。サレハ本朝ニ出来五穀二十分ニシテ、其一ヲ貢物トシ、内裡ニ備ヘ其外庄官下司公文等ハ、世々ノ天子其器量ニ因而其職ニ補セラレ、良法ヲ定メ、民ヲ恤ミ給ヒシ事、是又周ノ古法ニヨル者也。其後又四十五ノ帝行基ニ勅命有テ、田畑ヲ改メ分ツ。六尺四方ヲ以一

歩トシ、三百六十歩ヲ一反トス。畝ハ是三十六歩ナリ。国ノ内ニ郡アリ。郡ノ内ニ庄郷アリ。庄郷ノ内ニ里アリ。里ノ内ニ名アリ。六間ニ六十間ヲ一反トス。五拾ヲ町トシ、町ハ方六十間也。道路ニ分ツ時、六町ヲ一里ノ頭トス。六々三十六町ナル故ニ又是ヨ一里ト云。扱衣類ヲ定メ、飯ノ器ヲ定メ、飯ヲ定ム。耕作人ハ春夏ハ雜穀四合能米三合ヲ以一日ノ食トス。業アル時ハ米一合雜穀二合ヲ益ス。秋ハ黒米ノ飯六合ヲ以一日ノ食トス。其業ヲ作則ニ合ヲ益農工商同前也。農ハ黒塗赤キ紋ノ三器無添ノ折敷ヲ用、工商ハ赤四面ノ紋黒シ薄赤キ折敷也。イカニ富リトイヘトモ此法ヲ破事非ス。下鳥下魚ヲ食中鳥中魚ハ土ヨリ以上用之秋冬中春マテハ清酒ヲ喰中春ヨリ濁酒ヲ用。庶人四十歳マテ馬ニノセズ。衣服ハ麻布小紋ヲ付而、青キヲコク薄ク染タルヲ用、サイミ五所紋ヲモ用、絹ハキセス、皆侈リヲ止ル法ナリ。五倫ノ交リ、五常ノ德行、賞罰ノ法、三法ノ教皆彼国ノ本文ヲ授テ、本朝神道ノ補トシ、天下ヲ治平シ給事、皆利世安民ノ為ナリ。一人ニ二ヶ国ヲ不宛、国司郡司庄司ヲ定給事、器ニ因テ然ス。全ク家ニヨラス。其後延喜ノ聖帝古法ヲ守リ給ヒ、御身ニ私少モナク、何事モ皆天下利世安民ノ為ニ成サル、事、愚夫愚婦モ能聞伝ヘ、諸人ノ口ニアル者也。五日ノ両十日ノ風、是天ノ徳ヲ重ル者也。其後天下ノ制政武家ニ伝リ、平ノ泰時、貞時、時頼以下ノ武臣ニ及マテ古法ヲ貴ミ制道正キ則ハ、世モ又無異ニシテ万民皆樂シメリ。正法乱レ、上一人ノ樂シミヲ事トシ給。世々ハタトヒ乱国ニ非ストイヘトモ上ベ計目出度、御政道昔ニモ少ナキ明君ナリナド口ニ伸ルハ邪威ニ恐レテナリ。下心ハ恨ミ上ヲソシリ、眉ヲヒソメテ、イカナル武ノ

知^ニ其性^ヲ。知^ニ其性^ヲ者ハ知^レ天^ヲ矣。其心ヲ尽ト云ハ言行ノ上ニ一物ナキヲ尽トハ云ナリ。言行ニ惡ナシ。タトヒ言行ニ不是アリ共、愚故ニ知ラズシテ為^ナス処ノ不是ハ天ノ罪也。吾為ス罪ニアラサレハ惡ト云ヘカラス。不是ナリト云ヘシ。吾為ス罪ハ惡ナリ。故ニ善中ニ是非アリ。惡中ニモ是非アリ。性善ヲシル事は非ノ沙汰ニ非ス。心ヲ尽ヲ善ト云故ニ道ヲ学フノ大意人々吾智ノ及ニマカセ、善ヲ行シ而後是非ノ精微ヲ極メ、外モ是中レハ、弥^{イヨク}宜シ。文質共ニ善ナリ。心ヲ尽セハ性ナリ。性ノ上ニハ一物ナシ。性ヲ知ルト云是ナリ。是性何レヨリ出ルナレハ、無色無形ノ天ヨリ生天ヲ知ルト云。是ナリ。故ニ心ヲ以性ヲ知リ性ハ天ヨリ出ル所以ヲ知ル。孟子ノ曰、莫^{ナキ}レ非^レ命ト也。順而受^ニ其正^一。是故ニ知^レ命^ヲ者ハ不^レ立^ニ乎巖牆ノ下^ニ。尽^ニ其道^一而死者ハ正命也。故ニ君子ハアヤウキヲ見テ命ヲ知ル。孔子ノ曰、事ニ臨而恐レ謀ヲ好^テ而為^ナサム者也。戰場ニ出テ勝ヘキ理ヲ見ス而進ムハ血氣ノ勇也。血氣ノ勇ヲ用ル者ハ退クマジキニ退ク。命ヲ知ル者ハ事ニ臨テ恐アル故ニ能ク謀ル。進退正理ヲ失ハス。孟子ノ曰、求ル則得^レ之舍ル則失^レ之。是求ルニ益有。求メテ在^レ我^ニ者ナリ。吾ニ有トハ天命ナリ。又曰、求^レ之有^レ道。得^レ之有^レ命。是ヲ求メテ得^ニ益ナシ。求メテ外ニ有者也。命本己ニ備ル。学而此命ヲ得タリ。命ヲ求メ得而学ヒノ師命ヲ去テ己身ノ本命ニ率。是進退存忘ヲシルノ理也。只其己ニ備ル中ヲ取ノミ也。此言ニ朱子註シテ曰、求メテ外ニアルトハ富貴利達ノ事ナリト書セリ。是朱文公ノアヤマチナラム。孟子ノ心ハ天徳ヲ云。然ルニ求メテ得^レ朱子ハ至極ト定メ、学知ヲ去ル事不^レ能。進ム事ヲ知テ退ク事ヲ知ラス。存スル事ヲ知テ忘事ヲ

知ラサルハ、初学小見ノ学智也。切磋琢磨ナキナリト云フヘシ。朱子ノ評、是ニ似タリ。先生ノ誤チ後学ノ為^{タメ}乍^レ恐^{シカ}而云ノミ。如斯記スレハトテ朱文公ヲ非^シルニハ非ス。愚見カクノ如シ。孟子ノ曰、コトノク書ヲ信セハ書ナキニハシカシ。後学ノ人心アルヘキ事也。

南木惣要法部卷第三

(第一冊目終わり)

聖書ニ非ト云所一ツノ理アリ。大学トハ二百五字也。然ルヲ大學ハ聖書ニ非スト云ハ天ニ背キ、聖ヲ破リ、政ヲ破ル大罪ナリ。慎^{ツシ}ナクハアルヘカラス。又中庸ノ書、是又聖書ニ非ト云トイヘル説アリ。嗚呼愚ナル哉。而モ論孟ヲ毀^{ソシ}ラス。論孟皆性命ノ理也。然ルニ大学中庸ノ理ヲ、去テ論孟ノ理トテ別ナシ。然レハ論孟ヲ説事妄物ナラム。聖徳太子ノ曰、学還而邪トナリ、正法還而妄トナル。是聖ヲ破リ、政ヲ破ル大罪ナリ。学無シテ遊翫^{トカ}センニハシカシ。遊翫ニハ左ナシ。学ヲナシテ邪ヲ発シ、理ヲ破リ而暗者トナリ、心ヲ破リテ乱者ト成、聖ヲ破リ而邪者トナリ、政ヲ破リ而叛者トナル。悲マスンハアルヘカラス。是太子ノ言也。時千歳ヲ隔ト云ヘトモ、天理良智ハ古今符節ヲ合スルカ如シ。或人ノ曰、道ヲ学フニ性命ノ理ヲ先トスト宣^{ノミ}。何ヲ以性命ニ通セム。曰、聖賢ノ教皆性命ノ理ナリ。四書ノ内ハ何レノ書ニテ学ヘトモ理ハ同シ。只師ノ教ニヨル者也。中庸大学ノ書ハ本ヲ正スニハ見ルニ近シ。論孟両書ハ事理ノ精微ヲ尽ス者也。性命ヲ心得サレハ論孟通セス。性善ノ道孟子能言リ、物少クシテ性命ニ通シ安シ、孟子ノ曰、口ノ味ヒ、目ノ色、耳ノ声、鼻ノ臭、四肢ノ安佚。此五ツノ者ハ性ナリ。赤子モ同シ教外別伝ニシテ学智ニ非ス。生得ノ天性ナリ。此性ニ率而道トスル所ハ赤子ナリ。然レトモ能^{モノ}ク物食、能^{イッテ}言而成長スルニ随而ハ性ノマ、トテ、是ヲ許サス。学問トハナケレトモ、自然ト見覺ヘ聞覺ヘ、イツトナク是非ヲ知ル。是則命ナリ。此時礼ニ非サル事ヲ己ト知ル者アリ。(此者ハ止マサルモノ也。性也。心也。意也。情也。其命ヲ取テ性ヲ謂ス。性ヲ用サル心也。此命則根元ノ天性也。天性ハ仁義礼智信克^レ己ニ複^スレ礼ニ。己ハ赤子ノ性、礼ハ学

智ノ性、此性前後二ツニ見^ミルハ不可ナリ。幼少ノ時ハ不^レ知故ニ礼ニ中ラサレトモ性ナリト云。年長是非ヲ知ルニ及而不礼ナレハ性ニ非スシテ邪氣ナリ。天性上ニ止ムル者アルカ故也。私欲^{ヲホ}ニ蔽^フル則ハ時トシテ昏^{クラ}キ事アリトイヘトモ、其本体ノ性命ハ嘗テ息事非スシテ上ヨリキザス。故ニ此命ヲ取ル氣稟ノ人欲ヲ取^クル事勿レト。孟子ノ教ナリ。又是モ命也。命ハ天ヨリ万物ニ賦^クリ命スルナリ。惣シテ上ヨリ下ルヲ命ト云ナリ。父ノ命、師ノ命、君ノ命ナト云モ上ヨリ下ル皆命ナリ。命ヲ稟テ己ニ備ル性也。性己ニ備テ万事ヲ行又命ナリ。性ハ湍水ノ如シ。命ハ流水ノ如シ。中庸ノ書ニテ云、則天トハ未発ノ中湍水命ハ物ニ賦ル所ノ理也。流水ノ如シ。天命シテ性ニ率ヲ道ト云ト。此道ト云ハ是非二拘ラス性ノ如ク行、真実無妄赤子ノ如シ。然レトモ未^タ学ハサレハ事理礼義ニ中ラス。道ヲ修ヲ教ト云。孝悌忠信ノ業ナリ。小学文ナリ。小学モ本天ヨリ生。孟子ノ曰、仁ノ父子、義ノ君臣、礼ノ賓主、知ノ賢者、聖人ノ天道、五ツノ物ハ学而知ル。故ニ命ナリ。性アリ焉君子命トハ不^レ謂。此五ツ本天性ナレトモ性氣混乱而人能知ル事ナキカ故ニ小学ヲ学フ。師命ニヨツテ学テ知ル故ニ命ト云。然レトモ君子命ト不^レ謂性ニ率ヘト謂也。言心五常ハ学而知ル、先ハ勉メテ行^レ之、勉ノ内ハ命ヲ取、勉メ勉メテ至レハ性ナリ。故ニ士ハ賢ヲ願、賢ハ聖ヲ願ヒ、聖ハ又天ニ至ラン事ヲ願。右ニ曰^フ所ノ五ツノ物ハ五体ノ性、此ニ今謂所ノ五ツノ物ハ心ノ謂也。此十ノ物ヲ能明弁スル則性ト云。命ト云ノ分チヲシル事也。学者能心ヲヒソメテ此所ニ於テ自得スヘキ事肝要タルヘシ。是孟子ノ發明ナリ。先聖ノ未^タ言サル所ソ。故ニ爰^レ謂^ク記。孟子ノ曰、尽^ス其心^ヲ者ハ

ナリ。然レトモ其氣質ノ稟タル所ニ清濁ナキ事非ス。人欲ニ蔽^{オホ}ル則ヤ、時トシテ性理跡ニ残り、濁氣^{サキカス}先立^{グシカウ}已ニ言行不義ニ陷^{オチ}イラントス。然レトモ其本体ノ主人公、嘗^{カヅテ}未^{スレ}息跡ヨリ告テ、邪氣ヲ引止ム。其止ムル者ハ何者ゾ。其本善ノ明德^{メイタク}仏性至善ナリ。此天徳ヲタシカニ心得知リ不^{ザル}失人ヲ明德ヲ明カニス^トハ云ナリ。釈伝ニ是ヲ知ルヲ見性ト云。是ヲ行ヲ成仏ト云ナリ。己身ノ弥陀ヲ見ルト云。是ナリ。大善知識ニ逢ト云モ是ナリ。此知識ハ天道ナリ。神也。此神ノアリ所ヲ見ニ不起一念ノ中ニアリ。中ハ無色無形ニシテ声モナク臭モナクシテ有カ如シ。只至レリト云フヘシ。此名ヲ上天ト云。タトヘハ上天ハ湍水ノ如シ。天命トハ流水ノ如シ。湍水ハ性ノ体ノ如シ。流水ハ性ノ用ノ如シ。伸テハ屈シ、屈シテハ伸、出入時ナク、本末ナシ。住所ナクシテ出入スルナリ。釈伝ニ是ヲ本空ト云。本空ハ敬ノミ。不敬ハ放心虚氣ナリ。敬ハ放心ナキ只常也。又敬ニ真行草アリ。只礼儀ノ不^レ乱ナリ。其数極リナシ。大学ノ書ニテ教シテ言^{イハ}バ、先^レ知^レ止有^レ定^テ而后静ナリ。静ニシテ后安シ。安而后慮ル。慮テ后能得ルナリ。先止ルトハ散乱ノ氣ヲ静メ禪定ニ入。禪定トイヘハトテ閑居ニ引籠^{カウ}独アレト云ニハ非ス。禪定ハ動ニモ定リ、静ニモ定リ語ニモ定リ、黙ニモ定リ、行住座臥、皆定ル。人本来智アレトモ忘念ニヨツテ昧シ。故ニ信ニ住シテ、智謀ヲ出セト云事ナリ。万慮ヲ止ムレハ禪定ト成、定ニ入レハ静ナリ。静カナラムト欲スレハ、益動ス。動ヲ止メテ止ニ帰スレハ止、更ニ弥^{イヨク}動ス。止静ニ住セント欲セハ静ヲ離レヨ。円ナル事太虚ニ同シ。欠ル事ナク余ル事ナシ。又空忍ニ住スル事ナカレ。只何トモナク安カラム事ヲ要セヨ。安キ処ハ明鏡ノ如シ。

明鏡トイヘハトテ、本来明鏡ノ名モナシ。而モ万物能移ル。移ルト云ハ見聞覺智ニ迷^{マトフ}事ナシ。此ヲ能慮ルト云也。思ヒ謀ニ非シテ、天慮至善也。水ニ影ノ移ルカ如シ。浪タ、サルカ故也。此ヲ以能^ノ事理ニ通シテ得安キ者ナリ。大神通トハ是ナリ故ニ止ル事ヲ知ルヲ先トシ、得ル事ヲ後トスルナリ。物ニ本来有ト云、是也。又事ニ終始アリ。物格ルヲ始メトシ、天下平カナラシ事ヲ願ヲ後トス。物ニ至ルトハ、先^ッ時ヲシルヘシ。古ヘ大学ノ書始マリシ時ハ、今アル仏法神道ノ沙汰ナシ。故ニ事物ノ常ヲ云ノミ。今和国ニ三法^{神儒仏}ノ教^盛ナリ。儒道ハ四民ノ行処ノ常ナハ、常住不變、皆儒道ナリ。其中ニ仏法神道ノ教ヘ、少々交リアレトモ、少分ノ事ナリ。名ノミ盛ニシテ実ナシ。其教トスル言説ニ儒法ニタカヒ、下愚ヲ救ハン為ニ神道ノ怪、仏法ノ方便、皆愚者ノ為ニ言ヘトモ、利根ノ人モ聞マトヘリ。故ニ直^{スナハ}ニ道行ヘキ大道ノサマタケトナル者也。故吾云、先物格トハ神道ノ靈驗、仏法ノ方便、決了安心スル処、南木武経ニ少々記ス。彼ヲ見テ知ルヘシ。狐疑^{コギ}スル処ヲ決了シ、万法ニマドヒナキ、儒法ニ於テハ仁義礼智ノ四徳ノ性ヲワキマヘ、孝弟忠信ノ常ヲ知レハ欠ル事モナキナリ。此ヲ物格ルト云。物格レハ智至ルナリ。意ヲ誠ニストハ、性善ヲ貴フノ意ナリ。当今俗儒記誦詞章ノ学者、儒仏ノ師トスル者、都テ皆此意ニマドヘリ。是又南木武経ニ記セリ。意ニ惡ナシ。善ナリ。仏祖則心即仏性ヲ云。意又同而ヲ当今俗儒師此意ニ通セス。己カ凡情ヲ以明弁スル事ヲ得スシテ、大学ハ聖書ニ非ト云ノ誹謗アリト云。初經一章凡テ二百五字。蓋シ孔子ノ言ニ非ト云トモ、理又同シ而聖書ナルヲヤ。其伝ノ十章ハ曾子ノ意ニシテ門人ノ記所トアレハ、

曰、是何ト云事ソ。是何ト云事ソヤ。昔者天子^ニ争臣七人有^ル則^ハ無道也ト云ヘトモ、其天下ヲ失ハス。諸侯^ニ争臣五人有^ル則^ハ無道ナリトイヘトモ其国ヲ失ハス。大夫^ニ争臣三人アル則^ハ無道ナリトイヘトモ其家ヲ失ハス。士^ニ争友有^ル則^ハ身ノ令名ヲ離^レス。父^ニ争子アレハ不義ニ陥入^ルズ。不義ニ当^ル而ハ則^チ子争ハスンハアルヘカラス。臣又君ト争ハスンハ非ス。父ノ令ニ従^フ又焉^ナゾ孝ト云フヘケム乎。是孔子ノ言也。曾子父ニ事テ孝アル人也。然レトモ慈愛恭敬アル事ヲ知テ父ノ名ヲ揚^グル權道ニ違^ハリ。親ヲ安スルニ於テハ是ナリトイヘトモ不^レ足^ラ事又如^レ斯。曾子父ニ事而孝アル人也。又中ラサル事多シ。曾子曾皙ヲ養時、必酒肉アリ。將^マ微セントスル時ニ必^ア与^{ヘン}所^ヲ請^フ。余リ有ヤト問ヘハ、必有ト云。曾皙死而曾元又曾子ヲ養時、必酒肉アリ。將^マ微セントスル時ニ与^{ヘン}所^ヲ請^フハス。余リ有ヤト問ニ、亡^ナト云。將^マ以^テ而復進^メメントス。此所謂^ル口体ヲ養者也。曾子カ如キハ志ヲ養ト云フヘシ。親ニ事而曾子カ如ハ可也。是孟子ノ謂也。曾子曾元親ニ事而慈愛ハ同シ。其志^ス処曾元ハ野ナリ。曾子ニ劣^レリ。曾子モ又至孝^ニ非ス。故ニ孟子可ナリト云。言^イ心ハ君子ハ事必ストセス余リ有哉ト問時、有時モアラン、又ナキ時モアルヘシ。有時ハ有ト答ヘ又ナキ時ハナシト答ヘハ誠ナリ。誠ハ天性ナリ。然ニ必アリトスル事私意ナリ。然ルニ程子評シテ曰、子ノ親ニ事ルコト曾子カ如キハ至^シレリト云フヘシ。而^シカニ孟子家可ナリト云。豈^ニ曾子カ孝ヲ以余リアリトセン哉ト。此^ノ言^ケ程子アヤマテリ。豈^ニ其孟子道ナキ事ヲ言ハン。朱子モ又程子ヲ助ケリ。朱子モアヤマテリ。君子ノ道唯誠ヲ貴トシトスルナリ。誠ハ善ナリ。性ナリ。中ニ誠アレハ外ニ彰ル和也。和

トハ温和ノ和ニ非ス。中ヨリ顯ル庸也。義ナリ。恕ナリ。末ナリ。流レナリ。命ナリ。天ヨリ生ス和ハ喜怒哀樂愛惡欲、皆和ナリ。中ヨリ出テ節ニ中リ理ニ叶ヒ義ニ宜キヲ中和ノ徳ト云。是ヲ知ルハ智ナリ。孔子ノ曰、知仁ニ及ヘ共、ヨク守ル事ナケレハ得ルトイエトモ必失^フ。知仁ニ及ヒヨク守レトモ^以テ^ハ是ニ臨^ミマサレハ民不^レ敬。和仁ニ及能此ヲ守リ莊以臨メ共、動クニ礼ヲ以セサレハ、未^タ善カラス。其要皆愛敬ニ止ルノミ。孔子曰、父ニ事ニ資テ母ニ事ニ而モ愛同、父ニ事ニ資テ君ニ事ルニ而モ敬同故ニ母ニハ其愛ヲ取り、君ニハ其敬ヲ取ル。此ヲ兼タル者ハ父也。故ニ孝ヲ以君ニ事則忠ナリ。敬ヲ以長ニ事ル則順也。忠順不^レ失而其上ニ事リ而后能^ク其爵禄ヲ保而其祭祀ヲ守^ル。蓋^シ士ノ孝也。愛敬親ニ事ルニ尽シテ徳教百姓ニ加リ、四海ニ刑^ル。子ノ曰、父子ノ道ハ天性也。君臣ハ義ナリ。父母吾ヲ生リ。続事はヨリ大イナルハナシ。君親シテ此ニ臨メリ。厚キ事はヨリ重キハナシ。其親ヲ愛セスシテ他人ヲ愛スル者此ヲ悖徳ト云。其親ヲ敬セスシテ他人ヲ敬スル者此ヲ悖礼ト云。父母ヲ愛敬スルノ余リ他人ニ刑ル順也。孟子ノ曰、原泉混々トシテ昼夜ヲ舍ス。科^ニ盈^ミ而後進而四海ニ放本アル者カクノコトクシ、是ヲ取^ル爾。尤然ナリ。愛敬実アツテ父母ニ順アラサレハ、朋友ニ信ゼラレス親ニ順アルニ道アリ。身ニ反^カ而誠アラサレハ、親ニ順非ス。身ニ誠アルニ道アリ。善ヲ明カニセサレハ、身ニ誠非ス。善ハ性ナリ。性ヲ不^レ知バ身ニ誠非ス。誠ハ天ノ道ナリ。是ヲ誠ニスル者ハ、人ノ道ナリ。誠ト云ハ勉メス而中リ、不^レ思^ハ而得^ル。從容トシテ道ニ中ル聖人ナリ。誠^レ之者ハ扞^レ善^ヲ固ク是ヲ執ル者ナリ。誠ハ真實無妄天理ノ本善

小学ノ法皆明倫ナリ。大学モ猶明倫也。内外ノ別アリ。父子ノ親、君臣ノ義、長幼ノ序、夫婦ノ別、朋友ノ信、是ナリ。大学ハ己身ニ五徳ヲ備ル所ノ天有ヲ学而、タシカニ其理ヲ心得知ルヲ明德ヲ明ニスト云也。明德ヲ五ツニ分而視レハ、仁義礼智信也。此五ツノ物本ヨリ吾ニ備ル。故ニ天理ト云也。五徳ノ中和シテ五倫ニ応シ、能ク理ニ中ル所ノ言行也。大学ハ中ヲ明メ、小学ハ又外ヲ正ス。大学ノ理ヲ明メタル者ハ、能小学ニ中ル。外五倫ノ常ニ応シテ私ナキ者也。又小学ヲ能ク学而、言語事業灑掃應對進退ノ節、教ヲ能用而私ナケレハ、中モ又自然ニ明力ナリ。然トモ小学ヲ学ヒ行所ハ只志立トノミ云フヘシ。性理ヲ知ラサレハ、外事理ニ違コト多シ。小学ノ法五倫ノ道、其蓋ヲ記ノミ。此故ニ事ハ多クシテ学ハ少シ。理ハ微ニシテ足レリ。万物皆吾ニ備ル無尽蔵ナリ。是ヲ知ルヲ大学ト云。大学ノ書ニハ非スシテ大学ナリ。学智ヲ用ヒテ權道ヲシラサルヲ小学ト云。小学ノ書ニ五倫ノ道ヲ記処ハ九牛力一ニシテ、理ハ極リナシ。故ニ小学ヲ能学ヒ言行私ナキ人ハ、志シ立トノミ云フヘシ。權ニ非ス。然ハ小人ニ道ヲ教ルニ、小学ヲ先トス。(小学モ又天理ニシテ人造ノ私則ニアラサレトモ、俗儒是ヲ知リ難シ。天命ヲ知人ニアラスンハ、誰力是ヲヨクセン。嗚呼。)其故ハ理ハ近而学フニ難シ。事ハ遠ク而学ヒ安シ。安キヲ先トシ難キヲ後トス。小学ハ学而用ニ早シ。大学ハ学而用ニ遅シ。故ニ人生レテ而能ク食シ、能ク言ヘハ、先小学ニ入ル。礼儀ノ小法也。内ヨリ外ニ顯ル。仍曰、大学ハ本ナリ。学ニハ小学ヲ本トス。大学ハ本ナレハトテ小学ヲ後ト

シ学ヘトモ、明德明メ難シ。猶未小学ノ小法ヲモ知ラサレハ、人倫ノ法終ニ学ヒ得ス而、五倫ノ道一生行フ事不レ能。禽獸ニ遠カラス。又大学ノ宗ヲ能ク知ル人アレトモ、小学ニ中ラヌムハ其本是ナラストシルヘシ。未スレテ学ヒト云トモ、外法ニ能中ル人ナラハ、其中善ナリト知ルヘシ。聖賢ノ言行外事理ニ不レ中ラバナシ。然リト云トモ未スレテ学ヒシテ中和ノ理ニ徹スル者、古今独モナシト沙汰セリ。扱又小学ノミ学ヒ、進退ノ事業ヨキニ似タレト、其本正サレハ、事ノ變ニ中リ而權道ナシ。權道ト云ハ輕重ヲ謀ルノ權ナリ。仏法ニ西方ノ引道浄土門ノ方便ノ類難ニ勝テ計一數多シ。利世安民ノ為ナレハ、是聖道門ノ權才ナルヘシ。神道ニ靈驗ヲ以用トスト云ヘリ。是又愚者ニ善ヲ進ムル方便。利世安民ノ為ナレハ、誰力是ヲ非ラン。湯王武王臣トシ君ヲ害ス。君ハ一人天下ハ多シ。重シ。故ニ聖トス。葉公孔子ニ語ル。吾党ニ躬ヲ直スル者アリ。其父羊ヲ攘而子是ヲ証ス。孔子ノ曰、吾党ノ直キト云者ハ異ナリ。父ハ子ノ為ニカクシ、子ハ父ノ為ニ隱ス。直キ事其中ニアリ。如レ斯キ言行皆權ナリ。仏氏ノ戒ヲ持ツノ教、小乗ノ小戒アリ。又中乗アリ。又大乗有リ。三乗ヲ越テ又最上乘アリ。小乗ノ小戒ハ、大戒ニ背ク。父羊ヲ攘、其子是ヲ証ノ等也。不レ偽ノ小ヲ学而、父ヲ害スノ大罪アリ。此心得ヲ以テ大戒ヲシルヘシ。一ヲ聞而万戒ヲ覺ル。故ニ祖師ノ曰、一戒モ不レ持、一戒モ不レ破。是大乘見ノ大道ナリ。六祖曰、心地無レハ非自性ノ戒、心地無レハ癡自性ノ慧、心地無レハ乱自性ノ定、不増不減自金剛此偈最上乘ノ戒定惠ナリ。儒道モ皆同シ。小学ヲ不レ用、小学ヲ不レ破、是則大学也。或時曾子孔子ニ問テ曰、父ノ令ニ從ヲ孝ト謂フベケンヤ。子ノ

孔子ノ曰、君ニ事而忠ナケレハ孝ニハ非ス。位高ク官アレトモ
慎ナケレハ孝ニハ非ス。朋友ニ交而信ナケレハ孝ニハ非ス。
戰場ニ進而勇ナケレハ孝ニハ非ス。其惡名皆父母ニ掛、先祖
ノ耻辱ヲナス。此故ニ身ヲ立、道ヲ行ヒ、名ヲ後世ニ揚而父母
ノ名字ヲ高ク顯スハ孝ノ終リト宣リ。夫孝ハ親ニ事ルニ始リ、
君ニ事ル中比トシ、身ヲ立、名ヲ揚ルヲ終リトス。五刑ノ属
三千ニシテ、罪不孝ヨリ大ナルハナシ。親ヲヨク愛スル者ハ人
ヲ惡マス。吾人ノ親ヲ惡メハ人モ又吾親ヲ惡ム。孟子ノ曰、人
々吾親ヲ殺ス事ヲシレリ。吾人ノ親ヲ殺セハ人又吾親ヲ殺ス。
只一間アルノミナリ。夫能ク親ヲ敬スル者ハ人ヲ慢ル事ナシ。
吾人ヲ慢ハ、人又吾ヲ慢ル。愛敬親ニ事ルニツクシテ、余計万
民ニ刑ル。上ニ居而不驕バ高ケレトモ危カラス。自礼儀
ヲ正シフシテ自法度ヲ慎メハ、富貴身ニ余レトモ、他人是ヲ見
テ猶未タタラスト云。言心ハ齊ノ宣王圉方四十里、民是ヲ見テ
大イナリト云。宣王一人樂而民ト共ニ不レ樂。周ノ文王圉方七
十里、民是ヲ言而小ナリト云。文王一人ノ樂ヲ忘レ、民ト共ニ
樂シム故ニ而云。此以是ヲ視レハ、若吾朝ニモ明君有而仁政ヲ
施シ、刑罰ヲ省キ、税斂ヲ薄、耕ス事ヲ深クシ、耨事ヲ易
シテ民ト共ニ好惡ヲ同シ、民ノ父母トナルヘキ君若アラハ、万
民能思ヒ付、万歳ヲトナヘナン。民人暇ノ日、巷閭ヨリ庠序
ノ教ヲ立而、孝弟忠信ノ道ヲ学バセ、義理ヲシルニ於テハ、誰
カ上ヲ非ラン。貴フ事日月ノ如ク、親ム事父母ノ如クナランカ。
若誤テ逆敵發リ、上ニ背ク者アリ云トモ誰カ組セン。八十ノ
老翁モ挺ヲ制テ堅甲ノ利兵ヲ撻カム。王者ニ敵ナシ。良将ノ下
ニ弱兵ナシ。皆勇剛ナラン。吾朝ニモ楠河内ノ判官正成先生、

独只此道ヲヨクセリ。委細ハ下卷ニ記。右ハ閭巷ノ教ナリ。庠
序学校ノ教ハ皆大学ナリ。左ニ記。
南木惣要卷第二法部

ヲツクシ、父母ニ怡シメム事ヲノミ思ヒイタワルハ愛ノ極ナリ。人ノ子トナリ、婦ト成臣トナリテ貴人ニ事ヘ奉ルニ、今ノ世トモイカナル賤キ庶人ナレトモ主人ヲ貴ミ、恐ル、事ヲハ能シレリ。罰ヲ恐レテナリ。吾父母ヲ恐レ敬スル事ヲシラス。其人ノ心ノ億意ヲ窺ヒ見レハ、貪欲深ク又臆病ヨリ出タリ。四民ノ内別而武士ハ勇ヲタシナムヘキ事ニ非スヤ。耻カシキ事トシルヘシ。謹ムヘシ。貴人ノ前ニ座シテ太息ヲツキセス。欠セスヒサイシリセス。噫セス、嘆セス、伸セス、跛セス、睚セス、唾セス、涕セス、鼻カマス。寒レトモ襲セス、癢ケレトモ搔ス。袒裼セス。渉セサレハモスソヲ擽ス、衣服ノ裏ヲアラハサス。貴人ノ前ニテハ膚エヲカクスヲ礼トス。爰ニ記ス処ハ、九牛カ一其教ニモアラス。礼儀三百威儀三千其數極ナシ。女ハ吾父母ノ家ヲ出、舅姑ノ子トナリ、吾父母ヲハ又他人ノ女カワリテ父母ヲ忠養ス。此故ニ舅姑ニ事ルコト実ノ父母ノ如シ。跡先互ニ如此衣服垢ツケハ、灰ニ和シテ漱ギ申サムト請ヒ、衣裳綻ヒ、裂ヌレハ箴ニ(糸に刃)ツケテ補ヒツバラント謂ス。上下皆貴キニ事ヘ奉ル礼イツレモ此心得也。其志シ愛ト敬トノ二ツヨリ彰ル。他ニ出テモ昏ニハ必定メテ、晨ニハ省ル。一日ノ法ナリ。故アツテ出事アレハ必告シ、反レハ必面ヲ見ヘ、父母ノ機嫌ヲ窺ヒ、其志ヲ怡ハシム。常ニ遊フ處定リ有リテ、父母ノ心安カラシメン事ヲノミ思ヒ、老タル父母ヲ養事、今日ノミト珍客ノ如ク心得コ、ロヨク遊ヒ給ハン事ヲノミ願ヒトセリ。礼記ニ孝子ノ愛深キ者ハ、必和氣アリ。心ニ和氣アレハ其色面ニ顯ル。彰ル、処必怡ヘル色アリ。愉色アル者ハ必婉力ナル容アル者也。其要又愛敬

ニ止ル。愛敬親ニ事ニツクシテ余計万民ニ及也。曲礼二人ノ子トナリ臣トナル者、何レモ賤ニ有テ、貴キニ中ルニハ居處立処言處、皆方アリ。其要又愛敬ニ止ル。父母存生ニ座スレハトテ、他人ノ為ニ死スル事ヲ共ニセス故ハ吾身本吾身ニ非ス。父母預置給フ處ノ吾ナレハ、吾マ、ニナスヘキニ非ス。又死後ナレハトテ吾物トスヘキニ非ス。父母見聞ナケレハトテ、氣随ノ言行ハ後クラキ事也。比興ノ至リト云ツヘシ。一生吾物トスル事ナカレ。必ソコナヒ傷ル事ナカレ。子々孫々ノ末マテ心得同シ。孟子ノ曰、不孝ニ三ツアリ。後ナキヲ大イナリトス。子孫斷絶シ其家繼事ナキハ、父母ヲ殺スニ似タリ。孔子ノ曰、身体髮膚是ヲ父母ニ受タリ。毀ヒ傷ラサルハ孝ノ始ナリ。深キ淵ニ臨而薄キ氷ヲ履カ如ク、天高シト云ヘトモ腰ヲク、メ、地ハ厚シトイヘトモヌキ足セヨ。四方八面十方同シ身ヲ立、道ヲ行ヒ、名ヲ後世ニ顯シ、父母ノ名字ヲ高ク揚ルハ孝ノ終リ也ト宣ヘリ。尤然ナリ。無病延命ナリトイヘトモ学ヲ好マス、不用ノ行ヒ多ケレハ他人ニ後指ヲサ、レ、何カシカ子誰カシカ子孫ト他人ニトナヘサセ、先祖ノ名字ヲ耻カシメバ、ナキニ劣レル子孫ナリ。孟子ノ曰、世俗ノ不孝トスル處ノ者五ツ分限相応ノ家職ニ怠リ、身貧ク而父母ノ養ヲ重セサルハ、一ツノ不孝ナリ。博奕シ、或ハ大酒ヲ好ミ遊乱ニマキレ父母ノ養ヲカエリミサルハ、二ツノ不孝ナリ。吾身ニアタワサル貨財ヲ好ミ、或ハ好色ニシテ妻子ヲ私ニ求メ、父母ノ養ヲ顧サルハ三ツノ不孝也。耳ニ聴目ニ視ル欲ニ從而父母ノ名ヲ立、何カシカ子誰カシカ子孫ト笑レ、羞辱ヲナスハ四ノ不孝也。血氣ヲ争ヒ、喧嘩ヲ好ミ、父母ノ身マデヲアヤウクナシテ、ナケキヲカクルハ五ツノ不孝也。

ナラス。史司ノ教マドワシケレハ、^{ノボツテ}升而大学堂ニ入ル、下ノ奸曲不道ヲ正ス。史司濁ル則下ノ罪ニ罰ヲ倍ス。^{ヘイ}愚有ノ罪ハ輕シ。智者ノ罪ハ重シ。君智アルヲ挾而奉行トス。小人ノ罪ハ一身ナリ。他人是ヲ師トス。大人ノ罪ハ重シ。万民彼ヲ師トス。又小人ノ罪ハ己一身ニシテ他人ノ禍トナラズ。大人ノヨコシマナルハ多クノ人皆苦シム故ナリ。故ニ村上帝位ノ曰、民ノ罪ヲ害シテハ上タル智アル者ノ罪ヲハ如何様ニ計ラフヘキソヤト宣シトナリ。扱又五党ヲ州ト云。州ハ二千五百家ナリ。州ノ学ヲ序ト云。長又党長ニ禄ヲ倍ス。今ノ世ノ郡司代官是ニ似タリ。庠学堂ニ於テ是非分乱シ、奸曲アルヲ序堂ニ於テ正ス。庠ヨリ升而序ナリ。扱五州ヲ郷ト云。郷ハ万二千五百家ナリ。長又禄ヲ倍ス。此長ハ都ニアリ。今ノ世ノ奉行是ニ似タリ。是ヲ国学ト云。塾ヨリ升而庠々ヨリ升而序序ヨリ升而学校伝ニ此説アリ。又諸侯ノ国六遂郊門ノ内、六郷ハ学ノ名異ナリ。時代ニヨツテ替ル事多シ。品少キカ故ニ記セス。此書ニ記ス処ハ、上ハ天子ヨリ下庶人ニ至マテ、学セスト云事ナシト云。其大概ヲ記ス者也。扱聞巷ノ学ハ小学ナリ。其教トスル所、小大皆同シ。鶏初メテ鳴時、皆起而手ヲ洗ヒ口ス、キ、面ヲ清メ櫛ケツリシ髪ヲ結ヒ、髻打払ヒ、衣ヲフルヒ、貴賤相応ノ衣服ヲ着シ、エモンヲカイソクロイヒ、人々家職ノ用具ヲ腰ニサシハサミ、座席ノ塵ヲ掃、父母目サメテ起給ヲ待ツ。^{オキユフ}婦人ノ舅姑ニ事モ、子ノ父母ニ事ト志同シ。男女皆其心得同シフシ、衣服ト忠養ノ用ハ別ナリ。扱父母ト舅姑ノ座シマス所ヘ適ニハ、先親愛ノ誠ヲ以テ我カ体トシ、氣ヲシツメ、心ニ慎ミコトハヲ柔ケ、父母ノ志ヲ怡ハシムルヲ肝要トスルナリ。父母舅姑目サメテヨヒ給ヘハ、答ヲ速ニ

諾シカラス顔色ヲウラヤカニ然モ敬ミ早く近ヨリ仰ヲ待、命遅ケレハ機嫌ヲ窺志ヲ問ヒ、欲スル処ヲタツネテ其意ニ順ヒ、父母ノ志ヲタスク。父母怡バ子モ又怡ヒ、父母カナシメハ子モ又カナシム。父母忿レハ恐レテ怨ミス。扱父母起ント宣ヘハ、寒ニハ衣服ヲアタ、メ燠キニハサマシ、父母ニ奉ル其日ノ天氣ヲ見テ、寒暑ヲ告テ衣服、或厚ク、或薄ク、扱手水ヲ奉ル、弟ハ槃ヲ奉レハ、兄ハ水ヲ奉ル、婦ハ沃盥セント申、手水卒ハ請ヲマタカス、早く巾ヲ授ク。扱飲食ノ事ヲ何ヲ力進メン。何ヲ力調ヘ侍ラント問奉リ、父母ノ志ニ順ス。飲食ノ事ハ父母常ニ好ミ、欲スル所ヲ心得テ、旦暮其風味ヲコ、ロミテ、其宜キニ順ヒ、父母ヲ忠養スルナリ。貴賤共二分限相応ニ皆此心得ナリ。父母能飲食シ、逸居シ給ヲ見テハ子モ又怡テ退キ、吾モ又後ニ心ヨク食ス。若疾痛ノ愁アルカ、志シ安カラサル体力、常ヨリ不食ノ事アレハ其子愁テ飲食スル事ヲ忘レ、父母ノ傍ヲ去ル事不能。何ヲ力食シ給ハン。何ヲ力進メマイラセムト又問奉リ、好所アレハ怡テ整ヘ、夫婦志ヲ共ニシテ父母ヲ忠養スルナリ。若夫婦志シヒトシカラサレハ、忠養モタカヘリ。夫ノ孝ハ外ヲ主トシ、女ノ孝ハ内ヲ主トス。内外相調ヘ万事相達ス。家内ヨリ門外マテノ塵ヲ掃ヒ、水ヲ打、旧染ノ穢汚ヲ洗ヒ滌キ内外ヲ清メテ尊者ノ往来ヲ待者也。扱又父母舅姑ノ安逸スル座席ヲ窺ヒ、好所ニ順ヒ終日ナクサメヲナシ、其志ヲ怡ハシムル。日々新ニ又日々如レ斯シ、父母舅姑ノ老タルニ事ヘ奉ルニハ、日夜旦暮席ニツキ座シ給処立居心ヲ放サス。吾身ノ勞ヲ忘レ事ヘ奉ル者ナリ。其志赤子ヲ養カ如クアヤウク思ヒ、大事ニ力カテ然モ敬シ貴ヒ、父母ノ志ニ順シ、其氣ヲ傷ラス吾心ヲ勞シ力

田野ヲ開テ井田ヲ定メ、五穀ヲ樹芸シ、貢物ヲ定、分過ノ失ナク、私ナケレハ、民飽マテ喰ヒ、煖カナルマテニキテ逸居スレトモ、人倫ノ道ヲ学ハサレハ、禽獸ニチカシ。衆ヲ扱而司徒ノ職ヲ設ケ、カレカ長トシ人情ノ欲ニ随而父子ノ親君臣ノ義、夫婦ノ別、長幼ノ序、朋友ノ信、天理ニ因テ導ク而後、人ノ道アル事ヲシレリ。伝ニ云、夏ノ世ニハ校ト云。商ノ世ニハ序ト云。周ノ世ニハ庠ト云。庠序皆学ノ名ナリ。周礼ニ都六郷ノ内五家ヲ比トシ、五比ヲ閭トス。四閭ヲ族トシ、五族ヲ党トス。五党ヲ州トシ、五州ヲ郷トス。郷ハ一万二千五百家ナリ。又諸侯ノ國中ハ六遂ト云。六遂ノ内ハ名異也。五家ヲ鄰トシ、五鄰ヲ里トシ、五里ヲ鄣トシ、五鄣ヲ鄙トス。五鄙ヲ県トシ、五県ヲ遂トス。扱六郷ノ内ヲ以言則ハ二十五家ヲ閭トス。閭ハ一巷ヲ供ニス。閭巷ノ学ヲ名付テ塾ト云。塾ノ学ハ皆小学ナリ。小学ノ法左ニ記。五百家ハ党ナリ。党ノ学ヲ庠ト云。二千五百家ハ州ナリ。州ノ学ヲ序ト云。又周学トハ天子ヨリ諸侯ノ国ニ及マテ、其都トスル処ヲ国ト云。国ノ学ヲ学校ト云。国ト云ハ本朝今ノ国津ノ地也。庠序学校ハ皆大学ナリ。六遂ノ内モカクノコトシ。小学大学ノ分レ、事理一ナリトイヘトモ学文前後アリ。通シ安キヲ先トシ、通シカタキヲ後トス。上ハ天子ヨリ公卿大夫伯子男下庶人ニ至マテ、其始メ八歳ヨリ皆小学ニヨラサルハナシ。其中ノ秀者又大学堂ニ移ル。万民五家ヲ比トシ、其中ノ器アルヲ扱而五家ノ長トシ、残ル四人ニ常ニ怠リナク家職ノ道ヲ進メ、孝悌ノ業ヲ励シ諫メテ曰、史司ノ教ニ背ク事ナカレ。

若教政ニ違、不孝不忠ノ行アレハ、全五共ニ罪セラル閭巷ノウチハ皆ヨコ目ナリ。慎而油斷アルヘカラス。五比ノ長トシ、諫ニ怠リ各ヲ不義ニオトシ入ナハ、罪アル者ハ我ナス処トイヘトモ外三人ニ恨ヲ請ナム。是長タル者ノ諫メ怠タル所ナリ。謹而公儀ヲ恐レ給ヘ。諫メ侍レトモ不用ノ行マシマサハ、閭長ヘ訴ヘ侍リナム。小ヲステテ大ヲトルハ君子ノ道ト申ソ。事不レ叶ニ及テ頼ミ給フトモ專ナキ事ニテ侍ラン。其時恨ミタマヒソナサケナク見ヘ申ベシ。常ニ是ヲオモフカ故ニ、各ニ諫ル処ノ道ナルソ。又外ノ伍ニ増リテ忠孝実ナラハ、是又上ヘ告ケ申ベシ。賞罰明カナルヲ以、仁政ト承リサフラヘハ、善又然ナルヘシ。全伍ヨク思ヒ合道ヲハケマシタマヘ他聞ノ譽レヲトリタマヘ。予モ又怡ヒ侍ラント。或ハ忿リ、或ハ和シテ伍ノ長諫メテ善ニ進ム。扱五伍二十五ヲ閭トス。閭ハ一巷ヲ共ニス。巷ノ首二門アリ。門ノ辺リニ塾アリ。塾トハ小学文堂ノ事也。里中ノ内ニ老テ道アル者ヲ扱而禄ヲ宛ヘ、左右ノ上座ニ居テ民家ニアル時、大鼓ヲタ、キ一閭ノ民ヲ集テ道ヲ語ル。皆小学ナリ。父子ノ親君臣ノ義、長幼ノ序、夫婦ノ別、朋友ノ信ナリ。此ヲ教テ可不可ヲ扱而四閭百家ノ長ニ申シ、賞罰ヲ正シテ心ヲ付、其身ヲ諫メ怡ヲナス。百家ノ長ハ一閭ノ長ニ禄ヲ倍ス。学堂ハナシ。下司親疎ノ私アリ。或ハ是中ノ非ヲ舉、或ハ非中ノ是ヲ舉、奸曲ノ沙汰若モアラハト、横目ヲツケテ、是非ヲ正ス。二十五家ノ長ハ今和国ニ比シテ見ハ、組頭ト云ニ似タリ。百家ノ長ハ今ノ庄屋、扱五族ヲ党ト云。党ハ五百家也。又長アリ。百家ノ長ニ禄ヲ倍ス。又学堂アリ。今ノ世ノ大庄屋ト云。是ニ似タリ。此学ヲ庠ト云。庠ヨリ以上ハ大学ナリ。小学堂ニ於テ、道文明

記シ。次学文小大ノ迷ヒヲアカシ、次ニ軍旅ノ事ヲ記シ、終リニ乱ヲ引結テ王道ニ返シ、神儒仏ノ三法ヲ一ニシ、天ニ至ルト宣事何ノ云ソヤ。古今兵人ノ書記如レ斯沙汰ヲ未タ聞カス。別而当今世間ノ軍師其言ニ曰、軍法ハ只城取ヲヨクスルニアリト云。其城取ハ今師ノ曰、城ノ沙汰ニハ非ス。又謀計ヲ能スルヲ軍者トイヘリ。又三法ノ道何事ソ軍伝ニ用ルニ益ナシ。ミナ妄物ナリト云リ。然ルニ師ハ軍モ又王道、王モ又武ト言事何ソヤ。曰、然リ。宣所ノ如シ。文ノ外武ノ法ナシ。然ルニ文武ハ車ノ兩輪ノ如ク、鳥ノ兩翼ノ如シト云ハ非ナリ。文ヲ本トシ、武ヲ末ト云ハ可ナリ。武ハ文ノ權ト云ハ可也。往昔三皇ノ時、善惡是非ノ沙汰ナク賞罰ノ法ナシ。大道乱レテ仁義ノ名アリ。孝弟忠信ハ天下ノ乱ヨリ始ル。其上文武ノ名ナシ。三法ノ教ヘナシ。而モヨク治ル。天不レ言四時行レ万物育ス。天ニ比シ視ル則三皇モ不レ及。三皇ニ視ミレハ五帝モ不レ及。故ニ士ハ賢ヲ願ヒ、賢ハ聖ヲ願、聖ハ天ヲ願、天ニ通シ天外ヲサトリ終ニ至ラン事ヲ思フ。学文ノ極也。只其本ニ帰ン事ヲ要ス。天下乱テ覇ニ定リ、定而后王道故三王ノ言ヲ以覇道ヲ視レハ野ナリ。覇ヨリ以乱国ヲミレハイヤシミナ時ナリ。道ナリ。時ヲシラサル学者古語多ク覺ヘ言多キニ似タレト、其言ミナ空言也。孔子管仲ヲ言恒公ヲ相而諸侯ニ覇タリ。一タヒ天下ヲ匡シ、民今ニ至マテ其賜ヲ受、管仲徵セハ吾レ其髮ヲ被リ衽ヲ左ニセム矣。豈ニ匹夫匹婦ノ諒ヲ為ル如クナランヤ。自溝洫ニ經レテ是ヲシル事ナキカ。孔子管仲ヲ言ニ、其死ヲ責スシテ其功ヲ称シキ聖人其恩ヲ忘レ給ハサル事カクノコトシ。然ニ今ノ世ノ俗儒師其始メ朱文公程兄弟ノ功德ニ便リ書籍ヲ讀ミ習ヒタ

ル者トモ口給ヲ以誹謗シアルニアラサル妄物トス。慎ナクハアルヘカラス。程子朱子多クノ書籍ヲ集メ註シ置タマヘハ時ニトリテハ少ノアヤマチモアラン。是中ノ非ヲ舉、非中ノ是ヲトルハ惡人ノ所作ナリ。予南木武經ニ性理ノ沙汰少々舉キ言心ハ正成先生利世安民ノ為ニ謀計多ク記置タマヘハ、世間ノ兵人利養ノ為ニ用ン事ヲナケキ、和ヲ加ヘ記シ刊行セシムル所ナリ。然ルニ益ナキ性理ノ沙汰ト誹謗スト聞ケリ。此書若露顯セハ、猶又然言ン。軍伝ノ事ハ王者ノ事トスル処ニハアラサレトモ、止事得スシテ用レ焉。其本ニ疎クシ、末治スル者ハ非ス。故ニ其次第ヲ記。

南木惣要法武卷第一

八百二十八井、上士ハ六十四井、中士ハ三十二井、下士ハ十六井ナリ。

次ノ国君ハ二万二千四百畝、卿ハ二千二百四十畝、是二十八井ノ入ナリ。十六倍ニシテ四百四十八井三千五百八拾四家、大夫ハ百拾二井、上士ハ五十六井、中士ハ二十八井、下士ハ拾四井ナリ。

次ノ国君一万九千二百畝、卿ハ一千九百二十畝、是二拾四井ノ入ナリ。拾六倍ニシテ三百八拾四井、是三千七拾二家、大夫ハ九十六井、上士ハ四拾八井、中士ハ二拾四井、下士ハ十二井ナリ。

次ノ国君一万九千二百畝、卿ハ千九百二十畝ニ拾四井ノ入ナリ。是ヨリ以下拾三倍ニシテ三百拾二井、大夫ハ卿ノ禄三分一ニシテ百四井、上士ハ五十二井、中士ハ二十三井、下士ハ十二井ナリ。

次ノ国君一万六千八百畝、卿ハ千六百八十畝拾三倍ニシテ二万千八百四十畝、是二百七十三井二千八百八拾四家也。大夫ハ卿ノ禄三分一ニシテ七百二十八家九十一井也。上士ハ三百六十四家ノ入、三千六百四十畝也。中士ハ千八百二十畝、下士ハ九百拾畝也。九十一家ノ入。

次ノ国君一万四千四百畝、卿ハ千四百四十畝、是拾八井ノ入ナリ。是ヨリ以下ハ又拾倍ニシテ一百八十井、大夫ハ卿ノ三分一ナレハ六拾井、上士ハ三十井、中士ハ拾五井、下士ハ六百畝六拾家ノ入ナリ。

次ノ国君一万二千八百畝、卿ハ千二百八十畝、是拾六井ノ入ナリ。是ヲ七倍ニシテ百十二井、大夫ハ卿ノ禄半分ナレハ五十六

井、上士ハ二十八井、中士ハ拾四井、下士ハ七井五十六家ナリ。次ノ国君一万二千二百畝、卿ハ一千二百二十畝、是十四井ノ入ナリ。七倍ニシテ九十八井、大夫ハ四十九井、上士ハ百九十六家、中士ハ九十八家、下士ハ四十九家四百九十畝ナリ。

次ノ国君九千六百畝、卿ハ九百六十畝、是拾二井ノ入ナリ。七倍ニシテ八十四井、大夫ハ四十二井、上士ハ二十一井、中士ハ八十四家、下士ハ四十二家四百二十畝ナリ。次ノ国君八千畝、卿ハ八百畝、是拾井ノ入ナリ。七倍ニシテ七十井、大夫ハ三十五井、上士ハ百四十家、中士ハ七十家、下家ハ三十五家、此入ナリ。三百五十畝ナリ。是ヨリ以下又四倍ノツモリナリ。以下小ニシテ前後紛^{マギ}ル、故ニ記セス。可^レ用事アラハ以上ノ心得ニテ自得スヘシ。公侯伯子男トハ爵位ヲ以名ツケテ云ナレハ、必制地然ト云ニ非ス。子男ニモ大国アリ。公侯ニモ小国アリ。其器ニヨテ帝都ノ近国ヲ封シ、或ハ遠国ヲ封スル。故ニ大小不同也。或ハ先祖ノ忠義子孫其器ニアラサレトモ禄ヲハ世々ニスト云理アリ。本朝又然ナリ。往昔ノ攝政殿官位職ノ三ツヲ分定置給ヒシ。法此理ニ哉。此書ニ記ス^{イ、クダ}処ハ次第ヲ上ヨリ言下ス。則如^{ナシラ}レ斯国ヲ分ル大略ナリ。又天子ノ三公ハ公侯ニ視^{ナシラ}ヘ一同百成ノ国、或七八九十成ノ国、卿ハ伯ニ視五十成六十成、或ハ四十成ノ地ナリ。大夫ハ子男ニ視三十成二十成二十五成ノ地也。上士ハ附庸ニ視十成十五成。中士ハ六七八成。下士ハ三四五成ノ地ナリ。周成大概如斯爵位ヲ班ニシ貴賤ヲ連而上下ヲ正シ、制地ヲ分而本末ヲ異ニシ、賞禄ヲ定メテ分、過不及ノ失ナク上下和平ニシテ天下ノ人ノ志ヲ同ス。大ナル哉。大人ノ德行或^ル人予ニ問テ曰、此書ハ兵書ナルヲ井田ヲ本トシ、次ニ閭巷ノ学ヲ

ニ宅ト菜田ト田百畝トヲ宛、出来米拾二分其一分ヲ年貢トス。是什カーノ貢法ナリ。周政ハ國中ニハ貢法ヲ用、都鄙ニハ助法ヲ用、仍通シテ徹スト云也。法々助法徹法是ナリ。五家ヲ比トシ、互^{タカイ}ニ一家ノオモヒヲナス也。五比ヲ閭トシ、朋友ノ交リヲ為ス。四閭ヲ族トシ念比ニムツマシ。五族ヲ党トシ用事ヲ救ヒ合也。五党ヲ州トシ互^{タカイ}ニ物ヲ借合、五州ヲ郷ト云。折々見舞逢ナリ。是一万二千五百家ナリ。軍ニ比ス則五人ヲ伍トシ、伍伍ヲ兩トシ、四兩ヲ卒トシ、五卒ヲ旅トス。旅ハ五百人ナリ。五旅ヲ師トシ、五師ヲ軍ト云。軍ハ一万二千五百人ナリ。國中ヨリ騎馬三千人、卒七千二百人軍賦ナリ。是七万五千家ヨリ出ル。兵車二百乘、大車二百乘、兵車一乘ニ馬四疋、卒七拾二人、甲士三人、兵車二百乘ヲ計^{ハカル}ニ一万七千六百家ヨリ出ル。大車一乘ニ牛拾二頭、卒二拾五人宛重車二百乘ヲ計^{ハカル}ニ一万一千八百家ヨリ出、大車一乘、兵車共ニ合セテ車四百乘、牛馬三千二百疋、卒二万人、甲士六百人、是車制ナリ。都合十万四千四百戸ヨリ出ル軍役ナリ。國中一家一人ノ賦制ナレハ、余一万四千百拾八人アリ。是ヲ軍外ノ用トス。爵ハ官位也。公一位、侯一位、伯一位、子一位、男一位五等ナリ。^{天下諸大名}君一位、卿一位、大夫一位、上士一位、中士一位、下士一位、六等ナリ。^{諸大名又家ノ次第也}五等ハ天下ニ通シ、六等ハ國中ニ施ス。爵位盛大ニシテ、私ナキヲ以德トスル者ハ公ナリ。人ニ君タルヲ以德トスル者ハ侯ナリ。人ニ長タルニ足レルヲ以スル者ハ伯ナリ。其德ヲ以テ人ヲ養ニタレルハ子ナリ。其德ヲ以テ人ヲ安スルニ足レルハ男ナリ。命ヲ出而以テ衆ヲ正スニ足レルハ君ナリ。此君ト有ハ^{諸大名国司ノ事ヲ云}進退ヲ心得道上達スル者ハ卿ナリ。知ヲ以テ人ニ師タ

ルニタレルハ大夫也。オヲ以テ人ニ事ルニタレルハ士ナリ。士ハ上中下合シテ六等ナリ。都鄙ニ助法ヲ用テ公田ノ入所ヲ収メ、君ノ禄トシ、又國中ニ貢法ヲ用而什ニシテ其一ヲ賦セシメ、国家ノ用所ヲ充ス。如^レ斯ナル則ハ卿大夫以下マテ賦税^{オウ}匀当ニシテ失ナシ。公侯ノ封地大ナルハ、九同九百成ノ国、方三百里、兵車千乘出国ナリ。是ヲ九二分、方百里ナル物九ツ。方百里ハ方十里ナル物百ナリ。方十里ハ方一里ナル物百也。方一里ハ一井ナレハ、一同方百里ハ一万井也。三分ノ一ハ城都邑里圉地トナル。計^{ハカル}ニ三千三百三十三井ノ三ノ一。是ヲ除而実ニ六千六百六十六井ノ三ノ二。是助法ナレハ、井毎ニ八十畝ヲ公田トス。計^{ハカル}ニ五十三万三千三百三十三畝ノ三ノ一ヲ収ム。君ノ禄ハ三千三百畝、卿ハ三千二百畝。是四十井ノ入ナリ。実ハ方地ヲ十六ニシテ、其一ヲ禄トス。計^{ハカル}ニ六百四十井方三十一太半里ニシテ十成終ノ土地五千二百二十家、是卿ノ六ナリ。大夫ハ百六十井、上士ハ八十井、中士ハ四十井、下井ハ禄四百畝ナレハ、十家ノ入ナリ。十六倍ニシテ百六十家、是二十井ナリ。是ヲ下士ノ禄トス。卿三人五大夫上士九人、中士九人、下士九人、是公侯ノ大ナル者也。小国庶人ノ官アル者ニ五等アリ。或七同八同ノ国、又ハ五百成六百成ノ国アリ。封地同シカラス。是ハ其大概ヲ記者ナリ。

次ノ国君ノ禄ハ二万八千八百畝、卿ハ二千八百八十畝三拾六井ノ入ナリ。十六倍ニシテ五百七拾六井、是四千六百八家ナリ。大夫ハ百四十四井、上士ハ七拾二井、中士ハ三拾六井、下士ハ十八井。次ノ国君二万五千六百畝、卿ハ二千五百六十畝、是三十拾二井ノ入ナリ。十六倍ニシテ五百十二井四千九拾六家、大夫

信ノ業ヲ專トシ、礼義ヲハゲマストイヘリ。五家ヲ鄰トシ五鄰ヲ里トシ、四里ヲ鄣トシ、五鄣ヲ遂ト云。是一万二千五百家ナリ。井田ハ四井ヲ邑トシ、四邑ヲ丘トシ、丘トハ拾六井ナリ。四丘ヲ甸トス。甸ハ六十四井ナリ。井毎二八夫ナレハ五百十二家也。此地ヨリ出ル軍賦、兵車三乘、馬十二疋、歩卒二百十六人、甲士九人、重車三乘二牛三拾六頭、卒七拾五人兵車一乘二馬四疋。甲士三人車ノ上ニ左ハ弓ヲ主トシ、右ハ刺ヲ主トシ、中ハ御ヲ主トス。歩卒七拾二人ノ内ニ、拾四人ハ車ノ前ヲ拒ク。左右ノ角ニ拾四人宛アルナリ。重車一乘ニ、牛拾二頭卒二拾五人宛。内拾人ハ炊家子、五人ハ衣装固守、五人ハ廩養、五人ハ樵汲也。是一甸六十四井ノ地、五百拾二家ナリ。是ヨリ出ル軍役、是ヲ車制ト云。是ハ都鄙トテ田舎ノ地ナリ。和シテ曰、車制ハ本朝ニ不_レ用。異国モナベテ用ニハ非ス。行路幅セマ_レシケレハ、車制不_レ叶。増而本朝車制可_レ用地ナケレハ也。然トモ百姓軍賦兵ツモリ、田畑ノ積高ニ応シテ比シテ可_レ知_{タメ}ナレハ、記置所ナリ。扱又爵ト云ハ官位ナリ。禄ハ私用ナリ。爵禄ハ其器ニヨツテ宛行_フ。制地広ケレトモ、爵輕キアリ。制地少ナケレトモ爵重キモアリ。時ノ宜ニ隨_{シテ}而然ナリ。私スルニハ非ス。ミナ天下利世安全ノ為_{タメ}ナレハ、其家ニヨルニモ非ス。其人ニヨル者也。客問テ曰、異国ニハ四海ノ内拾二分而、其一分ヲ公侯ニ対シ、万乗ノ国ト云。千乗ノ国百乗ノ家ト云。又天子ノ郷ハ公侯ニ視_{ナラ}、大夫ハ伯ニ視_{ナラ}、元子ハ附庸ニ視_フト云リ。然ハ拾二ノ諸侯諸伯諸子男諸附庸ノ家ニハ、何ノ国ヲ宛シ。又天子ハ地方千里諸侯ハ方百里、伯ハ七十里、子男ハ五十里、大国ノ君ハ郷ノ禄ヲ拾ニシ、郷ハ大夫ノ禄ヲ四

倍ニシ、大夫ハ上士ニ倍シ、上士ハ中士ニ倍シ、中士ハ下士ニ倍シ、下士ハ庶人ノ官アルト同シ。禄ハ其耕ニ代トアリ。是ハ又余リ少ナカラム。異国爵禄ヲ班ニストハ何ノ云ソヤ。封国ノ分地大概國ノ広サ、又ハ帝都郊門ノ内、百姓ノ貢物軍賦心得難シ。願ハ委細ニ宣_{タマ}ヘ。曰、古ノ書籍ハ大ヲ舉而細ヲ尽サス。言ヲ仮ニ設ク。古法然リト云ニ非ス。公侯ノ大ナルハ天子ノ百分ノ其一ヲ受タリ。十二分一分ヲ宛ヘハ、諸侯ニハ何ノ国ヲ封セム。公郷ニ何ヲ給ラン。不_ニ以_テ文_ヲ害_レ辞_ヲ。不_レ可_ニ以_テ辞_ヲ害_レ志_ヲト云リ。凡異国四海ノ中集メテ地方九千里也。是ヲ九ツ二分、其八ツハ海岸山川空地トナレハ數ノ内ニ非ス。其一方三千里田畑邑里トナル。是ヲ又九ツ二分ル則方千里ナル物九ツ田地ヲ分時、地方一里ヲ井トシ、井拾ヲ通トシ、通拾ヲ成ト云。成ハ方十里ナリ。成拾ヲ終トシ、終十ヲ同ト云。同ハ方百里ナリ。同拾ヲ対トシ、拾封ヲ幾ト云。幾ハ方千里ナリ。故天子ノ制地幾内方千里ト云。是ヲ万乗ノ国トハ云ナリ。方千里ハ四海九ツノ一分ナリ。其八ツ諸侯諸伯諸子男諸附庸ノ領地ナリ。周ノ始メニ太公望改メテ千八百国ニ対ス。扱幾内千里天子ノ制地ヲ又九ツ二分、其八ツヲ都鄙ト云。其一方三百三十三里有余ヲ又五ツ二分、其四ツヲ近国ト云。其一方百四十九里有余ヲ又九ツニシテ其一ツヲ九重ノ帝都ト云。此内ニハ税賦ハナシ。城邑民家トナル。是_レ方四十九里。其八ツ郊門ノ内國中六郷ト云。公田ハナシ。税賦別ナリ。計ニ井ヲ為_{ナス}事一万九千七百五拾三井余ナリ。是ヲ三ツニシテ其一分城邑園地菜田トナル。計ルニ井ヲ為_{ナス}事六千五百八十四井余ヲ減シテ、実ニ一万三千百六十八井有余也。井毎二九夫ナレハ、拾一万八千五百十八家也。扱農子

タカヒニ兼合シテ、天下治平ス。農是ヲ耕シ、工ハ其器物ヲ整へ、商ハ是ヲ使シ、士ハ是ヲ奉行ス。然ハ士ニ定レル禄ナシ。故ニ九ノ一公田ヲ定メテ禄田トス。善政ハ本ヲ整ム。衣食ハ是民ノ本也。農桑ハ又衣食ノ原也。五畝ノ宅植レ之。以レ桑スル則、五十ノ者可^{ニシテ}以^テ衣^レ帛^ヲ。百畝ノ田勿^レハ奪^ニ其時^ヲ。数口ノ家飢ル事ナカルヘシ。庠序ノ教ヲ謹而重^ル之^ニ、孝弟ノ義以スル則、頒白ノ者道路ニ肩戴セス。孟子以^レ之^ヲ先^トシ、王ニ教ヘ給。尤仁政ノ始メナレハナリ。(柔ヲ以テ剛ニカツハ、民ト好惡ヲ共ニスルノミ。六韜三略ニ深く心ヲ入ベキコトナリ。聚斂ノ臣アランヨリハ、寧盜臣アレトイヘリ。)夏ハ五十二シテ貢シ、殷ハ七十二シテ助シ、周人ハ百畝ニシテ徹ス。方一里ニシテ井ス。井ハ是九百畝。其中ヲ公田トシ、八家ミナ百畝ヲ私田トシ、同公田ヲ養フ。其^ニ實ハ什カ一ト云^レ之^ヲ井田什カ一ト云事。夏ノ世ニハ百姓一家ニ田地五十畝宛ヘ拾二分、其一分ヲ貢米トス。今ノ世ノ一ナリト云。年貢ニ中ル殷ノ世ニハ一家一人ニ田地七十畝宛其代ニ又外ニ七畝ノ田地ヲ宛作ラセ、其七畝ヲ不レ殘貢ニ入ル。公ノ田七畝ヲ助耕シ貢トスル故ニ助スト云ナリ。是ハ又一ナリヨリモ少シ。右ノ外ニ廬舎トテ別ニ屋敷ト菜田ヲ宛ヘシ故也。一畝ト云ハ百歩ナリ。又周ノ始メ太公望周公丹ニ井田ノ法ヲ伝フ。又井田ヲ改メ開ク。五畝ノ宅ニ畝半ハ田ニアリ。二畝半ハ邑ニアリ。此五畝ハ何モ家ヲ造ル屋敷也。扱百姓一人ニ田地百畝ヲ宛田九百畝ヲ以、画^{エカ}テ井地ノ制ヲナシテ經界ヲ定ム。方六尺ヲ一步トシ、百歩ヲ畝トシ、方六十歩ヲ町トシ、六町ヲ一里ト云。井地九百畝ノ中ノ一分ヲ公田トシ、外ノ八百畝ヲ八家八人ノ私田トシ、中一分ノ田ヲ吾ヨリ先ニ能ク耕^シ耨^リ。私田ヲ後ニス。出生ノ未

有次第貢ニ入ル。九ノ一公田ノ内又二十畝ヲ以而八家ノ廬舎トシ、春夏ハ廬舎ニ居テ耕作シ、秋ヨリ冬ハ邑ニ居ル。邑ハ里ニアリ。爰ヲ以実ハ一家一人ノ百姓田百十畝ヲ耕作シ、其十畝ヲ貢ニ入ル。是ヲ助法ト云。扱經界トテ田ノ間ニ經ト溝アリ。溝ノ深^サ広^サ二尺、經ノ広^サ二間、牛馬ノ通路也。井ト井ノ間ニ又溝ト畛アリ。溝ノ深^サ広^サ四尺、路幅五間車ノ通路也。田毎^ニアセアリ。菜田阡陌ノ路、田ノ外ニ土手アルナリ。扱屋敷ノマワリニハ桑ヲ植女ハコカヒヲナシ、糸ヲ取一家ヨリ一足ノ帛ヲ貢ス。其外公役コマノアリトイヘトモ、今本朝ノ法ニ中ラヌ故ニ略ス。蓋シ其^ニ實ヲ計^ハニ、今和國ノ貢米諸役ヲカケテハ石代ニシテ四ツメンニ相当ランカ、五十二シテ帛ヲ衣ルトハ、民ノ侈^ヲリヲ止ムル法ナリ。万民饑寒ノ色ナク飽マテ食^ヲ煖^マカナルマテニ衣テ逸居ストイヘリ。然レトモ猶^ヲ未^タ人倫ノ道ヲシラサレハ禽獸ニ近シ。此故ニ侈リヲ極メ父母ヲナミシ、長ヲ輕シメ鰥寡ヲ侮^リ、公恩ヲ忘^ルレ災害生シ、禍^ヲ亂^ヲ發^ルリ世ヲ破ル。故ニ其村里ニ庠序学校ノ学文所ヲ定、農ノ暇^ニハ人倫ノ道ヲ学ブ。其業ミナ小学ノ法ナリ。故ニ愛^ニ父母^ヲ長^ヲ敬^シ朋友^ニ信^{アリ}。孝弟ノ道上ヲ犯ス事ナケレハ、天下和平ニシテ災害生セズ。禍亂不^レ發四國順^レ之ト云リ。庠序学校ノ次第左ニ記。民ニ道ヲ教テモ常ノ産^ヲタラサレバ、聖賢ノ道モ年ニ聞入ス。衣食多逸居スレトモ、人倫ノ道ヲ学ハサレハ私曲多シ。仁政ナレトモ善道トシラズ。只指当ル己カ利養ニ不^レ叶^ハバ、天理ノ正法ナレトモ下トシ、上ヲソシリ非法ノ沙汰ヲ專トシ、私言多ケレハ、爰ヲ以治世ノ為ニハ衣食ト教ト兼備シテ、全カラサレハ政道立難シ。故ニ周教ハ衣食兼^ニ備^ハリ、民モ又道ヲ知ル。故ニ孝弟忠

客アリ問テ曰ク、軍伝法配術ハ天道ノ常、人造ノ私則ニ非ス。王道ノ權ト宣^{ノミ}。心得ガタシ。謀ハ私慮ニ出ツト聞リ。曰然ニハ非ス理ナリ。利ニ非ス。古人ノ曰、軍ハ本天ヨリ出タリ。大極分而陰陽ノ名アリ。陽ハ神ナリ。陰ハ鬼ナリ。陽ハ善ナリ。陰ハ惡ナリ。陽ハ性ナリ。陰ハ氣ナリ。陽ハ清シ。陰ハ濁ル。人情未^ミ發^{ハツ}不起^キ。一念ノ中ハ可モナク又不可モナシ。不思善不思惡、其本ナキカ如シ。一ツノ理ノミ。無色無形万物其中ニ含^フメリ。故其本無ニ非ス。性氣彰^{アラハ}レ善アリ。惡アリ。是アリ。非アリ。孟子ノ曰、志ハ性ナリ。氣ハ次、性ハ主宰ナリ。氣ハ卒ナリ。性先立^{サキタテ}ハ順ナリ。氣先立^{サキタテ}ハ逆ナリ。惡ナリ。性先^{サキ}タチ順ナレハ、氣モ又善ナリ。惡ナシ。人性其本性氣ノ二ツ。其始メ一理ミナ天ヨリ生ス。天ト云ハ、未發ノ中也。故ニ天ニ本二ツノ物アリト云。是ナリ。一ツハ理、一ツハ無理。無理モ又氣ナレハ、天ヨリ生ス。末ニ彰ル。仍テ曰、克己ニ復^スレ礼^ニ。已トハ氣稟ノ人欲ナリ。礼ハ本天性ナリ。人欲ハ氣ナリ。此氣主宰ニ先立^ツ。是下トシテ上ヲアナドル故也。天下ノ大乱是ヨリ生ス。百乘ノ家ヲ八十乘ヨリ犯シ、千乘ノ家ヲ八百ヨリ犯シ、万乘ノ家ヲ八千乘ヨリ犯ス。ミナ下ヨリ上ヲ犯シ侮ル故ナリ。仍曰、有子カ曰其為^{ナリ}レ人。孝悌而好^ムレ犯^ムレ上^者ハ鮮^スシ。不^スレ好^ムレ犯^ムレ上^者而好^ムレ作^ムレ乱^者ハ、未^レ之^レ有^レ一也。故ニ孝悌ヲ貴^ムフ仁政ノ本ナレハ也。仍曰、言行未發以前ニ軍アリ。己ヲ敵トシ礼ヲ味方トス。一身ヲ城郭トシ、心ヲ主將トス。勉ヲ以關守トシ又門番トス。見聞知覺ニ迷^マ處^トノ内敵ヲ亡シ、城

郭ツヨキ則^ハ、外敵自然ニ亡ブ。然ル則^ハハ心広ク四体胖^カナリ。故ニ君子ハ身治ムルヲ軍法ノ本トス。客曰、是ナリ。(天子ハ天下ヲ以テ城トシ、国主ハ其國ヲ城トシ、大夫ハ家ヲ城トシ、士庶人ハ其身一心誠ナレハ、上ハ天子ヨリ、下庶人ニ至マテ、道ヲ學バスンハアルベカラズ。故ニ文ヲ以テ軍法ノ本トス。武末ナリ。父ナキ武ハ武ニアラズ。)天下四民ノ内三民ハナクテハ不^レ叶。故ニ是ヲ太公三寶ト云。大農大工大商ナリ。士ハ何ノ用ソヤ。曰、然ナリ。此故ニ兵書ニ曰、兵ハ不祥ノ器ナリ。天道惡^ムレ是^ヲ。不^レ得^レ止^ム而用ル。則^カナリ。上世未^タ四民分^レス。神皇氏始メテ耒耜^{ルイシ}ヲ為^{ツク}而民ニ家穡ヲ教^ユ而后四民ヲ分^ツ。皇帝始而兵器ヲ為^{ツク}ル。堯ノ時ニ当^{アタ}而猶^タ未^タ平カナラス。洪水横流シ天下ニ汜濫ス。草木鴨茂シ禽獸繁殖シ五穀不^レ登^ミ禽獸人ニ逼^{セマ}ル獸蹄鳥跡ノ道中国ニ交^{マシ}ハル。堯獨^ニ是ヲ憂^フ。舜ヲ舉^{アゲ}テ敷治スト云リ。舜是ヲ治ルニ何ヲ以セムヤ。礼ヲ以治メヤスキハ人ナリ。人ハ仁ナリ。仁ヲシラザルヲ残ト云、義ヲ不^レ知ヲ賊ト云。殘賊ノ人ヲ一夫ト云。一夫ハ禽獸ニ等^{ヒト}シ。人面畜心ニシテ孝弟ニソムク者ニ言ヲ以スレトモ聞入ズ。礼ヲ以貴ベトモ不^レ可^キ。故ニ兵丈ハ禽獸ヲ治ルニ始リ、謀ハ強敵ヲ治スルニ發ル。只天下平カナラム事ヲ願ニアリ。故舜四凶ヲ討シ湯武桀ヲ治メ紂ヲ殺ス。孔子少正卯ヲ誅スルノ類^ヒミナ人面畜心ニシテ礼ヲ以不^レ可^キ。故ニ然ナリ。士ナケレハ三民手足ヲ置ニ所ナシ。故ニ士アリ。而モ士ハ今又四民ノ長タリ。一人ノ身ニシテ百工ノ事不^レ備上ニアル者ハ心ヲ勞シ、下ニアル者ハ力ヲ勞ス。或^ハ心ヲ勞シ、或^ハ力ヲ勞ス。心ヲ勞ス者ハ人ヲ治メ、力ヲ勞ス者ハ人ニ治メラル。人ニ治メラル者ハ人ヲ養ヒ、人ヲ治ル者ハ人ニ養ハル。天下ノ通義萬歲不易ノ良法ナリ。四民

月海居士ハ生ニ讃州ニ。父ハ安藤氏。肥後尚明入道道椿居士之男也。母小原氏自性禪尼産ニ子一。号ニ玄淨祖諫ト。兄弟同スルコト也。明道如ニ伊川一。弟諫幼ニ而出家形ヲ倚ニ禪門ニ。為ニ因州大隣禪寺ノ住持ト。長ト而転位号ニ藍雲和尚ト。徒衆多シ。説教二十年其功甚シ。不幸ニシテ早亡。其歳五十。兄玄淨ハ継ニ父ノ武一。十有五歳ニシテ出ニ江府ニ。奥州ニ下ル白川ノ太守本多氏仕ニ忠義郷忠平郷ニ。九年去テ又出ニ江府ニ。適ニ越前ニ。見ニ太守光通郷ニ。為ニ書記ノ史ト。依ニ主命ニ。自ニ記南木軍鑑三十卷ニ。居ルコト十年去テ行ニ勢州ニ。太守不能レ用ルコト。又帰ニ讃岐ニ。見ニ国子君一。為ニ賓師ト。義論又十年不レ通レ所ニ言。終ニ去テ出京ニ。和ニ書南木武経五卷ニ。其書意善ノ論。先生所ニシテ未レ謂而其功莫太也。周二天下ニ。其意論謂ニ孟子性善一。其才等ニ如レ合ニ符節ヲ。淨老テ不レ求レ仕ニ洛陽東山ニ逸民ト而記此書九卷ヲ。月海八々歳。元禄二己巳十月日。洛陽北山ノ隱士玄理齋敬書。印 印

楠木正成先生ハ智仁勇兼ニ備テ得ニ武門棟梁之誉ヲ。称ニ千人ノ英万人ノ傑ト。不審古今之士庶重ニ其賢ヲ。慕ニ其塵一。於レ茲古稀ノ老翁月海居士有ニ超拔ノ材一。承ニ從上ノ事一。所著書將謂法配術ノ三ツ謂ニ言一句語ニ須具ニ三合レシテ帰ス一。即ニ一ニ而三三三便チ一チ矣。然則ハ天得レ一ヲ以テ清ク。地得レ一ヲ以テ寧ク王侯得レ一ヲ以テ為ニ天下ノ貞ト。故ニ吾宗ニハ万法帰ス一。子ノ曰ク吾道ハ一以テ貫レリ之ヲ。神道ニハ曰ク唯一ト矣。然則ハ理也。蕩蕩乎而無ニ形名一。渺渺焉而絶ニ涯涘一。広シテ論レ之則有ニ万殊一。略シテ而叙レ之則不レ出ニ乎三。嗚呼。積也。儒也。神也。其三教如ニ鼎ノ足一。易矣。爰不レ可下一日無ニ中ニハアルスノ書上。偉矣。入ニ武門ニ之階梯領ニ軍兵一之惣要豈ニ不レ慶快。瞻レ之勉メハ之興シ家ヲ治メ国ヲ置ニ天下ヲ於泰山ノ之安一。超ニ古越レ今致ニ聖君ヲ於堯舜ノ之上ニ。寧ロ為ニ分外一平哉。

元禄四年歳在辛未臘月穀旦
黄檗末流沙門石泉澄謹序 印 印

一 太宗論ノ事

一 戰場出行ノ剋法度ノ事

卷第五配部ノ配

一 孫子五言ノ事

一 八陣ノ事

一 備人積ノ事

一 備ノ事

卷第六配部ノ術

一 八陣分数ノ事并馬印

一 虚実ヲ知ル事

一 行軍ノ事

卷第七術部ノ法

一 智仁勇ノ事

一 金鼓鈴旗貝狼煙夜ノ相図ノ事

一 鍵ノ事

一 続松ノ事

一 地雷ノ事

一 霧ノ卯ノ事

一 川渡ノ事

一 楯ノ事

一 水中透ノ事

一 小屋取ノ事

卷第八術部ノ配

一 夜戦ノ事

一 出行ノ事

一 軍役ノ事

一 玉藥兵糧積ノ事

卷第九術部ノ術

一 四徳ノ事

一 神儒仏勝劣ノ事

一 三徳三法三身ノ事

一 三帰依ノ事

一 三社ノ事

一 三種ノ神器ノ事

一 三法一如天徳ノ事

な史料としてさまざまな角度から分析されてきた。野村氏によれば、序・巻一〜一九のうち一部（巻一〜三、一一）が欠落しているという。しかし原本には、清文堂刊行の『河内屋可正旧記』に載せられていない部分があり、野村のいう欠落部分が現存している可能性もあり注目される。今回は諸般の事情により原本を利用できなかったが、次の機会には原本に依りたい。現在山中浩之氏が中心となつて『可正旧記』のマイクロ化と新たな解説作業が進められており、その進展に期待したい。

（3）拙著『「太平記読み」の時代』平凡社選書、一九九九。

（4）安丸良夫『日本の近代化と民衆思想』（青木書店、一九七四）。現在、平凡社ライブラリー所収。

（5）両書とも『理尽鈔』の影響を受けて一七世紀半ば頃までに作成されたと推定されるが、どこの誰が製作したか未詳である。この両書に『楠法令卷』『軍用秘術聴書』等を付加したのが『楠家伝七卷書』（寛文九年〜一六六九刊）であり、両書に『軍用秘術聴書』を付加したのが『楠知命抄』（延宝八年〜一六八〇刊）である。

（6）なお『南木軍鑑』については、今井正之助『「南木記」・『南木軍鑑』考——『理尽鈔』に拠る編著の生成——』（『日本文化論叢』二、愛知教育大学日本文化研究室、一九九四）参照。

二 翻刻『南木惣要』

翻刻・入力 小川和也
監修 若尾政希

南木総要

南木惣要目録

披雲閣蔵書

卷第一法部ノ法

- 一 洛陽北山隠士玄理齋ノ序
- 一 黄檗石泉和尚ノ序
- 一 自敵ヲ亡スノ論
- 一 士農工商起本ノ論
- 一 井田経界ノ事

卷第二法ノ配

- 一 庠序学校ノ事

卷第三法ノ術

- 一 学文小大内外一致ノ論

卷第四配部ノ法

- 一 城取小屋取行烈備ノ事
- 一 軍法常ナルノ事
- 一 王城ノ図

四〇に仕え、「書記の史」となり主命により『南木軍鑑』を書きあらわしたという。実は現在国立国会図書館に『南木軍鑑』が現存しており、しかもそれは福井藩藩校明道館の旧蔵書であり、(掃雲軒の名はないものの)掃雲軒の著作の可能性が高い。この『南木軍鑑』(一)を見ると、これは『理尽鈔』・『太平記』を抜き書きしたものであり、思想傾向からいっても掃雲軒の著作と見なすのが妥当であろう。光通に十年仕えた後、伊勢国に行くも、その「太守」(津藩主藤堂高次「慶長六〇一六〇一」延宝四「一六七六」であろうか)は掃雲軒を用いることができず生国讃岐に帰った掃雲軒は、高松藩松平家の「国子君」の賓師となったという。当時の高松藩藩主は松平頼重(元和八「一六二二」元禄八「一六九五」)であるから、その「国子君」とは後嗣の松平頼常(徳川光圀の子、承応元「一六五二」宝永元「一七〇四」)となる。頼常が藩主になるのは延宝元年(一六七三)であり、掃雲軒が頼常の賓師となるのはそれ以前ということになる。掃雲軒は「義論又十年、言ふ所に通ぜず」と、十年間講釈をするも入れられず、高松を離れ京都に出、『南木武経』を執筆したという。ちなみに『南木武経』の自序には、延宝九年(天和元、一六八一)五月の年記がある(この年、掃雲軒は五六歳)。ここから逆算すると、松平頼常に仕えたのは一六七〇年代「八〇年代初期の時期(四〇歳代半ばから五〇歳代半ば)、松平光通及び伊勢の太守に仕えたのが、六〇年代「七〇年代初期の時期(三〇歳代半ばから四〇歳代半ば)、本多忠義・忠平に仕えたのが、五〇年代「六〇年代初期の時期(二〇歳代半ばから三〇歳代半ば)」ということになる。この序が語る

ことが事実なら、掃雲軒は、『理尽鈔』にもとづく軍学を信奉してくれる主君を求め、生涯を通じ軍学を講じて大名家を渡り歩いたことになる。これが事実かどうか、それぞれの藩の史料から確かめていかねばならない。そして、もしこれが事実だとすれば、次に、大名たちは何を求めて掃雲軒を雇ったのか、掃雲軒は大名に何を説こうとしたのか、といった点を考察していかねばならない。今後の課題である。

本稿で翻刻・紹介する『南木惣要』は、『南木武経』が正成の書を解釈するという体裁をとっているのに対し、掃雲軒の軍学を体系的に示した書物である。『理尽鈔』を根本に据えてそこで提起される明君としての正成像を継承するとともに、同時に『孟子』等の儒学の文献も引用し、神儒仏一致の立場に立ち、軍学の奥義を説いていく。一七世紀後半の「太平記読み」享受のありようを示す、絶好の史料である。

なお、翻刻作業は一橋大学大学院博士課程の小川和也が担当し、若尾が監修した。本稿を連名にする所以である。翻刻に当たっては、通行の字体を用い、合字は「シテ」「コト」「トモ」と表記した。図はすべて省略した。

注

(1)『南木武経』大阪府立中之島図書館所蔵の寛政一二年(一八〇〇)版より引用。

(2)野村豊・由井喜太郎編『河内屋可正旧記』(清文堂、一九七〇再版)。一九五〇年可正の子孫宅にて発見され、五五年活字化して刊行されて以来、当代の民衆思想・文化を探る貴重

らず広がりがあるのか。またそもそも掃雲軒とは何者で、誰を対象にしてどういう意図で著作を書いたのであろうか。本稿は、こういった基礎的研究を推し進めるための準備作業として、掃雲軒の別著『南木惣要』を翻刻し紹介するものである（なお、『南木武経』は石岡久夫編『諸流兵法』（人物往来社、一九六七）に翻刻されている）。筆者はかつて、徳山藩毛利家の旧蔵書からなる山口大学附属図書館棲息堂文庫（棲息堂は徳山藩毛利家の読書室の名である。棲息堂文庫旧蔵書は、宮内庁書陵部と山口大学附属図書館に二分され、現存している）において、『月海居士』が著した『南木惣要』（写本、九卷三冊）を読んだことがある。そこに収められた「元禄二己巳十月日、洛陽北山隠士玄理斎敬書」の序に、月海の「父は安藤氏」であること、かつて「南木武経五卷」を著したことが書いてあり、ここからこの月海が安藤掃雲軒であることがわかった。くわえて、この序によれば、掃雲軒軍学を講じて歴々たる大名家（白河藩本多家・福井藩松平家・高松藩松平家等）を渡り歩いたというが、果たして本当だろうかという疑念を抱きながらも、それを確かめることなく月日を費やしてきた。

ところが、二〇〇二年三月二七日に香川県立歴史博物館に史料調査に赴き、高松藩松平家旧蔵の史料を閲覧しているときに、そこに『南木惣要』を見出した。この書物は、「披雲閣蔵書」印が押される藩主旧蔵書であり、先の玄理斎の序にも印が二つ押され、続く黄檗石泉和尚ノ序にも二つの印が押されている。また、この書物の末尾には、「此歳六十六、元禄四辛未極月謹而書」と、月海（掃雲軒）自身が記した跋文があり、その末尾

にやはり二つの印が押されており、ここからこの書物が月海（掃雲軒）の原本と推定されるのである。しかもその跋文には、「吾老て機を縦ほしにし意の適く所趙遥として讃州に帰る、国子君に通ず。君兵書を請ふ」と、「国子君」の要請に応じてこの書物を書いたと記してあり、高松藩松平家にこの書物が収められているのもつじつまがあう。とすると、高松藩松平家に仕えたという玄理斎の序で述べられていたことが、にわかに信憑性をおびてくる。他藩に仕えたという記述も、事実の可能性も出てきたのである。

さて、この玄理斎の序にもとづいて、掃雲軒の略歴を整理しておきたい。まず生年であるが、元禄四年（一六九一）に六六歳だというから、寛永三年（一六二六）であろうか。讃岐に生まれ、父は安藤肥後尚明入道、母は小原自性禅尼であり、二人兄弟の兄（名は玄浄）であった。弟の祖諫は幼くして出家し因幡国の大隣禅寺の住持となったが、五十歳にして亡くなった。他方掃雲軒は、父の武を継いで一五歳で江戸に出たという。一五歳といえば、寛永一七年（一六四〇）になろうか。その後、掃雲軒は奥州に下って白川（白河）藩主本多忠義・忠平に仕えたが、九年にして白河を去って江戸に戻ってきたという。ちなみに、本多忠義が越後村上から白河に転封されたのは、慶安二年（一六四九）であり、本多忠平が白河藩主を襲封したのは寛文二年（一六六二）である。両「太守」に仕えたという記述が事実だとすれば、少なくとも寛文二年までは本多家に仕えたということになろう。その後、やはり時期は分らないが、掃雲軒は福井藩主松平光通（寛永一三八一六三六）延宝二一六六七

に御世久しからずして亡び給ひたり。武有て文なきは皆如此しと也（巻一五「処世訓（三）」）

ここでも可正は、この語が『南木武経』からの引用であると言も述べていない。だが両者を比較すると、この可正の言葉が掃雲軒の受け売りであることがわかる。ここで可正がしたことは、「後代ノ主心得ベシ」という偉そうな一言——後にみるように掃雲軒は藩主相手に講義していたと推定される——を削除するなど、若干の字句の補訂に止まっている。可正はまた、領主と民との関係について、

太公天下の人を見る事皆我子のごとくす。人の母たる者、己が楽ミハ願はず、子ノ楽ミを見て則わがたのしみとす。大人の民を養ふ心も、人の親のごとし。天下の民したしむ事父母のごとくす（巻一八「処世訓（六）」）

と、述べる。実はこれも掃雲軒の『南木武経』（巻四「自悟之法」）からの引用である。可正も掃雲軒を受けて、領主——民関係を、——領主は民を子のように養い民は領主を父母のように親しむと——親子関係に擬し相互的なものとして捉えているのがわかる。

さらに可正は本稿の冒頭で見たように、天狗、化け物、生霊、死霊、地獄、極楽などを心の妄乱と見なしていたが、これも掃雲軒の見解を踏襲したものである。掃雲軒は自説を展開した上で締め括って次のようにいう。

万法疑イナキヲ物格ルト謂ナリ。物格レバ智アリ、智アレハ意ニ誠アリ。故ニ予力教ル所ノ兵法ハ狐疑ヲ決了シ、万法ニ嫌疑ナク、意ヲ誠ニスルヲ先トス。意誠アレバ心正

シ、身治リ国天下ヲ平ニス。是大人ノ兵法ナリ

掃雲軒は、万法の理を明らかにし呪術的なものに囚われなようにする工夫を『大学』の八条目（ただし齊家はない）に重ねて論じている。治国平天下の担い手たる「大人」（ここでは明らかに領主層を指す）はそのような工夫の階梯を経なければならぬという。掃雲軒は、『理尽鈔』の呪術論を承けて、呪術的なものに囚われない自己形成を自身の軍学の核心にしているといえよう。それに対し、可正は掃雲軒の文章を改変している。

諸法の理を明らめ、萬法に疑ひのなきを物格と云也。こといたれば智有。智あれば意に誠有。意にまことあれば心たゞしく成て身治り、家齊フ。是大人の行ひ也。貴むへし（傍線筆者、巻六「清兵衛老狐に魅せらる事」）

これをもともとの掃雲軒の主張とくらべてみよう。掃雲軒が呪術的なものに囚われない自己形成の階梯を述べて正心・修身・治国・平天下まであげていたのに対し、可正は正心・修身・齊家の段階でとどめ、治国・平天下にまで言及していない。可正のいう「大人」は、領主層ではなく治国・平天下を任とした民衆をさしているといえよう。可正は、意図的に字句を改変して、もともと政治論であったものを修身・齊家論に読みかえているのである。

このように安藤掃雲軒著『南木武経』は、可正の自己形成・思想形成にきわめて大きな影響を与えた書物である。ここで大きな疑問が生じる。すなわち、いったいこのような『南木武経』受容は、可正にだけ見られることなのか。あるいは可正に止ま

和漢ノ兵ト古今其名多シトイエ共、和朝ニ於テハ楠河内判官一人、其宗ヲ得タリ。知アル人ハ天下国家ヲモ均ク治メ、仁アル人ハ爵禄ヲモ辞シ、勇アル人ハ白刃ヲモ踏ム。三ツ之モノ具リ、進退存亡ヲ心得、其正シキヲ失ハサル人者、正成先生ナリシ。嗚呼時之不祥因テ、建武三年五月廿五日、兵庫湊川ニテ戦死ス。其年四十三。此書ヲ記シ幼息正行ニ付属シ、其身無キ跡マテ之道義ヲ伝フ（傍点筆者）

と、「正成先生」は戦死の前に「書」を記し息子正行に伝えた。その「書」が「幸ニシテ世ニ残」った。しかるに、「鹿学ノ士妄ニ是ヲ取ル事アレハ、過チ多カラシム事ヲ恐ル。故ニ愚和ヲ加ヘテ一助トス」と、この「書」を誤解する者が出ることを恐れて「愚」かな私が「和」を加えたという。本文をみると、たとえば、「序ニ智仁勇ト書シ事ノ（改行）和シテ曰、知ハ良知ヲ謂（後略）」と、正成が記した「書」を引き、それに解釈を付けている。このように掃雲軒は、正成の「書」と見なしているが、正成の作である確証はなく、偽作である。近世の初め、遅くとも慶長一五年（一六一〇）頃から『太平記評判秘伝理尽鈔』（『理尽鈔』）の講釈が領主層に流行し、一七世紀半ばにはこの書物が出版されると、『理尽鈔』もの、『太平記』もの、楠正成ものが、数多く作られ出版された。掃雲軒のいう正成の「書」もその一つであり、内容を分析すると、楠正成に仮託して作られた軍書『楠三卷書』『神道正授』と一致し、この両書を再編したものである。

掃雲軒は「正成先生」と呼び、先の自序の傍点部（「天下国家ヲモ均ク治メ」）からもわかるように、「兵」の「宗」家で

あるだけでなく理想的政治をも行う、政治と軍学にたけた理想的指導者としての正成像、すなわち『理尽鈔』が提起した新たな正成像を継承している。さらに掃雲軒は正成について次のように述べている。

新田義貞正成（二）問玉フ。正成ノ師誰ゾ。正成、義経ナリト答エラレタリ。義経聖門ニ入ラズ、仁義ノ経ヲ知ストイエトモ軍ハ勝テ上手ノ由、正成郎從ニモ常ハ語レリ。近世ニモ豊氏ノ秀吉義経似リ。勝ツ事ヲ知テ治ムルコトヲシラズ。後代ノ主心得ベシ。武有テ文ナキ将皆此ノ如シ。武ハ文ヨリ出、文ノ外ニ武ナシ

（巻四「船軍之事」、傍線筆者）

正成が義貞に向かって義経から兵法を学んだのだと語る件は、『理尽鈔』巻七にあり、それを踏まえたものであるが、傍線部以下は『理尽鈔』にはなく、掃雲軒が新たに増幅した正成像である。義経は「聖門」に入っていないので「仁義の道」は知らないけれども、きわめていくさ上手であると、正成が郎等に語っていたという。「仁義の道」とは、「治むる事」すなわち慈悲に基づく治国である。興味深いのは、この正成の言にしたがえば、「仁義の道」を知りつくした正成自身は「聖門」に入ったことになる。実は先の『可正旧記』にほぼ同様の一文を見つけることができる。次のごとくである。

楠正成公の云、源ノ義経卿は聖門に入ざれば仁義の道を知らざりしといへ共、軍は至て上手なりと、常々郎徒にも語り給ひけり。豊臣秀吉公の御身の上をかんがふるに、義経卿に似させられて、勝事を知て治むる事をしり給はず。故

若尾政希・小川和也

一 安藤掃雲軒とは何者か

若尾政希

安藤掃雲軒という名前を聞いてピンと来る人はあまりいないであろうが、彼の次のような口舌を聞くと、どこかで耳にしたように感じられるのではないか。

天地ノ間ニ有物ハ是非共ニ皆理アリ。此理ヲ知ル者ハ疑惑ハズ、心中安樂ナリ。愚者ハ知ラザル故ニ疑マドヒテ心中安カラズ。世愚ノ惑所ノ大方、地獄極樂ノ沙汰、天狗化物狐ノ人ヲ惑ハス沙汰、生霊死霊幽霊ノ沙汰、是皆世人ノ嫌疑スル所專ラ此ノ如シ。世愚ハ云ニタラズ、博学ノ俗儒、亦和尚上人ナド謂テ大寺ノ住持別当ナド名付テ導師スル人、大概疑アルコト数多シ（下略）

これは掃雲軒の著書『南木武経』(一)巻五「諸魔降伏之事」の一節である。『南木武経』なる書物を読んだことも見たこともないのに、どこかで見たという感覚を持つのはどうしてか。

実は、『河内屋可正旧記』(2)において河内屋可正が、「夫天地の間に有物は、皆是非共に理有、此理を明らかにしる者は、疑ひまどはずして心常に安樂なり。此理をしらざる故に疑ひまよひて心をくるしむる也。凡世愚のまどふ所は、天狗ばけ物狐の人をまどはす沙汰、生霊死霊の噂也。世愚は云にたらず、学文を勤め、和尚上人などいわれて、導師する人々の身にも、此

まどひにおぼるゝ人も有と聞えたり（下略）」云々と、述べている。可正自身はこれが『南木武経』からの引用であると言もいつていないが、両者を比べればあきらかなように、先の掃雲軒の語句をいわば下敷きにして子孫への教訓を垂れているのである（拙著『「太平記読み」の時代』(3)参照）。河内屋可正こと、壺井五兵衛（寛永一三〇一—一六三六）正徳三—一七一三）は、河内国石川郡大ヶ塚村（現、大阪府南河内郡河南町）で庄屋役を勤めた上層農民（大地主）であり、酒造業をも兼ねた商人でもあった。この可正が隠居後、元禄初年（一六八八）頃から宝永年間（一七一—）頃にかけて、子孫らへの教訓として書きためたのが『可正旧記』である。安丸良夫氏はこれを、「石門心学成立の背景をもっともよく理解させる史料」(4)と位置づけ、『家』の没落についての危機意識がよびおこす思想形成の方向」は石田梅岩と「おどろくほど類似」しており、可正の立場を「より徹底して一貫性と原理性を獲得すれば、梅岩の立場となるように思われる」と述べる。具体的には、可正が「天狗、ばけ物、生霊、死霊、地獄、極樂など」を「心の妄乱」と見なしたことを挙げて、『心』の哲学をおしすすめてすべての呪術を否定」する姿勢は、「梅岩、尊徳、幽学などの重要な主張の一つ」でもあったとし、梅岩らの唯心論的通俗道德形成の先駆として可正をとらえている。このように安丸氏が可正の呪術否定として特筆しているものこそ、もとを辿れば『南木武経』に由来するものである。

『南木武経』の巻頭に付された掃雲軒の自序（延宝九辛酉五月日安藤氏掃雲軒謹而書）によれば、

岡山藩池田家：仮養子一覧

(継政～茂政)

申請者	年月日	仮養子	年齢	関係
池田継政	享保 2.4.18	池田豊次郎 (政純)	1 7	実弟
	享保 4.4.18	池田豊次郎 (政純)	1 9	実弟
	享保 6.4.16	池田豊次郎 (政純)	2 1	実弟
	享保 8.3.16	池田豊次郎 (政純)	2 3	実弟
	享保 10.3.16	池田出羽守 (政純)	2 5	実弟
	享保 12.3.19	池田出羽守 (政純)	2 7	実弟
池田宗政	(なし)			
池田治政	明和 4.4.21	池田護之進 (長寛)	1 7	実弟
	明和 6.5.4	池田主税 (政喬)	3 0	叔父
	明和 8.5.4	池田主税 (政喬)	3 2	叔父
池田斉政	寛政 7.4.16	池田掃部助 (政芳)	1 9	実弟
	寛政 9.4	池田掃部助 (政芳)	2 1	実弟
池田斉敏	文政 12.4.19	奥平勇吉	1 6	
	天保 2.4.	奥平勇吉	1 8	
	天保 4.4.20	奥平吉之丞 (慶政)	1 5	
	天保 6.4.21	奥平七五郎 (慶政)	1 7	
	天保 8.5.1	奥平七五郎 (慶政)	1 9	
	天保 10.4.22	奥平七五郎 (慶政)	2 1	
	天保 12.4.19	奥平七五郎 (慶政)	2 3	
池田慶政	天保 14.6.4	山内主膳	1 9	養方従弟
	弘化 2.4.26	山内主膳	2 1	養方従弟
	弘化 4.4.20	池田英七郎	1 7	
	嘉永 2.④.15	池田英七郎	1 9	
	嘉永 4.4.22	池田英七郎	2 1	
	嘉永 6.4.21	池田鏘八郎	1 4	
	安政 2.1.28	池田鏘八郎	1 6	
	安政 4.4.27	池田鏘八郎	1 8	
池田茂政	文久 3.2.	池田日升丸	1 7	分家当主

* 「各公仮養子御書付類」「御仮養子御願御控」などより作成

- 29 「齊敏公御内存書控」《C三一―一五一》
- 30 同右
- 31 「雄国院様御病中より御逝去一件」《C五―二五一七―一／TCE―〇六一》
- 32 「豊前守様御女御養女ニ被成候一件」《C五―二一八七／TCA―〇六一》
- 33 「御願書並御届書等」《C六―二八九／TCF―〇〇八》
- 34 同右
- 35 「池田氏系譜」本系二《C一―一九／TCA―〇〇一》
- 36 「松平内蔵頭御仮養子御願書類」《C三一―一四五》
- 37 同右
- 38 同右
- 39 「慶政仮養子願書」《C三一―一四八》
- 40 同右
- 41 同右
- 42 同右
- 43 「文久三年 御仮養子御願御控」《*C三一―二〇五／YC
C―〇〇七》
- 44 拙稿「萩藩毛利家の相続事情」(『湘南国際女子短期大学
紀要』9号、二〇〇二年)

のだったのである。その観点からすれば、家督を継承した大名にとって、参勤交代の開始(初帰国)は、自らの意志で後継者を指名する第一段階であり、大名相続の上でも、きわめて大きな意味をもっていたといえよう。

このような大名相続の特質と仮養子のあり方との関係を明らかにしていくためには、池田家以外の大名についても、網羅的な史料収集と分析が不可欠であろう。今後の課題としたい。

- 1 中田薫「徳川時代の養子法」(『法制史論集』第一巻所収、四三三頁 岩波書店 一九二六年)。以下、養子に関する諸規定については同書を参照した。
- 2 『御触書寛保集成』七九四
- 3 注1に同じ
- 4 『鳶魚江戸文庫一六・大名生活の内秘』二五六頁(中央公論社 一九九七年)
- 5 「甲子夜話」卷三―三三(松浦静山『甲子夜話』第一巻、平凡社東洋文庫 一九七七年)
- 6 「各公御仮養子御書付類」《C三―一四五―一五一/YC C―〇〇一》
- 7 「松平伊予守覚書」《C三―一五〇》
- 8 「池田氏系譜」本系一《C―一八/TCA―〇〇一》。
- 9 「継政公御内存控」《C三―一四九》

- 10 「池田氏系譜」利政流系第一七《C―一二三/TCA―〇〇一》。ただし輝言は、病身のため鴨方池田家を相続することはなかった。

- 1 「継政公御内存書控」
- 2 同右
- 3 「公儀江御届留」二《A―一七八/TAA―一五六》
- 4 「治政公御内存書控」《C三―一四七》
- 5 「池田氏系譜」本系一
- 6 「治政公御内存書控」
- 7 『御触書寛保集成』九八七号
- 8 「治政公御内存書控」
- 9 中田前掲論文
- 20 注1に同じ
- 21 「池田氏系譜」本系一
- 22 「斉政公御内存書控」《C三―一四六》
- 23 注4に同じ
- 24 拙稿「江戸時代における仮養子と相続」(『湘南国際女子短期大学紀要』一一、二〇〇四年)
- 25 「継政公御内存書控」
- 26 拙稿「岡山藩池田家の相続事情」(大口勇次郎編『女の社会史』所収、山川出版社 二〇〇一年)
- 27 「池田氏系譜」本系一
- 28 「丈之助様婿養子御所望より御引移並築地御屋敷江御移徒迄之諸留」《C三―二四五/TCE―〇五三》

であつた。実は慶政には嘉永三年（一八五〇）に実子政実（鼎五郎）が誕生していたが⁴²、政実の丈夫届が正式に提出され、実子として位置づけられたのは安政六年正月である。この実子の公表により、慶政の仮養子願書提出は終止符をうった。

（四）茂政の仮養子願書

文久三年（一八六三）、幕末期の混乱の中で、慶政は水戸藩徳川斉昭の九男九郎麿（茂政）を養子に迎え、家督を譲って隠居した。この相続自体が極めて政治的な選択であつたことはさておき、ここで取り上げたいのは仮養子の問題である。この年の三月、茂政は將軍家茂の上洛に従つて上京するが、それに先立つて願書を提出した。次の史料はその控えである⁴³。

私儀、今度上京被 仰付、難有仕合奉存候、就夫私儀末男子無御座候間、末家池田日升丸儀、当亥十七歳ニ罷成申候間、若不慮之儀御座候者、養子ニ仕、跡式被下置候様奉願候、此後参府仕候節、此願書御返可被下候、恐惶謹言

松平 九郎麿

文久三癸亥年

二月

松平 豊前守殿
水野 和泉守殿
板倉 周防守殿
井上 河内守殿

史料中に日升丸とあるのは、岡山の家分大名である生坂池田家の当主政礼である。將軍の「上京」という非常事態の中での願書提出であつたが、幕末に至つてもなお、従前通りの仮養子形式が遵守されていることは注目してよいであろう。

むすびにかえて

以上、岡山藩池田家における「仮養子願書」の俯瞰を試みた。池田家の事例を見れば明らか通り、仮養子願書は、当主の初帰国から実子の誕生までの間、確實に提出され続けてきた。寛政期までは弟や叔父などいわず家内の男子の指名が可能であり、仮養子手続きは安定的な相続を補完するものとして意識されている。しかし十九世紀に至ると、仮養子による制約が藩の思惑を越え、血筋の存続を脅かしかねない事態を生むことにもなつた。これも、仮養子が内包する不可避的な側面とみることでできよう。その意味でも近世の仮養子制度については、単に形骸化した手続きとしてではなく、大名相続との具体的なかわりを踏まえた上で、その機能を説明すべき問題と考える。

確かに仮養子の有効性は、当主の江戸不在中のみという期限付きである。しかしその一方で、仮養子の指名は当主の実子以外の男子について後継順位を明確化し表明する手続きでもあつた⁴⁴。ことに近世中期以降、血筋による継承が困難になると、家の存続や血統に対する意識は多様化し、相続の上にもさまざまな思惑と判断が入り込むことになる。そのような中での仮養子指名は、結果的に大名家の相続問題に微妙な影響を及ぼすだけでなく、後継問題を一層複雑化・煩雑化させる要因になるも

徳様よりは其砌先御挨拶被成置候処、此節壹岐守様(頼之)より右之通御挨拶被仰進候付、御二方様よりも御同様二被仰進候

二月廿一日

御使者
神瀬 伝左衛門

この時、相良家の先代頼之、先々代頼徳はまだ健在であり、右は、満次郎の実父頼之(壹岐守)からの口上となっている。相良家側は、池田家の格式に配慮すれば本来「御断」すべきであるとしながらも、池田家の血統に配慮し、申し入れを受け入れる姿勢を示した。しかし天保十四年段階の満次郎は、相良家にとつても大切な「御扣」であつた。そのため、直ちに慶政の仮養子として指名することは困難であり、他に候補者を求めなければならなかつた。

そこで池田家では、次善の候補として斉政の娘豊子の婚姻先である土佐高知藩の山内豊資の次男豊矩(内膳)を仮養子に依頼した³。豊矩は斉政の外孫であり、慶政にとつては「養方従弟」の続きとなる。山内家との交渉の結果、了解を得た慶政は、天保十四年、山内豊矩を仮養子として指名した。しかし六年後には、「故障之儀ニ付断申候」とあるように山内家側からの断りがあり⁴、豊矩の仮養子指名も二回で終わっている。

結局、弘化四年(一八四七)以降、慶政は池田一族の旗本の男子を仮養子に選ぶようになった。仮養子に指名されたのは、池田甲斐守の弟英七郎である。池田甲斐守家は、幕初の池田輝政の弟長吉の五男長賢の流れをくむ家で、七千石の旗本であつた。

当該家は、池田姓を名乗る同族末家であるが、分家後は岡山本家との縁戚関係もなく、仮養子指名の根拠は、あくまで「末家之儀」であつた⁴。

しかしこの英七郎の仮養子指名も、嘉永四年までの三回である。これは英七郎が、別の池田一族の旗本池田筑後守家の養子となつたためであり、本家の仮養子は英七郎の弟鏑八郎に替わつた⁴。

私(慶政)儀、実子無御座候付、在国中は迄御小性組御番頭池田甲斐守弟同姓英七郎儀、仮養子ニ奉願候処、同人儀大目付池田筑後守養子罷成候、依之猶又池田甲斐守弟同姓鏑八郎儀末家之儀ニ御座候間、仮養子奉願候儀御座候、以上

慶政の仮養子候補の順位をみれば明かなように、岡山池田家の拘りは、何よりも池田家の血筋にあつた。まず第一が男系の血統を優先した相良満次郎であり、第二が女系ながらも血縁を見いださうる山内家の男子であつた。そして同姓一門からの仮養子指名は、その次の選択だったことになる。すなわち斉政の場合とは異なり、当主慶政の血縁・縁戚を軸とした仮養子指名はなされなかつたのである。

なお、池田家が切望した相良満次郎は、弘化四年(一八四七)に岡山藩の分家大名鴨方池田家の養子となり、池田政詮として鴨方池田家を相続していた。この政詮は、明治元年(一八六八)、本家の池田茂政の養子として本家を引き継ぐ章政である。

さて、池田慶政の仮養子願書提出は、安政四年(一八五七)ま

表されることになったのである³⁴。

(三) 慶政の仮養子候補順位

仮養子から急養子として池田家の当主に迎えられた慶政は、天保十三年五月二十九日に正式に幕府から遺領継承を認められたが、慶政もまた、仮養子問題では池田家の血統に配慮しなければならなかった。

当初池田家では、血縁のある相良満次郎(章政)を仮養子候補に求めた。満次郎は池田家から相良家の養子に入った護之進(長寛)直系の曾孫にあたり、斉政の従兄弟の孫である。当時の池田家からみれば、満次郎は「御血統御連綿」の数少ない男子であつた。従つて池田家では相良満次郎を有力な候補とみなし、相良家へ次のように申し入れた³⁵。

御口上之覚

内蔵頭(慶政)様御儀、明年御暇被 仰出御帰国ニ相成候得者、御在國中御仮養子御願可被成、其御家様之御儀者興国院(長寛)様御血統御連綿被為在候御事故、満次郎様御儀、御仮養子ニ御所望も被成度候処、いままた御幼稚、其上當時者遠江守(長福)様御在邑中御仮養子ニ被為成候との御事ニ候得者、旁以無御抛、此砌之处者外様へ御頼も可被成候得とも、右之通池田家正敷御血統ニも被為在候御事、追々 満次郎様御成長、且者遠江守様御仮養子御不用之御時節ニ至候上者、必 内蔵頭様御仮養子ニ御所望被成度、依而者今暫 満次郎様他へ御養子ニ被進候儀者何卒御用捨

御座候様被成度、若又外方より御所望も御座候節者、御内談以前当御方へ先御打合御座候様被成度、其節時宜ニ寄猶被仰談候御儀も可有御座、何分ニも 満次郎様、他へ御養子之儀者御見合被進候様、厚御頼 思食候、此段御内使者を以被仰進候

これは、十月十一日付をもつて相良家側へ申し入れられた内容である。趣旨は、池田家の「血統」である相良家の次男満次郎を仮養子に求めたものであつた。ただしこの時点では、満次郎はまだ幼少であり、加えて相良家の当主である兄長福の仮養子として位置づけられていた。しかし、池田家の思い入れは強く、将来満次郎の指名が可能となつた暁には、是非とも仮養子として指名したいこと、また他から養子要請があつた場合も、事前に相談して欲しいこと、などを要望した。

これに対する相良家の返答は、次の通りである³⁶。

内蔵頭様江忝岐守様より之御口上

(前略) 旧冬御内御使者を以委細被 仰進候趣、於御在所被成御承知、先以興国院(長寛)様御血統被 思召、御懇談被 仰進、誠に厚忝思召候、右者 御大家様之御儀ニ御座候得者、御断茂可被仰進候得共、何分御血統被為在候儀を被 思召被 仰進候儀ニ付、不被得止事、無御遠慮御相談之通御任せ被進候、勿論内蔵頭様 御男子様被遊、御出生候迄之御儀与思召候間、右御挨拶御礼旁、御内使者を以被仰進候、此段被仰付越候、遠江守(長福)様・志摩守(頼

奥平家の男子を仮養子に指名することになった。文政十二年の仮養子願書の本文は左記の通りである²⁹。

私(斉敏)儀、今度御暇被下置国元江発足仕候、依之奥平大膳太夫(昌暢)弟奥平勇吉(昌猷)儀、当年十六歳罷成申候、兼而由緒茂御座候間、若不慮之儀御座候者、此者養子二仕、跡式被下置候様奉願候、来年参府仕候節、此願書御返可被下候、恐惶謹言

書式・手続きとも従前と変わるところはなかったが、「兼而由緒茂御座候」というのは、あくまでも島津家を通じた縁戚であり、池田家との間には直接的な関係はなかった。

奥平家からの仮養子指名は、天保十二年(一八四一)まで続いた。ただしはじめ仮養子に指名した勇吉(昌猷)は、「同人義同家相続仕候」とあるように³⁰、間もなく兄昌暢の跡を継いで奥平家の当主となった。従って新たな仮養子指名が必要となるが、池田家では引き続き昌猷の弟吉之丞(七五郎)を仮養子に願うことになった。

恐らく池田家の心積もりとしては、斉政の娘である金子と婿養子となった斉敏との間に男子が出生することを期待していたものと推測される。従って奥平家男子の仮養子指名は、池田家の血筋の男子誕生までの一時的な仮指名であり、正しく「仮養子」のはずであった。

しかし、天保十三年の斉敏の急死は、池田家に血統上の重大な問題突きつけることとなる。天保十三年の正月晦日、当主

斉敏は国元で死去した³¹。前年の四月、帰国を前に老中に預けた斉敏の仮養子願書中では、万一の場合の後継者として奥平七五郎(慶政)が指名されていた。仮養子指名が七五郎である以上、もはや他者の急養子出願は困難であったが、問題は七五郎が池田家にとって無縁の男子であった点である。

そこで池田家では、斉敏死亡を秘匿して「殿様御不例」の体を装い、血統を維持するための工作を行った。その手だてとは、分家大名にあたる鴨方池田家の娘宇多子を斉敏の養女とし、その上で奥平七五郎を婿養子に迎えようという目論見である。池田家にとつて血統の問題は大きく、血筋の存続に望みを託そうとしたものと推測される。そして天保十三年三月十八日に、当主斉政の名をもってまず宇多子を養女とする旨の届け出がなされ³²、その上で急養子願書が提出された³³。

私(斉敏)儀、於国許寅正月下旬より癩之症ニ而相勝不申候付、手医師共薬致服用段々療養仕候得共、逆上眩暈強塞等有之、追々疲労相増病氣指重、本復可仕躰無御座候、然ル処未男子無御座候付、若死去仕候者、去丑年四月御暇被下候御奉願置候通、奥平七五郎(慶政)儀、由緒之者二付、私養女ニ取合婿養子被 仰付、跡式無相違被下置候様奉願候、已上

この急養子願書は三月二十九日付であるが、提出書類は斉敏の名をもって提出・受理されなければならなかった。結局、斉敏の死亡は、すべての手続きが完了した後、四月二日として公

三 池田家の異姓養子

(一) 斉政の婿養子選択

斉政が仮養子願書を提出したのは、寛政年間の二回のみであったが、文政期に至ると池田家は後継者確保に苦慮することになる。斉政以降、斉敏、慶政三代の後継問題については、かつて別稿で論じたところであるが²⁶、ここでは仮養子を軸にもう一度見直してみよう。

池田斉政は、文政二年（一八一九）年、二十三歳になった嫡子斉輝を失い、また文政三年には五歳になったばかりの嫡孫本之丞にも先立たれた。この時、斉政は四十八歳になっており、直系の男子を失った斉政は、もはや仮養子ではなく、正式な養子申請の必要に迫られることになる。

はじめに養子候補にあげられたのは、弟政芳の長男で、甥にあたる斉成であった。しかしこの時、斉成はすでに旗本の神尾家に養子として入っていた。そのため池田家では、内々で神尾家の了承を取り付け、斉成を呼び戻した²⁷。そして文政四年の三月、改めて娘金子の婿養子として正式に後継者とする手続きをとった。

しかし、この斉成も五年後の文政九年（一八二六）八月に急死し、池田家でははじめて異姓養子を迎えなければならない事態に立ち至った。すでに五十四歳になっていた斉政にとって、養子取組は急務であり、結局、娘金子の再婚相手として鹿児島藩島津斉興の次男丈之助（斉敏）を養嗣子に迎えることになった。これが七代目の当主となる池田斉敏である。

私（斉政）儀、当戊五十四歳罷成申候、養子紀伊守（斉成）病死仕、外二男子無御座候二付、松平豊後守（島津斉興）二男島津丈之助（斉敏）義、当戊十六歳罷成、兼而由緒茂有之、娘江取合之年頃茂相応之儀二付、此度婿養子仕度奉存候、尤当時同姓異姓親類遠類之内相応之者無御座候間、右丈之助義婿養子仕度、此段奉願候、已上²⁸。

ただし、斉政と島津丈之助（斉敏）とは直接の血縁があるわけではなく、斉敏は鳥取池田家から迎えた斉政の妻の又甥であった。しかし同姓中に養子適格者を見いだせなかった池田家では、そのわずかな縁を「由緒」として、斉敏を婿養子に迎えた。

そして養子手続きから三年後の文政十二年、五十七歳となった斉政は病氣を理由に隠居し、十九歳の斉敏に家督を譲った。

(二) 斉敏の仮養子

斉敏は池田家にとって初めての異姓養子による当主であったが、もうひとつの問題は仮養子の指名である。もはや同姓中から後継者を選ぶことが困難になっていた池田家では、結局、斉敏の血縁に頼らざるをえなかった。そこで指名されたのが、豊前中津藩奥平家の男子である。当時、豊前中津藩の当主は奥平昌暢であったが、先々代の当主奥平昌高は島津重豪の次男である。従って昌高の息子達（昌暢、昌猷、慶政ら）はいずれも斉敏の父島津斉興の従兄弟にあたる男子であった。

池田家を相続した斉敏は、結局文政十二年（一八二九）以降、

るものであったが、右の文言からすれば、一度仮養子に指名した者を変更するには、相応の理由が必要であったことが窺えるであろう¹⁹。この点は中田氏が指摘されているところでもあるが²⁰、仮養子変更の理由明示は、後述する慶政の事例でも確認しうるところであった。

さて、池田治政に初めて男子が誕生するのは安永元年（一七七二）十月のことである。しかし治政は、この庶出の長子鉄三郎を幕府へ届けなかった。治政が長男として届けたのは、翌年の四月に誕生した嫡出子斉政である²¹。この届け出により斉政は嫡子として位置づけられ、治政の仮養子願書はこれ以後、提出無用となった。

（四）仮養子願書の扱い

治政は寛政六年（一七九四）に致仕し、二十二歳の嫡子斉政が家督を相続した。池田斉政が初帰国を許されたのは、襲封の翌年、寛政七年（一七九五）であったが、斉政の場合も寛政九年十一月に嫡子斉輝が誕生するまでの二回、実弟政芳を仮養子指名することになる。

ただし興味深いのは、寛政七年の仮養子願書の付帯文書であろう²²。これは、仮養子願書を月番老中に提出した時の模様を窺いうる史料である。

今般御暇被 仰出、近々御発駕被遊候二付、今（四月）十六日、御用番太田備中守（資愛）殿御登 城前御出御逢、御機嫌御伺相済、其次二御仮養子御願書被差出候処、御請取被

成、小刀二而御封御切、与得御一覽之上御受取、来年目出度御返可被成旨御挨拶有之、相済

右御願書、別紙御扣之通御代筆長崎吉郎相認、認方別紙之通、御書判・御名乗御直二被遊、御封し二御印被遊、糊付二而御懷中被遊候而御出被成候也

仮養子願書を提出された月番老中太田資愛は、その場で封を切り、内容を確認した上で受理した。かつて三田村鳶魚氏は、月番老中に預け置かれた仮養子願書の扱いについて「老中の方でも、決して開封しないのが例で、本人が無事に出席するまで保管された」と指摘されている²³。しかしこの寛政七年の事例を見る限りでは、太田資愛はその場で確認した上で受け取っており、必ずしも未開封のままとは限らなかった。また、仮養子申請にあたって大名側は事前に老中の指示を仰ぎ、あらかじめ申請内容の是非を確認することが常道になっていたものと推測され²⁴、たとえ未開封であったとしても、老中は内容を知らないわけではなかった。

また享保期の事例では、当初「水野和泉守・松平左近将監・松平伊賀守」宛の願書を作成したところ、幕府側の指示により、翌日には「戸田山城守」を加えて願書の書き換えを行うことになった²⁵。その意味では仮養子願書は、大名の単なる心覚えではなく、公的権威に裏付けられ、書式や文言なども厳密さを求められる願書であったといえよう。

加えて自筆を原則とする仮養子願書であるが、この点も一考を要するところかも知れない。

後継者とされた。そして正当な跡継ぎを得た継政は、もはや帰国時に仮養子を指名する必要はなくなったのである。

さて四代目の宗政は、三代目の継政の隠居によって宝暦二年（一七五二）に池田家を相続するが、この時すでに嫡男が誕生していた。寛延三年（一七五〇）生まれの治政である。従って宗政は宝暦三年以降、国許へ帰国するようになるが、結局、一度も仮養子願書を提出することはなかったのである。

しかし宗政は、明和元年（一七六四）に四十歳（実年齢三十八歳）で死去した。治政は宗政の跡を継いで五代目当主となるが、この時はまだ十四歳であった。治政の初帰国は、三年後の明和四年である。この時点で治政が仮養子に指名したのは、実弟の護之進（長寛）であり、提出先は老中阿部正右であった¹⁴。

もともと次の明和六年には、弟護之進は肥後人吉藩相良家の養子となっており、相良家を相続していた。従ってもはや護之進を池田家の仮養子に指名することはできず¹⁵、治政は新たな候補として父宗政の弟で、叔父にあたる政喬を指名した。しかし政喬は治政よりも年長であったことから、願書の文言は通例の仮養子願書とは異なっていた¹⁶。

私（治政）儀、今度御暇被下置国元江発足仕候所、未男子無御座候、若不慮之儀御座候者、私父方之伯父池田主税（政喬）、当年三拾歳ニ罷成、国元ニ差置申候、此者江相続被仰付、跡式被下置候様ニ奉願候、来年参府仕候節、此願書御返被成可被下候、恐惶謹言

つまり「養子」ではなく、「相続」という形で、万一の場合の後継者を指名する形がとられたのである。これは、享保五年（一七二〇）の幕府法令に基づくものであった¹⁷。

前々は急養子仮養子等ハ、年増之者をも相願候得共、向後年増之養子願ハ成かたき事候間、頭々支配々え此段寄々可被申伝候

この法令の趣旨が年長者への相続を否定したものでないことは、「相続」という文言での願書を受理していることから明白であろう。ただしこの法令からすれば、この時点まで年長者を「急養子」や「仮養子」とする場合があったことになる。従って年齢の上で「仮養子」が明確に年少者とされたのは享保期以降であり、年長者については「相続」として明確に区別されることになった。そのためこれ以後は、年長者を「仮養子」として申請した場合、幕府側からは書き替えが命じられるようになったのである。

ところで、池田家からは明和六年の仮相続願書に添えて次のような文書が提出されている¹⁸。

去々亥年、国元江御暇被下置候節、私弟池田護之進義、仮養子奉願置候処、同人義、外江養子被指遣候付、此度池田主税義、初而奉願候、以上

仮養子指名の本来的な有効期限は当主の江戸不在中に限られ

翌享保二年（一七一七）十二月九日、政倚は正式に養子手続きをとり、輝言を鴨方池田家の正式の後継者に位置づけることになったのである¹⁾。

ところで、この池田政倚の仮養子願書の写しが、岡山本家の仮養子関係書類の中に残されていることについては、次の記載がその事情を物語っている。

享保二年酉四月十八日、御帰国前二付、御月番久世大和守（重之）殿へ御持参之御書付相調候節、為御見合、池田匠守頭様去春御暇之節御差出被遊候御書付写、御貸り被遊直御留置被遊候御一通、此内有

（傍点引用者、以下同）

池田本家では享保二年（一七一七）、当主の池田継政の初帰国にあたり、仮養子願書を提出しなければならなくなった。その願書作成のための参考とされたのが、前年に提出された政倚の願書であり、この写しは継政仮養子願書の関連文書として一括されることになったものであった。

（三）継政く治政の仮養子願書

継政は、正徳四年（一七一四）に十五歳（実年齢十三歳）で襲封し、三年後の享保二年にはじめて当主として国許に戻った。

私（継政）儀、今度御暇被下置国元江発足仕候、依之若不慮之儀御座候者、手前罷在候弟豊次郎、当年十七歳罷成候間、養子仕跡式被下置候様奉願候、来年参府仕候節、此願書御

返被成可被下候、恐惶謹言

享保二年

酉四月十八日

松平 大炊頭

継政（花押）

土屋 相模守様

井上 河内守様

阿部 豊後守様

久世 大和守様

戸田 山城守様

右は、典型的な書式の仮養子願書であり、①当主の帰国、②弟豊次郎政純（十七歳、実年齢十二歳）の仮養子指名、③万一の場合の相続許可願い、④参府時の願書返却依頼など、概ね先の政倚の出願内容を踏襲するものであった¹⁾。

この段階でもっとも継政に近い血筋の男子は実弟の政純であり、仮養子候補としては彼を置いて他にはなかった。この願書は、帰国前の享保二年四月十八日付で作成され、月番老中の久世重之に預けられ、翌年、池田家に返却された。

その後、引き続いて享保四年、六年、八年、十年、十二年と、都合六回にわたって弟政純が仮養子に指名された。文言はほぼ同じだが、享保六年以降は「家老二仕国元ニ差置申候」とされ、国家老としての政純の立場が明記されることになった²⁾。

享保十二年六月二十四日、継政は嫡子宗政の誕生を、即日幕府へ届け出た³⁾。嫡出長男の場合、出生届は同時に跡継ぎとしての表明を意味しており、宗政はこの手続きと同時に、正規の

を持つものであったといえよう。

覚書

当年廿二歳被成候

倅主膳義、從幼少病者、以只今養生仕候仕合ニ付、次男正

当年六歳被成候

千代丸未幼稚ニ御座候得共、生得無病二年來之恰好ニ成長仕候間、私不慮之義御座候ハ、正千代丸ニ家督相統之段奉願候、以上

元禄十四年

四月十八日

松平伊予守（花押）

この時、池田綱政には三名の男子があつたが、いずれも庶出であり、一人は誕生直後であつた。年長の軌隆（主膳）は二十二歳になつていたが、病弱であつたため、綱政としてはまだ六歳になつたばかりの正千代丸（政順）を後継者とするつもりであつた。しかしそのためには、正式に嫡子届を提出しなければならぬ。当該史料は、嫡子届提出前の意思表示として、老中に託されたものであろう。

三年後の宝永元年（一七〇四）、綱政は政順の嫡子届を出し、正式に跡継ぎとして位置づけることになる。

（二）池田政倚の先例

「各公御仮養子御書付類」中で、本来の「仮養子願書」形式で書かれたもつとも古い願書は、正徳六年（一七一六）のものである。ただし当該史料は岡山本家の当主の願書ではなく、鴨方

分家・池田政倚の仮養子願の写しであつた。

政倚は、正徳四年九月に実子政含に先立たれ、当面の後継者を失い、仮養子願書の提出が必要となつた。当時の池田本家の当主は、池田継政（大炊頭）である。

私（政倚）儀、今度御暇被下置在所江発足仕候、依之実子無御座候間、若不慮之儀御座候者、松平大炊頭（継政）兄病身ニ而罷在候池田主膳（軌隆）倅龜次郎（輝言）与申者、当年九歳罷成、大炊頭国元罷在候、私為從弟之子ニ而御座候、養子仕度奉願候、其外親族之内相応之者無御座候、來年參府仕候節者、此願書御返被成可被下候、恐惶謹言

正徳六年

申四月十八日

池田 内匠頭

名乗書判

土 相模守様
井 河内守様
阿 豊後守様
久 大和守様
戸 山城守様

（括弧内引用者、以下同）

右にみる通り、仮養子願書は①当主の帰国、②実子の不在、③從弟違いの龜次郎（輝言、九歳）の仮養子指名、④龜次郎の所在（岡山）、⑤參府時の願書返却依頼、などを内容とするものであつた。

政倚が仮養子願書を提出したのは、この正徳六年のみである。

芳の立場はその典型的な事例であろう。

その意味では、仮養子指名は、江戸不在中を有効とする期限付き願書であること、また実子や正式養子など恒久的な後継資格をもつ者が現れれば資格を喪失するものであること、などからすれば確かに不安定な指名にすぎなかった。そのためであるうか、仮養子問題はこれまで、真正面から取りあげられることはほとんどなかった。加えて、三田村鳶魚氏が指摘されたように、肥前松浦藩の藩主であった松浦静山の随筆「甲子夜話」中の一項も、仮養子に対する位置づけを曖昧にする一因であったと推測される。

予が親類の一侯、在所に往くとして、亡父の時、其弟の末家を継せたるを仮養子に願置て立しが、間もなく在所に於て没したり。定て家頼杯の所為か、仮養子の願書を申下して、別人を願替て、没後に某氏養子となり、養父の忌服を受たり。然ば仮養子の願書は自筆調印の例なるが、印は人も押すべし。自筆は誰が書せしにや。近來の新事と云べし。

つまり、静山の縁戚大名が仮養子願書を預けて帰国したが、国元で死去した。家臣らはその事実を隠し、当主本人の名・判による「仮養子願替」を捏造して幕府の許可を得た。そしてその上で当主の死亡を公表し、願替による新たな候補を当主に迎えることに成功したというのである。

確かに仮養子をめぐり、右のような不正工作がなかったわけではなからう。しかしこの件は、仮養子願書を偽造しなければ

正当性を主張できなかったことの裏返しであり、それだけ仮養子願書は、当主本人の意志の反映として重視されていたともいえよう。

仮養子願書の出願・返却の反復は、一見形骸化した手続きのように思われがちである。しかし万一にも不測の事態に至れば、仮養子指名を覆して他者を後継者とすることは困難である。その意味でも、大名相続における仮養子指名は軽視できるものではなく、慎重にならざるをえない手続きであった。

二 岡山藩池田家の仮養子

池田家の当主による仮養子願書の過半は、「故御廟 各公御仮養子御書付類」。との注記のある一箱に収納・保管されている。箱中には元禄十四年（一七〇一）の二代目池田綱政の「覚書」を含め、以下三代目継政から八代目慶政までの仮養子関係書類が含まれている。この他にも、斉敏・慶政・茂政などの仮養子関係文書があるが、斉敏・慶政関係は箱内の史料と重複している。従って茂政分を補足すれば、岡山池田家の仮養子の出願状況は、ほぼ把握可能である（稿末の付表参照）。

（一）綱政「覚書」

まず、元禄十四年の池田綱政の「覚書」から確認しておきたい。この「覚書」は、綱政に庶出の男子がすでに存在するという点で、いわゆる「仮養子願書」とは異なる。しかし国許へ帰国するにあたって、幕府老中秋元正喬に対して後継候補に関する心積もりを託していることからすれば、仮養子同様の性格

大名家における「仮養子」史料

大森 映子

はじめに

江戸時代の大名や旗本は、帰国や公務によって江戸を離れる際、仮養子を指名しておくことを慣例とした¹⁾。仮養子とは、後継者未確定の者が、不測の事態に備えて「仮」の後継者指名をする手続きのことであり、いわゆる末期養子(急養子)の問題と深く関わるものであった。

慶安四年(一六五二)、幕府の末期養子公認により、後継者不在の大名であっても、臨終間際の病床から急養子を申請して家の継承を願うことが可能となった。しかし、その手続きの過程では幕府役人の立ち会い、いわゆる「判元見届」が義務づけられており、急養子申請にあたっては「実子無之面々、急病之節養子願之義、判元、壹万石以上は大目付衆、壹万石以下頭無之衆は御目付衆、見被申答候」²⁾とあるように、大名の場合であれば、通例大目付の立ち会いを求めることになる。しかし帰国中や往來の途次において不測の事態が発生すれば、実際問題として幕府役人の立ち会いは不可能であり、判元見届の手続きをとりうるのは、在府中のみであった。

仮養子申請は、いわばこのような江戸不在中の代替措置であった。中田薫氏が「出願者が国許又は旅行先で死亡した場合に、急養子願出と同一の効果を生じた」としているのも、こ

の点を指摘したものである。

以下本稿では、岡山藩池田家の仮養子関係史料の紹介を軸としながら、大名相続における「仮養子」の意味について若干の検討を試みることにしたい。

一 「仮養子願書」の性格

仮養子願書(当分養子願書)は自筆を原則とし、署名書判の上、老中連名宛の文書として作成される。願書は江戸発足前に月番老中に提出され、その手許に保管された。預け置かれた願書は、翌年の参府と同時に老中側から返却される。そのため仮養子願書の本紙は、控えや写し、あるいは老中からの添書などとともに、大名家史料中に残されるのが本来の形であった。

もともと仮養子願書は、当主の江戸不在期間中のみを有効とする願書である。それも出願者の身に不測の事態が発生した場合に効力を発揮するものであり、返却とともに失効した。従って再び江戸を離れる際には、改めて願書を提出し直さなければならぬ。隔年で国許と江戸を往復する大名の場合、実子の誕生、あるいは正式の養子取組の成立などにより後継者が確定するまでの間は、一年おきの仮養子願書提出と、翌年の参府時返却とが繰り返される。もちろん駿河城番、大坂加番などの出向時も、仮養子手続きは不可欠であった。

その一方で、いかに仮養子に指名されようとも、最終的に相続に関わるか否かは別問題であった。事実、何度か仮養子として名を挙げられながらも、結局部屋住のまま終わる事例も少なくなかった。後述する池田家においても、当主池田斉政の弟政

候哉、扱々無心元とも心底難申尽事二候へば、此段能々御
思慮可被成事、家考老カ中も能々考可有之儀と被仰聞候、

則一昨年極月十四日其方へ当年中も御病氣弥御勝不被成候
ハ、来年之御参勤御断、直御隠居二而も可被成哉と申進候
得とも、是者至極御大切ニ存候所より度々大崎より御帰之
義を申候所、其方中々難成趣と申候故、已後御恨を得申二
も不顧、当然之急事御許容御事整候様ニ申進置候、勿論一
昨年偽右之通申進候二而も無御座、至極無御余儀右之趣之
御病氣ニ候得者、則御隠居も成候得共、只今者先御快所、
来年御氣色を只今より申儀ゆへ、何とも如何鋪、ケ様之儀
ハ何程只今とやかく申候而も、拙者など夢ニも存候分ニて
ハ相濟不申候、第一御病氣被仰立候事、少ニ而も喰違候御
沙汰なとニ成申候而ハ、以之外之御大切至極ゆへ、何とそ
／＼来春例之通是非御参勤ニ成候而、明後年御暇已後御願
被成候へハ、第一茂宗政十郎殿十七ニ御成候ゆへ、万端御丈夫、
御家御長久と申ものニ存候故、別而左様被成候様ニ申入度
候得ども、一昨年当分之急事ニ付、不得止申入置候趣も御
座候故、御無用と御留ハ得不申候へとも、御国より御願之
趣ニ付被仰立、少ニ而も喰違有之候得ハ、隠目付より忽相
聞、又

御不審附申節者、一昨年御離縁砌之御大難曇り晴、又ハ大
崎ニ而之虚名御請ニ成候事申披、

御不審はれ居申事迄却而御不審附候様ニ成申候ハ、第一
大名之参勤断と申儀御制法之内ニ而、是より重キ事無之、
天下之御静謐も是ニ而御（徳川宗春）ベリニ成居申候所、第一当時ハ尾
張殿御事ニて考合候而者、少ニ而も被

仰立喰違申候ハ御国替之様成儀ニ而者無御座、御大切出来

【指南書Ⅱ】（元文四年二月二十六日、西尾忠尚↓大久保岡右衛門）

覺

一、当冬より御機嫌之御様躰、至而御難儀なる儀、御家中二而茂奉存様ニ可被成事、

（元文五年）
一、申之春ニ至候而ハ、猶以御家中二而も御機嫌之程奉氣遣様に無之候而ハ不相濟事、

一、右御病氣之趣流布仕候上、御參勤之比御眩暈以外強ク、其上至極無御拋御病二而、御乗輿・御歩行共曾而御叶難被成趣ニ付、御養生被遊、御快次第二 御発駕被成度由、先御断、

一、右御断、度々入可申候、

一、其砌、上方之医師御呼迎、其後江戸御医師をも御願被成、御国江御呼、何茂至極無御拋御病氣、中々長途之御旅行成申御様躰ニ無之と申儀、何も無御余儀存候様ニ可被成事、

但、此儀なと少しも間違有之候而ハ、別而御大切難尽申候、

一、右至極相整候上二而、何とも御參勤難被成趣、初而本多中務太輔殿へ表立御相談被成被仰遣、無是非段御国御隠居御願被成度と御相談可被仰遣候、

一、右之已後御願出申候者、御様躰為御見届、御目付中可被遣候、其節者至而御病氣御難儀之趣、至極わけ立申様ニ無之候而ハ甚以大切至極、少二而も喰違候儀有之候而ハ、御身之上之御障り且夕ニ可有御座候、

一、右御願濟候共、二三年之内者至而御窮屈不被成候而ハ、隠

シ目付より忽江戸へ相聞申候、然所御願濟候後も二三年之内御不相応之御身持有之候者、以之外之御大切御座候事、

右之趣ハ去々年御約束仕置候儀故、被成方ハ委細存分之趣申進候、併右之趣少二而も御相違二而、公辺江喰違候儀被 仰達候様ニ成申候者、乍憚如何様之御為不宜事出来も難斗候、第一當時者

尾張殿ニ而御考可被成候、御三家といへとも御用捨ハ無之、殊其砌御譜代之面々江者心行可慎旨被

仰付候、ケ様之儀ニ付而ハ從御国御願と申儀、至而不輕事、若哉少二而も右之わけ被 仰達候趣、少二而も御相違之趣も有之候ハ、忽隠シ目付諸国江大分入込居申儀故、早速相知申候、依之ハ甚御大切ニ存候、第一昨年拙者其方へ相對申候事、失念者有之間鋪候、御離縁事ニ付、仙台より様々虚説を以相達

上聞、既大炊頭殿必至と御身之上御障りと相見候ニ付、中務殿申合、無御拋御離縁之御実事申達、且仙台より申儀ニも数々喰違候事有之候、其内ニ而世間へも慥ニ相違相知候者、上方より大勢女引寄申など、仙台より被申候處、無左儀ハ御閑所御吟味ニ而相知可申趣申達、此等之趣第一御密事之御実事申達候故、御不審も晴候趣有之候所、仙台より之申立ニ、大崎ニ而大炊頭殿惡逆無道被成候、殊直彼御屋敷ニ而御隠居被成候御企と被申達候所、其俣大崎ニ被成御座候而ハ、右

御不審晴候事も亦

御不審之曇り出来可申も難斗故、是ハ難何ニ替御大切と存、

唯今迄ハ無御座候、若当年佐竹様二者五十以上と申儀斗二而被 仰出、大炊頭相残り可申哉、左候時者右之通第一離縁之節之趣ニ付而、何とも相濟不申と存罷在候、

一、其上病氣次第相募り申二付而、扱々当暮之儀何卒と奉念願候、以上、

(延享元年)
子十月

松平大炊頭内
大久保岡右衛門

《参考史料》

【指南書Ⅰ】(元文二年十二月二四日、西尾忠尚↓大久保岡右衛門)

一、不遠内ニ御上屋敷へ御帰候事、

一、竹千代様御祝儀御招請之一埒、とやかく相濟候様ニ可被成候事、

(元四年) 未之春 御国江御暇遣候様ニ、何とそ御工面可被成候、此方

(元四年) 未之春ハ御国江御帰、申之春御參勤年ニ成申候、其砌迄も

若御病氣御勝不被成候ハ、御參勤御断被仰達、其秋頃ニ直ニ

御隠居ニ而も御願被成可然候、其節ハ茂十郎様御十六ニなら

せられ候事、御十七ニ近ク候故、御国替之御沙汰ニも及申間

鋪候、茂十郎様御年之無御考、只今之趣ニ而御下屋鋪ニ被成

御座候而、殊更御隠居などの思召有之候者、以之外危キ御事

ニ存候事、

右之趣者、只今迄茂諸事大切至極を被仰聞候得ども、此儀

若哉毛頭も洩候而ハ、御穿儀を洩シ候事、御役ハ勿論其俤

御身命之御障りニ成申候、然とも余り難御絶御大切故被仰

聞候由、至極密々御頭人弘ニ而被仰聞候、

右之通ニ付、右之段々御違却被遊候而者、御大切至極不慮之

趣、水原勝内を以岡右衛門誓詞血判を以申上候、津田丹下な

と初、如何可有御座哉、中々御上屋鋪へ御帰と申儀、決而被

遊間鋪御趣之由申候处、不思儀ニ被届

聞召、(元文三年) 午三月十六日御 帰館被遊候、

御差別御昇進被成候得共、大炊頭・佐竹様と申様成等々之御家格前後仕候儀者、唯今迄者無御座様相考申候、依之、若後官之佐竹様御進、大炊頭相残り候而者、離縁之節之虚名実事故先官相残り候と、又人口可有御座候段、何共難相済二付、於私誠難堪、貴様迄御内々御咄仕候儀ニ御座候、以上、

(延享元年)
子十月

松平大炊頭内
伊木内記

【願書F】延享元年(一七四四)一〇月

覚

一、新^(光政)太^(宗泰)郎儀者、兼而申上候通、十八歳ニ而少将被 仰付候、
一、当相模守祖父松平伯耆守綱清、元禄八年五拾歳ニ而少将被

仰付、同九年大炊頭父伊予守綱政儀も少将被 仰付、親代迄者釣合官位等茂被 仰付候、然処代数相当之当相模守父相模守吉泰儀者、三拾年以前式拾九歳ニ而少将被 仰付、殊先達而死去も仕候、大炊頭儀者正徳四年家督被 仰付、翌年四月元服・侍従被 仰付候二付、家督より当子三拾一年、侍従より三拾年ニ罷成候得共、未少将任官 御沙汰無御座候二付、最初者此儀を年来心勞屈^(託)病氣附申候、

一、然処、第一元文二年不得止事妻致離別候処、此儀者何分大炊頭所存者、高祖父三左衛門尉輝政方江者

(徳川家康) 権^(徳川秀忠)様御入、随而曾祖父武蔵守利隆方江ハ、
台徳院様御養女君様御入、祖父新太郎光政方江ハ、

(徳川家光) 台徳院様御養女君様御入、其上新太郎娘
大猷院様御養女君二被遊、京都江 御入與御座候、右之品々

二付而ハ、乍恐一通り不成沢茂御座候故、

御上江之寸志ニ仍而、大炊頭一分之恥辱不顧、無事ニ相済候様離縁ニ而相済シ申候、然処大炊頭右寸志者相隠レ、却而虚名御役人様方之御唱ニ茂罷^(成)候哉、其御本多伊^(忠統)守様御掛りニ而、離縁之使被成候牧野越前守様・池田数馬殿無念之筋ニ罷成、差控御伺二付、大炊頭儀も不得止事差控相伺申候、妻女離縁ニ付、縦少々不埒之儀ニ而茂差控伺申候儀前代未聞之儀、夫とも不屈之罪茂御座候者不及是非候処、大炊頭重キ趣意有之、第一奉対 御上一分を相捨候寸志者相隠レ、右之仕合ニ付心外之至迷惑、殊虚名之人口之所者大炊頭別而心外残念至極故、必至と屈^(託)病氣附申候故、隠居をも奉願引込申度奉存候得共、左候而者右之通親相模守吉泰と釣合之家格相違、第一離縁ニ付而右之通指控相伺候程之儀故、虚名之人口之所者何共一分難済、唱之趣心外之至故、家格之通之重官蒙 仰不申内引込候而者、後代誹謗之程を迷惑ニ存、病氣ニ而中々難相勤を先押^(義峯)而漸々如是ニ而罷在候、

一、然処佐竹右京大夫様当年專御昇進と風説仕候、佐竹様者大炊頭より御後官ニ而御座候処、若御先立被成候而者、彼離縁砌之虚名実儀故先官相残り候と相唱可申候、左候而者外聞実儀難相済と存詰罷在候、何程茂家格違候ハ、後官御先立被成候、既 御三家様并 右衛門督様・刑部卿様二三位・中将御初官被 仰出候、其外御連枝様方ニ而松平修理大夫様・松平織部正様ニハ御初官少将被 仰付候、其外松平兵部太輔様など、申様之御家格違候ハ其通、松平安芸守様・大炊頭様・佐竹様杯と申様ニ、釣合候家柄前後違官位被 仰付候儀者、

二付、家督より三拾壹年、元服・侍從被 仰付候年より三拾年
二罷成候得共、今以任官之 御沙汰無御座候、先相模守吉泰と
大炊頭代數相当仕候處、互之親代迄者官位鈞合被 仰付、大炊
頭代二至、右之通喰違申候段、一分二取、外聞実儀共無面目奉
存、甚心勞屈仕候所より、近年病氣附申候上、剩元文式年不
得止事無抛子細有之、大炊頭妻離縁仕候、然處、右作略無調法
御座候哉、何分大炊頭所存者、高祖父三左衛門尉輝政方江者
權現様(徳川家康)御入、隨而曾祖父利隆方江ハ、
台徳院様(徳川家光)御入、祖父新太郎光政江ハ、
大猷院様(徳川家光)御入、御孫女様御入、其上新太郎娘
而ハ、乍恐一通り不成御趣茂御座候故、
御上江之寸志ニ仍而、大炊頭一分之恥辱を不顧、無事ニ相濟候
様ニ離縁ニ而相濟シ申候、然處、大炊頭右寸志之趣者相隱レ、
却而虛名御役人様方之御唱ニ茂罷成候哉、其砌本多伊予守様御
掛りニ而、離縁之使被成候牧野越前守殿・池田數馬無念之様ニ
罷成、差控御伺二付、大炊頭儀も不得止事差控相伺申候様成儀
共ニ成行候處、妻女離縁ニ付差控相伺申杯と申儀者前代未聞之
儀、夫共不屈之罪茂有之候者不及是非候處、大炊頭重キ趣意有
之、第一奉対
御上一分を相捨候寸志者相隱レ、右之仕合故、虛名之人口旁心
外之至、大炊頭屈仕候必至と病氣附申候故、必隱居奉願引込申度
奉存候得共、左候而者右之通親相模守吉泰と鈞合之家格相違、
第一離縁之儀ニ付、右之通差控相伺候程之儀故、虛名人口之所
者一分難相濟程之唱、心外迷惑至極故、此外聞相濟不申内者難

引込、且離縁之於趣意者口外難仕品ニ付、彼是相忍罷在候、然
處、後代之儀ニ付無心許大炊頭存候儀も御座候哉、去年中務太
輔様江大炊頭心底之趣、直筆ニ相認申上候趣ニ御座候、依之ハ
公辺ハ身分之儀相濟候と奉存候得共、右段々之首尾共故、代
々之家格之通之重官不蒙 仰以前隱居奉願引込候而者、右離縁
砌之虛名実儀之様ニ人口ハ相唱可申哉、外聞と申物茂有之、第
一代々蒙 仰候家格闕候而者、対先祖・子孫一分相濟不申と大
炊頭奉存候所より、当年迄ハ病氣押候而罷在候得共、兎角病身
ニ付永ク難相勤、唯今之躰ニ而者久鋪者存命之程茂無覺束奉存
候、就夫候而者、何卒當暮任官之
御沙汰茂御座候者、積鬱之外聞茂相濟、第一対先祖・子孫江大
炊頭一分相立、家之面目旁家中一同末々迄御厚恩之至此上茂無
御座候、其上大炊頭病氣も畢竟氣鬱より之儀故快復茂可仕哉、
若本願相叶不申中、病身之儀自然之儀も御座候而者、離縁砌之
虛名初万端大炊頭一分難相濟、大炊頭者不及申上、家中一統迷
惑之心底難尽申奉存候、依之者、當暮任官之儀誠奉念願趣、筆
紙言語ニ茂難尽申上奉存候、御由緒も御座候大炊頭ニ御座候得
共、大炊頭より申上候儀者、御役御勤被遊候中務太輔様御儀故、
遠慮仕差控不申上候、然處佐竹右京大夫様当年御昇進茂可被成
由、專風説仕候、若左様茂御座候時者、同姓相模守と右之通喰
違候儀ニ付心勞仕病氣附候上、第一剩離縁之儀ニ付而、右之仕
合共虛名ニ仍而天下江外聞さらし候故、全氣鬱之病氣ニ而、近
年病勞仕罷在候、然處後官之佐竹様ニ御先を被越候而者、何と
も難相濟大炊頭存詰候趣ニ御座候、子細者松平宗矩(松平宗矩、越前藩主)様、其
外御連枝様方之様成御家格違候御方様之儀者、何程茂前後之無

・侍従被 仰付、当子家督より三拾壹年、侍従より三拾年二
罷成候得共、未重官 御沙汰無御座候二付、年来屈^(託)病氣附
申候事、

一、然ルニ剩元文二年、不得止事妻致離別候之處、此儀者大炊
頭依寸志、離縁ニ而相濟シ申候處、却而差控相伺候様ニ罷成、
残念至極ニ存、第一外聞旁無是非存罷在候事、

一、然処佐竹右京大夫様当年御昇進と専風説仕候、佐竹様者大
炊頭より御後官ニ而御座候處、若御先立被成候者、外聞実儀
難相濟大炊頭存居申候事、

以上、
(延享元年)
子十月

【願書EⅡ】延享元年(一七四四)一〇月九日

(繼政)
大炊頭高祖父者三左衛門尉輝政と申、正三位宰相被 仰付、播
州領知仕候處、家統之儀輝政嫡子武藏守と申、為大炊頭曾祖父
ニ而御座候、右武藏守以来新太郎代初迄、三左衛門旧領之通播
州領知被 仰付候處、新太郎家督以後国替被 仰付、其節知高
減少、其以後唯今之高ニ罷成申候、何分昔之儀者近代之格ニ茂
難申上候二付、身上茂唯今之高ニ減少仕候以後、近代之格左ニ
書記申上候、

武藏守利隆嫡子
松平新太郎

元和九年八月六日元服拾五歳、從四位下・侍従被 仰付、御
字頂戴、寛永三年八月十九日少將被 仰付候、但、侍従被 仰
付候年より四年目、拾八歳之年ニ而御座候、

新太郎光政嫡子
松平伊予守

承応式年十二月廿三日元服十六歳、此時部屋住ニ而御座候、從
四位下侍従被 仰付、御字頂戴、寛文十二年閏六月九日家督
被 仰付、元禄九年十二月五日少將被 仰付候、家督より式拾
五年目、五拾九歳之年ニ而御座候、

但、父伊予守少將任官被 仰付候儀、及高年家督より年数遅
ク御座候事、

御上之 御趣意者不奉存儀ニ御座候得共、松平伯耆守儀、元
禄八年少將被 仰付候、相模守家者末子之家ニ而者御座候得
共、御筋目之訳ニ付、今以 御家門之列ニ加リ罷在候、是故、

大炊頭家よりハ任官等之儀茂先達而被 仰付候哉之様ニも奉
存候所、右之通伯耆守少將任官遅ク御座候故、随而伊予守任
官茂遅ク御座候哉と、古キ者共申伝候、何分伯耆守少將被
仰付候と伊予守儀も差統、翌年少將被 仰付候、其趣左之通
御座候、

松平伯耆守

元禄八年十二月十八日少將被 仰付候、此時五拾歳、

松平伊予守

元禄九年十二月五日少將被 仰付候、此時五拾九歳、

右之通ニ御座候處、当相模守宗泰亡父元文四年病死仕候、相模
守吉泰儀者、元禄拾三年五月家督被 仰付、同年十一月元服・
侍従被 仰付候二付、家督よりも元服よりも十六年目式拾九歳
ニ而少將被 仰付候、然処大炊頭儀者、正徳四年十二月家督被
仰付、翌年四月元服・侍従被 仰付、当子四拾五歳ニ罷成候

上大炊頭病氣茂畢竟氣鬱より之儀故快復茂可仕哉、若本願相叶不申中、病身之儀自然之儀も御座候而者、離縁砌之虚名初万端大炊頭一分難相濟、大炊頭ハ不及申上、家中一統迷惑之心底難尽申奉存候、依之ハ当暮任官之儀誠奉念願趣、筆紙言語ニハ難尽申上奉存候、御由緒茂御座候大炊頭ニ御座候得共、大炊頭より申上候儀者、御役御勤被遊候
雅樂頭様御儀故、遠慮仕差控不申上候、私儀譜代之者之儀ニ付、右之品々ニ難堪、此段各様迄申上候儀ニ御座候、以上、

(延享元年)
松平大炊頭家来
大久保岡右衛門
子八月

【史料D】延享元年(一七四四)八月二十四日

大炊頭祖父
松平新太父
光郎政
元和九年亥八月任侍従十五歳、
寛永三年寅八月任少将十八歳、
但侍従より四年目、

大炊頭父
松平伊予守
綱政

承応貳年巳十二月任侍従十六歳、
元禄九年子十二月任少将五拾九歳、
但家督より式拾五年目、

松平大炊頭
綱政

正徳四年午十二月家督十五歳、
同五年未四月任侍従十六歳
但家督より当子三拾壹年、

侍従より当子三拾年、
当子四拾五歳、

当相模守宗泰曾祖父
松平相模父
光守
光仲

寛永十九年十二月任侍従十四歳、
承応貳年十二月任少将式拾六歳、
但侍従より拾貳年目、

当相模守祖父
松平伯耆守
綱清

寛文元年十二月任侍従十五歳、
元禄八年十二月任少将五拾歳、
但侍従より三拾五年目、

当相模守父
松平相模守
吉泰

元禄十三年十一月任侍従十四歳、
正徳五年十二月任少将式拾九歳、
但侍従より拾六年目、
已上

【願書E】延享元年(一七四四)一〇月九日

覚

一、新太郎光政十八歳ニ而少将被 仰付候事、
一、松平伯耆守(綱清)元禄八年五拾歳ニ而少将被 仰付、同九年伊予守茂少将被 仰付、親代迄者釣合官位も被 仰付候事、
一、然処当相模守(宗泰)親相模守吉泰式拾九歳ニ而正徳五年少将被 仰付候、然処大炊頭儀正徳四年家督被 仰付、翌年四月元服

著守少將被 仰付候と伊予守儀茂差統、翌年少將被 仰付候、其趣左之通御座候、

元禄八年十二月十八日少將被 仰付候、此時綱清五拾歳、
松平伯耆守

元禄九年十二月五日少將被 仰付候、此時綱政五拾九歳、
松平伊予守

右之通二御座候處、当相模守宗泰亡父元文四年病死仕候、相模守吉泰儀者、元禄十三年五月家督被 仰付、同年十一月元服・侍從被 仰付候二付、家督より茂元服よりも拾六年目式拾九歳二而少將被 仰付候、然處大炊頭儀者正徳四年十二月家督被 仰付、翌年四月元服・侍從被 仰付、当子二四拾五歳二罷成候二付、家督より三拾壹年、元服・侍從被 仰付候年より三拾年二罷成候得共、今以任官之 御沙汰無御座候、先相模守吉泰と大炊頭代数相当仕候處、互之親代迄者官位鈞合被 仰付、大炊頭代二至、右之通喰違申候段、一分二取、外聞実儀共無面目奉存、甚心勞屈仕候所より、近年病氣附申候上、剩元文式年不得止事無抛子細有之、大炊頭妻離縁仕候、然處右作略無調法御座候哉、何分大炊頭所存者、高祖父三左衛門尉輝政方江ハ（徳川家康）權現様実姫君様御入、随而曾祖父武藏守利隆江ハ（徳川秀忠）台徳院様御養女君様御入、祖父新太郎光政江者（徳川家光）台徳院様御養女君様御入、其上新太郎娘大猷院様御養女君二被遊、京都江 御入興御座候、右之品々二付而者、乍恐一通り不成御趣茂御座候故、御上江之寸志二仍而、大炊頭一分之恥辱を不顧、無事二相濟候様二離縁二而相濟シ申候、然處大炊頭右寸志之趣ハ相隠レ、却

而虚名御役人様方之御唱二茂罷成候哉、其砌本多伊予守様御懸り二而、離縁之使被成候牧野（成熙）越前守様・池田數馬殿（政相）無念之様二罷成、御差控御伺二付、大炊頭義も不得止事差控相伺申候様成儀共二成行候處、妻女離縁二付差控相伺申杯と申儀者前代未聞之儀、夫共不屈之罪茂有之候者不及是非候處、大炊頭重キ趣意有之、第一奉対 御上一分を相捨候寸志者相隠レ、右之仕合故虚名之人口旁心外之至、大炊頭屈仕必至と病氣附申候故、必隠居奉願引込申度奉存候得共、左候而者右相模守吉泰と鈞合之家格相違、第一離縁之儀二付、右之通差控相伺候程之儀故、虚名人口之所者一分難相濟程之唱、心外迷惑至極故、此外聞相濟不申内者難引込、且離縁之於趣意者口外難仕品二付、彼是相忍罷在候、然處後代之儀二付無心元大炊頭存候儀茂御座候哉、去年中本多（忠良）中務太輔様・西尾（忠尚）隱岐守様江者、密々大炊頭心底之趣、以書付離縁之儀二付而之儀、御噂仕候趣二御座候間、追而者定而（酒井忠恭）雅楽頭様江茂大炊頭離縁二付而之儀御噂可申上置哉と奉存候、右之仕合共二御座候故、代々之家格之通之重官不蒙 仰以前隠居奉願引込候而者、右離縁砌之虚名茂、於後代ハ実事之様二茂人口相唱可申哉、第一代々蒙 仰候家格闕候而者、対先祖・子孫一分相濟不申と大炊頭奉存候所より、当年迄者病氣押候而罷在候得共、兎角病身二付永ク難相勤、唯今之躰二而者久鋪者存命茂無覺束奉存候、就夫候而者、何卒当暮任官之儀 御沙汰も御座候者、積鬱之外聞も相濟、第一対先祖・子孫江大炊頭一分相立、家之面目旁家中一同末々迄御厚恩之至此上茂無御座、其

頭当戌四拾三歳、家督より式拾九年罷成候得共、未 御沙汰無

御座候、数代相当相互ニ親代迄者官位鈞合被 仰付候処、大炊

頭代ニ至右之通相模守吉泰と喰違ニ罷成候段、一分ニ取外聞実

儀共甚以無面目奉存候所より近年病氣附、剩無抛子細有之(元文二年)已

之年妻離縁仕候処、不作略・不調法之仕方之様ニ罷成候、全以

一朝一夕之儀ニ而不縁仕候子細ニ毛頭無御座、不得止事儀御座

候、子細吟味と申儀ニ及候而者不相納儀故、第一年恐

權(家康)現様・台徳院様・大猷院様御由緒有之家之儀ニ御座候得

者、奉対 御上寸志之訳ニ而離縁ニ而事済候様ニ仕候処、却而

不調法之筋ニ成行、彼是喰違候事而已、別而心勞屈(託)、自然と

病氣附、唯今ニ而者全病人之躰ニ罷在候、依之者彈正大弼儀当

年十八歳ニ罷成候得者、最早隠居をも可奉願哉と奉存候得共、

代々之官位・家格も違候而者、何共一分難相済残念千万ニ奉存、

押而罷在候得共、右之通病身相募り候得者、永ク御奉公も難相

勤奉存候、就夫候而者、何卒当暮官位之 御沙汰茂御座候者、

家之面目不過之、積鬱之外聞相晴、本望之至難有家中一同末々

ニ至迄、御厚恩之程難有奉存候儀、此上茂無御座候、右之次第

表立奉願候儀者勿論、御手寄様杯江申上候儀迄、決而遠慮ニ奉

存、大炊頭よりハ曾而以一向不及沙汰儀ニ御座候、私儀数代厚

恩之者ニ御座候処、近年大炊頭彼是心勞之餘り病勞仕候有様見

申ニ堪兼、不及儀ながら存念之趣御内々御物語仕儀ニ御座候、

以上、

(寛保二年)

八月

御名家来

大久保岡右衛門

【願書D】延享元年(一七四四)八月二一日

大炊頭高祖父者三左衛門尉輝政と申、正三位宰相被 仰付、播

州領知仕候処、家統之儀輝政嫡子武藏守と申、為大炊頭曾祖父

ニ而御座候、右武藏守以来新太郎代初迄、三左衛門旧領之通播

州領知被 仰付候処、新太郎家督以後国替被 仰付、其節知高

減少、其以後唯今之高ニ罷成申候、何分昔之儀者近代之格ニ茂

難申上候ニ付、身上茂唯今之高ニ減少仕候以後、近代之格左ニ

書記申上候、

武藏守利隆嫡子
松平新太郎

元和九年八月六日元服拾五歳、從四位下・侍從被 仰付、御

字頂戴、寛永三年八月十九日少將被 仰付候、但、侍從被 仰

付候年より四年目、拾八歳之年ニ而御座候、

新太郎光政嫡子
松平伊予守

承応元年十二月廿三日元服拾六歳、此時部屋仕ニ而御座候、從

四位下侍從被 仰付、御字頂戴、寛文拾貳年閏六月九日家督

被 仰付、元禄九年十二月五日少將被 仰付候、家督より式拾

五年目、五拾九歳之年ニ而御座候、

但、父伊予守少將任官被 仰付候儀、及高年家督より年数遅

ク御座候処、御上之御趣意者不奉存儀ニ御座候得共、松平

伯耆守儀、元禄八年少將被 仰付候、相模守家者末子之家ニ

而ハ御座候得共、御筋目之訳ニ付、今以 御家門之列ニ加

り罷在候、是故大炊頭家よりハ任官等之儀茂先達而被 仰付

候哉之様ニ茂奉存候処、右之通伯耆守少將任官遅ク御座候故、

随而伊予守任官茂遅ク御座候哉と、古キ者共申伝候、何分伯

申九月

大久保岡右衛門

【願書C】寛保二年（一七四二）八月

兼而段々申上候通、松平相模守祖父松平伯耆守綱清と大炊頭親（宗泰）
伊予守綱政代迄者、官位鈞合被 仰付候処、当相模守親古相模
守吉泰と大炊頭互之代数相当仕候処、古相模守吉泰儀者式拾九
歳二而式拾八年以前正徳五年少将被 仰付候得共、大炊頭儀者
未 御沙汰無御座候、其上伊予守儀、家督より式拾五年目少将
被

仰付候所、大炊頭儀者家督被 仰付候年より当年式拾九年二罷
成候、此数茂違候二付、旁以何（託）
御趣意儀茂御座候哉と、甚以屈仕候所より六七年来全ク病

氣附申候、其上大炊頭妻不得止事儀二付、已（元文二）
此儀二付本多伊予守様御掛り 御尋之儀御座候二付、彼是御答

茂申上候得共、離縁之無趣意者難申上、依之、差控をも相伺
候程之首尾二而、殊外間違 公儀二相達候趣故、心勞奉存候処、

右之品共も年過候故、苦勞仕候儀も勘弁茂出来仕候得共、大炊
頭儀最早当年四拾三歳二罷成候処、今以代々蒙

仰候儀茂 御沙汰無御座候故、右之通親相模守吉泰と鈞合相違

之儀二付而茂、人口迷惑二奉存候上、剩離縁之儀二付而者、大
炊頭不行跡故之様二茂其砌世間二而者沙汰御座候二付、是ハ心

外迷惑と奉存候処より、氣症之儀弥以持病茂相募り、唯今二而
者全病人二罷成候、夫故当年坏者彈（宗政）
之所も丈夫二罷成候得者、必隠居之願茂申上度程二奉存候処、

正大弼茂最早致成長、相統

唯今隠居奉願引込候而者、右先達而之虚名茂於後代者実儀之様
二相唱可申哉、第一代々蒙 仰候家格茂闕候儀、对先祖・子孫
一分埒明不申と大炊頭奉存候所より、却而当年者何卒一情出シ
相勤申度と奉存候得共、兎角当年茂病氣不相勝候故、中々相勤
り兼申候、然共右大願相濟不申内者、对家何共迷惑至極故、無
是非乍病身ケ様仕罷在候、依之者当暮
御沙汰茂御座候者、对先祖随而者為子孫、第一病氣罷成候大炊
頭積鬱之儀共相晴、数年之大願相叶申二付而者、外聞実儀此上
茂無御座、御厚恩至極二可奉存候、右之趣故、何卒当暮 御沙
汰之儀、偏大炊頭を御助被下候儀二御座候得者、奉念願儀心底
之趣言語筆紙難尽申上候、以上、

（寛保二年）
八月

御名家来
大久保岡右衛門

【願書C】寛保二年（一七四二）八月

（宗政）

松平大炊頭高祖父三左衛門尉輝政儀者、正三位宰相被 仰付、

祖父新太郎光政儀者十五歳二而元服、 御一字頂戴、從四位下

・侍從被 仰付、十八歳二而少将被 仰付候、父伊予守綱政儀

者十六歳部屋住二而元服、 御一字頂戴、從四位下、侍從被

仰付、家督以後式拾五年目少将被 仰付候、然処松平相模守家

者 御筋目之訳二御座候哉、先々伯耆守綱清儀家督より十一年

目元禄八年少将被 仰付、伊予守より者先達而之

御沙汰二御座候、然共伊予守儀茂、右翌年元禄九年少将被 仰

付、家督より右申上候通式拾五年目二而御座候所、相模守吉泰

儀者家督より十六年目式拾九歳二而少将被 仰付候、然処大炊

承応貳年十二月廿三日元服拾六歳、此時部屋住ニ而御座候、從四位下・侍從被 仰付、御字頂戴、寛文拾貳年閏六月九日家督被 仰付、元禄九年十二月五日少將被 仰付候、家督より式拾五年目ニ而御座候、

但、父伊予守少將任官被 仰付候儀、家督より年数遅ク御座候事、御上之 御趣意者不奉存儀ニ御座候得共、松平伯耆守儀、元禄八年少將被 仰付候、相模守家者末子之家ニ而者御座候得共、御筋目之訳ニ付、今以 御家門之列ニ加り居申候、是故、大炊頭家よりハ任官等之儀茂先達而被

仰付候哉之様ニ茂奉存候処、右之通伯耆守少將任官遅ク御座候故、随而伊予守任官茂遅ク御座候哉と奉存候、何分伯耆守少將被 仰付候と伊予守儀茂差続、翌年少將被 仰付候、其趣左之通ニ御座候、

松平伯耆守

元禄八年十二月十八日少將被 仰付候、

松平伊予守

元禄九年十二月五日少將被 仰付候、

如斯ニ御座候処、当相模守宗泰亡父去ル末之年病死仕候、相模

守吉泰儀者、正徳五年十二月十八日式拾九歳ニ而少將被 仰付

候、大炊頭儀者、正徳四年午十二月家督被 仰付、当申ニ四拾

一歳ニ付、家督より式拾七年ニ罷成候得共、今以何之 御沙汰

茂無御座候、然処去ル辰之年参勤仕候年よりハ、若哉 御沙汰

茂可有御座哉と、殊外心願仕罷在候処、 御沙汰無御座候ニ付

屈仕病氣附候内、妻不埒之儀共有之、不得止事去ル巳之年離

縁仕候、右作略不調法ニも御座候哉、何分大炊頭所存者乍憚

御上江之寸志ニ仍而無事之取斗、離縁ニ而相済シ申候処、却而
其砌大炊頭差控之儀を相伺候様成儀共ニ成行、弥以屈仕病氣附
申候処、氣症ニ而御座候故、一昨年よりハ人前茂難仕様ニ存、
疾隠居之望ニ而罷在候得共、家老共其外用事相勤候者共迄茂重
郎十七歳ニ罷成候迄、其俣ニ而罷在候様ニ色々申聞候故、漸々
相待当年ニ至候、然処当年茂重郎十六歳ニ罷成候ニ付、来年者
隠居奉願と覚悟相極罷在候、以上、

(元文五年)
申九月

松平大炊頭内
大久保岡右衛門

【願書BⅡ】元文五年(一七四〇)九月

右別紙之趣ニ付、大炊頭儀、来年者必隠居奉願と覚悟相極罷在
候処、茂重郎漸当年十六歳ニ而御座候、式拾歳ニ茂罷成、彼是

勘弁仕候儀相成候年齢ニ不罷成内大炊頭隠居仕、茂重郎家督ニ
罷成候者、御謀計多御方ニ候得者、芝方角より以前之悪事を虚

名之様ニ為御取成、必家及騷動候程之大事可致出来趣相見候ニ

付、何卒隠居延引仕候様ニ色々家来共訴訟仕候得共、何を申候

而も病身故前後難願、来年者必隠居仕候と申切罷在候、其上大

炊頭先祖より代々少將任官被 仰付候処、大炊頭斗拔ケ申候而

者、近年之趣旁甚以恥辱之至、此儀も迷惑奉存、第一大炊頭病

氣畢竟屈仕より之儀故、当暮若哉任官之 御沙汰茂御座候得者、

病氣快氣仕候儀も眼前之儀ニ御座候、右之趣旁以当暮少將任官

之儀、家来共一統大願仕候儀、誠心底之趣言語筆紙難尽申上、

千万偏御頼奉願候、以上、

(元文五年)

松平大炊頭内

【願書Aa】元文三年（一七三八）一〇月

（以下「」部分は推定）

大炊頭祖父
松平新太郎

光政

元和二年六月家督八歳、同九年八月六日元服十五歳、從四位下・侍從被 仰付、御字頂戴、寛永三年八月十九日少將被 仰付候十八歳、

但、家督より十一年目、侍從より四年目、

大炊頭父
松平伊予守

綱政

承応貳年十二月廿三日元服十六歳、從四位下・侍從被 仰付、御字頂戴、寛文十二年閏六月九日家督三十五歳、元禄九年十二月五日任少將五十九歳、

但、家督より二十五年目、侍從より四十四年目

松平大炊頭

繼政

正徳四年十二月十八日家督十五歳、同五年四月五日元服十六歳、從四位下・侍從被 仰付、御字頂戴候、

但家督より当午二十五年、侍從より二十四年、当午三十九歳、

忠雄男

松平相模守

光仲

寛永九年家督三歳、同十五年十二月廿九日元服九歳、叙從四位下、賜 御字、同十九年十二月晦日任侍從十四歳、承応二年十二月廿八日任少將貳拾六歳、家督より貳拾貳年目、侍從より十二年目、

光仲男

松平伯耆守

綱清

寛文元年十二月廿六日元服十五歳、從四位下・侍從被 仰付、御字頂戴、元禄八年十二月十八日任少將五十歳、家督より拾壹年目、侍從より三拾五年目、

綱清男

松平相模守

吉泰

元禄十三年五月廿五日家督、同年十一月十五日元服十四歳、從四位下・侍從被 仰付、御字頂戴、正徳五年十二月十八日少將被 仰付候貳拾九歳、家督より十六年目

以上

【願書B1】元文五年（一七四〇）九月

（繼政）

大炊頭高祖父者三左衛門尉輝政と申、正三位宰相被仰付、播州

領知仕候處、家統之儀輝政嫡子武藏守と申、為大炊頭曾祖父二

而御座候、右武藏守以来新太郎代初迄播州領知仕候處、新太郎家督以後国替被仰付、其以後知高減少仕候、然共古昔之儀者近

代之格二茂難申上候、就夫身上茂唯今之高二減少仕候以後、近代之格左二書記申上候、

武藏守利隆嫡子

松平新太郎

光政

元和九年八月六日元服拾五歳、從四位下・侍從被 仰付、御字頂戴、寛永三年八月十九日少將被 仰付候、但、侍從被 仰付候年より四年目、十八歳之年二而御座候、

新太郎光政嫡子

松平伊予守

綱政

【願書A】元文三年（一七三八）一〇月

大炊頭高祖父者三左衛門尉輝政と申、正三位宰相被 仰付、播州領知仕候処、家統之儀輝政嫡子武藏守と申、大炊頭為曾祖父二而御座候、右武藏守以来新太郎代初迄、播州領知仕候処、新太郎家督以後国替被 仰付、其以後知高減シ申候、然共古昔之儀者近代之格ニ茂難申上候、就夫身上茂唯今之高ニ減少仕候已後、近代之格左ニ書記申上候、

武藏守利隆嫡子
松平新太郎
光政

元和九年八月六日元服十五歳、從四位下・侍從被 仰付、御字頂戴、寛永三年八月十九日少將被 仰付候、但、侍從被 仰付候年より四年目、拾八歳之年ニ而御座候、

新太郎光政嫡子
松平伊予守
綱政

承応二年十二月廿三日元服拾六歳、此時部屋住ニ而御座候、從四位下・侍從被 仰付、御字頂戴、寛文拾貳年閏六月九日家督被 仰付、元禄九年十二月五日少將被 仰付候、家督より式拾五年目ニ而御座候、

但、父伊予守少將任官被 仰付候儀、家督より年数遅ク御座候事、御上之 御趣意者不奉存儀ニ御座候得共、松平伯耆守儀、元禄八年少將被 仰付候、相模守家者末子之家ニ而者御座候得共、

御筋目之訳ニ付、今以 御家門之列ニ加り居申候、是故、大炊頭家よりハ任官等之儀も先達而被 仰付候哉之様ニ茂奉存候処、右之通伯耆守少將任官遅ク御座

候故、随而伊予守任官も遅ク御座候哉と、古キ家来共も覺居申候、何分伯耆守少將被 仰付候と差統、翌年伊予守儀も少將被

仰付候、然処当相模守儀者式拾四年以前少將被 仰付候、則相模守家と大炊頭家、近代之格左ニ書記申候、

松平伯耆守
綱清

元禄八年十二月十八日少將被 仰付候、

松平伊予守
綱政

元禄九年十二月五日少將被 仰付候、

元禄十三年十一月十五日元服・侍從被 仰付、正徳五年十

二月十八日少將被 仰付候、夫故当年式拾四年ニ成申候、

然処大炊頭儀、正徳四甲午年十二月家督被 仰付、夫より当年式拾五年ニ罷成候、然処右之通相模守と喰違申候段、大炊頭身

分ニ仕候而相覺申子細茂無御座候得共、何そ不応 御趣意埒茂

御座候哉と迷惑至極仕候所より、近年殊外病氣附、去春御暇被

下置候而茂国元江茂得不罷越仕合ニ御座候処、氣症ニ而御座候故次第二鬱滞仕、一比者散々之躰ニ罷在候、然処当年者參勤之

年ニ茂罷成候ニ付、若哉天道二叶、当暮杯任官之 御沙汰茂可有御座哉と、是を誠ニ張合ニ此節者少々氣分茂宜方ニ茂相覺申

候、当暮任官之御沙汰茂御座候者、誠氣分茂全快可仕候、若又当年茂 御沙汰茂無御座候者、弥屈仕可仕候、依之当暮之 御

沙汰を千万奉念願儀、心底之趣万端難尽筆紙候、以上、

（元文三年）
午十二月

(18) この寛保三年四月付本多忠良(老中)宛継政書付は、離縁

のいきさつと仙台藩主伊達吉村への怒り、仙台藩との和睦は一切断ることを、継政が自筆で記したものである。この書付は江戸城に保管されたいが(「豎横帳」寛保三年七月一日条)、同年七月二五日に伊達吉村は致仕する。

(19) 大名が官位昇進運動を行うのは在府時のみである。これは、大名の官位が幕府の殿中儀礼における序列のためのものであることを示している。

(20) 本多家へは忠良の二代前の忠国に継政の姉振子が嫁し、西尾家へはかつて播磨国新宮藩主池田重政の娘が旗本西尾盛教へ嫁していた。本多忠良・西尾忠尚ともに縁戚関係から岡山藩の「取次」となっており、その関係から官位昇進を働きかけられたのである

(21) 幕府による官位昇進の選考は、月番老中と月番若年寄が中心となり、大名の官位を老中、諸役人の官位を若年寄が評議した。この評議の下調査(基礎データ収集)を行ったのが奥右筆であり、若年寄がその責任者であった。橋本政宣「江戸幕府における武家官位の銓衡」(同編『近世武家官位の研究』続群書類従完成会、一九九九年)参照。

(22) 「寛保三年御定」の校訂と内容については、橋本政宣「総論 近世の武家官位」(前掲註(21)橋本編著書)に詳しい。

《付録史料》

凡例

一、翻刻にあたっては、闕字・平出を残した。また、適宜読点・並列点を補った。

一、漢字はすべて常用漢字に改めた。

一、かなはすべて現行の字体に改めた。ただし、次のものは残した。

江(え)、而(て)、茂(も)、与(と)

一、原本の摩滅・虫損などによって文字が判読しにくい場合には、字数を推定して□□で示し、字数を推定できない場合には「」で示した。

一、原本に塗抹のある場合には、〃〃をその文字の左傍に付し、抹消した文字が不明のときは、その字数を推定して、■ ■ をもって示した。

一、校訂註は、() で括って記した。

同年一月一〇日に、西尾・酒井・小笠原・奥右筆等から、大願成就の連絡があった。翌一日には本多忠良からも連絡があった。そして一五日に老中奉書が届き、翌一六日に継政は登城して少将昇進を仰せ渡される。足かけ一〇年以上に及ぶ昇進運動が、ここに結実したのである。

むすびにかえて

池田継政の官位昇進運動の概要は、以上の通りである。幕閣との交渉過程において、多くの興味深いやり取りがあるが、それらにはほとんど触れられなかった。また、願書の詳細な比較や、当時の幕政の動向なども視野に入れて、継政の昇進運動を分析する必要がある。これらの課題については、別の機会に改めて考えたいと思う。

末尾に《付録史料》として全二種類の願書、《参考史料》として西尾による指南書を翻刻・紹介する。ご参照いただければ幸いである。

註

- (1) 石井良助『天皇』（山川出版社、一九八二年、初版一九五〇年）二二一～二二七頁
- (2) 拙稿「大名の官位」（『研究ファイル』一七、共立女子大学文学部、一九九九年）
- (3) 拙稿「織豊期王権論」（『人民の歴史学』一四五、二〇〇〇年）・同「織豊期の王権論をめぐって」（『歴史評論』六四

九、二〇〇四年）。

- (4) 拙稿「近世武家官位試論」（『歴史学研究』七〇三、一九九七年）
- (5) 二木謙一「江戸幕府將軍拜謁儀礼と大名の格式」（同『武家儀礼格式の研究』吉川弘文館、二〇〇三年、初出一九九九年）
- (6) 拙稿「岡山藩と武家官位」（『史観』一三三、一九九五年）
- (7) 「御系図一 本系一」《C1-18*TCA-001》
- (8) 大森映子「大名家における後継者決定過程」（『湘南国際短期大学紀要』七、二〇〇〇年）
- (9) 大森映子「大名相続をめぐって」（『湘南国際短期大学紀要』八、二〇〇一年）
- (10) 大森映子「萩藩毛利家の相続事情」（『湘南国際短期大学紀要』九、二〇〇二年）
- (11) 大森映子「大名の離婚をめぐって」（『湘南国際短期大学紀要』四、一九九七年）、堀新・鈴木由子・山尾弘「近世大名の離婚」（『共立女子大学文学部紀要』四六、二〇〇〇年）。以下、離婚の経緯については両論文による。
- (12) 前掲註(7)「御系図一 本系一」
- (13) 「御書付之写」《C6-397*YCF-007》
- (14) 「近年江戸御表之事御覚書」《C13-512*YCM-015》
- (15) 「御秘録」《C5-2581*YCE-005》
- (16) 「御離縁二付御大乱之一件并御家格極秘御用」《C5-2587*YCE-005》
- (17) 前掲註(11)堀新・鈴木由子・山尾弘「近世大名の離婚」

月二五日条)、松平乗邑以下の幕閣への昇進運動も併行していたと思われる。

また、本多忠良側では、他家では家老が昇進運動の中心となっていたことを述べ、家老伊木内記が動けば本多もより積極的に協力すると述べている(「豎横帳」延享元年八月二四日条)。これは井上又右衛門(本多家の公用人)と大久保の交渉が熱を帯びた議論となった末での、いわば売り言葉に買い言葉であるから、これまで大久保が昇進運動を行ってきたことが不成功の原因というわけではない。しかし、岡山藩側としてはこれに対応せざるを得ず、参府してきた伊木を差出人として、いずれも本多忠良宛に下書のまま願書を提出した(「願書EⅠ」「願書EⅡ」)。

【願書EⅠ】は、まず歴代の岡山・鳥取両藩主の官位履歴を確認し、継政が昇進の遅れから病気になったとする。そして、和子との離縁が誤解されたことは「残念至極」である。さらには、継政の「後官」である佐竹義峯が先に昇進すれば、継政は「外聞実儀難相済」と覚悟している、と述べている。これまでの願書と異なるのは、佐竹の昇進問題に触れていることである。継政の昇進運動において、初めて佐竹の昇進が話題になったのは、四年前の元文五年九月である。関野斧右衛門(老中松平信税の用人)が、前田吉徳・池田継政・佐竹義峯の三人は次の機会に昇進すると述べたのが最初である(「豎横帳」元文五年九月条)。同じことは、依田半左衛門(西尾忠尚の用人)も述べている(「豎横帳」元文五年二月一六日条)。しかし寛保二年も昇進が叶わず、この時初めて佐竹に追い越される可能性を

感じたようである(「豎横帳」寛保二年二月六日条)。これ以降、継政の昇進運動は常に佐竹を意識して行われ、【願書EⅠ】ではじめて願書にも記すようになったのである。佐竹義峯の侍従任官は正徳五年十二月で、継政よりも八ヶ月「後官」である。しかし年齢は、延享元年当時五五歳であり、継政よりも一〇歳年長であった。従って、佐竹は「寛保三年御定」に定められた少将昇進の二条件、すなわち五〇歳以上と侍従任官より三〇年後をともにクリアしており、この年の昇進は確実であった。

【願書EⅡ】の内容は、従来の願書の流れを汲んだ【願書D】とほぼ同じで、末尾に「後官之佐竹様ニ御先を被越候而者、何とも難相済」と述べ、越前松平家や「御連枝様方之様成御家格違候御方様」は問題ないが、佐竹家のような「等々之御家格」に先を越されるのは前例がないと強調している。

以上見てきたように、差出人が大久保から伊木に代わっても、願書の概要に大きな変化はない。一〇月一〇日に伊木が本多邸を訪れ、結局、本多側は【願書EⅠ】のみを受け取った(「豎横帳」延享元年一〇月一〇日条)。

願書提出後、西尾から情勢を聞いていたところ、加納久通と小笠原政登へも内願した方がよいとアドバイスされた(「豎横帳」延享元年一〇月一六日条)。そこで一八日に加納、一九日に小笠原へ提出したのが【願書F】である。その内容は、【願書EⅠ】を詳細にしたもので、特に新しい主張はない。また差出人は、再び大久保に戻っている。官位昇進運動において、差出人が誰であるかは問題でないことがわかる。

これに対して、松平乗邑は【願書C】を簡潔にして再提出することを求め、これに答えて提出したのが【願書Cc】である。

内容的には大差ないはずであるが、岡山藩池田家が將軍家と縁戚であること、昇進運動は継政の意向ではなく「数代厚恩之者」である大久保が継政の様子を見るに堪えかねての運動であると断っている点が、従来の願書とは異なっている。

しかし、この年も少将への昇進は叶えられなかった。四〇歳を過ぎてから二度の昇進運動に失敗したのである。絶望した継政は、翌寛保三年二月一日には、「打込一間の狭所江引込被罷在」ほどの落ち込みようであった（「豎横帳」寛保三年二月一日条）。しかし、継政の実母栄光院の了解をバックにした、家老たちの「若無承引候得者、不残自滅仕候と覚悟相極」めたうえでの説得を聞き入れ、継政は「此度者致帰国、来年又参府可致」ことを了解する。そして継政は前年に命じられた関東筋川々御手伝普請の竣工御礼として四月一三日に登城し、その後帰国する。

継政が帰国した寛保三年に、幕府は「寛保三年御定」を定め、官位昇進の基準を初めて公表した（22）。幕府は「官位之儀者家督より之年数ニ不構、年齢等ニ而可被仰付」ことを、官位叙任の大原則としたのである。このことは、これまでの継政の官位昇進運動における、吉宗の年齢重視の姿勢に変わりはない。「寛保三年御定」は全二四ヶ条あるが、そのうち継政に関連するのは一条目と二条目である。その要点だけ述べると、少将昇進の条件は、①侍従任官から三〇年後、②年齢が五〇歳以上、のどちらかであった。この「寛保三年御定」公表の日は不明

であるが、前述した継政の落ち込みぶりからすると、この年はじめに公表されたのかも知れない。この当時、継政は四四歳、侍従任官から二九年目であった。年齢は不足であるが、侍従からの年数は、来年の参府時にはちょうど三〇年となる。今度の基準は、これまでのように内々の形で入手した情報とは異なり、幕府が公表したものであるから、この基準に合致すれば昇進する可能性が高い。継政はこの可能性を信じて帰国したのである。

寛保四〇延享元年（一七四四）七月に参府した継政は、すぐさま昇進運動に取りかかった。八月二日には初めて酒井忠恭（老中）に願書を提出した（【願書D】）。内容的に目新しいものではなく、【願書A】【願書B I】【願書C】の流れを汲み、【願書Cc】で述べた將軍家との縁戚関係や「譜代之者」である大久保が内願する理由を述べ、これまでの願書の内容を集成したものとなっている。しかし、それだけに長文となり、酒井からは、【願書D】が「永ク入組候間、此方様御三代之儀斗」を記して再提出するよう求めてきた。しかし、「此方様斗之儀ニ而者、曹源寺様（綱政）御延引之儀御引例ニ成候而者難済ニ付、伯耆守様御延引故と申儀相知候様、因州之儀茂書付」けて提出した（【願書Dd】）。酒井の求めは、元文三年の小笠原と同じであり、従って【願書Dd】は【願書Aa】とほぼ同じである。

【願書D】は酒井のみに提出されたのか、それとも従来通り松平乗邑以下六名の幕閣にも提出したのかどうかは不明である。しかし、酒井側は「随分諸方を御大願之御祈祷と思召、御取斗可被成候」とアドバイスしており（「豎横帳」延享元年八

同日条)。幕府での官位選考において、最終的には將軍の上意によつて官位叙任が行われる。しかし、宗泰が少將に昇進した正徳五年当時、將軍家継はわずか七歳であつた。家継が官位選考に関する意思を持っていたとは考えられず、宗泰の事例は幼君時の混乱とされたのである。

昇進が叶えられなかつた継政は、隠居の意向を再び強めた。翌元文四年四月に継政は帰国するが、国許から隠居願を提出しようとしたらしい。帰国の直前二月二六日に、西尾は【指南書Ⅱ】を大久保へ渡し、継政へよく言い含めるようにとアドバイスした。国許からの隠居願提出には種々の困難が伴うこと、隠目付からの報告によつて何か問題が生じると「御三家といへとも御用捨ハ無之」ことを、尾張藩主徳川宗春を例に示している(「江戸表」元文四年二月二六日条)。

これが功を奏したのか、継政は隠居願の提出を思いとどまる。しかし、隠居願望そのものがなくなつたわけではなかつた。参府した元文五年には、再び隠居を強く願うようになったらしく、大久保が本多と西尾に相談している。これと併行して、少將昇進運動も行われた。九月付で一昨年と同じメンバーに願書を提出する(【願書BⅠ】【願書BⅡ】)。【願書BⅠ】の内容は、【願書A】とほぼ同様であるが、和子との離縁を「御上江之寸志ニ仍而無事之取斗」であると弁明し、末尾で継政の隠居願について触れた点が異なる。【願書BⅡ】は【願書BⅠ】の補足である。嫡子茂重郎(当時一六歳)が「彼是勘弁仕候儀相成候年齢ニ不罷成内」に継政が隠居すれば、「御謀計多御方」である「芝方角」(仙台藩)の「御取成」によつて「必家及騒動候程之大

事可致出来」としている。従つて、昇進すれば継政の病氣も回復する(必然的に、継政の隠居もなくなる)ので、少將昇進を「家来共一統大願仕候」と述べている。しかし、四一歳になつて年齢の問題をクリアしたにも拘わらず、継政の少將昇進は見送られた。

その代わりかどうか、嫡子茂重郎の元服が認められ、將軍の一字拝領して宗政と名乗り、四品に任官した。しかし、継政の初官は侍従であつたから、四品では家格が一ランク低下したことを意味する。このまま継政が侍従のまま隠居すれば、宗政の極官も侍従となつてしまい、家格低下を決定づけることになる。また嫡子元服は、継政隠居の環境整備をも意味するので、「家来共一統」にとつてはかえつて状況は悪化したといえる。

寛保二年(一七四二)は西尾に願書を添削してもらい、八月付で従来と同じメンバーに願書を提出した(【願書C】)。【願書C】の趣旨も、【願書A】【願書BⅠ】と基本的には同じであるが、鳥取藩との家格差、継政の病氣、先祖以来の家格が低下することなどをより印象づける書き方となっている。すなわち、継政は鳥取藩との「釣合相違」についての「人口迷惑ニ奉存」と述べている。また、離縁についてはより踏み込んだ記載となり、離縁を「大炊頭不行跡故之様ニ茂、其砌世間ニ而者沙汰御座候ニ付、是ハ心外迷惑と奉存」と述べている。これらのことが原因となつて「氣症之儀弥以持病茂相募り、唯今ニ而者全病人ニ罷成」り、その結果隠居を願つたとする。少將に昇進しないでの隠居は「対先祖・子孫一分埒明不申」ことであり、継政を助けるつもりで「数年之大願相叶」うことを願っている。

とも大久保岡右衛門（江戸留守居役）は、老中招請についての相談のため、先の面々を「切々」と訪れており、「此次而を以て昇進の内願を行っていた（「江戸表」元文三年九月五日条）。

【願書A】は、鳥取藩池田家と岡山藩池田家は同格であるとし、両藩主の「近代之格」（官位履歴）をまず列挙する。そのうえで鳥取藩主吉泰が二四年前に少将任官したのに対し、継政がまだであることを「喰違」と述べている。そのため継政は「何そ不応 御趣意埒茂御座候哉」と思い悩み、「次第鬱滞仕、一頃者散々之躰」に陥ったが、昇進を「誠ニ張合ニ」して最近「少々氣分茂宜方ニ茂」なだったので、実際に昇進が叶えば「誠氣分茂全快」するであろうが、叶わなければ「弥屈怛（託）」するので、昇進を「千万奉念願」る、というものである。差出人は明記はされていないものの、内容的に大久保岡右衛門と思われる。【願書A】の要点をまとめれば、①岡山藩と鳥取藩は同家格である、②しかし、現在の両藩主の官位は「喰違」である、③少将昇進すれば継政の病氣も全快する、である。

これに対して、同月二四日に小笠原は「因州御三代・此方様御三代程、御家格之趣猶又書付越候様ニ」として、鳥取・岡山両藩主の官位履歴のみを記して再提出するよう求めてきた。これに応じたのが【願書Aa】である。小笠原は、【願書A】の要点①の根拠のみを必要とし、その他は不要としたのである。また同日には、老中が將軍へ提出する官位昇進の伺書（21）を、水谷又吉（奥右筆）から「至極内密ニ」見せてもらっている（「豎横帳」元文三年一〇月二四日条）。その内容は以下の通りである。

因州様御三代之趣

此方様御三代之趣

右之通ニ御座候間、大炊頭末年若ニハ御座候得共、親被仰付候互之年数茂当年合イ申候間、当暮少将任官可被仰付哉、但及 御沙汰申間敷哉、

元文三年当時、継政は三九歳であり、四〇歳未満であることが、やはり少将昇進の障害となっていた。しかし、「親被仰付候互之年数茂当年合イ申候」ことから、昇進も可能とされている。では「親被 仰付候互之年数」とは何であろうか。これは家督継承と侍従任官からの年数と考えられる。ちなみに、継政は家督から二五年、侍従から二四年である。このうち侍従からの年数は、継政の父綱政が四四年、前鳥取藩主綱清が三五年であり、継政より遅いものもある。しかし家督からの年数では、父綱政が継政と同じ二五年であるほかは、全員がこれより早い。つまり、この「年数」とは家督継承からの年数であることがわかる。従って、官位昇進の基準は、年齢と家督継承からの年数、すなわち幕府へ奉公した年数、の二つであることが判明する。

この伺書に対して、吉宗はやはり年齢不足（四〇歳未満）を理由に、継政の昇進を不可とした。これに対して、松平乗邑（老中筆頭）は、鳥取藩主宗泰が二九歳で少将昇進した前例を示した。これに対して吉宗は、宗泰の昇進を「御先代 御幼君様之節之御事ニ而、御詮議足り不申所より被 仰付候儀故、当時之引例ニ難成」として退け、近年は当人の年齢を基準に官位叙任していることを、加賀藩主前田吉徳・広島藩主浅野吉長を例示して強調した（「江戸表」元文三年一二月六日条、「豎横帳」

池田継政官位昇進運動の関連年表

年 月 日	事 項
享保17年(1732) or 同19年(1734) 是年	西尾忠尚に少将昇進を働きかける。
享保21年(1736) 4.3 = 元文元 是年	参府 (3.16 岡山発) 本多忠良に少将昇進を働きかける。
元文 2年(1737) 4.13 5. 9.10 10.5 12.14	病気を理由に、本年の滞府を許される。 大崎屋敷へ移る。 病気を理由に、来年の滞府も許される (9.5 願書提出) 伊達和子と離縁。 西尾忠尚からアドバイスを受ける (指南書Ⅰ)。
元文 3年(1738) 3.16 9.27 10.	上屋敷へ帰館。 茂重郎名代で老中招請。 願書A・願書Aa提出
元文 4年(1739) 2.26 4.18 是年	西尾忠尚 (指南書Ⅱ) を継政に提出。 帰国 (5.6 岡山着) 「江戸表」の成立。
元文 5年(1740) 4.6 8.13 9. 10.	参府 (3.18 岡山発) 本多忠良・西尾忠尚に、官位昇進・隠居について相談。 願書BⅠ・Ⅱ提出。 願書B①②の内容を、国家老へ伝える。
寛保元年(1741) 4.19	帰国 (5.5 岡山着)
寛保 2年(1742) 4.5 8.18	参府 (3.19 岡山発) 西尾忠尚が願書添削。8月中に願書C・願書Cc提出。
寛保 3年(1743) 2.13 4.19 是年	幅一間の部屋に閉じこもる (～2.18) 帰国 (④.4 岡山着) 「寛保三年御定」の制定
延享元年(1744) 7.18 8.21 8.22 10.9 10.19 12.10 12.15 12.16	参府 (7.1 岡山発)。 酒井忠恭へ願書D提出。 酒井用人の指示により願書Dd提出。 本多忠良へ願書EⅠ・Ⅱ提出、②は返却。 小笠原正登へ願書F提出。 西尾・酒井・小笠原・奥右筆等から大願成就を聞く。 老中奉書が届く。 少将昇進。
延享 2年(1745) 4.19 8. 是年	帰国 (5.7 岡山着) 「御秘録」の成立、宗政へ提出。 「豎横帳」の成立。

ていた池田家の家史編纂事業との関連であろう。こうして、藩士の家に秘かに伝わった詳細な記録が、藩政史料に取り込まれて、現在に伝来したのである。

以上の三つの記録は、いずれも大久保岡右衛門が作成に関わったと思われる。官位昇進運動は江戸留守居役が中心となって行われるから、この三つの記録はその詳細を知る上で好個の史料といえよう。そしてこの三つの記録に、継政の官位昇進願書が収録されている。昇進運動の詳細な分析は後の機会に譲ることにし、章を改めて昇進運動の概略と願書の全文紹介をするにとどめたい。

三 池田継政の官位昇進運動の概略

継政の官位昇進願書のうち、最も早いものは元文三年（一七三八）のものである。しかし、昇進運動は享保二一〇元文元年にも行われていたが（「豎横帳」元文五年八月一三日条）、本多忠良（老中）に働きかけたことが判明するのみで、その詳細は不明である。しかし、継政の昇進を吉宗の上意を伺うところまでは進んでおり、吉宗は継政の年齢不足（四〇歳未満）を理由に、少将昇進を不可としている（「江戸表」元文三年一〇月二二日条、「豎横帳」元文三年一二月六日条）。享保二一〇元文元年当時、継政の官年は三七歳であった（以下、特に断らない限り、継政の年齢は官年である）。

また西尾忠尚（若年寄）は、「寺社奉行勤候砌より此事承」と述べており（「豎横帳」寛保二年一二月六日条）、西尾への働きかけはさらに早い。西尾の寺社奉行在任期間は、享保一七

年（一七三二）三月五日〜同一年九月二五日である。このうち継政が在府していたのは、享保一七年と同一九年である（19）。継政の官位昇進運動は享保一七年ないしは同一九年に開始され、延享元年（一七四四）に昇進が叶えられて終わった。その昇進運動期間は、一三年ないしは一一年におよぶ。前述したように、一個人の昇進運動期間としては、管見の限り、最長のものである。もともと、このうち享保二一〇元文元年までの昇進運動は、本多や西尾といった「取次」にのみ働きかけた程度のものであったであろう（20）。

継政は病気を理由に、享保二一年四月から元文四年四月までの三年間在府したが、離縁のあった元文二年には昇進運動を行わなかったようである。この年は、離縁による悪評と継政の隠居願望への対応に迫られ、官位昇進運動どころではなかったであろう。一二月一四日には、西尾から継政の隠居に対する指南を受け（後掲【指南書I】）、これを受けて継政は、翌元文三年三月一六日に上屋敷へ帰館した。そして同年九月二七日の老中招請（前年元文二年の將軍若君誕生の祝儀）を、茂重郎を名代として行うことについて、西尾と本多から指南を受けている。本多と西尾の指南は詳細かつ多岐にわたっており、「取次」と大名との関係、ひいては幕藩制の裏表を示しており興味深い。

老中招請が終わると、継政の官位昇進運動は再開する。一〇月付で願書を作成し、松平乗邑（老中）・松平信税（老中）・本多忠良（老中）・西尾忠尚（若年寄）・加納久通（側用取次）・小笠原政登（側衆）へそれぞれ願書を提出した（願書A）。西尾からの返答が二二日にあるから、願書提出はこれ以前である。もっ

同四年二月二十六日の西尾忠尚による「指南」までである。大久保岡右衛門（岡山藩江戸留守居役）の動向を中心とした詳細な記録で、おそらく大久保がまとめたものであろう。

「御秘録」の記事内容は、元文二年一〇月五日の離縁から、延享元年（一七四四）一二月一五日の継政の少将昇進確定までである。離縁と官位昇進運動に関する詳細な記録である。表紙に「延享二乙丑年八月写上 大久保岡右衛門」とあり、奥書には

右一冊者、（延享二年）乙丑年之春中野左仲・水原勝左衛門まで認出、

数日兩所ニ相留り熟覽之上、成程若殿様江茂此通認上可然

由ニ付而、牧野権六郎書上候控也。

（延享二年）
丑年八月

大久保岡右衛門

とある。大久保がまとめ、中野（児小姓頭）・水原（寄合末席）が内容をチェックし、牧野（児小姓頭）が清書して「若殿様」（池田茂重郎、後の藩主宗政）へ提出したものを、大久保が写したものである。和子は茂重郎の実母であるから、離縁の事情を知らせておくためのものであろう。なお、本史料全文の翻刻・紹介があるので、参照していただきたい（17）。

「豎横帳」の表紙には「延享二乙丑年記之置 大久保岡右衛門」とある。記事内容は、元文二年一〇月五日の離縁から、延享二年二月に継政の書付写（寛保三年一七四三四月本多忠良宛）を酒井忠恭（老中）へ提出したことまでである（18）。また巻末には、先の継政書付写を寛延二年（一七四九）三月に堀田正亮（老中）へも提出したと、その事情が記されている。これは、宇和島藩主伊達村候が突如、江戸城中で仙台藩との和

睦を申し出たものである。そこで岡山藩では、和睦の仲介に動いていた堀田に、仙台藩との義絶に対する意思がいかに強固であるかを示すために、先の継政書付写を堀田へも提出したのである。

「豎横帳」は、「御秘録」とほぼ同時期を、同じ大久保岡右衛門がまとめたものであるが、記事内容は「御秘録」よりもはるかに豊富である。その理由は、「御秘録」が茂重郎への提出記録であるのに対して、「豎横帳」は大久保個人の控だったことにあると思われる。「豎横帳」は、寛保三年三月の関東筋川々の御手伝普請の記録である「御普請異説二付而再応書上控」と一緒に箱に収められて伝来した。両書は、同じ時期に大久保がまとめたという共通点はあるものの、内容的には直接の関連性はない。両書を収めた箱には「御秘録豎横帳七冊 大久保岡右衛門」という墨書と、「明治十七年八月豎帳二冊 河瀬源太郎献納」という貼紙がある。これによれば、この箱には両書の他に五冊の「御秘録」（前述した「御秘録」と区別するために「御秘録」と表記する）が収められていた。「御秘録」は離縁関係の記録と思われるから、本来は「豎横帳」の他に六冊の「御秘録」があり、「御普請異説二付而再応書上控」は後年紛れ込んだ可能性もある。いずれにせよ、五冊ないしは六冊の「御秘録」の内容は不明であり、これに先の「御秘録」が含まれていたかどうか不明である。

この両書を献納した河瀬源太郎は、おそらく岡山藩士の末裔であろう。大久保岡右衛門の係累に係わる人物と思われる。河瀬がこれを旧主である池田家へ献納した理由は、当時進められ

池田継政願書一覧

願書名	日付	差出	提出先	出典	備考
A	元文3年(1738)10月	無記名	松平乗邑、松平信税、本多忠良登 西尾忠尚、加納久通、小笠原政登	堅横帳、江戸表	
Aa	元文3年(1738)10月	無記名	小笠原政登	堅横帳、江戸表	小笠原の指示で簡略化
BI	元文5年(1740)9月	大久保岡右衛門	松平乗邑、松平信税、本多忠良登 西尾忠尚、加納久通、小笠原政登	堅横帳	
BII	元文5年(1740)9月	大久保岡右衛門	松平乗邑、松平信税、本多忠良登 西尾忠尚、加納久通、小笠原政登	堅横帳	
C	寛保2年(1742)8月	大久保岡右衛門	松平乗邑、松平信税、本多忠良登 西尾忠尚、加納久通、小笠原政登	堅横帳、御秘録	西尾が添削
Cc	寛保2年(1742)8月	大久保岡右衛門	松平乗邑	堅横帳	乗邑用人の指示で簡略化
D	延享元年(1744)8月	大久保岡右衛門	酒井忠恭	堅横帳、御秘録	
Dd	延享元年(1744)8月	(大久保)	酒井忠恭	堅横帳、御秘録	忠恭用人の指示で簡略化
EII	延享元年(1744)10月	(伊木)	本多忠良	堅横帳、御秘録	下書のまま提出
EII	延享元年(1744)10月	伊木内記	本多忠良	堅横帳、御秘録	下書のまま提出 本多受け取らず
F	延享元年(1744)10月	大久保岡右衛門	加納久通、小笠原政登	堅横帳、御秘録	

「取次」による岡山藩への指南書

書名	日付	指南者	内容	出典
I	元文2年(1737)12月14日	西尾忠尚	上屋敷への早期帰館、老中招請、参勤交代、隠居	江戸表
II	元文4年(1739)2月26日	西尾忠尚	国許からの隠居願の手順、参勤交代、国替	江戸表

は二一歳（官年二三歳）、和子は一七歳であつた。二人の間の子供は嫡男茂重郎（後の岡山藩主宗政）一人である。享保一二年には嫡子茂重郎（後の宗政）が誕生するなど、夫婦間に何の問題もなかったように思われる。しかし、継政は元文二年（一七三七）四月に、病気を理由に帰国を延期して滞府を許されると、翌五月には大崎下屋敷へ引き移ってしまった。そして一〇月五日に和子と離縁するのである。これに伊達家側は激怒し、伊達宗村の正室利根姫（紀伊藩主〇〇女、將軍吉宗の養女）を通じて、將軍に継政に関する悪い噂を流したのである。すなわち、継政は大崎下屋敷を悪所同然にし、上方から大勢の女を引き寄せ、河原色町の乞食女までも召し抱えるなど言語道断のていたらくである。そのため和子が継政に何度も意見したことが不和の原因となった。継政にあきれ果てた家老たちは継政を強制的に隠居させ、和子の実子茂重郎を毒殺し、継政の同母弟和泉（政純）を擁立しようとする計画があつた。この計画の障害となる和子は、継政のあずかり知らないうちに離縁されたというのである。

これに対して、岡山藩側はこれを事実無根と反論し、上方から大勢の女云々については、箱根関所を調べてもらえればわかるとしている。この弁明は一応認められたが、離縁届にさいしての無調法を理由に、継政だけでなく離縁の使者までもが差控伺を提出した。結局、差控には及ばないことになったものの、池田家側に悪印象が残る結末となつてしまい、大きなダメージを残すことになってしまったのである。

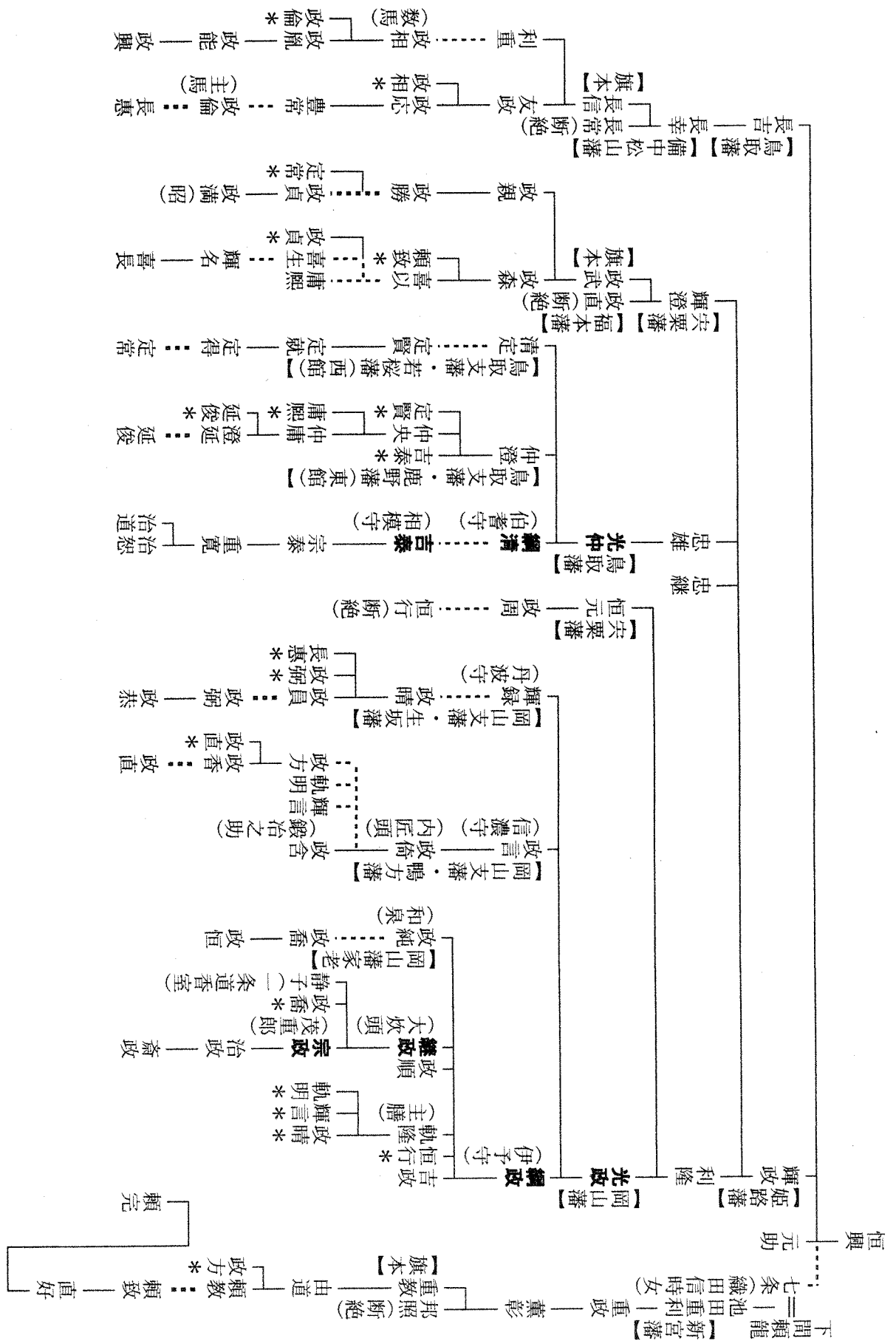
そして離縁の直後から、継政は隠居を強く願うようになる。

極官である少将への昇進をはたさなければ、継政の官位が前例となつて、資格が低下する危険性が高い。従つて、家臣団だけではなく、「取次」（岡山藩と幕府の間を取り持つ幕閣や上級旗本）さえも継政の隠居に反対した。「取次」である西尾忠尚（若年寄）は、病気とはいえ国許を四年間も留守にしては転封の可能性もあると継政を諫め、岡山藩側では同族である鳥取藩が仙台藩の「後おし」をしているとすら認識していた。岡山藩と鳥取藩では、元和三年（一六一七）と寛永九年（一六三二）に藩主幼少を理由に入替がなされており、再び両藩の入替があると危惧したのであらう。しかし、鳥取藩が仙台藩の「後おし」をしたとは考えがたく、むしろ天明四年（一七八四）には岡山藩と仙台藩の和睦を仲介している。離縁から四七年後であり、当事者はいずれもこの世を去つていた。

二 池田継政の官位昇進運動とその史料

池田継政の官位昇進運動の詳細を伝えているのは、「近年江戸御表之事御覚書」（以下、「江戸表」と略称）（14）・「御秘録」（15）・「御離縁二付御大乱之一件并御家格極秘御用」（以下、「豎横帳」と略称）（16）である。以下の行論において、この三つの史料からの引用は、本文中にカッコ書きで略称を記すこととしたい。この三つの史料はいずれも岡山大学附属図書館池田家文庫の架蔵史料であり、岡山藩池田家の伝来史料である。以下、それぞれの史料について説明しておこう。

「江戸表」は、包紙に「元文四末年 長谷川指出シ候、江戸ノ趣ノ丁」とある。記事内容は元文二年一〇月五日の離縁から



位昇進願書を取り上げる理由は、願書一通が残存し、官位昇進運動は足かけ一〇年以上におよぶことにある。管見の限り、この願書数・運動年数ともに、最多・最長である。そのうえ、その詳細を記した記録もあわせて残存しており、大名の官位昇進運動を知る上で最良の事例といえよう。

一 池田継政の官位と離縁

それでは、継政の略歴に触れておこう。継政は綱政の一七男として、元禄一五年（一七〇二）岡山に生まれた。母は綱政の側室で栄光院水原氏、京都の女性で綱政との間に三男一女を儲けた。継政は宝永元年（一七〇四）三歳で岡山藩家老池田由勝の遺跡を相続したが、兄政順の死により宝永七年に嫡子となり、正徳二年（一七一二）一一歳で江戸に下った。翌正徳三年に將軍家継に初めて拝謁し、翌正徳四年に父綱政の死によって岡山藩主となり、翌正徳五年に一四歳で元服した（7）。継政が一〇歳で嫡子となった時、三一歳の庶兄軌隆は三人の子を儲けていたにもかかわらず、「多病」を理由に嫡子とはならなかった。この時綱政は七三歳であり、若年の継政を嫡子とすることは冒險であった（8）。嫡子が一七歳未満の場合は家督継承を認められない可能性が高く（9）、そのため岡山藩は幕府へ継政の年齢を実際よりも二歳年長に届けている。これを官年といい、家督継承をスムーズにするため、近世社会では幕閣も黙認の上で日常茶飯事的に行われていた「年齢詐称」であった。これらの点については、大森映子氏の研究に詳しい（10）。

継政は正徳五年の元服のさい、従四位下・侍従に任官した。

この時の官年は一六歳である。岡山藩主は、部屋住の時に將軍の御前で元服し、一字拝領して従四位下・侍従に任官するの通例である。この初官の後、位階は従四位下のまま少将に昇進し、これが極官となる。継政は家督継承後に元服したが、そのことが任官の障害になった形跡はない。このまま順調に少将に昇進すれば、池田家としても継政としても何の問題もなかったのだが、正室伊達和子との離縁問題を契機に、継政は自らの官位昇進を非常に難しいものと感じ始める。

では、ここで継政の離縁について振り返っておこう（11）。池田家の祖である輝政の娘富利子（振子）は、慶長一六年（一六一一）に徳川家康の側室於加智の方の養女として伊達忠宗と婚約し、家康の死後元和三年（一六一七）に秀忠の養女として忠宗に興入れした（12）。輝政の孫（継政の祖父）光政は元和二年に八歳で家督を継承したが、將軍家光の命により池田忠雄とともに伊達忠宗が光政を後見して領国支配を行った。その後、伊達綱村（吉村の父）の娘と池田綱政（継政の父）の嫡子吉政の縁組みを予定していたが、ともに早世・若死した。これを惜しんだ池田綱政が、再び両家の縁組みを申し入れたという。これが継政と和子の婚姻である。幼少（一三歳）で家督を継承した継政は、「幕府向きのことなども不案内なのでお世話をお願いしたい」と吉村に頼んできたという。このような由緒から、仙台伊達家にとつて、岡山池田家は縁戚大名の中でも「格別懇意」であったという（13）。

継政と和子は正徳三年八月一八日に婚約が成立し、享保七年（一七二二）四月二三日に興入れが行われた。入興当時、継政

官位昇進運動の基礎的研究

―岡山藩主池田継政の場合―

堀 新

はじめに

小稿は、岡山藩主池田継政の官位昇進願書（全一通）の全文を翻刻・紹介し、その背景を考察しようとするものである。

かつて近世武家官位は、天皇家存続の鍵を握るものとして注目されていた。すなわち、改元・遍暦とともに官位叙任権は、近世天皇に残された最後の統治権の権能とされたのである（1）。江戸幕府が日本全国を支配した江戸時代においても、形式的にはあるが、天皇が將軍や大名に官位を任命し、朝廷が辞令である口宣案・位記・宣旨を発行していた。このような形式面を重視すれば、江戸時代においても天皇が君主であり、それを官位制度が支えていたことになる。また官位の高低はあ

るものの、將軍も大名も等しく官位叙任されているので、やがて大名は將軍の地位を相対化するようになり、また官位叙任から朝臣意識・尊皇意識が芽生え、それが明治維新につながっていくというのである。つまり、衰退を極めた天皇・朝廷が存続した最大の理由は官位制度にあり、さらには官位制度が明治維新の原動力ともなった重要な問題だということになる（2）。

しかし、大名への官位叙任を実質的に行っていたのは幕府であり、朝廷は幕府の指示を受けて書類を調えるのみであった。それを典型的に示すのが、叡慮推任の例である。新年の年賀使

をはじめ、近世ではたびたび幕府から朝廷へ使者が派遣された。その使者を務めた武家に対して、天皇が官位昇進の意向を示したのが叡慮推任である。このようなことは、珍しいことではない。使者は推任の受諾を保留し、江戸に戻って將軍の意向を確認し、許可がおりたら推任を承諾する。しかし、將軍の許可がなければ、叡慮推任を辞退しなければならなかった。幕末を除き、近世武家官位は將軍の意のままであったのである。しかし、官位叙任権を掌握していたのは幕府か朝廷かという二者択一の議論をする段階は、既に過ぎ去った。幕府も朝廷も、互いに他者を排除して官位叙任権を一元化する志向性を持っていない。幕府と朝廷が互いに相互補完的に存在して王権を構成していたという「公武結合王権」の枠組みを認識することで、はじめて近世国家の構造がとらえられるのである（3）。

それでは、近世武家官位の機能はどのようなものか。それを一言で言えば、武家を序列する機能である（4）。その点は中世社会でも同じであるが、かつては参内する時の序列であったものが、江戸城での序列を示すものへと変化した（5）。そのため、江戸幕府の最も重要な儀式の一つである正月儀礼にあわせて、年末に大量の官位叙任がなされるようになったのである。こうして大名は、みずからの家格維持、そして他大名との家格競争の手段として、官位昇進運動を行うようになった。近世武家官位制度は、一般的に寛文期（一六六一―七三）に確立したとされるが、その詳細が判明する最も早い事例は元禄九年（一六九五）の岡山藩主池田綱政の事例である（6）。

小稿で取り上げる池田継政は、綱政の嫡子である。継政の官